

カルラ・イーターに憑
依しました（凍結）

緋月 弥生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がついたら、人類が巨人に蹂躪される世界だった。

しかもウォールマリアに穴が空いたタイミングで、巨人に憑依しちゃってるよ。どうすんだこれ。

取り敢えず人類に味方しようと鎧の巨人に喧嘩売ったけど、あっさりボコされて巨人の体が大暴走。

勝手に動いた巨人の体は、鎧の巨人が庇っていた女型のあの子を捕食しちゃって……

!?

女型の巨人の力を継承しちゃったよ！

人間の姿に戻れたのは嬉しいけど、寿命はあと13年。

さらに憑依していた巨人はカルライーターだったらしく、エレンパパの前妻になってしまった。

アニはいないし、カルライーターはカルラ食べてないし、ダイナさんになっちゃったし、原作は木っ端微塵。

本当に、どうすんだこれ。

これは女型の巨人を食って人間に戻ったダイナ・フリッツに憑依した元男の主人公が、原作を粉砕してしまったことで発生した物語の歪みを正すため、四苦八苦するお話。

▼ごすろじ様から頂いた本当に素晴らしいイラスト

▼ダイナ（憑）

▼アリーセ

▼
ラ
ウ
ラ

目次

プロローグ カルライーターかよ

1

第1話	ウォールローゼへ	16
第2話	トロスト区侵入作戦	30
第3話	開拓地と口減らし	46
第4話	愚者の判断	61
第5話	失態、失態、失態	76
第6話	対鎧の巨人撤退作戦	94
第7話	サバイバル生活の前夜	108
第8話	生き延びるために	123
第9話	初めての立体機動戦	137
第10話	調査兵団との邂逅	150

第1話	無謀な交渉	165
第2話	下手くそな交渉	179
第3話	信頼なき協力関係	192
第4話	壁外調査へ	207
第5話	破壊の予兆★	222
第6話	順調の代償★	238
第7話	2つのリヴァイ班	252
第8話	狂い始めた歯車	268
第9話	第57回壁外調査——開始★	
第20話	第57回壁外調査——迫り来	281
るアギト		296
第21話	第57回目壁外調査——咆哮	

第22話	第57回壁外調査——友に捧	311	第30話	『進撃』VS『顎』——	465
げる心臓	——	331	第31話	失態の埋め合わせは敵兵の首	
第23話	第57回壁外調査——決着		で	——	485
351			第32話	転、転、転	502
第24話	東の間の平和を	368	第33話	未来への意志	516
第25話	巨人化能力者捕獲作戦		第34話	第58回壁外調査	531
392			第35話	M1「戦士」の覚悟	547
第26話	交錯する思惑	406	第36話	不完全な武術	561
第27話	ダイナとジーク	419	第37話	戦慄する焦土	576
第28話	『女型』&兵士長VS『獣』&		第38話	勝利、敗北、歓喜、苦惱	
『車力』	——	435	591		
第29話	起死回生の一手を	449	後日談1	叛逆者達の会話——『正義』と	
	——		『悪』の定義	——	607

後日談2 交差する母と息子の野望

618

第39話 ダイナ・フリッツ殺害事件

637

第40話 疑惑 | 651

第41話 対応×日常×三つ巴 |

668

第42話 反撃前夜 |

684

第43話 殺人鬼との邂逅 |

701

第44話 覚醒 |

717

第45話 敗北×代償×すれ違い

732

第46話 三作戦同時進行開始 |

747

プロローグ カルライーターかよ

響き渡る悲鳴。

燃え盛る街。

飛び散る鮮血。

崩壊していく家々。

気がつけば、そんな景色が目の前に広がっていた。

……は？

何これ？ どうなってるの？

啞然として、目の前の光景をしばらく眺め続ける。

そうしたら、いくつか気づいたことがあった。

まず最初におかしいと思ったのは、建物のサイズだ。どれもこれも小さい。

なんて言うか、お人形遊びとかで使うオモチャみたいだ。いや、流石にそれよりは大きいかも。

小さいのは変わらんけどさ。

次に、街のサイズと明らかに一致していない巨大な人影が無数に徘徊しているという

……お！

新しいもの発見。

アレは……小人か？ いや、街のサイズを考えるに向こうが正常な大きさかもしれない。俺がデカくなってる、つて考えた方が良さそうだな。

屋根の上を走ってるな。数は5人。服装は統一されている。腰には鈍色に輝く謎の機器を装備してるみたいだ。

なんか、すごい既視感^{デジャヴ}。

特に腰の機械、めっちゃ見たことあるぞ。遠目にも分かるくらいに見覚えがある。

なあ、あれさ、立体機動装置じゃね？

俺がそう思った瞬間、先頭を走る人が飛んだ。

腰の機械からはワイヤーが射出され、ワイヤーの巻き取りと後ろから放出するガスの勢いによって、人が凄いスピードで加速していく。

完全に立体機動装置じゃねーか!!!

「ガアアアアアアアアアアッ!!」

そう叫んだら、やっぱり獣のような咆哮が喉から迸った。

もう間違いないえ。

そんなに頭が良くない俺でも理解した。

ここ、進撃の巨人の世界だわ。

それでもって、俺は人類の天敵である巨人になつてる。憑依したと言つても良い。うああああ……。

何でこんな事になつたのか全然分からんけど、終わった。最悪だ。

兵士にうなじ削ぎ落とされて殺される。

もしくは捕獲されて実験台だ。ハンジさんのオモチャとして、死ぬまでモルモット生活だ。

調査兵団に襲われたりしたら、勝てる気しねえよ。

とにかく早く街から離れよう。

こんな立体物が多いところに突っ立つてたら、いつ攻撃されるか分かつたもんじゃない。

……んん？

街？

俺、巨人なんだよな？

何で壁の内側に入れてんの？

そう思つて後ろを振り返れば、がつつり壁に穴が開いていた。

次から次へと巨人が入ってきている。

もしかして、今って超大型巨人が出現した直後だったり？

だとしたら、どっちだ!?

ウォールマリア陥落時なのか、それともトロスト区での決戦時なのか。

……あ、壁門の前に落とし穴とかないからウォールマリアの時だな。

って、冷静に分析してる場合じゃねえよ!

もう鎧の巨人に内側の門まで破壊された後なのか!?

それとも、まだ巨人はシガンシナ区にしか侵入してないのか!?

いや、どっちにしてもやる事は同じだ。

人類の援護、それのみ。

大勢の兵士の前で巨人をぶっ倒したり、住民を助けたりしたら、害のない個体だと

思ってくれるかもしれない。

そう思ってた歩き出したその瞬間、地面が大きく揺れた。

壁の穴から、他の巨人とは明らかに異なるヤツが入ってくる。

超大型巨人を除けば最大となる15メートル級。筋肉質でポリウムのある体型。

全身を覆う、硬い鎧。

間違いない。

鎧の巨人……!

外壁の方にいるって事は、まだ内側の門は破られてねえ。

ここでコイツを倒すことが出来れば、ウォールマリアの陥落が防げる。

そこまで考えたところで、俺はふと思う。

原作の流れを壊して良いのか、と。

ここで鎧の巨人を倒したら、さらに事態が悪化する可能性もあるのか？

例えば、鎧の巨人が負けたことで『残りの2人』が作戦を諦めて帰還して、原作より早い段階で獣の巨人が襲来するとか。下手したら戦鎚の巨人も含めた総攻撃になるとか。

そんな事になるくらいなら、何もしない方が良いんじゃないのか……？

そう思って動きを止めた瞬間。

10メートル級くらいの巨人が、俺の目の前で家を壊した。

瓦礫とかした家の中に手を入れる巨人。その手が引き抜かれた時、手の中には涙を流して、恐怖に震える少女がいた。

思考が弾け飛んだ。

考えるより早く体が動き、10メートル級に渾身の拳を叩き込む。10メートル級の首から上が吹っ飛んでいき、巨人の生首が遠くの川に落ちて水しぶきをあげる。

頭部を失って倒れていく巨人の手から可能な限り丁寧に少女を回収。この近くで一

番高い建物の上に優しく乗せ、俺は鎧の巨人に向き直った。

何処と無く驚愕の表情を浮かべている鎧の巨人に向かって、俺は拳を構える。

勝てるか……？

巨人のスペックは向こうの圧勝。

なんせ相手は『九つの巨人』の一体。対して俺は無垢の巨人。何の能力も持ってねえ。

うええ、ダメだ。勝てる気しねえ。

そもそも鎧の巨人には殴打も蹴りも効かなくて、関節技しか攻撃が通らない。

俺、関節技とか出来ねえし。格闘技とかやってねーもん。

愉悦神父に憧れて、八極拳を齧ったことならあるけどよ。

そんな事を考えてたら、鎧の巨人が怯んだように後ろへ一歩下がった。

え？ 何で？

お前の方が圧倒的に優勢だろーが。

そう思つて鎧の巨人を注視してみると、手に何か握っているのが見えた。

……あれ、もしかしなくてもアニとベルトルトか？

待てよ。

今は壁に穴を開けた直後。

つまり超大型巨人は力を使った後でまともに動けなくて、無垢の巨人を連れて壁まで

走ってきた女型の巨人も、同じくダウンしてる？

もしかして、今が最大の好機？

……やるしかねえ！

「ガアアアアアアアアアアアッ！」

腹を括る。

雄叫びを上げて疾走し、鎧の巨人へと突貫する。

向こうはダウンした仲間を2人も庇っていて、まともに戦えないはずだ。

加えて内側の門を破壊する力も温存しておく必要があるだろう。

なら、ある程度の攻撃を行えば奴らは自然と撤退する！

鎧の巨人に向かって拳を振り下ろす。

効かないのは百も承知。

だから、狙いはヤツが庇っている人間状態の2人だ。

俺の拳を、鎧の巨人は慌てて仲間を握っていない方の腕でガードする。

まるで金属でも殴りつけたような感触。俺の拳の皮がめくれ上がり、骨が露出した。

拳から大量の血が流れ出す。だが、痛みはあまり無い。

ハンジさん曰く、巨人の痛覚は個体によって違うらしい。

つまり人間のように痛みを感じる個体もいれば、痛覚が鈍くて殆ど痛みに対応しない

個体もいるってことだ。

そして、俺はどうやら後者に該当するっぽいな。

ラッキーだ。

右の拳は使えないので、今度は左の拳で掴みかかる。

鎧の巨人の手首を掴み、大きく俺の方へと引き寄せた。ヤツの本来のパワーなら俺に引き寄せられる、なんてことは無かっただろうな。

けど仲間を握りしめた状態なら、ろくに力を入れられないだろう？

うっかり力んで、手の中の2人を殺しちまったら大惨事なんだから。

引き寄せた鎧の巨人の首に食らいつく。

うなじは狙わない。ドーセ鎧に守られて、歯が通らんだろ。

なら鎧に覆われていない首元から肉を食い破って、うなじの方に到達してやる……！

けど、鎧の巨人もそう簡単にやられてくれなかった。

片手で俺の首を掴むと、凄まじい力で握り潰そうとしてくる。

あ……これ、やば………つ。

あつという間に首が潰され、体から力が抜け出す。

脊椎が傷ついたのでか……!?

体が思うように動かない。鎧の巨人が拳を振り上げる。

防げない。うなじを叩き潰される。死ぬ。

死を直前にして、意識が明滅する。

じわじわと視界が赤く染まっていった。

気がつけば、俺は完全に体の制御権を失っていた。

「ガアアアアアアアアアアアアッ!!」

俺の意識が介入しなくなった体が、勝手に動き出す。

首が振り切れそうになるのも構わずに動いた俺の体は、巨人の基本的な本能に従った。

即ち、人間の捕食。

この場にいる人間は、たった2人だけ。

鎧の巨人と手に握られている、彼の仲間だ。

赤く染まった視界。

俺が最後に見たのは、鎧の巨人の親指と一緒に、俺の口の中へと入っていく金髪の少女の姿だった。



何が、どうなった……？

あれからどのくらい時間が経ったのだろうか。

こうやって思考が出来ているって事は、俺はまだ生きているんだよな？

ジーンと、体が熱い。

それを無視して無理やり目を開け、体を起こそうとして気づく。

……俺、瓦礫に埋もれてねえか？

マジかよ、最悪の目覚めだな。

何とか身をよじって、瓦礫の中から抜け出そうとする。

くそ、このひとときわデケエ瓦礫が邪魔で……。

コイツさえ何とか出来れば、あとは簡単に立ち上がれそう……ちよつと待て。

デカイ、瓦礫？

鎧の巨人と同サイズだった俺は、15メートル級のはずだ。

その俺から見てデカイ瓦礫って、一体どんなサイズになるんだよ。

なんか大事なことを忘れてる気がする。

完全に意識を失う直前に、何かあったような……。

そこでようやく思い出す。

俺の口の中に入っていった、金髪の少女のことを。

「うあああああああッ!? あ、ああ!? 何でこんな、女みたいな高い声が……いや、
違い! アニ食っちまったあ!!」

最悪だ、最悪だ、最悪だ。

原作なんてこれで木っ端微塵だよ。

主要な登場人物を殺しちまった。

まともに喋れたからまず間違いない。女型の巨人の力を継承して、人間に戻ったんだ。

どうする?

こっから、どうすれば良い?

というか鎧の巨人どこ行った?

女型の巨人を継承した俺を放置したとは考えにくい。

何とかして回収しようと考えてるのが普通だ。

いや、鎧の巨人の思考を読むのは後回しにしよう。まずは瓦礫の山から抜け出して、安全な場所まで移動しねえと。

さっきまでは無垢の巨人だったから他の巨人に狙われなかったけど、今の状態なら普通に狙われる。食われてたまるか。

そう考えたら、瓦礫に埋まっていたのはラッキーかもな。

その辺の道端で気を失っていたら、巨人の胃袋に直通してただろうし。
あー、もう。

素っ裸だから、肌が瓦礫に擦れて痛い。

抜け出したら廃墟を漁って、下着と服を探そう。火事場泥棒みたいで嫌だが、裸で動き回るなんて人としてアウトだからな。仕方ねえ。

お、やっと抜け出せた。

はあはあ言いながら、俺はすぐに一番近くにあつた家へと転がり込む。

これで、そう簡単には巨人には見つからねえだろ。

俺が気を失っている間に内側の門が破られたとしたら、殆どの巨人はより多くの間がいるウォールマリアの内側に移動してらだろう。

シガンシナ区にいる巨人の数は、少し減ってるはず。

だから大丈夫。落ち着け。

腕で額の汗を拭う。

あー、髪が長くて鬱陶しい。

視界の端つこにチラチラと金髪が見えるから、気が散る……金髪……？

両親はおろか祖父母まで全員日本人な俺が？

慌てて自分の体を見直す。

なんで1日に2回もこんなことしなくちやいけねーんだよ。

そんな俺の思考は、自分の体を見た瞬間に吹き飛んだ。

俺の荒い呼吸に合わせて上下する胸が、膨らんでいた。

たわわに実るそれは、俗に言うおっ……

「……………」

よく悲鳴をあげなかつたと、自分を褒めてあげたい。

そんな現実逃避気味な思考をしながら、恐る恐る「下の方」も確認する。

人間に戻ったのに、やっぱりついていながかつた。

顔がひきつる。

よろよろと。廃墟になった家の中を歩き回り、とあるものを探す。目当ての物はすぐに見つかった。

見つけた探し物……ひび割れた手鏡を、覗き込む。

鏡の中には、今にも泣きそうな顔をしてきる金髪美人が写っていた。

しかも見たことある。

原作キャラだ。

出番は少なかつたマイナーキャラだけど、持つてる役割が重要すぎたからはずきり覚えてる。

王家の血を引く者。

グリシャ・イエーガーの前妻。

ジークの母親。

エレンの義母。

——ダイナ・フリッツだ。

俺が憑依した巨人って、カルライターかよおおおおおおおおおおッ!!!
心の中で絶叫する。

声を出さないのは、巨人をおびき寄せないためだ。

まともに泣かせてもくれないのか、この世界は。

性転換だよ。TSだよ。

しかも人妻だよ。エレン。パパの奥さんになっちゃったよ。

これでもし、ジークに出会ったりしたらどうすれば良い？

獣の巨人に向かって、「久しぶりだね、あなたのお母さんよ♪」って言えば良いのか？
ふざけんな。

第1話 ウォールローゼへ

ダイナ・フリッツになってしまった衝撃により、呆然とすること約5分。やつと正気に戻った俺は、廃墟の中を探索していた。もちろん、服を手に入れるために。

つか、女性の服装とか分かんねえよ。

取り敢えずスカートを穿けば良いのか……？

しかし、元男の俺にとってスカートはハードルが高い。それに走る時に邪魔になりそうだしな。

無理せずにズボンで良いか。

しばらくしてクローゼットを発見。

中を確認したら、それなりの数の衣服が入っていた。

これでやつと裸族を卒業出来る。

動きやすそうな服を適当に見繕っていざ着用……する直前に、俺はある事に気づく。う、上の下着ってどうやって付けるの？

やべえ、困った。どうしたら良いのかさっぱりだ。

もう諦めてシャツ着たらダメか？

でも胸が大きい人は、これ付けないと痛いってなんかで読んだことがある。胸が痛くて満足に動けず、巨人に捕食されて死亡とか笑い話にもならん。

そんなふざけた理由であっさり死んだら、あの世でアニにフルボッコにされるわ。そもそも、人様の下着を勝手につけるのってどうよ。

同性でも変態だろ。

ましてや、俺は中身が男。

ふむ……。

無断で人様の家に侵入した挙句に、クローゼットから下着を盗み出し、それを装着しようとする男。

事案待ったなしだ。

今までの一連の行動、全部なしで。

素早く下着を元の場所に戻し、衣服だけ貰っておく。

これだけでも十分に変態な気がするけどな……。

もしこの家の人が生きていたら、謝罪して新しい服を弁償しよう。それが最低限の贖罪ってやつだ。

胸に関しては、清潔そうな布を巻きつけてカバーする事にした。

これなら固定されるし、問題ないだろう。

キツく巻いたから、そう簡単に外れるないと思われる。多分だが。

上は簡素な白いシャツで、下はフレアスカート？　つていうのを選んだ。丈は長めのをやつ。

本当はミニスカートくらい短い方が楽だし動き易いんだが、ダイナさんつて人妻なんだよ。そのうえ子持ち。

正確な年齢は分かんねえけど、子供がいる母親がミニスカートを穿いたら？　はつきり言つて、ちよつとキツイ。

授業参観とかにミニスカートの母親が来たら、俺は絶叫する自信がある。この体本来の持ち主であるダイナさんの為にも、ミニスカートは無しだ。

余談だがズボンはなかった。この家は一人暮らしの女性が住んでいたらしい。パンツ？

何を言ってるのか分からんな。

こんだけ丈の長いスカートなら見えねえつて。俺が今から立体機動装置を使うなら話は別だろうけど。

ともかく、俺は人の使用済みパンツを盗んで着用する変態では断じてない。ノーパンの子持ちの女性もどうかと思うが、バレなきやセーフだろ。

ウォールマリアが陥落した日に、俺は何やってんだ……。

さて、切り替えていこう。

具体的に、これからどうするか。

窓から外を見た限り、シガンシナ区にいる巨人の数は俺が気を失う前と比べて格段に少ない。多分これは鎧の巨人が内門を破ったから、そっちに移動したんだろうな。

ウォールマリアが陥落したと仮定するなら、シガンシナ区に留まるのは得策とは言えねえ。ここにいたら、いつ襲われてもおかしくないし。

ウォールローゼの中に入るのがベストなんだろうけど、残念ながら移動手段がねえ。

この世界の移動手段は馬か立体機動装置だが、俺はそのどちらも使えないんだよ。

乗馬経験なんてないし、立体機動装置は論外だ。年単位で訓練してやっと使えるような兵装を、素人の俺が使えるとは思えん。

残された手段は、巨人化して走ることだが……。

無理じゃね？

だつてエレン見てみるよ。

最初の巨人化は無意識で、次の砲弾を防いだアレは不完全。岩を運ぶ時は自我を失つて暴走してる。

巨人化能力も訓練が必須だ。自我を失えば、それはもう無垢の巨人と変わらねえし。

使いこなせないと、巨人化は自爆になっちまう。著しく体力を消費するのも簡単に使えない理由に含まれるな。

けど、巨人化能力は俺のたった1つの武器だ。そして命綱でもある。

巨人領域でこうやって正気でいられるのも、襲われたら巨人化して自衛できるから。本当に丸腰の状態でここに立っていたら、今ごろ毛布にくるまって泣いてると思う。

そのまま恐怖で動けず餓死して終わるだろう。

話が逸れた。

ともかく、たった1つの武器である巨人化能力は早めにマスターしといた方が良いつて話だ。

一か八か、女型の巨人の力でウォールローゼまで走るか。

九つの巨人の中でも俊敏さと持久力に優れている女型の巨人なら、素人の俺でも長時間活動できるかもしれねえ。

ウォールローゼまで辿り着ければ、あとは簡単。何食わぬ顔で、難民の中に紛れ込めば良い。

……よし、決めた。

ウォールローゼへ行こう。

目指すはトロスト区だ。

恐る恐る扉を開け、廃墟の外へ。

近くに巨人は……よし、姿は見えない。

まずは人間形態のまま、1メートルでも良いから距離を稼ごう。

巨人化するのには、巨人に襲われてからだな。少しでも力を温存しておきたい。

大きく息を吸って、全力疾走開始。

道が分からなくても問題ない。

ほとんどの建物は巨人によって倒壊してるから、簡単に辺りが見渡せる。

あとは超大型巨人がぶち破ったウォールマリアの壁から、真反対に走れば良い。巨人どもが入ってきた壁に背中を向けていけば、確実に内側の門の方角へと走れる。

こういう時、壁内世界の単純な構図は便利だな。

スカートを両手で掴んで、少し持ち上げながら走る。

くそっ。

舞踏会から逃げ出したお嬢様かよ、俺は。

走り方が最高にカッコ悪い。

男らしさの欠片もない自分の姿に涙を流しつつ、割れたガラス片を回収。当然、巨人化のトリガーとなる自傷行為に使うためだ。

瓦礫を飛び越え、死体を跨ぎ、炎を潜り抜け、ブチまけられた内臓や飛び散った血痕

を見ないようにする。充滿する死臭のせいで気分が悪い。

ひたすらにグロテスクな光景。

「死」が近い。

1つでも間違えたら、俺もその辺りに転がっている死体の仲間入りをするだろう。たとえ巨人化能力者でも。

無垢の巨人にあつさりと食われた、マルセルのように。

頭を振って嫌な想像を振り払い、鋭く息を吐いて加速する。そして、勢いのまま十字路を渡ろうとしたその瞬間。

右側の道から、こちらに歩いてくる巨人の姿が見えた。

11メートル級。肥満型。俺を見ている。捕捉された。ヤツとの距離は50メートル程。近い。巨人なら5歩未満で詰められる。

「……」

咄嗟につきさつき回収したガラス片を取り出し、指先を軽く切る。

……だが、巨人化できない。

もう一度、不発。

さらにもう一度、不発。

不発、不発、不発、不発、不発、不発、不発。

白魚のような10本の指が全て血で真っ赤に染まっても、俺はまだ巨人化できない。そこでようやく思い出す。

エレンも、初めは自分の意思で巨人化する事が出来なかった事を。

本当に馬鹿だな、俺は。気づくのが遅えよ。

もう巨人との距離は20メートルもない。

巨人化するには自傷行為だけでなく、人の姿を捨てても何かを成し遂げたいと思う『意思』が必要だった。

強い意思が、明確な理由が無ければ巨人化は出来ない。

俺のような初心者なら、なおさら強い『意思』が必要だろうに。

巨人の手が、俺に向けて伸ばされる。

終わる。

死ぬ。

拍子抜けするほど間抜けな理由で。

くそつたれめ。

巨人化能力を手に入れて、強キャラにでもなったつもりだったか？

日本での自分を思い出せよ。

人付き合いが下手くそで、頭が悪くて、意思が弱くて、すぐ流れに乗せられる。それ

が俺だろ。

そんな奴が、この世界で生きていける訳ねえだろうが。命を懸けてでも進む。

そんな強い意思がある奴だけが生きていけるんだ。

もう一度息を吸って、吐く。

落ち着いて、もう一度。

自分の『意思』を考えろ。

何のために巨人化する？

そんなの決まってる。自問自答するまでもない。

俺は。

巨人ま^{テムエラ}とめてブチ殺して、生き残ってやる！

死んでたまるか、バーカ！

直後、両手の指に刻まれた無数の傷からスパークが迸った。

俺を中心に骨が、肉が、皮が生成され、瞬きの間に肉体を構築していく。

視線が高い。

さつきまで見上げる程大きかった1メートル級が見下ろせる。

巨人化、成功。

「——オオオオオオッ！」

咆哮と共に拳を振り抜き、11メートル級を殴りつけた。

カルライーターだった時とは、比べ物にならない威力。身体能力が無垢の巨人とは桁違いだ。

硬質化もしていないのに、俺の拳は巨人の頭部を完全粉碎していた。

頭蓋骨をかち割られた11メートル級が地面に倒れ臥す。それでも起き上がろうとしたので、うなじに踵落とし。

11メートル級は完全に息絶えて、蒸気と共に消滅していく。

ここからは、体力と時間との勝負だ。

今の俺の練度じゃ、力を残して一旦人間に戻るなんて事は出来ないだろう。

人間に戻ったら、しばらくは巨人化が使用不可能になる。だから力尽きて人間に戻る前に、全力でウォールローゼへ辿り着く。

膝を曲げ、クラウチングスタートの姿勢。

足の筋肉に力を入れて、一気に駆け出した。

調査兵団が誇る品種改良した軍用のサラブレッドすら追い越す速さを持つ女型の巨人の脚力は凄まじく、信じられない速度で体が加速する。

本気の女型ってこんなに速いのか。

そりゃあ、大人数の調査兵が命がけて時間を稼がないと、罨の位置まで誘導するなんて無理だよな。

……俺が女型の巨人を継承したから、多分あのシーンなくなると思うけど。

まありヴァイ班の死亡フラグが折れたから良しとしよう。

特にペトラが死んだ時は泣きそうになったし。

班員の死体を見た時の兵長の表情とか、部下思いなのが伝わってきて本当にやばい。

……つと、巨人接近。

目測で5メートル級。

走る勢いを緩める事なく、通り過ぎ様に蹴り飛ばす。

桁外れの脚力による蹴りをまともに受けた小型の巨人は、20メートル近く吹き飛ばしてどこかへ消えた。

一桁クラスの巨人なら、これだけで撃破出来そうだな。

うん、無垢の巨人と九つの巨人の両方を経験したからよく分かる。女型の巨人マジ強え。マジ速え。

……これ、アニメで見た時よりも速くねえか？

この速度、立体機動装置で飛んでる兵士すら追い抜ける気がするんだけど。だってほら、足が地面につくたびに周囲の建物がひっくり返るくらいの振動が発生してるし。

鎧の巨人ですら、こんなに振動を感じなかったぞ。

何でだ？

もしかして、アレか？

獣の巨人みたいなパターンか？

岩を投擲したり、巨人を操ったり、脊髄液を飲ませた人間なら叫ぶだけで巨人化させたり、夜中でも月の光で動ける巨人を作ったりとやりたい放題だったジーク。

当初は「獣の巨人パネエ！」って思ってたけど、後になってそれらの能力は歴代の『獣』にはない能力で、ジークが『獣』を継承した際に発現した能力だったということが分かった。

その理由は、ジークが王家の血を引いていたから。

そして俺が憑依しているダイナ・フリッツも王家の血を引く存在だ。

もしかしたら、アニ以上に女型の巨人の力を引き出せているのかもしれない。

だとしたら、他にも何か能力が発現してるかもな。

機会があれば、要確認ということだ。

特に周囲の巨人を引きつけられる「女型の叫び」の能力な。あれが強化されてたら、もつと思いい通りに無垢の巨人を操れるかもしれない。

劣化始祖の巨人みたいな感じで。

それなら非常に助かるが。

1年後の口減らし……もとい、大征伐で死ぬことになる25万人の犠牲者が減らせるかもしれないねえ。

動くな、つて命令が出せたらな。

そんな感じで妄想を膨らませているうちに、内側の門を通過。

やべえ、もうシガンシナ区出ちやったよ。

嬉しさにガッツポーズしそうになったけど、その浮かれた気持ちは次の瞬間にすっかり消え去った。

内門を抜けた瞬間に、巨人の数が跳ね上がりやがった。

そこらじゅうにいる。

「オオオオオオオオオオオオツ!!」

チィ、やっぱり襲ってくるか。

奇声を発し、口を開いて、よだれを撒き散らしながら殺到する無垢の巨人。その数は、ざっと数えて30。

流石にこの数をまとめて相手にするのはキツイぞ、おい。

殲滅できなくはないけど、トロスト区まで走る体力が残るかは微妙だな。

けど、やるしかねえ。

走る速度は緩めずに、拳を握りしめる。

そして真正面から向かってくる13メートル級の顔面にアッパー。首がねじ切れ、打ち上げられたロケットみたいに生首が飛んでいく。

うわ、俺が最初に殺した10メートル級（だっけ？）を思い出すな。

なんて思いながら、残された胴体を踏み潰して前へ。

次は8メートル程度のやつが、2体同時に挟み込むようにして向かってくる。

甘えよ。

右側の巨人にアイアンクローをかまし、そのまま腕の力だけで持ち上げて振り回す。

左側の個体を8メートル級バットでなぎ倒し、用済みになった後は地面に叩きつけて頭部を粉碎。

そして死体を蹴り飛ばし、後ろから追いかけてきた小型の群れにシュート。ボーリングのピンみたいに、小型の群れが総倒れになった。

ふう、流石にちよつと息が上がってきたな。

ウォールローゼはまだ見えない。

俺が力尽きて倒れるのが先か、ウォールローゼにたどり着くのが先か。

自分を鼓舞するために雄叫びを上げて、俺は巨人を薙ぎ倒しながら再び走り出した。

第2話 トロスト区侵入作戦

体が熱い。

全身のいたる所から蒸気が噴き出している。

シガンシナ区を抜けてから、どのくらい走り続けたのかも分かんねえ。

体感時間的には、もう2時間くらい走ってる気がするんだが。

実際はもつと少ないだろうな。何せ、絶え間なく無垢の巨人に襲われ続けながらのマ
ラソンだし。

絶対に体感時間が実時間を上回ってる……筈だ。多分。

マラソン中に倒した巨人の数、およそ50。

兵士だったら精鋭扱い間違いなしのスコアだろ。リヴァイ班に入れる可能性あるん
じゃねーの？

……ペトラさんたちと共闘する女型の巨人とか、カオス極めてんな。

くそ、マジで疲れたぞ。

巨人の体も蒸気と共に少しずつ消えている。酷使し続けたせいで肉が消えて、骨が浮
かんできているレベルだ。

シヤレにならねえ。

まだウォールローゼも見えてねえ段階で力尽きたら、確実に死んじゃう。

そう考えれば、自然と心の中を焦りが支配する。

大丈夫だ、焦るな。

今の速度をキープしろ。

焦って無理に速度を上げて、自滅するのが最悪のパターンだぞ、俺。

何度も自分の中でそう言い聞かせ、はやる気持ちを落ち着かせる。

それにしても、手に入れたのが女型の巨人で良かった。

あの時に食ってたのがベルトルトだったら、マジで悲惨だったぞ。

超大型巨人はめっちゃ目立つし、移動は遅いし、持久戦に弱い。破壊力にパラメータ

を振りすぎて、それ以外の能力値が低すぎるんだよ。

極振りは超ロマンだし、巨人化するだけで辺りをまとめて吹き飛ばす爆発を引き起こ

せたりとカッコいいが、実用性は女型の巨人の勝ちだろう。

鎧は防御力とパワーがイかれてる代わりに、速度に難あり。

ブレードの斬撃や大砲すら防ぐ『鎧』は凄いいけど、関節技に絶望的に弱いのが欠点か。

後々になって雷槍なんていう、鎧殺しの兵装も作られるしなあ。

でもまあ、足首の装甲を外せば速度の問題は解決できるし。

鎧も普通にアリだよな。

戦鎧の巨人はチート。

よく勝てたよな、エレンは。

マジで巨人化能力者になっちまったから分かるけど、並大抵の練度じゃ『戦鎧』は倒せん。

必死で巨人の力をコントロールする訓練を積んだんだろう。

主人公、マジ主人公。

けど戦鎧は本体が巨人体と別の場所にいるから、長距離移動が出来るかは分からねえけど。

顎の巨人は機動力は凄いけどパワーに難がある。

進撃の巨人は……うん、きつとまだ秘められた力が残ってる筈だよな。今のままだと、無垢の巨人よりはちよつとスペックが高いだけの普通の巨人だし……。

そう考えたら、女型の巨人って優良物件だよな。

高いスピード、持久力といった基礎能力に加え、硬質化まで備えた汎用型。これといった弱点はなく、一定範囲の無垢の巨人を呼び寄せる「叫び」の固有能力まである。

悪く言えば器用貧乏だが、今の保有者である俺はダイナ・フリッツだ。王家の血のおかげで基礎能力が上がっているっほいから、十分にオールマイティと言えるだろう。

これは、うん。

女型の巨人、強い（確信）。

一番のアタリ引いたんじゃね？

少しでも疲労を紛らわせようと女型の巨人を褒めちぎっていたら、ふと地平線に何かが見えた。

黒い、帯状のもの。

視界の端から端まで延々と続くそれは、間違いない。

見えた、ウォールローゼだ！

ゴールが見えたおかげで、一気に気力が回復する。

少しでも早く辿り着こうと速度を上げ、そこで俺は気づいた。

……どうやって入ればいいんだ？

鎧の巨人が内門を破った正確な時間は分かんねえけど、まさかもうウォールマリアの難民が全て避難できたなんて事はないはず。

開閉門は開いている……と思うんだけどな。

まさか、この姿のまま開閉門に向かって突っ走る訳にもいかねえし……。

そんな事したら、大人数の兵士に滅多斬りにされるの間違いなしだ。

ある程度近づいたところで、人間に戻って走るしかねえ。

近すぎたら巨人の中から俺が出てくるところを見られるし、遠すぎたら門に辿り着くより早く巨人に食われる危険が増す。

これは、タイミングを間違えるとえらい事になるな。

まあ、今までの辛さに比べたら大したこと……。

そこで、俺は思わず足を止めてしまう。

俺の視界に映るのは、トロスト区へとなだれ込む難民に引き寄せられて現れた、無数の巨人。

その数はざっと数えて15。全部が10メートル級以上という、最悪の光景だ。

こんな状況の中で人間に戻ったら、間違いなく食われる。

けど巨人のままだと、トロスト区には入れない。

いつそ壁を登るか？

いや、無理だな。

女型の巨人の跳躍力でも50メートルの壁は飛び越えられないし、俺はまだ硬質化が使いこなせていない。

つか、まだ試したこともねえ。

アニみたいに指先とつま先を部分硬質化して壁を登れるかって聞かれたら、自信がないとしか言えねえよ。

あと乗り越えた先に人間、特に兵士がいたら終わりだ。

壁を乗り越える巨人が出た、なんて大騒ぎになるに決まってる。

既に超大型巨人と鎧の巨人のせいで大パニックになってんだから、壁を乗り越える行為は火に油を注ぐようなもんだろ。

くそ、どうすりや良いんだよ。

いつそ周囲の巨人を殲滅してから一度ウォールローゼから離れて、人間になって戻るか？

……そんな体力もう残ってねーぞ、オイ。

既にフラフラだったの。

いや、待てよ。

一つだけ、博打に近いが案を思いついた。

失敗したらもれなくミンチにされて巨人の胃袋に直行だが、成功すれば高確率で難民の中に紛れこめる。

恐らくだが、人間に戻る姿も見られない。

そんな作戦を。

やるか？

正直に言うと、めっちゃ怖い。

立体機動装置でも使えれば成功率はぐんと上がるが、そんなもんは持ち合わせていない。つか、持ってたとしても使えん。

そうなると最後の頼りとなるのは、ダイナの素の体力になる。

ダイナって、体力あつたか……？

……うん、どう考えても無いよな。

女性の平均的な身体能力って、どのくらいなのか。

ああもう、こんな事をグダグダ考えても何も始まらねえよ。

腹を括れ。やるしか無いんだ。

死にたくねえんだろ？

じゃあそろそろ覚悟を決めろよ、俺。

いくら体は人妻でも、心まで女になった訳じゃないんだから。

今こそ、漢気を見せる時。

まずは出来る限りトロスト区に接近。

開閉門との距離が1キロメートルを切ったところで、俺は立ち止まった。

そして大きく息を吸う。

巨大樹の森でのシーンから効果範囲を推測した。ほぼ間違いなく釣れる。

目に見える巨人は全て、能力の射程範囲内だ。

だから全力で、叫べ。

「ツツオオオオオオオオオオ——ツツツ!!」

女型の巨人の固有能力。

周囲の巨人を呼び寄せる「叫び」だ。

難民を狙っていた15体の巨人が一斉に振り返ると、次の瞬間には口を開いて全力疾走し始めた。

もちろん、俺に向かって。

あああああああッ!

くつつそ怖え!

ア二つてマジで凄え! 正体を隠蔽するためとは言え、よくこんなの実行出来たな!? 10メートルを超える巨人が約15体、我先にと涎を撒き散らして迫ってくる。

あまりの迫力にちよつと漏らしそうになったぞ。

いや、飲み物を飲んだ直後だったら間違いないく漏らしてたな。

ギリギリでダイナさんの名譽は守られた。

恐怖心をかき消すためにアホな事を考えつつ、俺は仰向けに寝転がる。

その状態で目を瞑り——直後、全身のあらゆる箇所鈍い痛みが走った。目を開けてみれば、俺の体が見えないくらい大量の巨人が群がっている。

ここだ。

今この瞬間を逃せば、死ぬ。

「ら、ああああああつー！」

雄叫びを上げながら、巨人体のうなじから飛び出す。

顔やら両腕やらが巨人の肉と癒着してなかなか離れないが、そんなの無視だ。強引に腕に力を込め、ブチブチツツという音と共に無理やり肉を引き千切る。

巨人体は仰向けの体勢だったので、うなじから出た俺は必然的に地面の上へ。すぐさま立ち上がり、俺は未だに巨人体を貪っている巨人どもの足下をすり抜けた。

踏み潰される危険を越えたら、さあ博打の始まりだ。

巨人の体が食い尽くされるより早く、トロスト区に入れたら博打は成功。

反対に、間に合わなかったら博打は失敗。本体も胃袋行きとなる。

巨人化を解除した際に白のシャツは持っていかれたが、スカートとさらしは未だに健在。下は装備してないから、さらしとスカートのみを着用とえらい格好だが、そんな事を気にしてる余裕はねえ。

今はただ、ひたすら走るのみだ。

走る。

背後からはブチブチと、皮を剥ぎ取る嫌な音が聞こえてくる。

走る。

3分の1を超えた辺りで、音がグチャグチャという肉を咀嚼するものに変わった。

走る。

残り約300メートル。ついにバキバキという骨が噛み砕かれる音になった。もう間もなく、巨人体が食い尽くされる。

走る。

咀嚼音が消えた。その代わりに、地鳴りのような足音が聞こえ始め、どんどん迫ってくる。

やべえ、食べ終わりやがったな。

一直線に俺の……いや、トロスト区の方へ走り出したらしい。

そりゃ、こんだけ人間が密集してたら当たり前か。

走る。

もう真後ろまで迫っている。

残り100メートルを切った。

走る。

大量の巨人の接近に気づいた兵士が、門を閉じるように命令を出しているのが聞こえた。

おい、ふぎけんな。

俺だけじゃない。まだ数百人以上の難民が残ってるんだぞ。

なんで自分たちだけ助かるうとしてんだよ。

腰に立体機動装置を装備してるくせして、鞘からブレードを抜いてすらいねえ。

ああ、くそ。間に合わない。

視界の隅に巨人の指先が見えた。

門との距離はあと30メートルで、しかも門は半分近く閉まっている。

あと少し、あと少しなのに。

「死んで、たまるかあああああッ！」

渾身の力を込めて絶叫する。

その瞬間に、背後から聞こえてきた無数の足音が一斉に止まった。

なにが起きた？

思わず立ち止まって振り返りそうになるが、そんな気持ちを振り払って走る。

トロスト区まであと10メートルもない。

門に向かって殺到する難民の中に躊躇なく飛び込んだ俺は、人の波に押し流されるよ

うに門の中へ。

そして俺がトロスト区の地面を踏んだ瞬間、すぐ後ろで門が閉まる音がした。

「はっ、はっ、はっ、はっ……！」

荒い呼吸を繰り返し、体が求めるに従って、少しでも多くの酸素を取り込む。

間に合った。

生きている。

賭けに勝った。

ドクドクとうるさい心臓の音が。

自分の呼吸音が。

間違いなく生きているのだと、俺に教えてくれている。

思わず体から力が抜け、地面にへたり込む。

ああ、日本が恋しい。

九死に一生を得た俺は心の底からそう思い、そのままバタリと気を失った。



「知らない天井だ……」

ゆっくりと目を開けた俺は、真っ先に飛び込んできた光景を見て無意識のうちにそう

呟いた。

これ、一度は言いたいセリフランキングの上位に間違いなく入ってるよな。使えて満足だ。

ぼんやりとした頭でそんな事を考えながら、疲れが残る身体に鞭打って上体を起こす。

見知らぬ天井の次に目に入ったのは、広い建物の中にすし詰めになっている人々の姿。

アレだ。

大地震とかのデカイ災害が起こった時の、避難所みたいな。そんな光景が広がっている。

……そうか。

トロスト区に入れたんだっけか。

つまりこの場所は避難所みたいなではなく、マジで避難所なんだろうな。

もしかしたら、エレンやミカサ、アルミンもいるかも。

ならば是非とも会いたい、探すのはやめとこう。

本当にいたとしても、今は話しかけない方が良いだろうし。恐らく巨人への憎悪メラメラで、「駆逐してやる！」の名台詞を放ってるだろうから。

カルライターである俺は、その名前に反して、エレンママを食べてない。

けど、エレンママは家の倒壊に巻き込まれて足を怪我していたから、高確率で他の巨人に食われたと思われる。

もちろんハンネスさんの救助が間に合った可能性もあるから、真実は分からんけど。すでに原作なんて木っ端微塵だし、なにが起きててもおかしくねーからな。

キヨロキヨロと辺りを見渡しながらそんな事を考えていたら、誰かに肩を叩かれた。振り返ると、笑顔を浮かべた知らない女性が。

茶色の髪に、榛色の瞳。顔立ちは綺麗に整っていて、美人さんだ。だけど見覚えがないから、主要な登場人物じゃなさそう。

……ってオイ。

この人が羽織ってる緑のマントって、もしかしくなくても調査兵団の!? 本物の調査兵!?

ダメだ、嬉しくてもニヤつくな。

周りが家族や友人を失った悲しみで泣いてるのに、俺だけ笑ってたらやべえだろ。

「良かった、目が覚めたんですね」

「ええと、もしかして気絶した俺を運んでくれたり……?」

話しかけてくれたので、取り敢えず返事をしてみる。

すると調査兵の彼女は怪訝な顔になって、首をかしげた。

「俺……………?」

「あ!? いや、私を運んでくれたんですか!」

一人称を指摘され、慌てて言い直す。

そうだった。

俺、女になってたんだよ。

何も考えずに「俺」って言っちゃまった。

この世界にオレっ娘なんて概念無さそうだし、そりやあ不自然に思われるわな。

……リアルでもオレっ娘なんて見たことねえけど。

「はい！ アリーセ・エレオノーラです！ 道のど真ん中で倒れていたの、こうして避

難所まで運ばせて頂きました」

「あ、ありがとうございます。ダイナ……です」

家名まで言いかけて、慌ててやめる。

フリッツとか壁の王と同じ家名だし、名乗ったらややこしくなるのは間違いない。

「ダイナさんですね。体に怪我はありませんか?」

問われて、軽く体を確認。

……上半身はさらし以外は何も装備してなかったのに、いつの間にか上着を羽織っていることに気づく。

アリーセさんが着せてくれたのかね。
ともあれ、傷はなさそうだな。

まあ怪我をしてたとしても、手当なんかする必要ないんだけどな。巨人の力で勝手に再生するし。

「大丈夫みたいです。痛いところはありません」

女言葉が分からねーので、敬語で対応。

すると、俺の返事を聞いたアリーセさんは「それは良かったです」と言いつて立ち上がった。

「では、私はこれで。もうすぐ食料の配給がありますから、ここを動かないことをおすすめします」

それだけ言い残して立ち去っていくアリーセさんの背中を見送つてると、俺の腹がぐうと鳴った。

まあ、あれだけ走つたら腹も減るわ。

この世界に来てからはまだ何にも食つてねえし。

……ア二？

流石にノーカン……だよな………？

第3話 開拓地と口減らし

両手で握った鋤を、足下に広がる乾いた大地に向かって振り下ろす。ドスツという鈍い音と共に、土が掘り返された。

この作業を、延々と繰り返す続ける。

兵士の人が休憩の合図を出すまで。

それが開拓地に送られた、ウォールマリアからの難民の仕事だ。

……あー、何やってんだよ俺は。

ウォールマリア陥落から、どのくらいの時間が経ったのか。

こまめに数えてねえから正確な日数は分からんが、もうすぐ1年つてところだと思う。

その間、延々と畑仕事をやらされてる。

拒否権はない。

だって、仕事しないとメシが貰えねえんだから。

しかも休みなく丸一日働かせるくせに、偉そうに命令してるだけの憲兵よりメシの質は悪いし量も少ないときた。

暴動が起きるのも納得だな。

朝早くに起きて昼まで畑を耕し、無いも同然な飯を食ったら、次は夕飯までノンストップの畑仕事を再開だ。夕飯は昼食よりはマシだが、それでも味はマズイし腹も膨れない。

娯楽は一切なしときた。

現代社会のブラック企業も真つ青な職務内容。

尤も、俺はバカ正直に従ってねえけどな。

夜中にこっそり抜け出して、ひたすら巨人化能力の訓練を積んでいた。

抜け出せなかったり、愛用している練習場所の近くに人がいたりと毎日出来たわけじゃないが、かなり上達したと言える。

かつては使えなかった硬質化もバツチリだ。

周囲に無垢の巨人がいないのと、出来るだけ見つかると危険を減らすために大音は立てられなかったから、叫びの力は練習できなかったが。

ただでさえ、巨人化の際には爆音と強い光が発生するからな。何度か音が聞こえたらしく、人がやって来て、慌てて巨人化解除したこともある。

だから、こればかりは仕方ねえ。

「あ、ダイナサーン！」

約1年間の努力の成果を振り返っていると、俺の名前を呼ぶ声が聞こえて来た。

最初はダイナつて呼ばれる事に違和感しか感じなかったが、人間の慣れつてすげえよな。今ではすっかり慣れた。

……女の体には全く慣れなかったけど。

初めての、何だ、月経とかは地獄だった。詳細は省くが、月一回のペースで訪れるあの苦しみは本当に勘弁してほしい。

二度と女子に向かつて、このネタでからかわないと誓った瞬間でもある。

「何で返事を返してくれないんですかつ！」

「ごめんなさい、ちよつと嫌な過去を思い出してて……」

呼び声を無視してたら怒られた。

作業する手を止めて顔を上げるも、1人の少女が頬を膨らませながら駆け寄ってくる。

そう、トロスト区に入った直後にぶつ倒れた俺を避難所まで運んでくれたあの調査兵、アリーセだ。

最初の出会い以降も何度か会う機会があり、今や俺のただ1人の友人になっている人物。

いきなり女の体になった俺が、何やかんやで生き残れているのはアリーセの助力によ

るところが多い。

近くに立っていた憲兵が作業を中断した俺を怒鳴ろうとしたが、俺に近づくとアリーセの姿を見て慌てて口を閉じた。代わりに舌打ちして、苛立ちを露わにする。

原作通り、ウォールマリアが陥落してから調査兵団の評価は大きく上がった。

まあ、当たり前の話だな。

避難民を誘導するのも、守るのも、殆ど調査兵がやったんだから。

憲兵も駐屯兵もこの時は巨人を見たことすらない奴が大半で、まともに動けた奴なんて数える程しかない。

それに比べて調査兵は実戦経験が豊富で、巨人の恐怖に耐えうる胆力を持っている。

どっちが活躍するかなど、考える必要すらねえ。

民衆——特にウォールマリアからの難民——からの支持が最も高いのも調査兵団。

つまり、他の兵団の兵士は調査兵団にデカイ顔が出来ないってわけだ。

醜態晒して民衆からの支持を失った直後の状態で、民衆の命を救った調査兵団を蔑ろにでもしたら、暴動待った無しってこと。しかもここはウォールマリアからの難民が多く集まる開拓地。ここにいる殆どの人が調査兵団の肩を持つ。

他の兵団の兵士からしたら、さぞ肩身が狭いだろうよ。

だから普段から威張り散らして、ストレスを発散させてるのかもしれないねーが。

「せっかく空き時間が出来たから会いに来たのに、いつもすぐに黙り込んで……」
いや、ホントすいませんね。

開拓地に来てからは一人で黙々と作業する日が続いているから、思考の海に沈むクセがついちやっつたんだよ。

延々と考え事でもしてないと、開拓地ではやっていけねーし。

「でも、珍しいですね。今はどこの兵団も忙しくて、兵士の人に休み時間なんて無いはずなのに」

これ以上アリーセを放置するのはかわいそうなので、取り敢えず今思いついた話題を振る。

すると彼女は未だに不機嫌そうに頬を膨らませながらも、俺の問いに答えてくれた。

「最近、調査兵団の団長が代わったんです。エルヴァイン・スミスっていう人で……」

エルヴァイン団長きたあああああッ！

アリーセの口から飛び出した名前に、俺のテンションが跳ね上がる。

原作における最重要登場人物の1人。

人類の矛盾である調査兵団を率い、数多の戦果を叩き出した人物だ。

その頭脳は作中でもトップクラス。いち早く人類の中に潜む巨人の存在に気づくなど、活躍するシーンも多い。

「前進せよッ！」は、進撃ファンなら誰もが知ってる名台詞だろう。他にも名台詞多いけど、俺はこれが一番ポピュラーなやつだと思ってる。

どうでも良いことだけだ。

「それで長距離索敵陣形っていうのが出来て、調査兵団は今、大規模な部隊の編成中で………つて聞いてます？」

「もちろん」

「……まあ、良いです。ともかく、調査兵団は部隊の編成中で、それが終わるまでの間がちよつとした休暇になった訳です」

「じゃあ、しばらくゆっくり出来るんですね」

そう言うと、アリーセは一気に苦い表情になった。

そのまま何かを言おう口を開いては閉じ、開いては閉じを繰り返す。

お喋りなアリーセが沈黙するなんて、随分と珍しいな。

かなり言いにくい事があるみたいだ。

だとしたら、俺の方から無理やり聞き出すのは良くねえだろう。ここは彼女が話す決心をするまで、ゆっくり待ってやるのが年上の対応ってヤツだ。

俺、ダイナさんの年齢とか知らんけど。

どんだけ若く見積もっても、23歳くらいか………？

15歳でエレンパパと結婚という強引な仮定でも、20歳だ。

原作開始の時には、まあまあな年齢になってんな。

指折りしながらダイナの年齢を予想していると、急にアリーセが抱きついてきた。

ダイナの身長は168センチと女性にしては非常に高いので、自然とアリーセの顔が俺の胸元に埋もれてるような形になる。

な、なんだ？

急にどうした？

女の子に抱きつかれた経験とかなないから、そんな急に来られると俺もテンパるとい
か……

そんな、俺の浮ついた気分は、アリーセの次の一言で完璧に粉碎されることになる。

「……明日、大勢の避難民を使ったウォールマリア奪還作戦が行われます。このまま開拓地にいれば、間違いなくダイナさんも作戦に投入されます。だから、今すぐ逃げてく
ださい」

そう言われて、アホな俺はようやく気づく。

ウォールマリア陥落から、1年。

それはつまり。

『口減らし』が行われる時が来たということだ。

人口の約2割。

25万人が巨人に食い殺されるという悲惨な結末を迎える作戦が、始まる。



結論から言うと、俺は逃げなかった。

本当は凄え怖くて、逃げたくて仕方なかったけどな。

男なら逃げるなど一晩中自分に言い聞かせて、何とか奪還作戦に参加する決意が出来た。

逃げなかった理由はいくつかあるが、最も大きいのはアリーセに迷惑をかけないため。

恐らく、兵団は奪還作戦に避難民を使うということを当日まで隠していた。

当たり前だわな。

あらかじめ「7日後にウォールマリア奪還作戦に参加して、巨人と戦ってもらうから」なんて避難民に予告すれば、逃げ出す奴が続出するだろう。巨人と戦えと命令されて、

はいやります！ つて答える馬鹿は我らが主人公エレンくらいだ。

それを防ぐために、敢えて作戦決行の直前に発表を行う。

なのに発表前に俺が逃げ出せば、確実に兵士から情報が漏れたと兵団は考えるだろうな。

そしてその場合、真つ先にアリーセが疑われるだろう。

俺が最も親しくする相手で、しかも兵士。

容疑者にされるに決まってる。

その結果アリーセが投獄されたり、処刑されたりしたら俺は耐えられない。

つーか、ブチ切れて巨人の力で暴れるくらいのはする。

原作の登場人物たちのように、親友が殺された直後でも冷静を保てるような精神力は、今の俺にはねえんだから。

まあ、避難民が1人逃げたところで兵団が気にするとも思わねえが。

今のはあくまで最悪のパターンってやつだ。

けどそんな可能性が少しでもあるなら、ゼロにしておきたいというのが俺の心情だな。

他にもいくつか理由はあがるが、今それを全部並べる時間はないらしい。

俺たち避難民は兵士によって誘導され、トロスト区の開閉門の前に集められていた。

死にたくないと言き叫ぶ声。せめて子供は、妻は、祖父は、参加させないでくれと嘆願する声。全部まとめて無視される。

本当に、嫌な気分になる光景だ。

避難民に慈悲の言葉は与えられない。

代わりに与えられるのは、冷たい金属の武器だ。

俺が渡されたのは、兵士が使う超硬質ブレードの劣化版みたいな剣。

これで戦えてか？

いつそ笑いすら込み上げてくる。

立機動装置もなく、馬もなく、渡されるのは一振りの剣のみ。

本当に、何が奪還作戦だよ。

「ではこれより、ウォールマリア奪還作戦を開始する！ 敵前逃亡は許されん！ 参加

する全ての兵士と民よ、人類のために心臓を捧げよ！」

奪還作戦の指揮を執る兵士の声が響き渡り、同時に壁の扉が開いていく。

そして、作戦が始まった。

「出撃いッ！」

「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！！！！」」

まず始めに馬に乗った兵士たちが駆け出し、その後を避難民が徒歩で追う。もちろん

ん、俺もその中の1人だ。

頼りない剣を握りしめ、後ろから押されるようにして前へ。

そして遂にトロスト区の外へと踏み出し、直後に地獄が広がった。

巨人、巨人、巨人、巨人、巨人、巨人、巨人、巨人、巨人、巨人。

見渡す限り、大量に。

絶望するより先に、当たり前だよな、なんて感想が浮かぶ。

25万人もの人間が一点に集まってんだ。

当然、人の気配に反応して巨人が集まってくるに決まっている。より人口の集中するところに、巨人は引き寄せられるんだからな。

こんなの、基礎知識だ。

それはもう、戦いじゃなかった。

次から次へと壁の外へ出てくる人間たちを、巨人たちが貪り食うだけ。俺の目には、人類が巨人に対してご馳走を振舞っているようにしか見えない。

「……くそつたれ」

そう吐き捨て、俺は改めて地獄を直視する。

巨人の数は……ぶっちゃけ分からねえ。多すぎる。

どう見ても100は下回らねえだろ。下手したら200に届いてるかもな。

前方も左右も巨人で埋め尽くされていて、後ろからは避難民が溢れるように出てきている。立ち止まったら後ろから押し倒されて、人に踏み潰されて死ぬだろう。

さあ、どうする？

生き残るためには、ここからどうすれば良い？

巨人化。

最も安直な考えが浮かぶが、今このタイミングでは無理だ。

目撃者が多すぎるし、巨人化した時の爆風で周囲の人を吹き飛ばしてしまう。

超大型巨人程じゃないけど、俺が巨人化する時もそれなりの爆風が引き起こされるかな。こんな人口密集地のと真ん中じゃ使えん。

だけど、このままアホみたいに巨人の方に走り続けても死ぬだけなのは間違いない。

エレンみたいに、噛み砕かれずに巨人の胃袋に入れたらなあ。

それなら胃袋の中で巨人して、存分に暴れてやるのに。

自分から巨人の口につ込むのはリスクー過ぎるから、これはボツ案だ。

くそ、考えているうちにどんどん巨人が近くなる。

早く打開策を……。

そこで、何かに躓いて転んだ。

顔から地面に激突した俺は額をさすりながら立ち上がり、何に躓いたのか確認して、

吐きかけた。

俺が足を引つ掛けたのは、上半身がなくなつた兵士の死体だ。

断面からは内臓と鮮血が吹き出しており、骨まで丸見えになっている。

「吐くな、吐くな、吐くな」

この人だつて、好き好んでこんな姿になつたんじゃねえ。

そう言い聞かせ、喉元までせり上がつてきたものを、再び嚙下して胃の中に引き戻す。

ちくしよう、無駄に時間を割いた。

早く、何か……。

人がいない場所までいけたら、巨人化できる。ならば、人がいない場所へ一瞬で移動できる手段を探せ。

心のどこかでそんな都合の良い手段があるかと思ひながらも、再び最も近い巨人を睨みつけ、見つけた。

パシユンツツという、ワイヤーの射出音。

ガスの噴出と共に、高速機動する兵士。

あるじゃねえか。

この世界には、人間が高速で移動できるようになる便利な機械が！

すぐさま身を翻し、先ほど転倒の原因となつた兵士の死体の許へ。下半身のみのソレ

には、立体機動装置が残っていた。

取り外し方とか知るか！ 無理やり引き千切れ！

最低限の機能さえ損なわなければ問題ない。

両横の鞘を強引に外し、立体機動装置の本体だけ入手。装着方法など分からないので、取り敢えずベルトで腰に巻きつける。ガスの噴出口が後ろに、ワイヤーの射出口が横にければ良い。

立体機動装置を無理やり腰に取り付けたら、次は15メートル級の個体に向かって照準を定める。

奴は今、食事に夢中だ。大丈夫だ、問題ない。

自分にそう言い聞かせ、トリガーを引く。

両腰の射出口からワイヤーが飛び出し、先端のアンカーが巨人の体に突き刺さったのを確認。そしてもう一度トリガーを引き——違った、こっちのトリガーだ——ワイヤーを巻き取る。

体が引つ張られる感覚。

逆バンジーでもしてるみたいに俺の体が15メートル級に引き寄せられていき、全身に凄まじい圧がかかる。まともに立体機動装置を装備してないから、空中でバランスが取れずに頭を下にして吹っ飛ばすマヌケぶりだ。

スカートがめくれ上がるが、そんなの無視してガスを噴出。もちろん、出力最大の俺の体は錐揉み回転しながら真上に吹っ飛び、15メートル級が小さく見えるほどの高さに。

避難民も兵士も、視線は全て巨人に釘付けだ。馬鹿みたいに吹っ飛んだ俺に視線を向けてる奴なんて、1人もいない。

大成功。

ワイヤーで雁字搦めになってようが、ともかく空高く飛び上がれば俺の勝ちだ。

大きく口を開き、自分の右手に食らいつく。

スパークが迸り、骨が、肉が、皮が、現れ、体を構築する。

さあ——1年間の修行の成果、今こそ見せようか。

立体機動に利用した15メートル級を踏み潰しながら着地した俺は、渾身の雄叫びを上げた。

第4話 愚者の判断

天から一条の閃光が走り、俺が自分の手を喰い千切ることで生まれた傷口を起点として、巨人の体が生成されていく。

女型の巨人となった俺は空中で身を捻り、立体機動に利用した15メートル級の巨人の真上に着地する。

肉と骨が潰れる音と感触。

俺の真下で赤色がぶち撒けられ、周囲の人たちは巨人の血を浴びながらも、何が起きたのか分からず呆然としていた。

まあ、そうなるよな。

彼らからしたら、空が光つたと同時に巨人が降ってきたようにしか見えないだろう。驚くなんて方が無理な話だ。

15メートル級のうなじを踏み潰してトドメを刺し、素早く立ち上がる。

ひとまず巨人化は成功。

さて、相手は反応すっかな？

俺が視線を向ける先は巨人どもではなく、トロスト区……壁の中だ。

俺が「口減らし」から逃げなかった理由その2。

それは鎧の巨人と超大型巨人の2人が、奪われた女型の巨人が出現したのを見てどんな反応するか確認するため。

ずっと不思議に思っていたことがある。

それはこの世界にやってきた初日、俺がアニを食って人間に戻った時のことだ。

あの時、なぜか『鎧』と『超大型』は『女型』を継承した俺を拘束せず、無視して内門の破壊を優先していた。

いや、おかしいだろ。

九つの巨人はマーレが有する最大の武器、地球で言うところの核兵器みたいなもんだぞ？

貴重な7つのうちの1つを奪われて、放置するわけがねえ。

マルセルの『顎』がユミルに奪われた時は、ライナーが動転して逃げ出した、っていう理由がある。

けど俺の時は2回目。

アニを食われたっていう衝撃はあったと思うが、流星にライナーがまた混乱したって事はないだろう。

見逃された理由が分からなかった。

その理由を知るために、俺はこうして派手に女型の巨人の姿を晒している。

トロスト区の中でやってきた時とは違い、真昼間で、これだけ人が注意を向けている場所です。巨人化したんだ。

巨人化の際の光と音は、間違はなく奴らに聞こえていたはず。

……奴らがトロスト区にいれば、の話だが。

『鎧』か『超大型』が今すぐ姿を現して、俺を狙ってくるならまだ分かる。

俺が気を失っている間に何かあり、どうしても俺の回収より内門の破壊を優先しないといけない理由があったんだろう。

理由の本身はやっぱり分かんねーままだが。

けど、今回もまた姿を見せなかったしたら？

その場合は「俺を見逃さないといけない理由」が生まれる訳だが、そんなもんがあるとは思えねえんだよ。

……しかし、出てこねえな。

俺が巨人化してから10分は経ったが、2人とも現れる気配なし。

もしかして、俺がその辺の巨人に食われて死ぬのを待ってんのか？

でもその場合は俺を食った無垢の巨人が元の姿に戻るから、巨人の正体が人間って壁の中にバレる訳だが……。

それは向こうからしたら避けたいことのはず。

マルコを殺した時のリアクションから推測するに、自分たちの正体がバレるような不安要素は絶対に潰しに来ると思っただけだな。

それとも、ここで俺と戦うリスクを恐れている？

負ける可能性はもちろん、こんなにも人がいたら巨人化するのも一苦労だろう。巨人化の瞬間を見られる可能性は、かなり高い。

それを恐れて出てこない、つてのは分からんでもないけど。

それらのリスクを考慮しても、女型の巨人の力を見逃すか？

原作じゃ、戦士長と決闘を演じてまでアニを助けようとしたくせに？

……いや、あれは『女型』よりアニを回収したかったのか。

主にベルトルトが。戦ったのはライナーの方だけだな。

あー、くそ。

もうどうせ原作は木っ端微塵だから、ここで鎧か超大型を仕留めてやろうと思ったのに。

やっぱりそんな簡単にいかねえか。

なら、プラン変更。

他の巨人化能力者の撃滅は諦め、この場の避難民が少しでも生き残れるように動こ

う。

もしかしたら、アルミンのお爺ちゃんを助けられるかもしれない。

真後ろから伸びてきた8メートル級の腕を避け、顔面に蹴りをお返ししてやる。8メートル級の顔面が陥没し、頭部が吹き飛んだ。

まずは近くの巨人を倒しながら、巨人の群れを脱出。

その後は「叫び」の能力で避難民から引き剥がして、俺の方へと引き付けなければい。あとは傾合いを見て、習得した硬質化で壁を越える。

よし、完璧だ。

……完璧だと、いいなあ。俺ってそんなに頭良くないから、想定通りに物事が進むほうが珍しいんだよな。何か不足の事態が起きるかもって身構えてるほうが良いかも。

「オオッ！」

つと。

奇声を発しながら飛び上がり、上から襲ってくる10メートル級をアッパーで迎撃。そのまま流れるように次の動作へと入り、今まさに女性兵士を食い殺そうとした13メートル級を殴り倒す。

そして、硬質化。

意識を硬質化したい部位に集中し、力を込める。

俺の足首から膝までが硬質化し、青白く輝く結晶のように変化した。

「——シィッ！」

息を吐き、硬質化した右足で薙ぎ払うような蹴りを繰り出す。

蹴りの軌道にいた巨人たちがまとめて両断され、上半身と下半身に分裂して地面に沈む。

お、おお、凄え。

想像以上の破壊力なんですけど。

別に格闘技の経験者でもない俺の蹴りでもこの威力なら、アニの蹴りはどのくらいの強さだったのか。

……この口減らしを生き延びたら、アリーセに対人格闘術でも習おうかな。痴漢や強姦魔から自衛するためとか言えば、喜んで教えてくれそうだ。

そんな思考をするくらい余裕がある。

硬質化がもたらした戦闘力の向上は、そのくらい凄い。

普通の状態で全力の拳を放つと、俺の拳まで骨が折れたりするんだよ。

そうなるも当然、再生が必要になる。再生するということは、余分な体力を使うという事。体力を使うということは、巨人化を維持できる時間が減るということ。

こんな感じで悪循環が始まる。

それを解決してくれる硬質化は本当にありがたい。

確かに硬質化も体力を消費するが、傷の再生と比べたら圧倒的にコスパが良いんだよ。

また一体、巨人を仕留める。

さて、どこまで上手くいくものか。



トリガーを引いてワイヤーを射出。

アンカーが目標の立体物に突き刺さったのを確認して、ガスを噴出。

前方へと高速移動しながらトリガーを引いてワイヤーを回収し、横回転しながら空中で姿勢を制御。素早く次にアンカーを突き刺す場所を決めると、私はトリガーを引いた。

ダイナさんが、ウォールマリア奪還作戦に参加した。

私がそれに気づいたのは、奪還作戦が開始してから10分以上も経過した後だった。

昨日のうちに、ダイナさんには逃走経路を教えていた。

私はその逃走経路で待っていたけれど、いつまで経ってもダイナさんは姿を見せな

い。

そして壁の外で大きな音と光がした瞬間に、私はようやく、ダイナさんが作戦に参加してしまったのだと気づいた。

そこから先は、もう無意識に動いていたと思う。

兵装が保管されている倉庫から無断で立体機動装置を持ち出し、休暇中にもかかわらず兵士の制服を纏い、壁を乗り越える。

その先で見たのは、地獄だった。

抵抗することもできずに、巨人に捕食されていく避難民たち。

私たち調査兵団が多く犠牲者を出しながらも守った命が、徒に減っていく。

「……………に……………の、何の、為に！」

気づけば、私は絞り出すような声で叫んでいた。

思い出すのは、ウォールマリアが陥落した日のこと。

仲の良かった同期の皆は、避難してきた人たちを守って次々と死んでいった。

今でも仲間たちの断末魔が、死の間際の恐怖に歪んだ表情が、脳裏にこびりついて離れない。

私も巨人の血と仲間の血で真っ赤になりながら、ガスと刃が切れるまで必死に戦い続けた。

私がガス切れで撤退すると、住民の避難が終わったのは同じくらいだったと思う。あまりに必死に戦っていたから、その時の記憶があやふやでちよつと自信がないけれど。

結局、私たちが助けた避難民の大多数がこうして巨人に食い殺されるなら。私の友達、仲間たちは、どうして死ななければいけなかったのだろうか。

あの時に人類に捧げた彼らの心臓は、本当に無駄じゃなかったのかな。

そんな時に出会った……というか、見つけたのがダイナさん。

疲れでフラフラになりながらも、未だに混乱状態の避難民の人たちを誘導している途中。いきなり道のど真ん中で倒れ込んだのが、彼女だった。

どうしてか上の服は着てないし、下着もつけていない。胸元に布を巻きつけただけの姿は、はつきり言って危うかった。

だって、ダイナさんは凄く美人だもの。

あんな綺麗な女性が胸に布を巻きつけた状態で倒れてたら、男達に何をされるか分かったものじゃない。

慌てて担ぎ上げて避難所まで運び、上着を着せて寝かせた。

幸いにして彼女はすぐに目を覚まして、私はすごくホツとしたのを覚えている。

ああ、命を救えた。兵士としての役目を果たしたって。

その時は少し会話しただけで終わっただけ、避難民に食料の配給をしていた私は、その後もよくダイナさんと出会った。

口数の少ない彼女は常にぼーっとしていているように見えて、実は色々なことを考えている……らしい。

何度か会話をしていると自然と打ち解けて、私は暇さえあれば彼女に会いに行くようになった。その時の私は多くの友達と仲間も一度に失ったから、とにかく話し相手が欲しかったのかもしれない。

経緯はともあれ、ダイナさんは私にとってかけがえのない友人になったのは事実だ。そんな彼女が、この地獄にいる。

また友人を失うかもしれないという恐怖で、全身の震えが止まらない。

次々と食べられていく避難民の姿を見て、すでにダイナさんも食べられた後かもしれない、なんて嫌な想像が浮かぶ。

早く、早く、ダイナさんを見つけないと。

食べられてしまう前に。殺されてしまう前に。

そう思えば思うほど、どんどん焦る。

だから、こんな簡単なミスをしてしまったのかな。

アンカーが建物に刺さらず、弾かれた。

空中で大きくバランスを崩してしまい、速度がガクンと落ちる。

こんな巨人だらけの場所で、動きが鈍れば。

「オオオオオオッ！」

口から涎を溢れさせながら、13メートル級が私に襲いかかってくる。

視界いっぱい広がる、巨人の口内。

今までの経験から分かる。これはもう、助からないやつだ。

ワイヤーの射出も、ガスの噴出も間に合わない。

というか、巨人の口内は私の進行方向から迫ってきてる感じだから、まずは体を反転させる必要がある。

そんな余裕はない。

もしかしたら、罰なのかもしれないあと漠然と思う。

人類に心臓を捧げた兵士でありながら個人の感情を優先させて、たった1人の市民の命を救うために、兵士としての規則を破って勝手な行動をした罪への。

少しずつ巨人の口が閉じられていく。

先に死んでいった仲間たちの姿が浮かぶ。

私も、今そつちに行くから——

「オオオオオオオオオオオオッ！」

「——ッ!？」

体の芯まで揺さぶるような、凄まじい雄叫び。

それと同時に、今まさに私を食い殺そうとしていた10メートル級の巨人が吹き飛んだ。

巨人が、飛んだ。

10メートルの巨体が。

実際に目の当たりにしても、その光景が信じられなくて私は啞然とするばかり。

何とか正気に戻ったのは、地面に落ちる直前だった。

慌ててトリガーを引いてワイヤーを射出し、この辺りで一番高い建物……時計塔の上へと着地する。

そして一体何が10メートル級の巨人を吹き飛ばしたのかと視線を走らせて、見つけた。

15メートル級。

ほとんどが男の人のような体つきの巨人にしては珍しく、女性のような体つき。女型の巨人、とでも名付けたら良いのかな。肩まで伸びる金髪を揺らすその巨人は、拳を振り抜いた姿で止まっている。

月白色に輝く瞳は一瞬だけ私を見て、そしてすぐ興味がなくなったように別の方向を

向いた。

こんなにも近い距離なのに、人間わたしに反応しない……？

それに私の見間違いじゃなかったら、あの巨人はさつき、他の巨人を殴り飛ばしたことになる。

巨人を攻撃する巨人なんて、聞いたことがない。

ゾワツと。

全身の血が騒ぐ。

あの巨人は普通の巨人とは違う。

奇行種。

それも、今までの巨人とは根本的に異なる行動原理を持った。

あの巨人が「他の巨人を攻撃する」という特性を持つてるなら、利用できるんじゃないかな。

10メートル級を空高く吹き飛ばすほどの膂力。

あの力で他の巨人を掃討してくれたら、ダイナさんの生存確率も……！

その時、女型の巨人が大きく動いた。

右足を軽く持ち上げ、片足立ちのような姿勢で静止。

すると女型の巨人の右足の一部が、青白い何かに覆われていく。

それが何なのかと私が疑問を持つよりも早く、烈風すら纏った強烈な蹴りが放たれた。

薙ぎ払うかのような軌道のそれは、近くに立っていた巨人を5体もまとめて両断してしまう。

なに、あれ……!?!?

運動性能が今まで見てきた巨人とは違いすぎる!

確かに巨人は運動性能やその他のスペックに個体差があるけど、あんなに飛び抜けた個体は見たことがない。

明らかな規格外——

「ツツオオオオオオオオオオ——ツツ!!」

女型の巨人が再び雄叫びを上げた。

でも、先ほどのものとは音量が桁違い。

体の芯どころか脳まで揺さぶられて、視界も揺れる。

けれど私を本当に驚かせたのは、次の瞬間に起きたこと。

避難民の人たちを捕食していた巨人たちが、一斉に女型の巨人の方へと向かって行った。捕食を中断してまで。

信じられない。

巨人が人間の捕食より優先することがあったなんて、今までの常識が丸ごと覆る。この場の殆どの巨人を引き連れたまま、女型の巨人が走り出した。

「……あー！」

咄嗟に女型の巨人を追いかけようとした私は、トリガーを引く直前に思い出す。自分がどうしてここにいるのかを。

ダイナさんは……!?

兵士としては、女型の巨人を追いかけるべきだ。

あの巨人は放置できない。

人間より強く巨人を引き寄せる特性に、人間より他の巨人を攻撃する特性。

うまく利用できれば、信じられないほど有益な武器になってくれる。

けど私個人としては、ダイナさんの安否を確認したい。

今すぐ彼女の無事を確認して、力一杯抱きつきたい。

私は。

アリーセ・エレオノーラは、どうすれば良いの……？

第5話 失態、失態、失態

……やっぱり『女型』のスペック凄えな。

肩越しに後ろを見てみると、かなり離れた位置に巨人の大群が見えた。まだ全力の速度じゃねえけど、それでも並みの巨人を簡単に引き離せてる。

これなら簡単に逃げきれそうだな。

もう少し走って完全に巨人の群れの姿が見えなくなったら、壁をよじ登るか。今のところ壁沿いに走ってるからいつでも登り始められるんだが、念には念を入れるってことで。

登ってる途中で、下からジャンプしてきた無垢の巨人に足を掴まれたりしたら最悪だ。あの群れのど真ん中に落下することになる。

そうになったら流石に死ぬ。

あの大群を駆逐するとか、普通に無理だつーの。

100に近い数の巨人の群れを駆逐できるのって、それこそ『超大型』くらいだろ。距離を取ることが出来れば、『獣』も岩の投擲で殲滅出来そうだけど……。

見た目的に『獣』は足とか遅そうなんだよな。

17メートルの巨体に加えて、あの長い腕。絶対に走った時バランス取りにくいだろう。

いや、まあ、ジークならもう高速で走ってもおかしくない気がしなくもない。あの強キヤラ感ハリヴァイにも引けを取らないし。

……ああ、もう1人いたな。巨人の群れを殲滅できる可能性を持った人が。

我らが人類最強にして、この世界で紛う事なく最高位の戦闘能力を持つリヴァイ兵長だ。

ライナーを殺す一歩手前まで追い詰め、精鋭揃いの旧リヴァイ班すら全滅させたアニを単独で倒してエレンを取り返し、獣すら倒してジークにトドメを刺す瞬間まで追い込む。

人間じゃねえ。

リヴァイ兵長とは絶対に戦いたくない。

勝てる気しねーよ。

つと、完全に引き離れたな。

背後から巨人の姿が消えたのを確認した俺は、硬質化を発動させる。

両手の指先と、両足のつま先。

皮膚が青い結晶のように変化したそれらを壁に突き刺し、よじ登っていく。

ここで気をつけないといけないのは、力を入れすぎて壁に穴を開けちゃうこと。下手したら壁の中の巨人が露出するという、最悪の事態になりかねん。

原作も開始してないのに『地ならし』が発動するとか、大惨事だ。それも座標を使つての正式な起動じゃないから、超大型巨人の大群は壁の中の人類にまで牙を剥くだろう。

……細心の注意を払う必要があるな。

そんなことになったら、責任取れねえ。

ヒヤヒヤしながらも、壁の上到達。

よし、後は飛び降りる……だ……け……け……？

しまった、降りる時のことを考えてなかった。

50メートルって、巨人化してもかなり高くないか？ このまま飛び降りたら死ぬ可能性ってゼロじゃない？

いや、うなじを硬質化してれば死ぬことはねーな。骨折くらいはするかもしれんが。

つか飛び降りたら絶対に大音がある。

壁の中に巨人が侵入するところ見られたら終わりだぞ、オイ。

……はあ。

面倒くせえが、登ってきた時と同じようにコツコツと降りるしかないか。

指先とつま先をもう一度硬質化し、登った時と同じ要領で降り始める。なんか、カッコ悪い気がする。

巨人化能力者なら、無茶ができる巨人の体を利用してもつとド派手にやるような先入観があつたな。

ともかく今の姿を絶対に見られる訳にはいけないので、なるべく早く手足を動かす。そして、やつとの思いで地面に着地。

壁を超えた俺は、すぐさま巨人化能力を解除する。

うなじの部位が蒸気と共に消滅し始め、本体が外界に露出した。

「お、今回は服が消えてねーな。ラッキー」

本体を見下ろした俺は、ちゃんと服を着たままの上体を見て呟く。

流石に兵士の死体から貰った立体機動装置や、奪還作戦開始の時にもらった剣とかは消えてたけど、今回は服が完全に無事だ。

最初の頃は巨人化を解除するたびに服を持っていかれたから、地味に金がかかったんだよなあ。

流石に服までは配給してくれねえし。

仕方ないから開拓地での作業でもらったなげなしの金は、全部服につき込んでた。が、それも今日で終わりだな。

これからは飯が買える。

まずは明日のパンを2個にするか。

久しぶりに空きつ腹がマシになるかもしれないねえ。

あー、そんな事を考えてたらお腹が減ってきた。

……で、ここ何処だ？

トロスト区の中……じゃないよな、うん。

だつてガッツリ森の中だし。

ちくしょう、壁の上にいた時に現在地を確認しとけばよかつた。相変わらず頭悪いな。

かなり走つたから、トロスト区からだいぶ離れてんじやねえの？

人間の足で戻るのつて、かなり大変なんじや……。

「はあ……」

本日2度目の、盛大なため息をつく。

その瞬間だった。

パシユンという、独特の射出音。この世界で何度か聞いた、ガスが噴出する音。さらに金属同士が擦れる、摩擦音。

ブワツと。

全身から嫌な汗が噴き出した。
指先が、いや、全身が震える。

ギギギギギ……と。

壊れたブリキ人形のように首を動かし、まだ完全に消えてない巨人の体の上で音のした方向へと視線を向ける。

そこには。

驚愕の表情を浮かべて、俺を見下ろすアリーセの姿があった。

……見つかった。



個人の感情を優先して、ダイナさんを探すのか。
兵士の役割を優先して、女型の巨人を追うのか。

結局のところ、私はどちらも選べずに中途半端な形で気持ちで動いてしまっていた。

ひとときわ高い建物の上から、大きく数を減らした避難民の人たちが我先にとトロスト区へ撤退しようとする光景を見下ろす。

私は人と比べて、視力が良い方だと思う。

この高い建物の上からでも、人の顔を見分けられるくらいはつきり見えるから。目を皿にして、友人の姿を探す。

けれど、どれだけ必死に探してもダイナさんの姿は見当たらない。

生き残った半数近くの人がトロスト区へ帰還したところで、私は急激に怖くなった。嫌な考えが浮かぶ。

無意識のうちに、生き残った人たちの中からではなく、あたりに散乱する死体の中から友人の姿を探そうとしている自分がいる。

違う、そんな訳ない。

ダイナさんが死んでるはず、ない。

どれだけ自分にそう言い聞かせても、体の震えは止まってくれない。そして、ついに限界がきた。

トリガーを引いてワイヤーを射出し、立体機動を開始。

生存者からも死者からも目を離して、女型の巨人の追跡を開始する。

急に、やっぱり兵士としての役割を果たすべきだ、なんて思った訳じゃない。怖かったから。

もしどれだけ探してもダイナさんの姿が見当たらなかつたら、今度こそ私は自分だけ生きてることに耐えられないと思つたから。

また友人の死を見ることになる可能性が怖くて、私は逃げ出した。仮に。

あくまで仮定の話だけど、ダイナさんが死んでいたらなら。

少なくとも、女型の巨人を追っている間はその現実を見なくて済む。トロスト区に戻らなければ、私の中ではダイナさんは生死不明のままだ。絶対に死なない。

そんな最低の考えで、私は女型の巨人を追った。

女型の巨人の姿はとっくに見えなくなっていたけれど、女型を追う巨人の大群の最後尾はまだ見えている。

幸いなことに、女型の巨人は壁に沿って走っているみたいだ。

なら私も壁を利用して立体機動できるから、わざわざアンカーを刺す場所を探さなくても良い。

絶対に巨人に捕まらないよう、かなりの高さを保って追跡を開始。

……けれど。

「まだ遠目にも姿が見えない……」

追跡を始めてからすでに5分以上経過している。

なのに、女型の巨人の姿は見えない。

足の遅い個体はすでに数体は追い越したし、今でも私の眼下にはおびただしい数の巨

人が走っているから、彼らの探知内にはいるはずなんだけど。

走る速度まで規格外なんて……。

もしかしたら、調査兵団の馬より速いかも。

トリガーを引いて、今までより強くガスを噴出。

巨人たちを次々と追い越しながら、さらに加速していく。

そしてようやく、遠目に女型の巨人の姿が見えた。

試しに後ろを振り返ってみると、私と同じように女型の巨人を追いかけてきた巨人の群れは見えない。

先頭の個体すらも。

本当に、冗談みたいな速さ。

調査兵団の中でも、女型の巨人の速度に追いつける人は少ないかもしれない。

もしも真正面から、女型の巨人とぶつかったなら……。

ゾクリと、背筋に冷たいものが走る。

自分の血で大地を赤く染め上げる同胞たちを幻視してしまう。

あれはミケ分隊長でも、勝てるかどうか分からない。

「……………」

嫌な想像を振り払い、今は少しでも女型の巨人の情報を集めようと改めて前を見たそ

の瞬間。

女型の巨人が、いなくなっていた。

慌てて私も動きを止め、壁に張り付いて辺りを見渡す。

けれど見つからない。

どうすれば良いのか分からずに私はしばらく呆然とした後に、取り敢えず壁の上まで

移動しようとワイヤーの射出口を上に向ける。

そして、頭を鈍器で殴られたかのような衝撃に襲われた。

「う、そ……」

喉から掠れた声が出る。

今まさに、アンカーを刺す場所にしようと思つた壁の上。

そこに、女型の巨人がいた。

消えたんじゃない。私が目を逸らした間に、壁をよじ登っていたんだ。

壁を乗り越えられる巨人なんていない。

そんな先入観から、私は無意識のうちに壁の上なんて見ようとしなかった。ずっと壁

から離れたものだと思つて、平原の方を見ていた。

だから気づかなかつたんだ。

啞然とする私の前で、壁内の方へと女型の巨人が降りていく。

ウォールローゼが、たった1体とはいえ、間違いなく巨人に突破された。蘇る1年前の惨劇の記憶。

ここで私が女型の巨人を倒さないと、あの惨劇が繰り返されてしまう。

覚悟を決める。

勝てる気はしない。

だけど、やるしかない。

不思議と恐怖はなかった。それどころか、ようやく死に場所が見つかった。そんな気さえる。

何度も壁外調査を生き残って、ウォールマリア陥落の時も生き残って、分かったことがある。

死ぬのは怖くて辛いけど、残される方も死ぬのに負けなくらい辛くて、悲しくて、苦しいんだってこと。

この奪還作戦という名の口減らしを生き残れたのは、僅か数千^人程度。25万人のうち、たったのそれだけ。

分かっていったんだ。

ダイナさんが死んでいる可能性の方が、何倍も高いんだってことは。でも。

もしも奇跡が起きて、本当にダイナさんが生きていたなら。

私はこの「生き残ってしまった苦しみ」をダイナさんに押し付けてしまう——？
そう思った瞬間に、まだ死ねないという気持ち之急激に膨れ上がった。

壁を乗り越えながら、私は歯をくいしばる。

死に場所はここじゃない。

女型の巨人を倒して、ダイナさんの生死をちゃんと自分の目で確認してから、改めて死に場所を探すんだ。

ワイヤーを放つ。アンカーを刺す。ガスを吹かす。

先手必勝。

女型の巨人が私に気づくよりも早く、うなじを切り落としてや……………え。

パシユンと。

乗り越えたばかりの壁にアンカーを突き刺し、私は動きを止めた。

思考が真っ白になる。

目の前の光景の意味が分からなくて。

なにかの見間違いだと思つて。

でもどれだけ目を見開いても、目の前の光景は変わらなくて。

膝をついた体勢で動きを止めている女型の巨人。

その体は蒸気と共に、少しずつ消えていく。

うなじから上半身だけを出した、ダイナさんを基点として。

「アリーセ……？」

この1年ですっかり聞き慣れた、ダイナさんの優しい声。

この場所では絶対に聞こえないはずのそれが、確かに私の鼓膜を叩く。

気がつけば、女型の巨人の頭の上……ダイナさんの目の前に移動していた。

間違いない。

陽の光を浴びて輝く綺麗な金髪。いつも私に優しい眼差しを向けてくれた、月白色の瞳。

女型の巨人から出てきたのは、私の友達だった。

「どういう……こと、ですか……？」

無意識に溢れ出ていた私のその言葉に、ダイナさんが困ったような、今にも泣き出しそうな表情をする。

まるで悪いことをしたのがバレた、子供のような表情。

いつもお喋りな私の話を静かに聞いてくれていたダイナさんの、初めて見る表情。

気がつけば、私は友人に剣先を向けていた。

色々な感情が渦巻いて、私の心の中はぐちゃぐちゃだ。

「どういう、ことですか？ 何で女型の巨人の中から、ダイナさんが出てくるんですか？ 私に分かるように、説明してくださいよ」

ダイナさんは黙ったまま、何も答えてくれない。

超硬質ブレードを握る私の力が強くなる。

「ダイナさんは、巨人だったんですか？ 私を騙してたんですか？ 友達だって言ってくれたのも全部ウソで……」

「——ッ！ 違うー！」

また初めてだ。

ダイナさんが声を荒げるところなんて、初めてだ。

気がつけば、私も怒鳴り返していた。

「じゃあ、ちゃんと説明してくださいよ!? 何で女型の巨人の中から出てきたのかを、私に!!」

「これ、は……」

私とダイナさんの視線が交差する。

やがて、ダイナさんが全身から力を抜いてうな垂れた。

そこでようやく、私は自分が泣いていることに気づいた。

私の体からも力が抜けて、その場に座り込む。

しばらくお互い無言の状態が続いて、私は少しずつ落ち着きを取り戻す。

やっぱり、聞きたいことは沢山ある。

でも、私が一番聞きたかったのは。

「ダイナさんは、人類の敵ですか？」

「……違う、と思います。少なくとも人間を襲ったりする気はないし、壁を壊すつもりも

ありません」

「信じて良いんですか？」

「信じてくれるんですか？」

私の質問に、質問で返してくるダイナさん。

それがおかしくて、私はちよつとだけ笑ってしまった。

「聞いているのは私の方じゃないですか」

「いや、だって、巨人の姿、見られましたし……」

巨人の姿。

そう言われて、やっぱり女型の巨人がダイナさんで間違いなかったんだと思う。

シヨックは……あまり、受けない。

それどころか、女型の巨人の不自然な行動に説明がつく。

他の巨人を攻撃する特性。

近くの人間を襲わずに無視する特性。

そしてよく思い出せば、女型の巨人は私を助けてくれている。

私が13メートル級に食われかけた時、13メートル級を殴り飛ばして助けてくれた。

……あ。

それだけじゃない。

その後、女型の巨人は他の巨人を引き連れて走り去った。

さつきまでは何でそんな事をしたのか意味が分からなかったけど、今なら予想できる。

もしかして、避難民の人たちを救うためだった？

考えれば考えるほど、女型の巨人の行動は『人類の敵』としてはあり得ない。むしろその反対。人類を巨人から守ってすらいる。

本当にダイナさんが敵なら、あの巨人を引き寄せる能力を使った後に、トロスト区に強引に入れば良かった。

というか、そもそも壁の中に1年もいて何もしてない時点で敵としてはおかしい。人類への攻撃が目的なら、とっくに壁の中で巨人化して暴れているはずだ。

本当に、敵じゃない。

良かった。

私は、ダイナさんに裏切られてなんていなかった。

「ダイナさん、私は——」

私が口を開いた直後だった。

突然、空が光る。

壁のすぐ向こう側から、雷でも落ちたみたいな光と爆音がした。

続いて立ち昇る大量の蒸気に、地鳴りのような音。

「アリーセ、立体機動で逃げて!!」

何が起こったのか分からず硬直する私と対照的に、ダイナさんは焦ったように女型の巨人の中に埋まっていた下半身を引き抜く。

そして、何とスカートのポケットから取り出したナイフで自分の手を突き刺そうとした。

何考えてるの、この人は!?

慌ててダイナさんの腕を掴み、自傷行為を寸前のところで止める。

「何してるんですか!?! まさか正体がバレたからって自殺を……!?!」

「そうじゃないから! ……まずい、もう登ったのか!?!」

「さっきから何を……」

見ているんですか、という私の問いかけは最後まで発せられなかった。急に上を見上げたダイナさんに倣って、私も壁の上へと視線を向ける。そこで見たのは、壁の上から飛び降りてくる巨人の姿だった。

「ツオオオオオオオオ!!」

耳をつんざく咆哮と共に、巨人が降ってくる。

慌ててダイナさんを抱えて立体機動に移ろうとするけど、僅かに間に合わない。

大地を揺るがしながら巨人が着地し、私とダイナさんを纏めて握りしめる。そして再び、壁を登り始めた。

咄嗟に巨人の指を超硬質ブレードで斬りつけるけど、全く刃が通らない。それどころか、超硬質ブレードの方が折れてしまう。

「何、これ……!?!」

硬すぎる巨人の皮膚に呆然とする私。

その隣で、私と一緒に巨人の手の中に捕らえられたダイナさんが悔しそうに叫んだ。「出てこないと思っただらそういうことか、鎧……ッ!!」

そして私たちは抵抗することも出来ずに、再び壁外へと連れ出されてしまった。

第6話 対鎧の巨人撤退作戦

ちくしょうが……！

鎧の巨人の手の中で必死にもがくが、人間の力でどうこうできる訳がない。

両腕を上から押さえられる形で握られてるせいで、自分の手を食い千切って巨人化するのも無理だ。

隣では俺と一緒に捕まったアリーセが超硬質ブレードで指を斬りつけているが、反対に刃の方が折れちまってる。やっぱり、鎧の巨人に兵士の装備は効かねえよな。

くそっ。

鎧のやつ、俺が人間に戻るのを待ってやがったのか。

トロスト区の前で俺が姿を現した時、『鎧』も『超大型』も出てこなかった理由が今やつと分かった。

俺が少しでも消耗するのを待ってたって訳だ。

これ以上は絶対に負けられない戦士組からすれば、危険な賭けには出られない。大勢の人間と無垢の巨人が周囲にいたあの状況は、リスクが高すぎると判断したってことか。

だから様子見に徹して、最も勝機が高いタイミングを見計らっていた。なら、そのタイミングはいつだ？

決まっている。

人間に戻った瞬間を狙うのが、最も有利だろう。

バカ正直に相手が巨人化してる時に狙う必要はない。巨人化能力者が最も隙を晒すのは、人間に戻った直後だ。

だが、1人で反省会している暇はない。

こうしている今でも、鎧の巨人はウォールマリアの方へと走り続けている。もうウォールローゼが見えない。つか、捕まってからどのくらい経った？ それすら分かんねえ。

ふざけんな。

このままマールに連れていかれてたまるか。

『超大型』まで出てきたら俺の勝機は完全に消える。それより早く、鎧の巨人を倒さねえと……！

「アリーセ、そのブレードでどこでも良いから私を斬ってください！」

両腕を押さえつけられてる俺と違って、アリーセは手が動かせるらしい。

ならアリーセに傷を作ってもらえれば、その傷で巨人化できる。

連続で巨人化するのはキツイが、あと一回戦うくらいの体力は残ってる。

そう考えて頼んだんだが、

「こんな時に何言ってるんですか!? そんな簡単に生きるのを諦めるなんて……」

見事に伝わらなかった。

まあ、この状況でそんなことを言えば、食われるくらいなら自刃したいって言ってるようにしか聞こえんわな。

「そうじゃなくて! 巨人化するのに傷が必要なんですよ! 自傷が巨人化のトリガーです!」

「……!」

慌てて詳細を説明すると、アリーセが息を呑む。

そして超硬質ブレードと俺を見て、本当にやって良いのかと迷ってるようだ。

アリーセが躊躇している間に、鎧の巨人が動く。

俺たちを握りしめている手とは反対の手が近づいてくる。

巨人化を防ぐためにブレードを奪う気か!?

ならいつそのこと、舌を噛み切っても……!

そう思つて舌を出したところで、アリーセが俺の胸元あたりにブレードの切っ先を触れさせた。

「本当にやりますからね!？」

「頼む!」

アリーセの最終確認に即答する。

そこでようやく決心したアリーセが、俺の肌を浅く切り裂いた。

天から光が落ち、再び俺の巨人体が生成されていく。

巨人化の衝撃で鎧の巨人の手と一緒に吹き飛ばされそうになったアリーセを生成されたばかりの両手で優しく握りしめ、俺はバックステップで鎧の巨人から距離を取った。

ひとまず拘束を逃れた俺は、アリーセを頭の上に乗せる。

「すごい、本当に……!」

驚愕してるとこ悪いけど、そんな暇はない。

地面を踏み砕くほどの踏み込みと共に、鎧の巨人の拳が放たれた。

咄嗟に両腕を交差し、硬質化まで加えて防御する。だが、鎧の巨人は俺の防御をもともせずにはち抜いた。

両腕の骨が折れる鈍い音と共に、俺は後ろへ10メートル以上も吹き飛ばされてしまった。

なんつー威力だよ。

硬質化した俺の腕の骨を折るとか、どんなパワーしてやがんだ。

骨折して両腕が使えなくなった俺を見て、鎧の巨人が追撃の体勢に入る。

ボツ！ と。

鎧の巨人が、烈風を纏うほどの速さでタックルを繰り出した。

ウォールマリアの内門を破るほどの威力を秘めたそれをまともに受ければ、一撃で戦

闘不能になるのは必至。

どう避ける……!?!?

「ダイナさん！ 身を屈めて足払いして下さい！」

「——オオッ！」

考えるより早く、体が動いた。

言われた通りにしやがみこみ、地面に手をつけて鎧の巨人の足を狙って硬質化した右

足で蹴りを放つ。

確かな手応え。いや、足応えか？

鎧の巨人の脛を守っていた硬質化した皮膚が砕け散り。脚部に痛打を受けた鎧の巨

人が転倒する。

格闘技経験者でない俺ですら分かる、明確な好機。

左腕の再生は止めて、右腕に再生力を集中。一気に右腕の骨折を再生する。

そして前のめりに倒れてくる鎧の巨人の頭に狙いを定め、硬質化した拳でアッパーを放つ。鎧の巨人は咄嗟に腕を差し込んで俺の拳を防ぐが、今度は俺がガードを強引に打ち抜いた。

前のめりに倒れていた鎧の巨人が、俺の拳を受けて後ろへ仰け反る。

「腹部に蹴りです！」

再び頭の上のアリーセから指示が来た。

迷うことなく指示に従い、蹴りを放つ。今度は足払いの時のような足の甲で薙ぎ払うタイプではなく、足の裏で蹴りつけるタイプ。

鎧の巨人の腹部がひび割れ、そこから血を吹き出しながら後ろへと吹っ飛んでいく。

凄え、まともに入った。

「油断しないでください。膝を軽く曲げて、腰を落とすんです。……起き上がりましたよ。パワーでは負けてますが、速度ならダイナさんの勝ちみたいです。避けとカウンターに徹しましょう」

今の僅かな攻防で、女型の巨人と鎧の巨人の性能差を見抜いたってのか？

だとしたら凄え観察眼だ。

感心しつつアリーセに言われた通りに腰を落として身構えたのと同じ、鎧の巨人が口から蒸気を吐き出して起き上がった。

……が、今度はすぐに攻めてくる気配がない。

拳を構えた状態のまま、俺の隙を伺うかのようにじつとこちらを睨みつけている。

膠着状態に入ったならちようど良い。

生まれた猶予時間、こちらも存分に使わせてもらうまでだ。

鎧の巨人には気づかれぬように、こっそり本体の上半身のみを巨人体から分離する。

「……アリーセ」

「……っ!？」

小声で呼びかけると、アリーセがビクツと肩を震わせて振り返った。そしてうなじから上半身だけを出した俺をみて、微妙な表情をする。

「そんな事まで出来るんですね……」

「鎧の巨人から目を逸らさないで。本体を露出させてるのが相手にバレます」

そう言うと、アリーセは小さく頷いて鎧の巨人へと視線を戻す。

背中を向けたアリーセに、俺は出来る限り早口で即興で立てた作戦の説明を始めた。

「このまま真正面から鎧の巨人を倒すのは難しいので、隙を見て逃げます。協力してください」

再び、アリーセは背を向けたまま小さく頷く。

「まずは――」



俺が説明を終えるのと、鎧の巨人が動くのは同時だった。

第2ラウンド開始だ。

すぐさま本体を巨人体の中へと戻し、アリーセが頭の上から立体機動で移動したのを確認して、俺も鎧の巨人へと向かって走り出す。

鎧の巨人が間合いに入ったのを確認して、渾身の蹴り。

脇腹を狙う俺の一撃は、しかし鎧の巨人の両腕でガツチリと防がれてしまう。右足全体に走る、硬いものを蹴りつけた際のジーンとした痺れ。

それがなくなるより早く、鎧の巨人からカウンターが飛んできた。

俺の顔面を狙ったエルボー。咄嗟に首を捻って躲し、掌底打ちを胸元に叩き込んでやる。

が、鎧の巨人は後ろに下がって見事に俺の掌底打ちの威力を受け流した。この辺りでも、素人と格闘技経験者の差が出てきやがる。

後ろに飛んで殴られた威力を受け流すとか、俺はそんなの出来ねーぞ。

明確な実力差に奥歯を噛み締めながらも、すぐに次の攻防へ。

後ろへ下がった鎧の巨人へと追いつき、硬質化した足先で脛を狙う。

が、鎧の巨人は半身になって簡単に俺の蹴りを躲した。

直後、返礼として放たれた砲弾と見紛うほどの拳が迫り来る。

慌てて上体を横へ動かすが、僅かに間に合わずに掠った俺の頬から血が噴き出した。

……その代わりに、鎧の巨人の腕を掴むことに成功。

渾身の力で腕を引っ張り、俺は自分ごと鎧の巨人と共に後ろへと倒れこむ。そうなる
と当然、鎧の巨人が俺の上に乗る形となり、マウントポジションが相手に奪われる。

俺のミスに、鎧の巨人が僅かに笑ったような気がした。そのままご自慢のパワーで俺
を抑え込み、俺のうなじを食い千切ろうと大口を開ける。

なので、俺も嗟い返してやった。

お前のミスは3つ。

1つ目は、勝ったと思って気を抜いてしまったこと。

2つ目に、俺と1対1タイマンで戦っているつもりになっていたこと。

そして3つ目、人類の叡智の結晶と、調査兵の力を侮っていたことだ。アリーセが持
つ超硬質ブレードが『鎧』で弾けたから、自分には兵士の攻撃は効かないと思いついて
警戒すらしていなかっただろ。

巨人化能力者の俺が言えたことじゃねーけどよ。
人間の力、あんまり舐めんな。

「らああああああつ!!」

独特の金属音と、ガスの噴出音。

雄叫びを上げながら、白刃を煌めかせてアリーセが空を舞う。

第2ラウンド開始の直後から近くの木へと移動していた彼女は、ずっと俺が鎧の巨人の動きを止めることを信じて奇襲の機会を窺っていた。

独楽のように回転した彼女が、鎧の巨人の膝裏の筋を見事に削ぎ落とす。

ハンジさん曰く、人間の構造上『鎧』で覆えない部分がいくつかある。

例えば関節部位。関節をガチガチに固めたら、動くことが出来ねえからな。

俺がアリーセに頼んだのは、原作のミカサのように、鎧の巨人の筋を削ぎ落とすことだ。脚を動かす上で重要な筋を削がれた鎧の巨人は一気に動きが鈍くなり、パワーも落ちる。

今度はテメエが下になれやア!

「オオオオオオオオオオオッ!」

両腕で鎧の巨人の首をキメ、そのまま裏投げ気味に放り投げた。

鎧の巨人を背中から地面に叩きつけ、マウントを奪い返すことに成功する。と、同時

にアリーセに合図。

そして硬質化した両拳を握りしめ、鎧の巨人の顔面を殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打、殴打。

ひたすら目元の部分を狙って拳を振り下ろし続け、ひととき強く殴った後に巨人体に命令を残して離脱し、女型の巨人が指先で右目をえぐり取ったところで、鎧の巨人が反撃に転じた。

鎧の巨人は両腕の肘を地面につけて体を固定し、ブリッジするように体を跳ね上げて、上に乗っていた女型の巨人は体が浮いた衝撃で地に手をつける。

その瞬間を逃さずに鎧の巨人が相手の両腰を掴んで押し上げ、ブリッジした両足を引き抜き、曲げたその足を自分と相手との間に入れると、ドロップキックのように相手の体を吹き飛ばす。

吹き飛んでいく女型の巨人。

鎧の巨人はその腕を掴むと自分の方に引き寄せ、そのうなじを食い千切った。飛び散る鮮血の雨の中で、鎧の巨人はうなじの中から飛び出した俺を捕獲しようとして、ようやく気づく。

俺が、女型の巨人の中に入っていないことに。

辺りで最も背が高い木にアンカーを突き刺し、立体機動装置で限界の高さまで飛び上

がっていたアリーセ。

俺は彼女の腕の中にいた。

マウントポジションを取ると同時に俺はアリーセに合図を送り、ひたすら目元を殴ることで鎧の巨人の視界を妨害して、アリーセの再接近がバレないようにする。

次に合図を見たアリーセが立体起動装置で俺の下へ来てくれたタイミングを見計らい、最後に巨人体に鎧の巨人を押さえつけるよう命令を残して、本体自身は離脱。アリーセに抱えてもらって、この高所まで運んでもらったってわけだ。

どれだけアリーセの支援があつたところで、素人の俺が格闘技の訓練を積んだ『戦士』が動かす鎧の巨人に、真正面から打ち勝てるわけがない。

なまじケンカ慣れしてる方だからこそ分かる。

素人と訓練を積んだ格闘技経験者の差は、圧倒的だ。

逆立ちしても、マウントポジションを取っても勝てない。

つーか、素人が格闘技経験者を相手にマウントポジションを維持できる訳がねえ。

空手などの格闘技経験者は、マウントポジションから抜け出す術を知っているそう
だ。素人が格闘技経験者を押さえつけることなんて出来ないんだよ。絶対に。

この世界に空手はねえだろうが、そこは戦士の一員。そのくらいの格闘技術は持つて
るだろう。

だから、俺はせっかく取ったマウントポジションをすぐに捨てた。維持できないのは分かっていたから。

結果、今まさに見せつけられた通りだ。

さっきの鎧の巨人の動き、マジでやべえ。

俺本体が入ってなかったとは言え、女型の巨人は最後に俺が残した「抑えつけろ」って命令に従って力を入れていた。

なのに、一瞬で抜け出しちまった。

あのまま離脱してなかったら、今ごろ鎧の巨人の口の中だっただろう。

「けど、勝つのはこっちだ。アリーセ、お願い」

後ろから俺の体を抱きしめて飛んでいるアリーセに、3度目の合図を出す。

彼女は頷くと、俺を鎧の巨人に向かって全力で投げつけた。

「ダイナさん、いっけえええええええええええっ！」

「おう！」

アリーセの声援に短く答え、俺は鎧の巨人に向かって落下しながら自分の手を噛みちぎる。

3回目の巨人化。

鎧の巨人が巨人化の光と音でようやく俺の居場所に気づくが、もう遅い。アリーセに

筋を斬られたその足じゃ、回避は間に合わねえ！

空中で巨人化した俺は、残された力の全てを右脚に注ぎ込む。

今現在、俺ができる最高硬度の硬質化。

それを施した右脚で、落下の勢いをも加えた全力の蹴りを放った。狙いは当然、鎧の巨人の両足。

動きの鈍った鎧の巨人は予想通り回避できず、俺の蹴りは見事に足首に直撃した。鎧の巨人の足首から下が切断され、移動能力を完全に奪うことに成功する。

そこで、俺も限界が訪れた。

力を使い果たし、巨人の体が瞬く間に消えていく。

気を失う直前に見た最後の光景は、巨人体から強引に俺を引き抜くアリーセの姿だった。

第7話 サバイバル生活の前夜

知らない誰かの声が聞こえる。

知らないどこかの景色が見える。

「この世の全てを敵に回したって良い」

男の声。

親しい人の声。

「この世の全てからお前が恨まれることになっても」

知らない誰かが俺を抱きしめて涙を流している。

いや、俺はこの人を知っている。

この人は、

「父さんだけはお前の味方だ。だから約束してくれ」

わたし
俺のお父さん——

「帰ってくるって……!」

そして場面が切り替わった。

燃える街。響く悲鳴。地響きのような足音。充滿する死臭。舞い散る鮮血。

朦朧とする意識の中、巨大な口が迫ってくる。

不気味な笑みを浮かべた金髪の巨人の口が、閉じた。

「……つづ、あッ?!」

「あ痛っ!」

凄まじい頭痛に叩き起こされて、俺は勢いよく上体を起こす。

すると今度は頭の内側からではなく外側からの痛みに襲われて、俺は額を押さえて蹲る。

うああああああ……!」

頭の内と外の両方が痛ええ。

しばらく痛みで悶絶した後、涙目で周囲の様子を確認する。

すると、俺のすぐ近くで同じように頭を抱えて蹲っているアリーセの姿があった。

どうやら俺が上体を起こした際に、お互いの額がぶつかってしまったらしい。

「うう……ダイナさんって意外と頭が硬いんですね……。赤くなってるかも……」

アリーセもかなり頭が硬かった気がするけどな。

そんな感想は口には出さず、俺は改めて辺りを見渡す。

ここは、アレか。

目に飛び込んできた景色は初めて見るものだが、俺はこの場所を知っている。要するに、アニメで見た場所ってことだ。

樹高80メートルを超える巨木が並び立つ、鬱蒼とした森の中。

本来なら女型の巨人の捕獲作戦に使われる予定だった場所——巨大樹の森。

俺とアリーセは、そこにある巨木の上にいた。

気を失う直前の状況から推測するに、気を失った俺をアリーセが立体機動装置でここまで運んでくれたってことか。

運が良かった、以外の感想が思い浮かばねえ。

鎧の巨人の両足首から下を破壊したとはいえ、あの程度の損傷なら数分で回復できるはずだ。すぐに追跡が始まるだろう。加えて壁外なので無垢の巨人の脅威もある。

そんな中で気を失った人間を抱えて安全地帯まで辿り着けるなんて、本当に奇跡とか言いようがない。

かなり近くに巨大樹の森があったんだらうな。

「随分と斃されましたけど、大丈夫ですか？」

そんな事を考えながら巨大樹の森の景色に見入っていると、アリーセが労わるような

声音で話しかけてきてくれた。

「え？ ……ああ、もう大丈夫かな」

「無理しないでくださいね？ 巨人化能力のことはさっぱり分らないですけど、気を失うまで頑張ったんですから。体に負荷が掛かかっていてもおかしくありません」

「確かに無理はしたけど、アレくらいしないと鎧の巨人の不意はつけないから」

それに斃されてたのは、巨人化能力の酷使が原因じゃない。

アニから継承した『記憶』が原因だ。

最近では眠るたびに夢の中で断片的な記憶を見せつけられる。人の記憶を無理やり見せられる時点でいい気分はしねーが、今回のは特に酷かった。

あれは恐らく、俺に食べられる時の……死ぬ直前の記憶だろう。

食われる直前のアニの感情が流れ込んできて……これ以上、思い出すのは良くねえな。

軽く首を振って、気を取り直す。

「……まだ気分が優れないなら、膝枕でもしましょうか？ さつきみために」

「さつきみために……？ ああ、だから起き上がった時に頭をぶつけたのか………膝枕?!」

「そんなに驚くことですか？」

俺が気を失っている間にそんな男の理想みたいなシチュエーションがあったのかよ。もう一回やってってくれて言うのも何かカッコ悪いし、勿体ないことしたな。

つと、そんな事を考えてる場合じゃねえか。

いくら安全な高所にいるつつつても、ここは壁外。しかも力を使い切った直後で、今の俺は巨人化することが出来ねえ状態だ。

襲われたら抵抗すらできない。

頼れるのはアリーセの力だけだが……

「アリーセ、ガスと刃はどのくらい残ってる?」

「それなんです……実は、ガスが完全に切れました。本当にギリギリ、巨大樹の森に入れた感じです」

マジかよ。

そう言い、不安な表情を浮かべて俯くアリーセ。

これは本格的に移動手段がない。

俺が回復するまでの間、木の上で過ごすしかないってことか。

「しばらくは壁内に戻れないだろうし、食料を調達しないと……」

希望的観測で、10日間はサバイバル生活ってところか。

この巨大樹の森から、どうやって10日分の食料を調達したもんかな。

下手すりや食料になるものがなくて餓死だ。

「この森に食料になりそうなものとかない？ 10日分は欲しいんだけど……」

「ダイナさんがもう一度巨人化するのに、10日も……。いえ、あれだけの力ですし、そのくらいの休息期間はむしろ妥当……」

ん？

何か勘違いされてねえか？

「巨人化能力は明日にでも使えると思うよ。一晩ぐつすり眠れば、力は大体回復するし。後はこの森に食料があるかどうか……」

「たった一晩で回復できるんですか!？」

「た、多分。しっかり休息が取れたらの話だけど」

凄いい勢いで詰め寄ってきたアリーセに少し怯みながら、引き気味に返答する。

俺の言葉に一瞬だけ難しい表情になったアリーセだが、すぐに笑顔になってパンツと両手を合わせた。

「それなら10日もここで待たなくても、明日にはダイナさんの力で壁内に戻れるんじゃない……」

「あー、それは無理かな」

喜んでるところに水を差すようで悪いけど、そんな簡単にはいきそうにないんだ。

一瞬で表情を曇らせたアリーセの頭を撫でながら、俺は口を開く。

「鎧の巨人がそう簡単に諦めるとは思えない。向こうからしたら、私が壁外にいる今が捕獲する絶好の機会。必ず私たちが壁の中に戻ろうとした時を狙って、襲撃してくる。今の私じゃ、悔しいけど鎧の巨人は倒せないし……」

「そんな……。いくら鎧の巨人でも、待ち伏せなんて知性は……」

そこまで言いかけて、アリーセは何かに気づいたように口を閉じた。察しのいい彼女なら、わざわざ俺が明言しなくても分かるだろう。

「鎧の巨人も、ダイナさんと同じ……。巨人の体を纏った人間なんですか……?」
震える声で発せられた彼女の問いに、俺は無言で頷いて肯定を示す。

しばらくアリーセは何も言わず、無言の時間が続く。

先に静寂を破ったのは、俺の方だった。

「聞きたいことは色々あると思うけど、まずは生き延びることを考えてみない……?」
「……そう、ですね。しばらくはダイナさんと2人きりでサバイバル生活ですし、情報を聞き出す機会は幾らでもありますよね」

「お、お手柔らかに……」

そう言っただけに笑顔が戻ったアリーセに、俺も苦笑を返す。

その笑顔が空元気によるものでも構わない。

今はまず、餓死しないことを考えるべきだろう。お話タイムは、生き延びる手段を確立してからだ。

「まずは食料ですが、巨大樹の森で調達するのは難しいと思います。食べられる野草や果実が分かりませんか。下手に毒物を食べてしまったら最悪ですね。そういった知識がある人がいるなら別ですが……」

そこで言葉を区切ってこちらを見てきたので、俺は首を振る。

「この世界の植物や果実なんてさっぱりだ。」

サバイバル知識なんて持ち合わせていない。

「それなら、近くの廃村などを回るしかありませんね。ウォールマリア陥落は本当に突然のことでしたから、食料を持って逃げることは難しかったです。なら、まだ食料が残ってる可能性があります」

「もう一年も経ってるし、肉も野菜も腐ってない？」

「保存食なら一年経っていても大丈夫なはず。村によつては、冬を越すための食料を倉庫に保存していたところもあるでしょう」

「なるほど……」

干し肉とかなら食べても大丈夫そうだ。

不安なら火で炙れば良いだろう。

飲み物も、酒ならまだ飲めるものもあるかもしれないねえ。枯れてない井戸が残ってれば、それが最善だが。

それと、もう一つ問題がある。

「この巨大樹の森の近くに、村ってどのくらいあるか分かる？」

「私はカラネス区出身なので、ウォールマリアの地形はあまり詳しくなくて……。実際に走り回って、村を探すしかないかと」

うへえ。

下手したら近くには村が一つもありません、って可能性もあるわけか。運良く村を見つけても、そこには食料がない場合もあるだろうし。

これは、マジで厳しいな。

場所が明確に分かっていて、食料がある可能性が比較的に高いところ。

そんな都合のいい場所なんて流石に……ある。

「……シガンシナ区だ」

「さ、流石に速すぎませんか？ 確かに食料の備蓄はかなりありそうですが、辿り着くまでの危険が大き過ぎると思いますけど」

「ギリギリだったけど、シガンシナ区からトロスト区までは走れたから。今回は巨大樹の森からのスタートだから、前回よりも余裕があると思うし」

「やった事あるんですか!? ……あ! ……もしかして、初めて会った時にダイナさんが突然倒れたのって……」

「今回みたいな巨人化能力の酷使が原因」

そう言うのとアリーセは微妙な表情でため息をついて、腕を組んで考え込み始めた。彼女はしばらくその姿のまま硬直していたが、やがて決心したように顔を上げる。

「村を探して歩き回るにしても、シガンシナ区に向かうにしても、危険なのは同じです。それなら、確実性の高いシガンシナ区の方が良いかもしれません。……行きましょう」
決まりだな。

あのクツソしんどのイマラソンをやるのは嫌だが、生きる為には仕方ねえし。

鎧の巨人と超大型巨人が揃って待ち構えている可能性が高いウォールローゼに向かうよりは、幾らかマシだと思うべきだ。

「じゃあ、出発は明日の夜。日没と同時に動こう」

「昼の方が良いんじゃないですか? 夜だと巨人の接近に気付くのが遅れますし、道に迷う可能性もありますよ?」

「道に迷う可能性については否定しないけど、巨人の方は大丈夫。基本的に巨人は夜になると活動が鈍るから」

「道順の方も大丈夫だと言って欲しかったですけど……」

前回は本当に死に物狂いだったから、ぼんやりとしか憶えてねえんだよな。

まあ、ひたすら南に向かって走り続ければ必ず辿り着けるし、方角は太陽の光で分かる。恐らく大丈夫だろう。

夜中に走り出すから出発の時は方角が確認できないが、日が出ている今のうちに南がどつちか確認していれば良い。

幸い、俺とアリーセがいる枝の上は日光がよく届いてるし。

方角を確認したら、後は寝るだけだ。

俺が今やらないといけないのは、しっかりと休んで出来る限り体力を回復させること。

途中で体力切れになったら、その時はアリーセまで道連れにしちまうからな。それだけは絶対に避けないといけない。

ただでさえ鎧の巨人との戦いでは借りを作りまくったんだから、ここで少しでも返すべく必要がある。

「帰ったら、エルヴィン団長にダイナさんのことなんて説明しようかな……」

「え!?! お……私が巨人化能力者って報告するの!?!」

「当たり前じゃないですか。ダイナさんが調査兵団に協力してくれたら、私たち人類は一気に前へ進めるんですよ? 調査兵団が命を賭して求めた「巨人の情報」に、どんな

大砲や武器よりも強力な「巨人の力」。逃がすわけありません」
うう、そりやそうだよな。

俺も調査兵团に味方するのは良いんだが、その前に軍法会議にかけて処刑される
気がするんだよ。

いや、俺は兵士じゃないから軍法会議ではないか。

何にせよ、不利な状況から裁判にかけられるのはエレンの例からして間違いないねえ。

アリーセは擁護してくれると思うが、彼女一人がどれだけ俺を庇ってもあまり意味が
ないだろう。それどころか、アリーセまで俺の仲間だと疑われてまとめて処刑されるか
もしれねえ。

本当に処刑を逃れたかったら、ハンジさんやエルヴィン団長の協力を勝ち取る必要が
ある。

その為にはどうすれば良い？

……トロスト区での決戦だ。

あそこでエレンと同じく人類の勝利に大きく貢献出来れば、エルヴィン団長が「使え
る」と判断してくれるだろう。

岩を運ぶエレンの援護でもするか。

もしくは、叫びの力で巨人を引き寄せて壁の外へと誘導するとか。

そんな事を考えていると、アリーセが硬い表情で話しかけてきた。

「……ダイナさんが巨人化能力者だと知っているのは、今のところ私だけです。ここで私を置き去りにするなり、殺すなりすれば、口封じできますよ?」

まあ、確かに一理ある。

ここでアリーセを殺して口封じすれば、俺が巨人化能力者だとバレる事はなくなるだろう。

少しでも自分の保身を考えるのなら、それが最善手。

……だが。

俺は手を伸ばし、アリーセの頬を軽く引つ張る。

「い、いひゃい。いひゃいです、ダイナひゃん」

「口封じする気なら、いくらでも殺す機会はありました。なのに殺してない時点で、私がおなたを裏切る気はないと分かるでしょうが」

「で、でも、私が裏切る可能性もありますよ? やっぱり巨人化できるダイナさんは危険だから、殺そうとか」

「それなら鎧の巨人と戦いで、私を援護しなかったら良かったでしょう。アリーセが私を援護しなければ、私はあのまま鎧の巨人に負けて連れ去られていました。さらに付け加えるなら、気を失った私をあの場合に放置すれば良かったんです」

「それは、アレです。拷問して情報を聞き出して殺すつもりだとか」

「本当にそうなら、そんな事は言いません。あと巨人化能力者に拷問はお勧めしません。わざわざ傷つけてあげるなんて、巨人化してくれと言っているようなものです」

俺が片っ端から返答していくと、やがてアリーセはネタが無くなったのか「あー」とか「うー」とか考え込み始めた。

そんな彼女を額にデコピンを叩き込んで、涙目になった彼女に俺は微笑を浮かべる。

「私が巨人化能力者だと知った瞬間に殺そうとしなかった時点で、私はアリーセを信用しています。今さら裏切りませんよ。親友ですから」

エレンにとってのアルミンやミカサが、俺にとってのアリーセだ。

巨人化能力者を見た時のこの世界の住人の反応は、子鹿隊長や初期のリヴァイ班の様子でよく分かる。

それだけ、壁内の人間にとって巨人は怖い。

なのにアリーセは前と同じように接してくれているし、命まで救ってもらった。

俺が彼女を信用する理由としては十分だ。

なぜか顔を赤くして硬直しているアリーセを置いて、俺は木の幹に背中を預けて寝る体勢を取る。

今から明日の夜まで、24時間ぶっ続けで睡眠だ。シガンシナ区まで走る体力も十分

に回復するだろう。

腕を組んで目を閉じると、アリーセが俺の隣に密着して座り込んだ。そして調査兵団のマントを広げると、俺にもかけてくれる。

「……夜は冷えます。この方が暖まるでしょう」

女になってて良かった。

この密着度はやばい。

絶対に反応してた。

だって右半身にめっちゃ柔らかい感触が伝わってくるんだぞ？ 何か良い匂いもするし。

眠れねえよ。

つか、アリーセ寝るの早くね？

もう寝息が聞こえてきたんだが。

結局俺が眠れたのは、そこから2時間以上も経った後だった。

第8話 生き延びるために

頭上で輝く月と満天の星を見上げて、俺は大きく伸びをしながら立ち上がった。

丸一日ぶつ続けて寝てたから少し体は怠いが、その代わり巨人の力は完全に回復している。前回よりも多少は距離が短いし、巨人化能力の練度も高い。

これならシガンシナ区に辿り着く前に力尽きる事はなさそうだ。

「そろそろ出発ですか？」

「頃合いだと思う。日が出たら巨人がまた活性化するから、夜の間にはシガンシナ区に辿り着きたい」

「分かりました。支度するので、ちょっと待ってて下さい」

そう言うときアリーセは立ち上がり、出発の準備を始めた。

立体機動装置を装備する彼女を横目に、俺も軽く準備運動を行う。体を動かすたびにバキバキ音が鳴って気持ちいい。

特に腰な。

上体を後ろに反らしていると、ふとアリーセが俺の方を凝視していることに気づく。

「アリーセ……?」

「いえ、何を食べたたらそんなに大きくなるのかなあと」

ああ、胸の話か。

原作だと出番が少なかったから見てもいなかったけど、ダイナは意外と胸が大きい。

カルラさんの方も大きかったっけ？ 小きくは無かった気がするが……。

エレンパパよ、貴様さては大きい方が好きだな？

俺は大ききなんぞ気にしねーがな。小さいのも十分に個性だ。

なので嫉妬の視線を向けてくるアリーセをフォローすべく、俺は口を開く、

「ほら、貧乳はステータスっていう男性もいますし。そんなに気にしなくても……」

「すてーたす、という言葉は初めて聞きましたが、何となく意味は察せられます。それを

踏まえた上でそのセリフを言った男性に、こう言い返してやりたいですね。お前は女性

に哀れみの視線と共に「短小はステータスだ」と言われて嬉しいか？」と

なんて恐ろしいこと言うんだこの子。

大きさにコンプレックスを抱いてる奴がそんなセリフを哀れみの視線と共に美少女

に叩きつけられたら、ガラスメンタルでなくても心が砕けるぞ。

俺なら確実に女性恐怖症になる自信がある。もう2度と人前で下着を脱げなくなる

の確定だ。銭湯とかお泊りイベントが地獄に早変わりすること間違いなしだろう。

貧乳はステータスなんて言葉、もう2度と女性に向かって言うまい。

この言葉はフォローにならない。男版に言い換えてみればよく分かる。ただの追撃だ。アリーセの返しに戦々恐々としているうちに、彼女は出発の準備を整えていた。

立体機動装置と調査兵団の深緑のマントを身に付けた彼女の姿に、俺もさっきのアホな会話を忘れて気を引き締める。

いくら無垢の巨人の活動が鈍くなる夜中でも、壁外は壁外。危険なのは間違いないのだから。

ちよつと油断したら死ぬ。忘れるな、ここはそんな世界だ。

「それじゃあ、お願いします」

「了解」

アリーセから超硬質ブレードを借りて軽く指先を切ると、俺は木の枝から飛び降りる。直後にやめとけば良かったと思った。

ああ、クツソ怖え!! 80メートル舐めてた!

30メートルでもオフィスビルの7、8階の高さだつっの。80メートルつて、その理論から考えたらビルの20階以上の高さじゃねえか。

怖いに決まってるだろバカヤロー。三重の壁より高いわ。

勢いで飛び降りたことを後悔しながら、死にたくないの一心で巨人化能力を発動させた。

天から雷光が降り注ぎ、爆音と共に骨肉が生成されていく。

俺は完成したばかりの巨人体を操作し、軽く膝を曲げて地面に着地するとアリーセに向かつて合図を出した。

程なくして、ワイヤーを駆使してアリーセが降りてくる。

ガスがなくても、ワイヤーの射出も巻き取りだけである程度は移動出来るらしい。

アリーセが俺の左肩に飛び乗ったのを確認すると同時に、南に向かつて走り出す。

さあ、始まりの地に向かおうか。



「ダイナさん、見えました！ ウォールマリアです！」

左肩の上で歓喜の声を上げるアリーセに、俺も頷いて答える。

結論から言うと、何事もなく辿り着くことが出来た。

夜中に出発したのは正解だったらしく、ただの一度も無垢の巨人に襲撃されなかったし。

あまりに呆気なくて、肩透かしを食らった気さえする。

いや、何事もないのが一番なんだが。

指先と足先を硬化して壁をよじ登り、ウォールマリアの上で巨人化を解除。本体をうなじから引き抜いて、深く息をする。

何事もなかったとは言え、壁から壁まで走るのは流石に疲れるな。気を失った前回と比べれば、幾分マシだが。

傷の再生で無駄に体力を消費しなくて済んだのが大きいのだろう。

「お疲れ様でした、ダイナさん」

そんな分析をしていると、アリーセがどこからともなくハンカチを取り出して、額の汗を拭いてくれる。

良い子すぎるわ。結婚しよ。

未亡人で子持ちの同性だけお嫁にもらってください。もしくは嫁に来てください。

なんて俺のチョロイン思考は、アリーセのお腹から聞こえてきた「ぐうー」という音によつて遮られた。みるみるうちにアリーセの顔が赤く染まる。

まあ、昨日から飲まず食わずだもんな。

腹が鳴るのは仕方ない。

かく言う俺もかなり腹減ってるし、ハードな運動を終えたばかりだからめっちゃ喉が渴いた。

水が飲みたい。

「え、えつと、それじゃあ最初に枯れてない井戸を探しましょう！　まずは水を確保する必要があると思います！」

「そ、そうですね。けどその前に立体機動装置にガスを補給しないと。巨人が跋扈するシガンシナ区の中を、まさか徒歩で移動する訳にはいけませんから」

照れ隠しなのか早口で捲し立てるアリーセをジェスチャーで宥めながら、俺はそう提案する。

まだ夜明けまでには少し時間がある筈だ。

巨人が不活性化している夜のうちにガスの補給を済ませとかなないと、後々が面倒になるだろう。

そんな訳でアリーセと2人で談笑しながら壁の上を歩き、シガンシナ区を見下ろして補給拠点っぽい建物を探す。

幸い、拠点らしき建物はすぐに見つかった。

巨人の襲撃で一部が損壊しているが、中の方は無事だろうと思われる。遠目に見てるだけなので、確信は持てないが。

「アリーセ、ガスなしでもあの建物まで移動できる？」

「……これだけ立体物が多いなら、ワイヤーの巻き取りによる前進だけでもいけると思っています。もちろん速度は出ませんから、襲われた時は高確率で巨人に捕まってしまう

すが……」

「じゃあ、尚更急ぎましょう。夜の今が絶好の機会です」

「ですね。ダイナさん、しっかり掴まって下さい。速度は出ませんが、不安定なのは変わりありません」

そう言われて、俺は慌ててアリーセの背中にしがみつく。

と、同時にアリーセが壁から飛び降りた。

もの凄い浮遊感を目を閉じて堪え、情けない悲鳴を上げそうになる口を無理やり閉じる。年下の少女の背中中で悲鳴を上げるとか、僅かに残っている男のプライドが許さない。

僅かにしか残っていない理由？

……色々あったんだ。本当に。

だが数分すると浮遊感にも慣れ、目を開けられるようになった。

ワイヤーの巻き取りだけで進んでいるはずなのに、思ったより速い。

それに、よく咄嗟にアンカーを刺す場所を決められるよな。

俺なら次にアンカーを刺す場所を即座に決められず、毎回立ち止まる事になりそう
だ。

……戦闘開始5秒で巨人の胃の中に入るのは間違いなしだろ。俺に立体機動装置を

扱う素質はないと確信した。

「窓ガラスを割って中に飛び込みます。衝撃に備えて下さい！」
「へっ!？」

思わず変な声が出た。

ちよっ、待って待って待って。

そんなトロスト区決戦時のジャンみたいな事しなくても、普通に入れば良いだ
ガツシヤアアアンツ！ と。

俺がパニックになっている事など知らないアリーセは、躊躇なく窓に飛び込んだ。心の準備をする前に衝撃がくる。

飛び散ったガラス片が当たって地味に痛い……。

いや、巨人の力で小さな傷なんて一瞬で治るから良いんだけどさ。

そんな文句を心の内に抑え込んで、立ち上がって周囲を見渡す。

視界に飛び込んできたのは、原作漫画やアニメにもあった巨大なガスボンベ？ みたいなのが並ぶガスの補給場所。

どうやら、本当に補給拠点だったらしい。

周囲に巨人の姿もないし、これなら問題なく補給できるだろ。

っーか、アリーセはもう補給してるし。

手際よくガスの補給を終えたアリーセはすぐには俺の所へ戻って来ずに、何かを探すかのように辺りを歩き回っている。数分して、ようやくお目当ての物が見つかったのか、何かを抱えたアリーセが戻ってきた。

「えーつと、それは？」

「ダイナさんの立体機動装置です。ダイナさんには巨人化能力がありますが、壁外で活動するなら立体機動装置はやっぱりあつた方が良いでしょうよ」

いや、無理だろ。

あんな超人的な動き、俺には出来っこねえよ。

確かに使えたら生存率は跳ね上がるだろうが、俺には練習中に高速で建物にぶつかつて大怪我する未来しか見えん。

下手したら巨人じゃなくて、立体機動装置の操作ミスで死ぬ可能性すらある。

なので遠慮しようと思つたが、あつさりと言いくるめられてアリーセから立体機動装置の訓練を受けることが決定した。

どうしてこうなつたんだ。

その後。

取り敢えず俺は壁の上に戻って待機することになり、アリーセは夜の間に井戸を探すと再びシガンシナ区へと入って行つた。

待っている間はやる事もないので、リアル立体機動装置を弄って遊ぶしかない。色々と触っている間に、だいたい操作方法が分かってきた。

このトリガーはワイヤーの射出で、下のトリガーの方が巻き取りか。こっちは確か、ガスの噴出だったな。

「お待たせしました。飲み水、ありましたよ」

そんな感じで10分ほど待っていると、アリーセが戻ってきた。

井戸は案外すぐに見つかつたらしく、たつぷりと水の入った桶を抱えてのご帰還だ。

差し出された桶に入った水を一気に飲み干す。

自分の想像以上に喉が渴いていたらしく、あつという間に全部飲んでしまった。

「…………あ。ごめん、アリーセの分まで飲んでしまつて…………」

「私は井戸の所で飲みましたから、気にしないでください。元から全部ダイナさんの分ですよ」

だから良い子すぎる。

親友の優しさにほっこりしていた俺だが、直後にアリーセは優しいだけではないと思ひ知る事になった。

「喉も潤つたことですし、早速立体機動装置の練習を始めましょうか」

…………嘘だろ？

「今さつきシガンシナ区に到着したところなんだが？」

愕然としている俺に、アリーセが何か手渡ししてくる。

見てみれば、進撃世界の兵士の制服だ。

井戸だけじゃなくて、こんなものまで見つけてきたのか……。

「まずは着替えて下さい。その後、立体機動装置の装備の仕方を教えますね」

そして、アリーセ先生によるスパルタ教育が始まった。



アリーセと相談した結果、立体機動装置は夜に行うことになった。

夜の方が危険だと思うかもしれないが、昼間にやると高確率で巨人に襲われるからな。

暗くて建物が見えづらく、衝突する危険性が高かったとしても、巨人に襲われるよりマシだろう。

それに今の俺の技量だと、明るいも暗いも関係ない。どっちにせよ建物に激突するのだから。

じゃあ昼は何やるんだって話だが、こっちは壁の上でアリーセに対人格闘術を教えて

もらうことになった。

巨人化能力者同士の戦いは、スケールを大きくしただけで、要するに素手での殴り合いだ。当然ながら、喧嘩の強い方が勝つ。

厳しい格闘技の訓練を積んだ「戦士」が操る鎧の巨人や獣の巨人に勝つためには、俺も格闘技を学ぶ必要がある。

鎧の巨人と2回やりあったことで、現在の實力差は痛感させられた。

以上の理由から、今は対人格闘術の時間だ。

立体機動装置の装備方法を教えてもらってる間に夜が明けたからな。

「それじゃあ、どこからでも殴りかかってきて下さい。まずは今のダイナさんの實力を確認しますから」

そう言って、少し離れた場所から手招きするアリーセ。

女の子に向かって殴りかかるのは元男としてどうかと思うが、まず間違はなく向こうの方が強いだろうし。

ここは胸を借りるつもりで、本気で行くか。

大きく息を吐いて、拳を握りしめる。

そして真正面からアリーセに向かって突っ込んだ。彼女の直前で右足を踏み込み、腹を狙って本気の拳撃。

しかし俺の渾身の一撃は簡単にアリーセに受け止められ、直後に足払いされてみつともなく転倒。即座に立ち上がろうとするも、腕を掴まれて関節をキメられた。

「はい、私の勝ちです」

「……手も足もでねえ……………」

「動きが単調過ぎて、どう攻撃するのか丸わかりですね。まずは拳を大ぶりに振るわなようにしましょうか。では、もう一度」

アリーセに促され、第2ラウンド。

先ほどと同じように勢いよく走り出し、今度は右足の膝を狙っての蹴り上げ。アリーセは軽く後ろに下がって俺の蹴りを避けると、お返しとばかりに俺の顔を狙って上段蹴りを繰り出してくる。

ハイキックとかマジかよ…………!?

咄嗟に両腕で蹴りを受け止めるも、あまりの威力に大きく後ろに仰け反ってしまう。その隙を見事に突かれて、再び足払い。

頭から地面に倒れこむ。

「痛ったあ…………つー!」

「うーん…………反応は悪くないんですけど、体が追いついてない感じがしますね。基礎的な体力作りから始めた方が良いかもです」

アリーセは倒れ込んだ俺の手を引いて立ち上がりながら、笑顔で言い放った。

「手始めに各種柔軟運動と、腕立て伏せ100回、腹筋100回。その後はシガンシナ区を一周するように、壁の上を走り込みましょう。これを1セットとして、日没までに休憩を挟みながら毎日3セット。頑張りましょうね」

それどこのワンパンマン？

しかし、この残酷な世界において身体能力が必須なのもまた事実。

立体機動装置を扱うにしても、対人格闘術の修練を積むにしても、基盤となる身体能力がなければお話にならないだろう。

少しでも生き延びる確率を高くしたいのなら、やるしかない。

俺は涙目になりながら、アリーセを上に乗せた状態での腕立て伏せを始めた。

……アリーセが軽くて本当に助かったな。

ダイナさんボディ、非力すぎる。腕が折れるかと思った。

第9話 初めての立体機動戦

腹部を狙って放たれた正拳突きを、両腕を交差させてガツチリとガード。防ぎ切った直後に、反撃の蹴りを繰り出した。

体を捻って回転することで遠心力を味方につけ、威力をブーストした渾身の一撃。

だが、アリーセは上体を後ろに反らすことで俺の胴回し回転蹴りをあつさりと躲して見せた。それどころか後ろへ倒れた勢いを利用してバク転を行ったかと思うと、つま先で俺の下顎を狙って蹴りを放ってくる。

アクロバティックな動きに驚きつつも、半身になってギリギリで回避に成功。

アリーセが着地する瞬間を狙って、右の拳を叩き込む。今度は俺の拳がアリーセの腕で防がれるが、構わず左拳で追撃を行う。これも完璧に受け切られてしまうが、構わない。本命はこの後だ。

俺の拳を受け止めたアリーセの右手を掴み、足を払って彼女の転倒を誘う。しかし彼女は足払いされる直前に跳躍し、空中で身を捻って俺の首に蹴りを放ってきた。咄嗟に握っていた彼女の腕を引っ張り、蹴りの軌道を逸らして回避。

そのままアリーセを振り回して地面に叩きつけようと試みるも、あつさりと腕を振り

ほどかれた。

俺の拘束から逃れたアリーセがバックジャンプで間合いを取ったので、ここで一度攻防が途切れる。

「お見事です。身のこなし、反応速度、技の練度……どれも、最初の時と比べると見違えましたね」

アリーセが微笑みながらそう言い、格闘技の構えを解いた。

それを見た俺は、全身から力を抜いて地面にへたり込む。

シガンシナ区に舞い戻ってから、どれ程の時間が流れたのか。

最初の10日ほどは経過した日数を数えていたが、もう今はさっぱり分からねえ。感覚的には、既にかなり長い間シガンシナ区で生活したと思うんだが。

ともあれ、ここでの時間は全て対人格闘術、立体機動術、基礎体力トレーニングに費やした。

結果、アリーセに太鼓判を押してもらえる程度には出来るようになったのは良いんだけど……。

彼女に俺の拳がともに当たるのをイメージする事すら出来ない。

どれだけフェイントを織り交ぜ、トリッキーな攻撃を繰り返しても、簡単に捌かれてしまう気がする。

「やっぱり、勝つのはまだ無理か」

師匠を超える日は遠いな、などと考えながら呟くと、いつの間にか近づいて来ていたアリーセが苦笑を浮かべた。

「流石にまだ負けてあげれません。というか、何年もかけて磨き上げた格闘術が、弟子のダイナさんにあっさりと負けたら私がへこみます」

まあ、それもそうか。

『俺』は裏路地での喧嘩が関の山で、ダイナも荒事とは縁遠い人物だ。死人が出るような厳しい訓練を3年間も行い、壁外で命をかけて巨人と戦い抜いたアリーセを、そんな簡単に追い抜けるわけがない。

気長にやっけていくしかねえよな。

幸いなことに、世界が大きく動く『原作』の開始まで後数年残っている。それまで訓練を怠らなかつたら、それなりの実力者にはなれるだろ。

……多分な。

どちらにせよ、死にたくなければやるしかない。

少し赤く染まり始めた空を見上げながら決意を新たにしていると、真横からガシャンガシャンという金属音が聞こえてきた。

音の方向に視線を向けてみると、立体機動装置の用意をしているアリーセの姿が目

入る。

今さつき筋トレと走り込みと組手が終わったっていうのに、何やってんだろうな……。

思わず遠い目をした俺は悪くねえ。

華奢な美少女のくせに、どんな体力お化けなんだよ。

何をやるうとしているのかは察しがつくが、確認の意味も込めて俺は口を開く。

「あの、何でまだ日が暮れてないのに立体機動装置を？」

「ダイナさんもかなり体力がつきましたし、随分と立体機動に慣れたようなので、そろそろ実戦経験を積もうと思いました」

そう言いながら、自分の装備を終えたアリーセは俺にも立体機動装置を差し出してきた。

ちくしよう、分かってたよバカヤロー。

いつも通りの立体機動訓練なら、日没まで休憩を挟むもんな。まだ明るい内から立体機動装置を装備するって事は、ついに実戦だってことくらい馬鹿な俺でも察せられるっついの。

だが、疲れたしやっぱ生身で巨人と戦うのは怖いのでやりたくないなんて、ここまで付き合ってくれたアリーセには口が裂けても言えん。

そもそも、こうして壁外でのサブバイバル生活を余儀なくされたのは俺がアリーセの助言を無視して、口減らしに参加しちまったのが原因だ。鎧の巨人に襲撃されたのも、俺が向こうの仲間を食い殺して力を奪ったからだし。

完全に俺がアリーセを巻き込んだ。しまった。

それなのにアリーセはその事について全く言及してこないし、こんな過酷な生活を繰り返しているのに、嫌な顔ひとつしない。それどころか常に笑顔で、俺の横にいてくれる。

そんな彼女に対して俺が出来るのは、少しでも迷惑をかけないように死に物狂いで強くなることだけなのだから。

やらない、なんて選択肢はありやしない。

組手で殴られたり蹴られたりして痛む体を引きずって、俺も立体機動装置を腰に装備していく。

装備に不備がない事をアリーセに確認してもらい、俺は鞘から超硬質ブレードを引き抜いた。

両手に伝わる、剣の重さ。前は随分と重たく感じだが、地道にトレーニングを重ねた今の俺なら、木の枝のように軽く感じられる。

アリーセとアイコンタクトを交わし、俺は壁の縁に立った。

日が出ている内にシガンシナ区に入るのは、これが初めてだ。

夜なら置物のように動かない巨人どもだが、今は人間を求めて街中を徘徊している。くそつ、どれだけ見てもやっぱ怖え。今の俺、トロスト区が襲撃された直後のアルミンより震えてるかもな。男のくせにマジで情けねえぞ、オイ。

大きく息を吸って吐く。

何度が深呼吸して気持ちいを落ち着けていると、アリーセが軽く俺の肩に触れて、「大丈夫です。訓練兵団の3年間の訓練と比べても、負けなくらいの密度で鍛えてきましたから。それにダイナさんには巨人化能力がありますし、何より私がついていきます」

アリーセは言い終わると同時にマントを翻して、躊躇なく壁から飛び降りた。そして少し高めの建物の屋根に着地すると、俺を誘うように手を振ってくる。

「だあああああつ！ このツ、カツコ良すぎ何だよクソツタレ！ 俺より男らしくて女子力も高いとか、もう俺がモブキャラになってんだろ！ キアラ立ちすぎなんだよ、主人公か！ 元からダイナはモブだけどな！」

距離が離れてアリーセに自分の声が届かないのをいいことに、久しぶりの男言葉全開で、自分でも意味の分からない言葉を叫ぶ。

これ以上、アリーセの前で無様を晒してたまるか。

奥歯を噛み締めながら、俺は地面を蹴って壁から身を躍らせる。身が竦むような浮遊感。凄い速度で大きくなる建物と地面。

無数の気を失わせようとしてくる要因を前に、しかし俺はしっかりと意識を保って握っているトリガーを引く。

両腰から射出されるワイヤー。その先端についているアンカーが狙っている箇所につき刺さったのを確認して、ガスを噴出させる。

真下へと落ちていた体がワイヤーの力で横へと動き出し、ガスの噴出で一気に加速した。引っ張られるように飛ぶ中、俺はワイヤーを回収しつつ空中で横回転し、回収したばかりのワイヤーを再射出。アリーセの立っている建物へとアンカーを刺し、彼女の横へと降り立つ。

我ながら上出来。

ひとまず練習通りに動けたことに安堵していると、アリーセが軽く拍手を送ってくれる。

「移動は申し分ありません。満点です」

よっしゃ。

本物の調査兵から立体機動で満点もらったぞ。

進撃ファンには最高のご褒美だ。

だがまあ、喜んでばかりではいられない。

壁外で立体機動できるのは、最低限のことだ。

むしろ本番はここから。いかに巨人を倒せるか、生きて帰れるかが肝心だろう。

気を引き締めていくべし。

「それでは、実戦訓練を始めましょう。右を見てください」

アリーセに言われた通り右を向くと、あれは……8メートル級か？ 比較的小型の巨

人が、少し大きめの街路をゆっくりと歩いている。

「あの8メートル級を狙います。私が脚部を切つて機動力を削ぎ落とすので、ダイナさんほうなじを」

「……了解！」

アリーセに腰が引けていることを悟られないように、敢えて強気な返事を返した。

俺の返答にアリーセは小さく頷くと、ワイヤーを射出して8メートル級に向かつて一気に突っ込んでいく。

立体機動を覚えた今だからこそよく分かる。

アリーセは強い。

流星にリヴァイ兵士長には届かないだろうが、ミカサが相手なら引けを取らないだろう。

そう思えるほど、彼女の動きは圧倒的だ。

「……………うしっ！」

自分の両頬を軽く叩いて気合を入れ、俺もアリーセの後を追って飛び出した。いつか追いついて見せる。

今はアリーセに頼ってばかりだが、必ず彼女に頼ってもらえるくらい強くなる。

胸を張って、アリーセの相棒だと言えるように。

「ぜあああああッ!!」

白刃一閃。

俺の前で裂帛の気合いと共に振るわれた超硬質ブレードが、見事に8メートル級の足を削ぎ落とした。

斬撃を放って離脱するアリーセが、俺に目線で合図する。

俺も目線で応え、トリガーを引く。

アンカーが足を切られて倒れ臥す8メートル級のうなじに刺さると同時、ガスを噴出させて急接近。そしてすれ違い様に、独楽のように回転してうなじの肉を削ぎ落とす。

縦1メートル、横10センチ!!

吹き飛ぶ肉片。飛び散る鮮血。噴き上がる蒸気。

その中で、俺は小さく笑った。

殺^とった、と。

「ダイナさん、後ろです！」

「——ッ！」

遠くから飛んでくる、アリーセの悲鳴混じりの叫び。

それが鼓膜を叩いた瞬間、俺はワイヤーの射出トリガーではなく、ガスの噴出トリガーを引いていた。

ワイヤーで固定していないため、錐揉み回転しながら斜め上へと飛んでいく俺。ぐるぐると回転する景色の中、俺は確かに見た。

ほんの一瞬前に俺がいた空間が、巨人の口の中に入っていたところを。

あつぶねえ……！！

もしアリーセが危険を知らせてくれなかったら、今頃アイツの口の中だった。

ヒヤリとした感覚が、蛇のように俺の背中にのたくる。

巨人とは何度も交戦したが、今まではその全てが俺も巨人の姿だった時だ。

初めて生身で交戦して、痛感する。

——巨大^{デカイ}。

女型の巨人の視点からだ、幼児のようにすら見えていた8メートル級が、馬鹿でかく見える。

そして何より、今しがた俺を食い殺しかけた巨人。

「15メートル級かよ……っ」

巨人化した時の俺やエレンって、あんなにデカイのか。

なら、超大型とかどーなんだよ。

は、はは、変な笑いすら浮かんでくる。

流石に初めての実戦で、15メートル級を討伐するのは無理だろ……？

無理にガスを吹かしたせいで未だに体勢を立て直せない俺に向かって、15メートル級の手が伸びてきた。

アンカーを出す暇がない。また無理やりガスを吹かしたら、その辺りの壁にぶつかっちまう。

躲せない。

これ、捕まっ……

「これ以上、お前らに私の友達を奪われてたまるかあああああつ!!」

直後、今にも俺を掴もうとしていた巨大な掌が消え去った。

木つ端微塵になって飛び散る肉片と、雨のように降り注ぐ赤い液体。返り血で真紅に染まったアリーセが、15メートル級の手首から先を完全に切り刻んでいた。

「……殺^とったあああああつ！」

その光景を見て、俺は反射的に叫ぶ。

トリガーを引いてワイヤーを射出し、全速で15メートル級の背後へと回り込んだ。そしてワイヤーを巻き取りながらガスを噴出させて加速して、全力の斬撃を叩き込む。

目え瞑って歯ア食いしばれ！

8メートル級の時と同じ、完璧な手応え。

急所を抉られた15メートル級が、倒れこみながら蒸気となって消えていく。

民家の上に転がるように着地しながらそれを見届けた俺は、顔にこびり付いた返り血を手の甲で拭いながら立ち上がる。

そこで、俺のすぐ近くにアリーセが着地した。

お互いに無言で歩み寄り、ハイタッチを交わす。そして抱きついてきたアリーセを受け止める。

「ダイナさんが、死んじやったかと思っただあ……」

嗚咽混じりにそう言うアリーセに、俺は思わず苦笑を浮かべた。

そう言うセリフや行動って、助けられた側がやると思うんだけどな。

数秒して、落ち着いたアリーセが俺から離れる。

そして打って変わって頬を膨らませ、怒気を滲ませた彼女はビシッと俺を指差して、「油断厳禁っ！」

「はい……」

いやホント、面目無い。

助けていただき、誠にありがとうございます。

まさか真後ろから迫ってきていたとは、全く気づかなかった。

「次は気をつけてくださいいね！」

……次？

嫌な予感がして辺りを見渡すと、巨人が複数体近づいてくる。

ちよつと待て、まとめて同時に来られると今の俺じや捌き切れないんだが……!?

「私が左の2体を殺りますから、ダイナさんは右側の10メートル級を！」

……これ、巨人化して蹴散らしたらダメかなあ。

もし調査兵団に入れたら、アリーセに討伐した数を証明してもらって、多めに給料もらおう。

そんな決心をしながら、俺はワイヤーを射出した。

第10話 調査兵団との邂逅

ウォールマリアアの壁上で、青空を見上げながら座り込むこと30分以上。

俺はアリーセのオモチヤにされていた。

身動き一つ許されない状態がこんなに続けば、死んだ魚のような目になるのも仕方ねえよな。うん。

本当に、女の子って面倒くせえ。

「はあ……」

「あつ!? ダイナさん、あれだけ動かないでくださいって言ったじゃないですか!」
「ため息を吐いただけですけれど!」

本当に少し頭を動かしただけで、後ろからアリーセの憤慨する声が飛んできた。

髪型をセツトするのって、そんなに気を張らないといけないものか……?

全ての始まりは、俺の髪がやたらと伸びちまったことだ。

本来のダイナの髪の長さは肩にも届かない程度だったんだが、切るのが怠くて今の今まで放置し続けた結果、ついに毛先が腰に届いたらしい。

立体機動の最中に毛先が立体機動装置に巻き込まれてしまい、危うく巨人に食い殺さ

れかけたんだよ。いや、アレは本当に死んだかと思っただな。

そんな事故が起きれば当然、髪を切ろうって話になる。

が、ここで問題発生だ。

昔のように肩より上の場所でバツサリ髪を切ろうとした俺を、アリーセが鬼の形相で止めた。

彼女の主張は、俺の綺麗な金髪を切り落とすのは勿体ないとのこと。

命の危険もあるのにそんな事を言っただけで反論したところ、涙目で懇願されたので、肩の長さまでは残すって結論に至ったんだが……

「やっぱりこうした方が似合ってる……いえ、むしろ横髪を……それだと全体のバランスが……でもそうすると、ダイナさんの持つおっとりとした雰囲気損なう事に……」

ブツブツと呟きながら、俺の髪を結んだり解いたりするアリーセ。

どうも、俺の髪型がなかなか決まらないらしい。

肩の長さでも万が一の危険が怖いから、念のために結ぶってだけの話なんだけだなあ。

「……よし！　これに決めた！」

どうやら、やっと決まったらしい。

アリーセの手によって、俺の髪がどんどん結ばれていく。

完成したのは、ポニーテールだった。

30分以上も悩んだ結果が、こんな無難な髪型って……。今日はまだ巨人と戦ってないのに、やたらと疲れたぞ。

しかしアリーセにとっては会心の出来らしく、太陽のように輝く笑顔で魅力を語っている。

「カールさせた横髪と、結わえた髪の根元が編み込みになっているところがポイントなんです。あとはチラツとうなじが見えるようにして、ダイナさんの大人の魅力を引き立たせてみました！」

いや、そう言われても。

髪を掴まれたら喧嘩の時不利になる、なんて理由で丸刈りにして俺に良し悪しなんて分かるわけねーだろ。いや、言ったらアリーセが傷つくから絶対に口には出さねえけど。

兎も角ようやく「動いてよし」と許可を頂いたので、首を傾けて肩をぐるぐる回す。

あー、バキバキと音がなって気持ちいい。

……なんか、今の俺っていい歳したおっさんみたいだな。今は女だからオバさんか。

年齢不詳だから正確には分からねえが、まだギリギリ20代だと思っただけだな。見た目的に。

ダイナが美人なのを考慮しても、こんな若々しい30代はいねえだろ。まあ、俺が勝手にそう予測してるだけなんだけどき。

俺があんまり変化ないのに対して、アリーセは随分と変わった。

絶壁だった部分も今は掴める程度にまで成長したし、纏う雰囲気も美少女から美人へと変わった。

背も少し伸びたしな。

前は俺の胸元のあたりに顔があつたが、今や肩よりも上に来ている。

……こんなに成長が感じられるくらい、シガンシナ区にいたのか。

もしかしたら、2年か3年は経過したのかも。

毎日トレーニングして、組手して、立体機動の技術を磨いて、ガスと刃が尽きるまで巨人を殺す。

ただそれだけの毎日だったのに、時間が流れるのはあつという間だな。

さてさて、俺の寿命も後10年残ってるのかね。

俺がユミルの呪いで死ぬ前に、アリーセが平和に生きていける世界を築いておきたい。

少なくとも、アリーセの安全を完璧に確保した後じゃないと、死ぬに死ねないっつーの。

「髪型をお揃いにしてみました！」なんて言いながらはしゃぐアリーセの姿を横目に、そんな事を考えていた時だった。

地平線の向こうに、何かが見えた。

順番に空へと昇っていく緑色の煙。巻き起こる土煙。

……マジかよ。

もしかしなくても、調査兵団の壁外調査だ。

「アリーセ、急いで立体機動装置の準備を！ その後は前に捕獲しておいた馬を用意しましょう！」

「え、え!? ちょっと、急にどうしたんですか!?!」

「ウォールローゼの方角に、調査兵団の一団が見えました！ 今なら壁外調査中の彼らと合流して、壁内に戻れます！」

「……！ 分かりました。すぐに準備します！」

すぐに俺の意図を理解したアリーセが、立体機動装置を装備し始めた。一足先に準備を始めていた俺は、先に壁から飛び降りて下の民家に繋いであった馬の手綱を握る。

アリーセから馬術を習つたという正解だったな。

俺が馬に跨ると同時に、上から降りてきたアリーセもそのまま馬に飛び乗った。

「周囲に巨人の姿はありません。ダイナさん、今のうちです！」

よし、運が良い。

アリーセの報告に頷いて応え、馬の横腹を軽く蹴って走り出すように合図を送る。

馬が嘶き、猛然と駆け出した。

信煙弾の上がり方から見てまず間違いない。

あの動きは長距離索敵陣形……つまり、既に団長はエルヴィン・スミスに変わっている。

キース教官が相手の場合は微妙だったが、エルヴィン団長が相手なら上手いこと取り入ることが出来るだろう。

好奇心の塊みたいな人だから、いくつか『原作』から得た情報をチラつかせたら、確実に食いつく。

団長は間違いなく陣形の中心、中列前方にいるはずだ。

位置はわかる。

後は追いつくだけなんだが、それが難しい。

「ああ、もう！ 馬のスペックが違いすぎる！」

「やっぱり、調査兵団の馬に普通の馬で追いつくのは無理ですね……」

俺たちが乗っている馬がそこらの農村で生き残っていた個体なのに対して、調査兵団の馬は、普通の市民が稼ぐ生涯年収と同等の金額を注ぎ込まれて生まれた怪物サラブ

レット。

勝てるわけねーよ。

向こうの馬は約80キロの速度をキープしたまま長時間走り続けられるらしいが、こっちはそんな速度を出したら直ぐに潰れちまう。

立体機動装置を使えば追いつけるかもしれないが、立体物がねえ。こんな時に限って、調査兵团はひたすら平原を突き進んでやがる。

もう、残されたのは最後の手段だけだ。

超硬質ブレードを鞘に納め、懐から小型のナイフを取り出す。

それを見て、アリーセが焦燥を滲ませた声を上げた。

「待ってください！ 確かに巨人化したダイナさんの速度なら追いつけるかもしれませんが、調査兵团に正体が……！」

どちらにせよ、早いか遅いかの違いだ。

あのエルヴィン団長を相手にどこまでやれるか分からないが、取り入るための策は考えて考えてある。

対話さえ出来れば、チャンスはあるだろ。

問題はエルヴィン団長の所に辿り着くより早く、リヴァイ兵長とぶつかってしまいう可能性。

リヴァイ兵長にだけは勝てる気がしない。遭遇したらこっちが死ぬ。まあ要するに、博打だ。

けど、やるしかねーってヤツだな。

このまま延々とシガンシナ区に留まる訳にもいかない。大手を振って壁の中に入り込む絶好のチャンスを、そう簡単に逃してたまるか。

覚悟を決めて、俺は馬から飛び降りる。

と、同時に手のひらをナイフで浅く切り裂いた。

空から雷光が降り注ぎ、轟音と共に巨人の肉体が生成されていく。

サバイバル生活の間、鍛えていたのは対人格闘術と立体機動だけではない。

巨人化能力という最大の切り札も、他の2つに負けないくらい訓練を重ねている。継承した『記憶』から推察しても、今の俺なら歴代の女型の巨人継承者の中でもトップクラスの实力者だという自負があるくらいだ。

巨人化の際に発生した蒸気を駆け抜けて、馬上にいたアリーセを軽く握って回収。彼女が俺の髪を掴んでしっかりと肩の上に立ったのを確認して、一気に地面を蹴り飛ばす。

踏みしめた大地にクレーター作り出し、俺は地震かと錯覚するほどの振動と共に駆け出した。

直後、長距離索敵陣形の後方あたりから赤の煙弾が打ち上げられる。

流石はエルヴィン・スミス考案の長距離索敵陣形。

この距離でも俺の姿を発見できるのか。

続いてすぐに緑色の煙弾が打ち上げられ、俺を避けるようにして進路が右に傾く。

「ダイナさん、陣形の両端には近づかないでください。索敵班に早期に発見されると、また進路をズラされてしまいます。いくらダイナさんの方が速くても、こうも避けられると追いつくのに余分な体力を使う事になりかねません。調査兵団と戦闘、という最悪のケースを考えると、出来る限り体力は温存した方が良いでしょう。こちらは相手を殺さずに無力化する必要があるのです、蹴散らすのも骨が折れると思いますし」

了解。

要するに、ど真ん中を突っ切れって事だろ。

長距離索敵陣形は、上から見ると先端が丸みを帯びた戦闘機のシルエツトのように見える。

後方の両端が広がっているから、そこに近づくと中心部からかなり遠い位置で発見されるって訳だ。

だから陣形の端を避けて、真後ろから迫る必要があるんだが……難しいな。

今の俺は、陣形の左翼後方辺りにいるらしい。

まずは一度陣形から離れて、中列の後方の位置まで移動する必要がある。

俺たちの目的であるエルヴィン団長は、原作知識が正しいのなら次列中央にいるはずなのだから。

……はあ。

骨が折れるが、仕方ねえ。

左翼側から突撃したら、延々と右へ右へ逃げられるだろうし。

今のところ煙弾の色は赤色だから、奇行種としては判断されてない。

これはラツキーだ。

奇行種の判断をされない限りは、まだ戦闘には発展しないはず。

今のうちに中列へと移動すべしだ。

口から蒸気を吐き出しながら、さらに加速。

既に怪物サラブレッドを大きく上回る速度——約100キロ以上は出てるだろう。

うん、チーターでも追い抜けそうだ。

相変わらず女型の走行速度はやばい。

しかも100キロも出てるくせに、これはまだ『王家の血筋』でブーストしてない段階なんだよな。

実はさらに加速するためにちょっとした技を開発しているんだが、今は必要ねーな。

素の性能だけでいけそうだ。

「……………」 前方右手に兵士です。数は5人。中列後方の荷馬車護衛班のようですね」
よし、放置の一択で問題ないな。

荷馬車と共に行動する彼らは、移動速度がかなり遅い。簡単に追い抜かせる。
と、思ったその時。

少し前を走っていた調査兵たちが、甲高い金属音と共に超硬質ブレードを引き抜いた。

おいおいおい、そこは赤の煙弾を打ち上げて団長の指示を仰げよ。なんでいきなり戦闘態勢に入ってるんだよ。

黒の煙弾も打ち上げられてないし、まだ奇行種として判定されてねえだろうが。

もしかして、新兵か？

本当なら真つ先に煙弾を撃たないといけないが、巨人の姿を見てパニックになったとか？

それなら、いきなり戦闘態勢に入ったのも頷ける。

俺たちからすれば、まったくもって嬉しくないリアクションだな。

巨人の姿で巨人を殺したことも、人間の姿で巨人を殺したこともあるが、巨人の姿で人間と戦うのは初めてだ。

しかも、相手は殺してはいけないというハンデ付き。

楽に団長の所まで行かせてくれそうにねえな。

「ぜ、全員で一斉にかかれえ！ 足を削ぐんだ！ まずは動きを止めるぞ！」

「「お、おおっ!!」」

先頭を走っていた兵士が、やや怯えが滲む声で号令をかけた。

5人の兵士が馬から飛び降りて立体機動に移ると同時に、俺は指先でアリーセを髪の中に隠す。俺の女型はアニのと比べて髪が少し長いから、人間1人くらいなら簡単に隠れられる。

アリーセが姿を隠した直後、俺の体にアンカーが突き刺さった。

素早く視線を走らせて、周囲を飛び交う兵士の位置とアンカーの突き刺さった位置を確認を行う。

アンカーの位置はうなじ、右腕、左足首、額、左肩の5箇所か。

急所に加えて、どれも巨人への攻撃が成功すれば大きく相手の動きを制限できる箇所ばかり。

右腕と左肩なら腕の筋肉が狙えるし、左足首なら当然、足が狙える。額のは俺の視覚を狙ってるんだろう。

5人の兵士による、5箇所同時攻撃。

普通の巨人なら、まず間違いないで倒せるな。見事な連携だ。

……まあ、俺には通じねえがな。

5人の兵士たちが一齐にガスを蒸し、両目、足首、両腕、うなじを狙って急接近してくる。

が、彼らの刃が届くより、俺の動きの方が早かった。

狙われた5箇所部位が、一齐に青白い光を放つ。そして硬質化した肌が、俺を攻撃した超硬質ブレードを反対に砕いた。

「なっ……!? 刃が通らない!?!」

「こっちもだ!」

「眼球にも刃が届いてねえ!」

うなじを狙っていた兵士が驚愕の声を上げると、他の兵士も次々と困惑した声を出す。

気持ちは分かるけど、最初の奴のセリフはやめろ。

死亡フラグ感がハンパじゃないから。

そんな感想を心中で抱きつつ、俺は大きく跳躍。

空中で横回転して、体に突き刺さったアンカーをまとめて吹き飛ばす。その際に兵士たちも一緒に吹き飛んでいったが、死んではねえだろう。

骨折の可能性はあるが、こつちも殺そうとしてきた相手を無傷で帰してやるほどお人好しじゃねーよ。

殺しはしないが、多少の負傷は覚悟してもらおう。そしてその負傷が無垢の巨人に食われる原因になっても、流石にそこまでは面倒を見きれない。

俺たちだつて生き残るのに必死なんだ。他者に気を配るにしても、限度があるつーの。

無力化した5人組に背を向けて、移動を再開。

しかし、走り出して間も無く空に黒い煙が打ち上げられる。

咄嗟に煙弾の発射地点を見れば、今まさに信号銃を下ろす兵士の姿が。

チツ、今の戦闘を見られてたつてことか。

さあ、ここからが厄介だ。

次々襲いかかってくる調査兵を殺さないよう手加減しつつ、陣形の最奥まで進まねえといけない。

何だその難易度ルナティックな鬼畜ゲーは。

だが、やらなければ俺とアリーセの生存権は得られねえ。

やっつてやる。

「オオオオオオオオオオオオッ！」

俺は雄叫びを上げながら、超硬質ブレードを握りしめて飛び掛かってくる無数の兵士たちの中に入った。

第11話 無謀な交渉

もう随分と聞き慣れた射出音と共に、無数のアンカーが俺に向かって打ち出された。それらを身を屈め、硬質化した拳で弾き、時に跳躍して躲していく。ただの1つも体に刺させてやらない。

「くそつ、何なんだコイツは!? 並みの巨人とは運動性能が違いすぎる……!」

「奴の体にアンカーを刺すのは無理だ! 周囲の立体物を利用しろ!」

何度やってもアンカーが刺さらないことに1人の兵士が苛立ちの声を上げ、それを聞いた隊長格の兵士が指示を出す。

おっと、そうはさせねえ。

周囲の地形を確認。

この辺りは僅かに木々があるだけの平原で、立体物の数は少ないな。

立体機動に使えるような木は……あつちの2つか。

いくつかある木の中から最もアンカーを刺すのに理想的なモノを割り出した俺は、薙ぎ払うような蹴りでアタリをつけた木々をなぎ倒す。

俺も立体機動が出来るようになったから、兵士の動きは大体読めるようになってんだ

よ。

今まさにアンカーを刺そうとしていた木が倒されたことで動揺した兵士が数人、空中での姿勢制御に失敗して地面を転がった。

うわ、今のは絶対に痛い。

あの人とか顔面から落ちたけど、死んでねーよな？

ケガくらいは大目に見てくれる可能性もあるが、流石に殺したら話し合いに応じてくれなくなる。

くそつ、本当にやりにくいな。

巨人の力は簡単に人間をミンチにしてしまうから、加減が本当に難しい。

いつまで続くんだよコレ。

そろそろ陣形のと真ん中だと思っただが、エルヴィン団長の姿は未だに見えない。

「ダイナさん。体力はまだ大丈夫ですか？」

終わりの見えない現状に辟易していると、俺の髪の中に隠れていたアリーセが小声で話しかけてくる。

軽く頷いて、俺は肯定を示した。

『獣』を見習って巨人の姿でも人語を話せないか努力はしたんだが、まだ片言になるんだよなあ。

「ただけ練習すれば、あんなに上手いこと喋れるんだか。……つと思考が逸れた。」

慌ててアリーセへと意識を戻す。

「見てください、紫の煙弾です。あの煙弾の意味は……」

——緊急事態発生。

アニメでは、最初の壁外調査で馬を失ったジャンが打ち上げている。

陣形のと真ん中から、紫の煙弾だ。

そろそろ向こうも本気でこつちを潰しに来る……つつ!?

ゾワツ、と。

背中に氷でも押し当てられたのかと錯覚してしまうほどの悪寒に見舞われて、俺は咄嗟に両手でうなじを覆い、硬質化までして防御姿勢をとった。

直後、ガツギインツという甲高い音が鳴り響く。

音の出どころは、当然ながら俺のうなじ。

パラパラと舞い散る、砕けた超硬質ブレード。

舌打ちしながら刃を換装する彼は、見間違えることなく。

「……チツ、どうなってやがる。確かに仕留めたはずだが」

人類最強。

九つの巨人すら単独で屠る、最強の兵士。

リヴァイ兵士長。

冷徹な光を放つリヴァイ兵長の三白眼と視線が交差した瞬間、俺は理屈ではなく本能で悟る。

ダメだ、勝てねえ。

初撃を防げたのは奇跡に近い。

攻撃の瞬間のリヴァイ兵長の姿が見えなかった。硬質化した指から感触が伝わって、やっと攻撃されたと気づけたほど。

ひたすら防御に徹してガスと刃が尽きるを待つことも出来るが、それをやっていたら本命のエルヴィン団長を取り逃がす。

そもそも、女型はそこまで防御が得意じゃねえ。

ソレは鎧の領分だしな。

リヴァイ兵長が様子見している、この一瞬間の間に判断しろ。

人類最強の兵士を出し抜き、目標に追いつく方法を。

……そんな方法、1つしかない。

全力で逃げるのみ！

ここで兵長と戦って、俺が得することなんてゼロだ。

無駄に体力を消費するだけで終わる。

ここで巨人の力を使い果たしてしまつたら、ほぼ間違ひなく死んでしまう。

片膝をつけて両手にうなじに当てるといふ、防御姿勢を解除。

立ち上がると同時に大地を蹴り飛ばし、全力疾走を開始する。

「兵長、奇行種がさらに陣形の奥へと！」

「騒ぐな。見りや分かる。全員、騎乗して奴を追うぞ！」

「ハッ!!」

信じられないほどの早さで立体機動から馬での移動に移つたかと思うと、俺との距離が300メートルも離れないうちに追跡を開始し始める兵長たち。

ふっざけんなよ。

この程度の距離なら、周囲に立体物が増えて兵長たちが立体機動できるようになつたらすぐに詰められるぞ。

少しでも立体物の少ない平原を走り続ければ良いんだが……

そこで、陣形の次列中央——エルヴィン団長から煙弾が打ち上げられた。

色は緑。意味は進路決定。

煙弾の示す先に見えるのは、巨大樹の森。

冗談じゃねえぞオイ!

そんな所に入り込まれたら、立体機動装置の本領を發揮した兵長にズタボロにされて死ぬわ！

兵長1人でも勝てるか分からねえのに、パツと見て15人以上の調査兵がリヴァイ兵長と一緒に追いかけてきてる。

勝ち目なんて万に1つもない。

全力での殺し合いならともかく、こっちはハンデ付きなんだよ馬鹿やろう。

「……いけます！ この速度差なら、追いつかれるより早く団長の所に辿り着けますよ！」

少しずつ小さくなっていく兵長の姿を見てアリーセが喜びの声を上げるが、その認識は甘い。

俺たちが敵に回しているのは、人類のためなら自らの命すら喜んで投げ出す調査兵団。

馬でも追いつかないと分ったなら、次は間違いない死を覚悟しての時間稼ぎを行ってくる。エレンを追跡するアニにしたように。

そんな俺の予想が正しいことは、次の瞬間に証明された。

太ももの辺りを狙って、兵士の1人がワイヤーを射出してくる。

それを見た俺はすぐさま太ももを硬質化。

アンカーを弾き、相手が立体機動に移るのを阻止する。だが、それでもその兵士は止まらなかつた。

アンカーを刺すのは無理だと判断した彼は、ガスの噴出だけで強引に俺に追い縋ってくる。

自滅覚悟の一撃。

躲されても、俺が回避行動を取れば走る速度が僅かに遅くなる。反撃を受けて殺されても、やっぱり時間は稼げる。

稼げる時間が例え瞬き一回分ほどの僅かなものでも、その一瞬を得ようと死力を尽くす。

これだから、調査兵団はカッコいい。

カッコよくて、しかし報われない姿が哀れで仕方ない。

名も知らぬ兵士が行う決死の攻撃を、俺は硬質化であっさりと防ぐ。

リヴァイ兵長ほどデタラメな速度で攻撃されたら、硬質化するヒマもない。けど並みの兵士の攻撃の速度と比較するなら、俺の硬質化に軍配が上がる。

甲高い音がして、弾かれた超硬質ブレードが砕け散った。

攻撃を防がれた兵士と目が合う。

彼が浮かべるのは恐怖と、無念と、絶望の表情だ。

そんな顔するくらいなら、特攻なんてやめてくれよ。

大地へと落ちていくその兵士を殺さないように優しく握り、立体機動に使えそうな木がある方向へと投げる。いきなり放り投げられた彼はかなり驚いた表情をしていたが、咄嗟にアンカーを突き刺して木の上に着地した。

それを見届けて、俺は再び前を向く。

……見えた！

数人の兵士を従えて、馬で疾走するエルヴィン団長の後ろ姿。

後は団長以外の兵士を一時的に無力化して、団長と話が出来る環境を作れたら俺たちの勝ちだ。

数十秒もあれば、エルヴィン団長の興味を引ける言葉を発せられるのだから。

団長が興味を持ってくれれば、取り敢えず話をするために周囲の兵士を制止してくれるだろう。

尤も、以上のことをリヴァイ兵長が追いついてくるまでにやらないといけないってのが難しいんだけどな。

「ダイナさん！」

左肩の上から、アリーセがつんぎくような悲鳴を上げた。

咄嗟に振り返ると、真後ろにすでに超硬質ブレードを逆手に構えたリヴァイ兵長の

姿。

これ、硬質化が間に合わねえ……!?

硬質化による防御を諦め、咄嗟にうなじを右手で覆う。

次の瞬間、右手から指の感覚が消えた。

真紅の液体と共に飛び立っていく、5本の指先。

それに驚いている時間もない。

いつの間にか左肩にアンカーが打ち込まれており、リヴァイ兵長はお得意の連続攻撃の体勢へと入っている。

高速回転する、兵長の小柄な体。銀の円環と化した兵長が、俺の首を落とすべく加速

し――

「んんんんああああッ!」

「……………」

髪の中から飛び出したアリーセが、リヴァイ兵長の一撃を防いでいた。

力負けたアリーセが吹き飛び、彼女が握っていた超硬質ブレードが砕ける。対して、リヴァイ兵長の刃は折れていない。

その差が、アリーセとリヴァイ兵士長の実力差を明確に語っていた。

俺の肩から落下するアリーセを、慌てて左手で受け止める。

まさか巨人の肩に人間が乗っているとは思わなかったのか、不意をつかれた兵長も一度俺から離れていった。

か、間一髪……！

念のためにアリーセに隠れてもらって正解だったな。

まさか、リヴァイ兵長でも巨人に人間の仲間がいるとは思わねえだろう。

俺の髪の中に隠れていれば、高確率で奇襲に成功できる。リヴァイ兵長に隙を作れる。

目論見通り生まれた僅かな猶予期間を利用して、俺は走りながら再生したばかりの右手で大地を抉って大量の土砂を握りしめる。そして握りしめた土砂を、エルヴィン団長の進行先へと投擲。

びつたしエルヴィン団長の目の前に落ちた土砂によって、団長の馬が嘶きをあげて停止する。

「ダイナさん、今です！ アレを！」

言われずとも！

王家の血筋を引く俺ダイナだから出来た、本来の女型の巨人なら有さない能力の1つ。

——範囲硬質化！

握りしめた右手の平を地面につけ、硬質化を発動。

俺の右手を中心に巨人の硬質化によって生まれる結晶が広がっていき、周囲に高さ15メートルほどの壁を円形に作り出す。その半径は50メートル。

ミニサイズの『壁』の完成だ。

いきなり自分達の周囲に壁が生成された事に驚愕して、混乱状態に陥る調査兵団。

そんな彼らの前で、俺は堂々と巨人のうなじから本体を曝け出す。

さあ、第二の正念場だ。

頭の良くない俺が、壁内人類最高峰の頭脳を持つエルヴィン・スミスを相手に、果たしてどこまで出来るのか。

舌戦の地力では完全に負けてるが、情報戦の有利は俺が優っている。

可能性はあるだろう。

緊張で引き攣る顔を無理やり無表情に制し、俺は口を開く。

「……エルヴィン・スミス団長。私達は貴方と交渉がしたい。私達が差し出すのは、貴方たち調査兵団がその命をかけてまで求めている『情報』。見返りとして求めるのは、壁内の生存権です」



エルヴィン・スミスを含む調査兵団は、その全員が混乱の極みにいた。

後から追いついたリヴァイ兵長もまた、突如として出現した15メートルの円形の壁の上で視界に映る光景に呆然とする。

膝について停止する巨人。

その巨人のうなじから姿を現した、金髪の女性。

彼女に寄り添うようにして立つ、調査兵の姿をした茶髪の女性。

そして金髪の女性が発した言葉の内容。

どれもが、彼らを極度の混乱に突き落としている。

しかし流石と言うべきか、真つ先に冷静さを取り戻したのはエルヴィン団長だった。

「総員抜剣！ 奇行種を包囲し、警戒態勢を整えよ！」

腹の奥に響くほどの声量でもって、周囲の兵士を正気に戻らせると同時に指示を出す。

それを見た金髪の女性は無言で自分の指先を小型のナイフで浅く切り裂き、茶髪の女性には折れた刃を捨て、新しい刃を換装した。金髪の女性が出血する指先を掲げ、エルヴィンに負けないほどの声量で叫ぶ。

「全員動くな！ 私達に戦闘の意志はない！ だがそちらから攻撃した場合、私は再び巨人となり、自衛として反撃を行う！ 私が巨人の体を生成し、意のままに操ることが

出来るのは、既に見せた通りのこと！」

茶髪の女性の言葉で調査兵団に激震が走り、誰もが怯えた表情で剣先を突きつける。しかし、動く者は一人もない。

目の前の恐怖を払拭してくれるのを求めるかのように、視線をチラチラとエルヴィン団長とリヴァイ兵長に向けた。

それに応じるかのように、エルヴィンが口を開く。

「君達は何者だ？ 少なくとも、私は正体も分からない相手と交渉は出来ない」
探るようなエルヴィンの質問。

その問いかけに先に答えたのは、茶髪の女性の方だった。

「ウォールローゼ、カラネス区出身！ 93期訓練兵団第2位卒業生アリーセ・エレオノーラです！ 調査兵団に所属していました。ウォールマリア奪還作戦の折に壁外に取り残されましたが、彼女——ダイナさんに助けてもらい、現在までシガンシナ区で食料を確保しつつ生活していました！ ウォールマリアの壁上から信煙弾が見えたので、調査兵団と合流できると思います！ こうしてやって来ました！」

茶髪の女性——アリーセの言葉に、調査兵が顔を付き合わせて困惑する。

「あつちの女は人間なのか？」

「93期の調査兵だと言っていたぞ。誰か、彼女と同期の者はいないのか!？」

「俺、アイツ見たことあるぞ！ 確か3年前に戦死したクリストフ隊長の部下に、エレオノーラって女兵士が……」

「じゃあ、本当に茶髪の方は人間……」

「ならどうして巨人なんかの味方をしてるんだ?！」

次々と調査兵の間から声が上がりが始めた。

それを、リヴァイ兵長が靴底で地面を蹴りつけながら一喝して黙らせる。

「お前から静かにしろ。今エルヴィンが喋ってる。テメエらが声を出していいのは、エルヴィンがああのデカブツ女に対して攻撃命令を出した時だけだ」

「は、はっ!」

再び場を静寂が支配したのを確認して、エルヴィンは金髪の女性——ダイナへと向けた。

「次は君の自己紹介を聞いても?」

エルヴィンに促されてダイナは頷き、口を開く。

「私はダイナ。壁の外にある『人間の世界』から来た者です。そして……エルヴィン团长、貴方の父親の仮説が正しいと証明出来る者でもあります」

エルヴィン・スミスの瞳が、ダイナが巨人のうなじから出てくる場面を見た時よりも大きく見開かれた。

第12話 下手くそな交渉

——貴方の父親が立てた仮説が正しいと証明できる存在。

ダイナから発せられたその言葉が、エルヴィン・スミスにどれほどの衝撃を与えたのか。

恐らくそれは、エルヴィン本人にしか分からないものだっただろう。

エルヴィン以外の者達に衝撃を与えたのは、もう1つの方だ。

——壁の外にある『人間の世界』から来た。

人類は107年前に出現した巨人によって食い尽くされ、残るは壁の中に生きる人々のみである。

壁内で暮らす者ならば、誰もが知っている常識だ。

その前提をまるごとひっくり返すような、ダイナの言葉。

一度はリヴァイ兵長によつて静寂が戻った調査兵団が、再びざわめき出す。

「壁の外の世界だと……!?!」

「馬鹿な、あり得ん!」

「所詮は巨人の言うことだ! 世迷言に決まっている!」

「団長指示を！ これ以上、巨人の言葉に耳を傾ける必要はありません！ 早く殺しましよー！ ヤツは危険です！」

阿鼻叫喚となる一歩手前、と言ったところか。

エルヴィン団長とリヴァイ兵長の静止命令が無ければ、混乱はこの程度では済まないだろう。

そしてその事実が、如何に2人の統率力が高いかを示している。

だが、この場の誰よりも混乱していたのはエルヴィンだ。

エルヴィンと父親のやり取りを知っている者は、付き合いの長いごく少数の親密な者達のみ。

間違っても、この場が初対面の相手が知っているような事ではない。何より知っているごく少数の者達ですら、つまらない冗談だと笑い飛ばした話なのだから。

エルヴィンの脳裏に、決して色褪せることのない過去の記憶が浮かび上がる。

幼い頃に、父に向かって発した問いかけ。

——何故、壁外の人類が減んだのか……？

王政が配布する歴史書には、矛盾点があつた。

現状、人類は巨人のせいで壁外の世界を完全に調べ尽くせてはいないのだ。それなのにも関わらず、歴史書には『壁の外の人類は絶滅した』と明言されている。

調べ尽くせてないのなら、断言など出来るわけがないのに。

その矛盾点に気付いたエルヴィンの父親は、とある仮説を立てていた。

107年前に壁の中に逃げ込んだ当時の人類は、壁の王が統治しやすいように、壁の王によって記憶を改竄されたのだと。

問いの答えとして返ってきたその仮説をエルヴィンが知人に話したことで、父は死んだのだ。

それ以降、エルヴィン・スミスは『仮説』の真偽を確かめるために調査兵団で活動し続けた。

そして今、探し求めていたモノが目の前に現れた。

待ちわびた、渴望した、追い求めた、答え合わせの時が。

部下たちが純粹に『人類の自由』のために命を賭している中で、それでも見続けた夢が。

人類最高峰の頭脳は、次々とダイナと名乗る女性の危険性を弾き出している。

もし彼女の言っている事が全て虚言で、壁の中に入るための策略だったのなら。ここで彼女と『交渉』して、彼女を壁の中に入れたが最後、どれほどの人々が死ぬことになるのだろう。

このダイナという女は本当にエルヴィンが、そして調査兵団が求めている情報を持つ

ていると確証を得られない以上、交渉に応じるのはリスクが大きすぎる。

そんな事は分かっているのに、どうしても目の前に差し出された『答え』を振り払えない。

調査兵たちが戸惑いの声を交わす中、エルヴィンだけがダイナを見つめて微動だにせず、沈黙している。

それに痺れを切らしたのは、リヴァイ兵長だ。

トリガーを引いてワイヤーを射出すると、15メートルの壁の上からエルヴィンの隣へと立体機動で移動する。

「オイ、エルヴィン。いい加減に判断しろ。ここは壁外だ、いつまでも時間があるとは限らねえぞ」

そう言つてリヴァイ兵長が指差したのは、今しがた空に打ち上げられた赤い煙弾。当たり前だ。

これだけの数の人間が一点に集まっていれば、巨人が引き寄せられない訳がない。

いくら高さ15メートルの壁で周囲を囲っているとは言え、10メートル超えの個体なら乗り越えてくるだろう。

事実、今まさに……

「うわあああああつ!?!」

壁の上から、絶叫が迸った。

ダイナとアリーセに注目していた全員が一斉に声のした方へと視線を向ければ、そこには巨人に握りしめられた調査兵の姿が。

壁の上によじ登って兵士を握りしめているその巨人は、15メートル級。

「——チッ——」

リヴァイが舌打ちし、超硬質ブレードを逆手に持つ。

そして仲間を救出すべく立体機動に移ろうとしたところで、ダイナとアリーセが飛び出していた。

白刃が煌めき、ダイナの放った斬撃が15メートル級の両目を切り裂く。それとほぼ同時に、アリーセが兵士を握りしめていた巨人の右手首から先を切断している。

巨人の手首と共に地面へ落ちた兵士が無事なのを確認したダイナは、その勢いのままワイヤーを再射出。アンカーを15メートル級の右足首に突き刺すと、地面スレスレの軌道で踵を狙う。

反対の足を見てみれば、全く同じタイミングで左足首にアンカーを突き刺したアリーセが、ダイナと全く同じ軌道で飛翔していた。

合図もなしに行われた、非の打ち所がない連携攻撃。

高速回転しながら交差したダイナとアリーセは、巨人の足首を完璧に削ぎ落としてい

た。

移動に必須の筋を削がれた15メートル級が、壁の内側へと頭から落ちる。その隙を、彼女たちは逃さない。

足首を削ぎ落とすと同時に真上へと上昇していたアリーセが、ガスを吹かして高速で下降。両目、両足首、右手を失ってまともに動けない15メートル級のうなじを、完璧に挟り取った。

赤い雨が降り注ぎ、蒸気が立ち込め、死んだ巨人の肉体が消えていく。

そんな最中で、ダイナとアリーセは無言でハイタッチを交わした。

パアンツという快音が響き渡る。

あまりに見事な連携に、何人かの兵士がダイナが巨人だという事も忘れて「すげえ……」と感嘆の声を上げた。

リヴァイ兵長だけは、血の雨で汚れた顔を綺麗な布で熱心に拭っているが。

ダイナは軽く周囲を見渡し、他に15メートルの壁を超えられる大型の巨人はいないか確認を行う。

どうやら、今は大丈夫らしい。

壁の上から飛び降りると、アリーセと共に元の位置へと戻る。

そして助け出した兵士の方を指差すと、

「これで私たちに敵対意思がないと、少しは信じてもらえましたか？」

そう尋ねてくるダイナにエルヴィンは首肯し、口を開く。

「……ああ。だが、交渉に応じるかは別の話だ。我々は君たちが差し出す情報が正しいかどうか、判断する術がない」

その返しに、ダイナは待つてましたとばかりに笑みを浮かべた。

「壁の外にも人類が生存している決定的な証拠が存在します。シガンシナ区にある第104期訓練兵団所属エレン・イエーガーの生家。その地下室に、壁の外の世界が細かに記述された手記があります」

「……」

息を呑むエルヴィン。

しかし彼が返答する暇を与えず、ダイナが畳み掛ける。

「エレン・イエーガーの父、グリシャ・イエーガーもまた壁外の人間です。その証拠は、恐らく調査兵団の記録を辿れば分かるでしょう。832年に行われた壁外調査で、キースという名の兵士が壁外でグリシャ・イエーガーと出会ったという記録があるはずで、その後、グリシャは無断で壁外へと出た罪で牢に入れられていますので、その記録も調べれば見つかるかもしれません。そのキースという兵士が存命なら、彼に直接聞いても確認できるかと」

一息ついて。

「私はグリシャ・イエーガーの前妻です。その証拠も地下室に。グリシャの手記には、私のことも書かれているはずでしょうから。ここで断言します。エルヴィン・スミス、あなたの父親が立てた仮説は正しいと。壁の王は107年前に、壁内人類の記憶を改竄しています。そして肝心の壁の王がどうやって人々の記憶を改竄したのか、ですが」

そこで一旦話を区切ると、ダイナはエルヴィンに向かって手を差し出した。

それを見て周囲の兵士は慌ててエルヴィンを守るように剣を構えるが、ダイナは全く気にすることなく続きを口にする。

「前払いできる情報はここまでです。ここから先が知りたければ、私の手を取ってください」



エルヴィン団長から与えられた馬に乗った俺は、盛大にため息を吐いた。未だに冷や汗が止まらねえ。

口から心臓が飛び出す幻覚が見えくらい緊張したつっの。

最後らへんとかちよつとパニックになったせいで、自分でも何言ったのか曖昧なくら

いだ。

何よりの失敗が、予定よりも情報を喋り過ぎちまったこと。

信頼を勝ち取ろうとして焦った結果がああザマ。本当に、こういう駆け引きは俺には向いてねえなど痛感する。

グリシヤの手記とかについては初めから言うつもりだったが、正確な場所まで教えはしないつもりだったのに。

いや、まあ、エレンの名前を出した時点で十分にアレだが。

エレン本人に実家の位置を確認されたら終わりじゃねーか。

本当に馬鹿だな、俺。

壁の中に巨人が入ってるとか、始祖の巨人とか、真の壁の王とか、座標とか、マールとか、巨人の正体とか、交渉材料になりそうな情報が全部パーになっちまう。

この辺の情報はまとめてグリシヤの手記に書いてるから、手記を手に入れられたら終わりなんだよ。

何で俺は自分の首を自分で締めてるのか。

でも曖昧な情報だと、証拠になっってくれねえし。

ひとまず協力体制を構築出来たのだから、それでも良いと思うべきだろう。

……まあ、殆ど捕虜みたいな扱いだが。

現在の俺とアリーセは、一緒の馬に乗って調査兵団と共にトロスト区へと引き返している途中だ。

アリーセが手綱を握り、俺が後ろにいる形。

そんな俺たちの四方を抜剣した兵士が囲んでいて、真後ろにはリヴァイ兵長がご降臨しているという。

それに加えて、俺もアリーセも立体機動装置を没収されてしまった。

変な動きを見せたら即殺するという構え。

当たり前だが、すげえ警戒されてやがる。

でもエルヴィン団長は一応、俺の手は取ってくれたし。

少なくとも「壁内人類にとって必要な情報を持っている」と判断されたのなら、構わない。

これで容赦なくぶつ殺される可能性は大きく低下した。

そして気になる、俺とエルヴィン団長が交わした『交渉』の内容だ。

俺が提供するの『情報』の続きと、巨人の力。

その代わりに調査兵団以外の者に俺が巨人化能力者だとバラさないことと、壁内で衣食住を与えるように要求した。

これでエレンみたいな裁判沙汰は避けられるし、生活の心配もない。相手に裏切られ

たら終わりだが、それは向こうも同じだ。壁内で俺が巨人化して暴れるだけで、壊滅的な被害が出るのだから。

調査兵団からすれば女2人分の衣食住を保証して、俺のことを上に報告しないだけで、追い求めている『情報』と、どんな兵器よりも強力な『巨人の力』が得られるんだ。文句はないだろう。

この内容で取り敢えず交渉成立とした俺とエルヴィン団長は、話の続きは壁内ですべく仲良く一緒に帰還中って訳だ。

人類最強の兵長に、剣先を突き付けられてるけどな。

目の前で巨人討伐して、兵士さん助けて、分かりやすい敵対意思は有りませんアピールしたのにこれだよ。最初にエレンが巨人化能力者だと分かった時の周囲の反応を見てたら、俺の扱いはまだマシな気がするが。

手枷とか付けられてないし。

「ダイナさん」

そんな事を考えている時、アリーセに話しかけられた。

「壁外の世界の出身のことや、巨人についての事は2人で生活している間にたくさん聞きました。けど、グリシャって人の前妻だったなんて話は初めて聞いたんですが」

そう言えば、勢いでそんな事まで言ってたな。

まさか「私はグリシャの前妻です！」なんて言う日が来るとは思わなかった。

マニアックな体験すぎるわ。

「あんまり人に言う話でもないですし、別にアリーセにわざわざ話す必要はないかと思
いまして」

「必要ありますよ！ グリシャつてどんな人ですか!? その人がダイナさんを捨てたん
ですか!? というかエレン・イエーガーつて、ダイナさんの息子!? 子持ちなんですか
!?!」

うわ、物凄い質問攻めが来た。

ついさつきまで命すら賭けての交渉してたのに、一気に変な話題になったな……。

つーか、捨てられたとか言わないで欲しい。

別に俺が捨てられた訳でもないし、ダイナも捨てられてないのに、何故か惨めな気分
になるから。

「エレンは私の息子じゃないですよ。グリシャの後妻の息子なので、私とは何の血の繋
がりもありません」

「ちよつ……!?! その人、ダイナさんを捨てて別の女の人と子供を!?!」

言い方よ。

グリシャがすごい女癖悪いように聞こえるからやめなさいって。

そんなくだらない会話をしていると、後ろから兵長の冷たい声が聞こえてきた。「オイ、何をコソコソと話してやがる。殺されてえのか?」

滅相もございませぬ。

慌てて弁明をして、何とか兵長に殺気を収めてもらう。

そこでようやく、数年ぶりのウォールローゼが見えてきた。脳裏に浮かぶのは、口滅らしの時の惨状。

アレからもう、随分と時間が経ったんだな。

「帰ってきましたね……」

「……ええ」

トロスト区へと続く門が開くのを見て、アリーセと短く言葉を交わす。

だが壁内に入って、これで安心! とはいかない。

むしろ、ここからだ。

まだ『原作』は始まってすらないのだから。

これから襲い来るだろう様々な困難に立ち向かう決意を新たにすべく、俺は両頬を軽く叩いて気合いを入れた。

第13話 信頼なき協力関係

調査兵団の面々と共にトロスト区へと帰還した俺とアリーセを迎えたのは、空気が震える程の大歓声だった。

いや、驚きすぎて心臓が止まるかと思ったっつーの。

進撃ファンの俺のイメージだと、どうも調査兵団の帰還つてのは暗い印象が強いからな。アニメや漫画でも、キース教官の「何の成果も、得られませんでしたあああああつ！」から始まるし。

歓声で迎えられるとか、違和感しかねえ。

キース教官が団長だった時代の調査兵団しか知らないアリーセも俺と同じく、口をポカんと開けて呆然としてたくらいだ。

まさかいきなりエルヴィン団長が裏切つて、俺の正体やら提供した情報やらを壁の中にばら撒いたのかと危惧したが、どうやらそういう訳ではないらしい。

後から聞いた話によると、この壁外調査での死者が過去最も少なかったとか。

8割以上の調査兵が生還したらしく、5年前のウォールマリア陥落の時から増えていた調査兵団ファンがお祭り騒ぎしてるんだと。

集まっていた人の中には市民だけでなく憲兵までいたので、兵士じゃない事がバレないかヒヤヒヤしていたが、これは無用の心配だった。

考えてみたら、入れ替わりの激しい調査兵の顔を全部暗記してる奴なんて、そりゃあいねーよな。

中にはリヴァイ兵長のように、正規の訓練兵団を通過せずに入団した者までいるんだし。

そんな感じで喝采を浴びながら帰還した俺たちだが、現在は地下牢にぶち込まれている。檻を挟んで、調査兵団の主要メンバーと向かい合っている形だ。

まあ、当然か。

いつでも巨人になって暴れられるような危険人物が、自由に壁内を歩き回れる筈がねえ。

牢屋に突っ込まれるのは不服だが、ある程度の信頼関係を築くまでの我慢だと割り切るべきか。

アリーセも俺と同じ牢屋の中だから、彼女を守る事は出来るしな。地下でかつ仲間が近くにいれば、容易に巨人化できないと考えたんだろう。

原作でエレンにやったのと似たような対策だな。

こればかりは、詰めが甘いと言えないけど。

数年間みっちり巨人化能力の練習を行った今の俺なら、体の一部分のみを巨人化する事だって出来る。

女型の巨人の右腕だけを生成して地下牢を破壊すれば、簡単に脱獄成功だ。崩落の危険があるなら、範囲硬質化で固めれば良いだけだし。

巨人化する際の爆破もある程度なら制御できるようになった。

その気になれば、近くの物を何も破壊せずに巨人化する事もできる。反対に、超大型巨人のように辺りを吹き飛ばすことも可能だ。

……尤も、超大型巨人ほどの威力はねえが。

半径数十メートルに爆風を発するのが精一杯ってところだろう。

ともあれ、俺が牢屋にぶち込まれても余裕なのは以上の理由があるからだ。

いつでも逃げられるって思っていれば、心に多少の余裕も生まれる。

「協力関係を了承したというのに、このような形で対話する事になってしまい申し訳無い。だが、こうでもしなければ君を今すぐに殺すべきだと主張している兵士達が納得しないだろう」

そこで、思考の渦に呑み込まれていた俺の意識がエルヴィン団長の声によって現実へと回帰した。

舐められないように余裕の表情を浮かべ、俺も口を開く。

「壁の中で暮らす人々にとつて、巨人は恐怖の象徴そのもの。そんな巨人の姿になれる相手を殺したい、鎖に繋ぎたい、檻に閉じ込めたいと思うのは普通でしょう。これは對話に必要な措置だと理解しています」

「そう言ってもらえると、我々も助かる」

緊張で声が震えないか不安だったが、自分で思ったよりもしつかりとした声が出た。ダイナの声は凜としているので、ハキハキと話すだけである種の迫力が伴うんだよ。

俺の返答にエルヴィン団長は少しだけ口元を緩めてそう言うと、すぐに表情を引き締める。

それを見て、俺も對話へと意識を集中していく。

さあ、頭を回せよ俺。

どの情報を開示すべきで、どの情報はまだ黙っていた方がいいのか。

必死に見極めろ。

ミスは許されねえぞ。

「改めて自己紹介といこう。私はエルヴィン・スミス。調査兵団の団長を務めている。そして私の右隣に立っているのがリヴァイ、その横がミケで、端にるのがハンジだ」
自分の自己紹介を終えたエルヴィン団長は、周囲に立つ人物を順に指差しながら名前を呼んでいく。

錚々たる顔ぶれに俺は内心で「調査兵団の主力メンバー総揃いキタコレ！」とかアホな感想を抱きながら、表情を崩さずに静かに頷いた。

いやまあ、進撃ファンなら興奮するのは仕方ないだろ。

エルヴィン団長にリヴァイ兵長に、ミケさんとハンジさんまで。好きな漫画の登場人物が本当に目の前に現れたんだ。

感動するなっていう方が無理な話だわな。

尤も、残念なことには全く友好的な関係ではないが。

「改めまして、ダイナです」

「アリーセ・エレオノーラです」

「……よろしく頼む。では早速、質問をして構わないだろうか？」

俺たちも簡潔に自己紹介すると、エルヴィン団長は早速とばかりに本題に入る。

ああ、うん。そうだよな。

エルヴィン団長からすれば、探し求めている全てが目のあるようなものだ。

一刻でも早く、手を伸ばしてそれを掴みたいだろう。

「もちろんです。しかし、私が今ここで持つている全ての情報を開示する訳ではないとご理解ください。これは人類に対する敵対行為などではなく、保身のためです。全ての情報を開示した瞬間に、用済みとして殺される危険もないとは言いきれませんから。

信用できないのはお互い様でしょう？」

食い入るようにこちらを見つめてくるエルヴィン団長に、念のための釘を刺しつつ肯定を示す。

「了承した。……まず初めに、私の父の『仮説』についてだ。私はこれを、親密な関係にある相手以外には話していない。知っている者は極少数に限られる。それを、どうして君は知っている？」

まずは予想通り。

真つ先に『仮説』について質問してくるって事くらいは、俺ですら予測できている。「まず『仮説』の内容ですが、これは壁の王が何らかの方法で自分が統治し易いように当時の民の記憶を操作したのではないか、というものです。ではなぜ私がこの仮説を知っているのかですが、その答えは巨人の力に由来します。皆さんの前で私は15メートルの高さの壁を瞬間的に作り上げました。この『硬化』の能力をはじめとして、人間が纏う巨人は無数の力を有しています。その中の1つに、他者の記憶に干渉する、というものがありません」

エルヴィン団長が、リヴァイ兵長が、ハンジさんが、ミケ分隊長が、アリーセが。

この場の全員の視線が俺に集中する。

緊張で声が掠れそうになりながらも、一度大きく息を吸って俺は話を続けた。

「私が使ったのは、その能力。全ての壁内人類は、目に見えない『道』で繋がっているのです。私が生み出す巨人の肉体も、その目に見えない『道』を通して送られてきています。そして『道』には巨人の血肉だけではなく、時には他者の記憶も流れる事があります」

もちろん嘘八百だ。

しかしエルヴィン団長たちには、この嘘を嘘だと判断する方法がない。確実に誤魔化せる。

とは言っても、全部が嘘って訳じゃないがな。

巨人能力者は先代継承者の記憶を覗けるが、これもある意味では他者の記憶への干渉に含まれるだろう。

それに、全ての巨人の頂点たる『始祖の巨人』は確かに他人の記憶に干渉する能力を持っている。

ただ、俺がアニから継承した女型の巨人にはそんな能力はないってだけだ。

俺がエルヴィンの父親の『仮説』を知っているのは、ただの原作知識なのだから。

何か詐欺師の手法みたいだが、悪く思わないでほしい。

「つまり、君はその能力で私の記憶を見た？」

「はい。そして私が『仮説』が正しいと断言できる理由でもありません。最初に言った通

り、私は壁の外の世界から来ました。私自身が壁の外に人類が生活している世界があると知っています。加えて、先ほどの巨人による他者への記憶干渉能力。『仮説』に出てくる当時の民の記憶改竄は、この能力で行われたものだからです」

目を見開く、調査兵団の面々。

そんな彼らから目を逸らさず、俺はエルヴィン団長が求めて止まない「答え」を叩きつける。

「壁の王は、私と同じ巨人化能力者です。それも、私より遥かに高度な記憶干渉能力を持っている。繰り返しましょう。貴方のお父上の『仮説』は正しい。壁の中に暮らす全ての民は、壁の王が持つ巨人の力によって記憶が改竄されています」



トロスト区へと帰還し、地下牢の中でいくつかの質問に答えた数日後。

俺とアリーセは地下牢から出してもらえる事になり、複数人の兵士に監視されながら移動することになったのだが……

「それで、巨人になるってどんな感じ!? 感覚とかはどうなってるの!? 普通の巨人は人間と比べて痛覚が鈍いけど、それは巨人化した君も同じなのかな!? それとも巨人の

体を纏っても、痛覚は人間の時と変わらないのかい!？」

轡を並べて目的地で移動する最中、俺は馬上でハンジさんの質問攻めを受けていた。全く止まらないマシンガントークに、俺の気力はもうゼロだ。気分すら悪くなつてきたぞ、オイ。

旧リヴァイ班のメンバーが一齐に退室した理由がよく分かる。

これはしんどい。

少し前までは俺に剣先を突き付けて殺気を剥き出しにしていた周囲の兵士たちも、今や俺に憐れみと同情の視線を向けてきている。

アリーセ？

彼女はもうダウンして、俺に寄りかかってぐったりしているよ。

リヴァイ兵長も呆れたようにため息をつくばかりで、全く助けてくれない。

「ところで！ 私たちはこれから何処に連れて行かれるのでしょうか？」

このままでは本気で埒があかないので、俺はほんの僅かに生まれた隙を突いて、俺は大声で言葉を被せる。

するとようやくハンジさんはマシンガントークを中断し、俺の質問に答えてくれた。

「ああ、私たちの目的地は旧調査兵团本部。古城を改装した施設だから、設備は整っているよ」

あー、あそこか。

エレンが旧リヴァイ班と共に、巨人化能力の実験をしていた場所だ。

井戸の中で巨人化しようとしても出来ず、ティースプーンを拾おうとした時に誤って巨人化してしまったシーンが強く印象に残っている。

……いや、待てよ。

もう1つ印象に残っているシーンがあった。

やつべえ、もの凄く嫌な予感がするぞ。

漫画とアニメの中で見たものと全く同じ、旧調査兵团本部の前で俺たちは馬から降りる。

ああ、全く同じだとも。

初めてエレンたちがここに来た時の本部と。

つまり、だ。

「ただ、しばらく使われずに放置されてたから、少し荒れてるんだけどね」
そりゃそうだよな。

エルヴィン団長から聞いたところ、今は849年。

トロスト区決戦の前で、当然ながらエレンが巨人化能力を覚醒させる前の時期だ。

この本部も、掃除される前。

という事は……

「それは重大な問題だ……早急に取り掛かるぞ」

だと思つたよ、コンチクショウ！

俺は涙目になりながらも、箒を片手に兵長に指示された部屋の掃除に取り掛かる。

本来はエレンの仕事なのに、何で俺がやらなきゃいけないーんだよ。

ハンジさんの巨人トークの後にリヴァイ兵長と掃除とか、疲労が限界突破するわ。

そして俺たちは、兵長からオツケーが出るまで数時間以上も箒を動かし続ける事になった。



ピカピカになった本部の前で、俺とアリーセは互いにもたれ合いながら座り込む。

こんなに身も心も疲れたのは、アリーセに格闘術の組手でボコボコにされた後、ノンストップで巨人と立体機動で戦った時以来だ。

「もう寝たい……」

「頑張ってください、ダイナさん。まだここに来た本来の目的は達していませんよ……」
半泣きになりながら弱音を吐くと、アリーセが俺の髪を指で優しく梳きながら励まし

てくれた。

あー、癒される。

壁内に入ってからのは出会う人全てから敵意を向けられ続けてたから、アリーセの優しさが一段と身に染みるな。

彼女を守るためにも、もうひと頑張りしますか。

疲労で動きたくないと呼ぶ自分の体を叱咤し、俺は立ち上がる。

そこに、ハンジさんがやって来た。

「疲れているところ悪いけど、早速『巨人化能力』を見せてもらおうよ」

「ええ……」

この旧調査兵团本部に来た理由は、ハンジさんとリヴァイ兵長の前で巨人の力を見せるため。

俺が調査兵团に提供したのは、情報だけじゃない。

この巨人の力も、ある程度は調査兵团のために使うという事になっている。

だが、俺の『巨人の力』が何をどこまで出来るのか正確に分からないと作戦も立てられないとの事なので、じゃあ実演しよって話になったわけだ。

まあ、俺の最後の切り札である巨人化能力の全てを見せる気はサラサラねーが。

見せてやるのはあくまで基本的な運動性能と、硬質化能力だけ。

『叫び』の能力や、王家の血に由来する、俺個人の特殊能力は見せてやらない。

将来的に敵対するかもしれない相手に、切り札の全てを晒すなんてアホな真似は流石にしないっつーの。

立体機動装置を装備したりヴァイ兵長を筆頭に、10人以上の兵士が俺を取り囲む。その全員が、3回以上壁外調査を生き残った精鋭たちらしい。

周囲の立体物も十分以上。

俺が裏切れば、即座に殺せる陣形だ。

リヴァイ兵長とハンジさんを除く兵士たちの表情を恐怖と緊張で強張っており、俺が怪しい動きをすれば本気で殺しに来ることが嫌でも分かる。

今なら、エレンの気持ちがよく分かるな。

化け物扱い。腫れ物扱い。まともに会話すらして貰えず、常に殺意と警戒心丸出しで剣を向けられてしまう。

なるほど、確かに信頼できる仲間という存在に縋り付きたくもなるな。

アニに襲われたあの時、エレンが自分の力ではなく仲間の力を選択したのも、こういった要素が原因なのだろう。

アルミンやミカサのような存在を、調査兵団の中にも求めた。

だが、俺にはアリーセがいる。

どんな時でも、必ず彼女が近くに来てくれている。だから何の問題もない。

選択の必要すらない。

俺はただ、自分の力とアリーセのみを信じていれば良いのだから。

「よし、じゃあ実演開始！」

ハンジさんから号令がかかり、俺はポケットからナイフを取り出す。

俺の今回の目的は、本部に開いた穴を塞ぐこと。

穴は高さ3メートル、幅2メートルと巨人化した俺からするとかなり小さい。

問題なく硬質化能力で防げるだろう。

もう想像がつくと思うが、これは俺の巨人の力がウォールマリア奪還に使えるかどうか確認するためのものだ。

やってやるよ。

エレンの手を煩わせる必要すらねえ。

ウォールマリアは、俺が奪還してやる。

その功績で、俺とアリーセが調査兵団から信頼を得られるのなら。壁の中で大手を振って生きられる権利が貰えるのなら。

手に握ったナイフで、浅く自分を斬りつける。

ダイナの真白の肌に赤い線が引かれ、血の玉が僅かに飛び散った。
瞬間、空から光が降り注ぐ。

爆音と共に傷口から目に見えない『道』を通じて送られてきた巨人の血肉が生まれ、肉
体を構築する。

——高さ3メートル、横幅2メートルの大穴が、一瞬にして塞がった。

第14話 壁外調査へ

「おい起きろー！」

そんな怒声と共に、疲れて果ててベッドの中で眠っていた俺の首根っこが掴まれる。直後、布団と共にもの凄い勢いで投げ飛ばされた。

咄嗟に空中で身を捻り、受け身を取りながら床の上を転がって勢いを殺す。

そしていつも懐に忍ばせている護身用のナイフを取り出して、奇襲を仕掛けてきた相手を確認すべく顔を上げると、不機嫌そうに俺を見下ろすリヴァイ兵長と目が合った。

「いつまで寝ぼけてやがる。さっさと支度しろ。起床時間はとつくに過ぎている」
リヴァイ兵長はそれだけ言い残すと、地下牢の中に作られた俺の部屋から出て行ってしまう。

まさか、今のつて起こされただけ？

兵長……流石に乱暴すぎるわ。

奇襲された訳ではないと分かると、ナイフを構えている自分が急速にアホらしく見えてくる。

何とも言えない気分で立ち上がりながら、俺は言われた通り朝の準備を始めた。

寝巻きを脱ぎ捨て、支給された兵士の制服を身に纏う。

手早く歯磨きを済ませて顔を洗い、地下牢から出て兵長が去って行った方向へ。

つか、鍵すらかけてない地下牢って意味あんのか？

もう旧本部の中を自由に歩くのが許可される程度には信用してくれてるなら、普通の部屋を与えてくれても良いんじゃないかねーの？

そう、この旧本部に来てからそれなりの時間が経過した。

2、3ヶ月くらいか。

その期間の間なにしてたって話だが、別段これといったイベントは発生していない。エルヴィン団長と何度か会話して、ハンジさんの質問攻めをやり過ぎし、空いた時間をアリーセとのんびり過ごす。それを繰り返してただけだ。

俺の巨人化能力の研究にも一旦区切りがいたらしく、ここ何週間は巨人化してないしな。

今のハンジさんは、俺が硬質化で生み出した結晶をあらゆる手段で分析しようとしてるらしい。

調査兵団の面々ともある程度は親しくなり、挨拶を交わすようになった。

バリバリに警戒されてるのは変わらないが、ここに来た当初よりは随分とマシになっただろう。少なくとも、後ろから話しかけただけで刃を向けられることは無くなった。

いや、ホント、事あるごとに超硬質ブレードを構えるのをやめて欲しかったんだよ。

「あ、ダイナさん。おはようございます」

「ん、おはようアリーセ」

怯えた表情で超硬質ブレードを振り回す調査兵の姿を思い返しながら通路を歩いていたら、ちょうど部屋から出てきたアリーセと出会った。

軽く挨拶を交わして、自然と連れ立って歩き始める。

「あー、もー。ダイナさんってば、また髪がグシャグシャのまま……。髪を結べとは言いませんから、せめて櫛で梳いてください」

「いきなりリヴァイ兵長に放り投げられて起こされたから、今日は髪を整える時間がなくて」

「今日は、じゃなくて今日も、でしょう。……って、ちよつと待ってください。放り投げられて起こされたってどういう事ですか？」

頬を膨らませたアリーセが、懐から取り出した櫛で俺の髪を梳きながら質問してくる。

俺が懐に入れてるのがナイフなのに対して、アリーセは櫛か。

こういうところで女性（真）と女性（偽）の差が現れてくるな。

なんて思いながら、俺は今朝の顛末を話す。

「ノックもせず、女性に部屋に入って来たんですか!? しかも寝ている女性の首根っこを掴んで投げるとか、酷すぎます! 絶対に女性にモテませんよ、あの人」

残念、モテモテです。

ペトラさんを筆頭に、男からも女からも人気がある。

何せ「兵長に踏まれ隊」なんていう猛者が集う集団まであるからな……。

憤慨するアリーセの横で、俺は「兵長になら何されても良い!」と頬を染めて身悶える日本の幼馴染(女)の姿を思い出す。

あのような高度な変態まで生み出してしまうとは、兵長のカリスマ恐るべし。

そんな感じでアリーセと談笑しているうちに、目的地である少し大きめの部屋に到着した。

木製の扉を開いて、中へと入る。

部屋の中にはエルヴィン団長、リヴァイ兵長、ハンジさんに加えて、見知らぬ兵士が3人ほど。

いつも俺の監視をしていた兵士とは違うな。

ここ数ヶ月の間で、旧本部に常駐していた兵士の顔と名前は全部覚えた筈だ。なのに
見覚えがないという事は、今日ここにやって来た新顔ということになる。

……いや、待てよ。

1人は完全に見覚えがないが、残りの2人は見覚えがあるような。

まあ、今はいいか。どうせ後で紹介されることになるだろう。

そう結論を出し、俺は彼らから視線を外す。

「朝から呼び出してごめんねー。でも、ようやく次の壁外調査の予定が決まったんだよ」
壁外調査………ついに来たか。

実は少し前から、エルヴィン団長に次の壁外調査に参加して貰うと言われていたんだよな。

説明するから座って座ってと、ハンジさんが俺とアリーセに椅子を差し出した。
机を挟んでハンジさん達と向かい合う形で、俺たちは席に着く。

それを見て、エルヴィン団長が口を開いた。

「まず壁外調査の目的だが、トロスト区からシガンシナ区へと大部隊を送り込むための経路を構築することだ。今回は壁外に補給拠点を作ろうと思う」

「壁外に補給拠点……。そんな事が可能なんですか？」

せつかく作った拠点が、巨人によってあっさり壊される未来しか見えないんだが。

そう思っって質問すると、ハンジさんが嬉々として話に割り込んできた。

「そこで活躍するのが、君の巨人の力だよ！ 君が私たちと最初に出会った時に見せてくれた、巨大な壁を作る能力があるだろう？ あれで簡易的な補給拠点を作るんだ。君

の硬質化で構築された拠点なら、そう簡単に壊されることもないだろう」

ああ、なるほど。

確かに『範囲硬質化』なら、瞬時に巨大な建造物を作れるだろう。

だがこの作戦には、1つ問題がある。

「巨人の力を貸す約束ですから、言われた通りにはやるつもりです。しかし、私の硬質化も万能ではありません。壁のように単純な作りの建造物なら素早く構築出来ますが、複雑な建造物を建てるには時間がかかります」

補給拠点と言うからには、前のように円形に壁を作れば良いってもんじゃないだろう。

作りたい建造物が複雑になればなるほど、形成するのに時間がかかってしまう。

後、俺が作りたい建造物の構図を正確に理解しておく必要もあるな。

何なら、見取り図を見ながらやらせて欲しいくらいだ。暗記にはあまり自信がねえ。そういつた旨のことを伝えると、エルヴィン団長が微笑と共に俺の懸念を払拭した。

「そのような複雑なものは要求しない。イメージ図としては、このようなものだ」

エルヴィン団長が机の上に紙を広げる。

覗き込んで見れば、縦長の箱のような建造物が描かれていた。

長方形型の建物で、高ければ高いほど良いらしい。

天井には人が通れるくらいの隙間がいくつか描かれてるな。これは……立体機動で建物の上から入ることを想定してることか。

あとは普通の入り口も1つ。

この入り口は間違っても巨人が通れないように、1メートル半ほどの大きさが良いとのこと。

……まあ、このくらい簡単なものなら、そんなに時間はかからねえな。

しかし、出来るだけ高さは欲しいってか。

面倒くさいことを言ってくれやがる。

俺の女型の巨人はそこまで硬質化能力に特化している訳じゃねえ。

本来、硬質化でモノを作るのは『戦鎚の巨人』の専売特許だ。

この『範囲硬質化』は王家の血筋の力で無理やり巨人の真価を引き出して使うもので、使うと一気に体力が持つて行かれるんだよ。

限界サイズの建物とか建てたら、しばらくは巨人化出来なくなるぞ……。

後、俺は疲労で動けなくなっちゃう。

俺がウォールマリアを塞がなかったのも、これが理由だ。巨人が跋扈するシガンシナ区の中で、動けなくなるのは流石にリスキーすぎるわ。

そして、そのタイミングを見計らって襲撃されたら終わりだ。迎撃も出来ずに殺され

る。

ぶっちゃけ言って、やりたくねえな。

けど、今さらやっぱり無理ですとか言える雰囲気でもねーし。

調査兵団には悪いが、余力を残せる程度にセーブして作るとしますか。

「……分かりました、やってみます」

そう言うと、ハンジさんが歓声をあげた。

朝っぱらから本当に元気だ、この人。

リヴァイ兵長に「うるせえ！」と怒鳴られても、全く騒ぐのをやめようとしなない。

そんな2人を横目に、俺とエルヴィン団長は会話を続行。

「では次に、今回の壁外調査で君と行動を共にする兵士を紹介しよう」

エルヴィン団長がそう言うと、今まで部屋の隅っこにいた兵士達が一斉に俺の前に並んだ。

数は3人。

男が2人で、女が1人だ。

一番左端にいた男の兵士が、公に心臓を捧げる敬礼を取って自己紹介を始める。

「特別作戦班に配属されました、フォルカー・バルヒェットです！」

身長190を超える巨体に、ツンツンと逆立つ赤茶色の髪の毛が特徴的な人だ。彫り

の深い顔立ちで見下ろされると、威圧感がすごい。

なんか悪役レスラーとかやっつてそうだな。

兵服の上からでも分かるくらい、筋骨隆々だし。

「同じく、テオバルト・シュライヒです」

次に名乗りを上げたのは、真ん中に立っている男性。

背の高さは俺より少し高いくらいだから、170センチくらいか。先ほどのフォルカーって人と比べたら、随分と小柄に見えてしまう。

うーん、やっぱり見たことある気がするんだよなー。

『原作』？

いや、違う。

いくら進撃の巨人を読み込んだ俺でも、モブ兵士の顔まで覚えてはいねえよ。

じゃあ、どこで……あ！

「あ、ああ！ あの時の特攻してきた人！」

思わず小声で叫んでしまう。

巨人化して長距離索敵陣形のだ真ん中を突き進んでいる時に、ガスの噴出だけで俺に追いつがり、決死の攻撃をしてきたあの兵士だ。

やっと思いつけてスッキリした。

「同じく、ラウラ・ローヴァインですー」

最後に名乗りを上げたのは、綺麗な金髪をサイドテールにした女兵士。

美しいと言うよりは可愛らしい。美人というより美少女と、どこか幼さを感じさせる顔立ちだ。

身長もかなり低く、リヴァイ兵長よりさらに5センチは小さいだろう。

155センチってところか。

……女性にしては普通じゃね？

ダイナが背が高すぎるせいで、地味に感覚がおかしくなってるな。

で、こつちもやっぱり見覚えがある。

テオバルトさんの時と同じく顔を凝視して記憶を掘り返していると、ラウラは何やら不機嫌そうにそっぽを向いた。

その後は俺とは絶対に目を合わせようとせず、無言でアリーセの方をガン見し続けている。

なんだ……？

巨人化能力者にいい感情を持ってない側の人か？

ならば、どうして俺と同じ班に配属されることを了承したのやら。拒否権がなかったのか？

「……あ！」

などと思いを巡らしていると、隣に座っていたアリーセが先ほどの俺のように声をあげた。

「知り合い？」

「調査兵団と合流した際に、私たちが助けた兵士さんですよ！ ほら、ダイナさんが作った壁を乗り越えてきた15メートル級に捕まっていた人ですよ！」

アリーセに言われて、ようやく俺も思い出す。

調査兵団に対して敵意はないと証明するために、調査兵を捕らえた15メートル級を俺とアリーセで討伐したんだっけか。

で、その時に助けたのがこのラウラって子だったんだ。

どうりで見覚えがあると思った。

「以上3名が、特別作戦班に志願してくれた兵士達だ。この3人に君たち2人とリヴァイ兵長が加わり、6人で行動してもらおう」

要するに、旧リヴァイ班のさらに先代となった訳だ。

改めて同じ班になった3人の順に見て、最後にアリーセと顔を合わせる。

「何はともあれ……壁外調査、頑張りましょうね」

「ええ」

そう言って笑い合い、そこで俺はふと何かおかしいことに気づく。

……志願制？



トロスト区とシガンシナ区の間で作られた行軍経路にある、今は人1人いない街。

その街の中央にある広場が、拠点の構築場所だった。

「おいダイナ、アリーセ！ 絶対に俺から二馬身以上離れるな！ 必死で馬を走らせろ！」

「は、はいー！」

必死で馬を走らせながらリヴァイ兵長の後を追う。すぐ後ろからは、10メートル級が四足歩行で俺たちに迫って来ていた。

もう少し距離を詰められてしまえば、後ろに手を伸ばした瞬間に手首から先が食い千切られてしまうほどに近い。

「兵長、立体機動に移らないんですか!? いくら調査兵団の馬でも、逃げきれません！」

すぐ後ろから聞こえてくる巨人の息遣いに、俺の横を走るアリーセが悲鳴に近い声で叫ぶ。

全くもって同意だが、原作を知る俺はリヴァイ兵長が何の考えもなしに動く人物でないことは理解している。死ぬほど怖いのが、今は兵長を信じて馬を走らせるのみだ。

長距離索敵陣形で巨人の襲撃を避けながら拠点構築予定の街に辿り着いたまでは良かったのだが、その目的地である街に想像以上の数の巨人がいたのが問題だった。

真ん中の広場だけでも10体という、とんでもない数。

仕方なく精鋭兵たちが巨人を街の外側へと惹きつけ、その隙に俺たち特別作戦班が中心の広場に行く予定だったのだが……

「奇行種……！」

中央に向かう途中、精鋭兵の誘導に釣られなかった奇行種と至近距離で鉢合わせてしまったのだ。

入り組んだ街の中では、建物のせいで遠距離から発見できないってことか。立体機動戦には理想的な地形だが、索敵という点から見れば最悪の場所でもあるな。

まさか十字路を駆け抜けた瞬間、右手側の街路から奇行種が飛び出してくるとは思わなかったぞ。

と、そこで後ろからパシユンという独特の音が聞こえてくる。

立体機動装置の、ワイヤー射出音だ。

思わず振り返ってみれば、班員となったフォルカー、テオバルト、ラウラの3人が、奇

行種へと攻撃を仕掛けるところだった。

奇行種に追いかけられ始めた直後にいなくなっただけと思ったら、別ルートに逸れて立体機動に移っていたのか。

「フォルカーとテオバルトは足を！ 私があなじを狙うわ！」

「了解」

ラウラの指示に2人が頷き、それぞれ巨人の太ももに向かってワイヤーを射出。アンカーを突き刺すと、見事に足の腱を削ぎ落とした。

疾走していた奇行種が頭から地面に突っ込み、動かなくなる。

ラウラはその隙を逃さず、奇行種の真上から急降下してうなじを斬りとばす。

奇行種の脅威が消えて、アリーセと2人揃って安堵の息を吐いた。

しかし、その直後にリヴァイ兵長の怒声が飛ぶ。

「気を抜くな！ 前から来るぞ！」

慌てて視線を前に戻せば、右の通路から2体。左の通路からは3体の巨人がこちらに迫って来ている。しかも、全部が12メートルオーバーだ。

オイオイオイ、つぎけんな。

まだだいたい巨人が残ってるじゃねーか……！

「お前ら、立体機動に移れ。5人がかりで右の2体を処理しろ。俺は左の3体をやる」

俺が返事をするよりも早く、リヴアイ兵長が左へ向かって飛んでいく。

「ダイナさん！ 私たちも！」

「私とアリーセで手前の13メートル級を相手します！ ラウラたちは奥の11メートル級を……」

「お願いします、と俺が言い切るより早く。」

ラウラが今装備していた刃を捨て、甲高い金属音を響かせてブレードを換装する。「貴女の指図を受ける気はありません。引っ込んでいてください」

「こんな時になに言ってるんだこの子!？」

驚愕する俺を無視して、ラウラはアリーセにだけ視線を向ける。

「見ていてください、アリーセ姉様。そんな人の皮を被った巨人より、私の方が姉様の隣に立つに相応しいと証明いたします！」

言うが早い、ラウラは1人で奥の11メートル級へと突っ込んでいってしまう。

俺とアリーセはもちろん、残されたフォルカーとテオバルトすらも、ラウラの独断専行に戸惑って動けない。

そんな俺たち4人に、12メートル級が襲いかかってきた。

第15話 破壊の予兆★

俺が制止の声を言い切るより早く、ラウラが単独で1メートル級へと突っ込んでいつてしまった、その直後。

取り残された12メートル級は、ラウラでなく俺たちの方へと大口を開けて突っ込んできた。

「ダイナさんー！」

「分かってますー！」

アリーセの声に、俺も短く応じて立体機動のトリガーを引く。

今まさに街路を走っているから、立体物には事欠かない。両側にズラリと建物が並んだから、アンカーの刺す位置を選ぶ必要すらねえな。

ワイヤーを射出すると同時に鞍を蹴り、馬上から空中へと身を踊らせた。俺とアリーセの後を追って12メートル級も手を伸ばしてくるが、その指先をまとめて切り落としてやる。

「……ふっ！」

12メートル級の指を切り落とした勢いをそのままに、俺はガスを噴出させて加速。

独楽のように回転しながら巨人の腕を切り刻みながら進み、一気に背後まで回り込む。これで奴の右腕は使えない。ピクリとも動かせないほど、腕の筋肉はズタズタになったはずだ。巨人の再生力は個体差があるが、ズタズタにされた右腕を再生するには例え『女型』でも10秒は要する。

それだけあれば、トドメを刺すのに十分以上。

残るは、うなじのみ！

無茶な使い方をしたせいで刃こぼれしたブレードを捨て、両腕を交差させて鞘のストックと持ち手を接続。火花を散らしながら、新しい刃を引き抜く。

しかし刃の換装をしている間に、12メートル級は無事な方の左腕で俺を掴もうとしてくるが、俺はそれを無視。強引にうなじへ向けてワイヤーを射出した。

何故なら最高の相棒が、絶対にカバーしてくれると分かっていたから。

「らあああああッ！」

俺に集中するあまりに、意識外にしてしまっていたアリーセに巨人は左腕を切り落とされた。さらに彼女はブレードの換装レバーを引きながら腕を振るい、刃を投擲して12メートル級の両目を潰す。

両目、両腕の完全破壊。そして俺のアンカーは、既に奴のうなじに突き刺さっている状態だ。

「殺った」

確信を込めてそう呟き、俺は体を回転させながら飛翔して両手に握る刃を一閃。V字にうなじの肉を削ぎ落とし、近くの建物へと着地した。

ほぼ同じタイミングで隣に着地したアリーセと、無言でハイタッチを交わす。

そして顔にこびりついた返り血を袖で拭いながら、すぐにラウラの方を確認。

「え、なにあの子強い」

加勢しようとしたが、その必要が全くなかったとラウラの方を見た瞬間に分かった。既に11メートル級は急所を削ぎ落とされて、ただの肉塊となっている。

見事なくらいの圧勝。

苦戦するどころか、俺とアリーセの戦いを観戦するほどの余裕すらあったらしい。

俺たちがいる建物よりも高い位置から観戦していたラウラは、パチパチと気の無い拍手を俺に向かって送ってきた。

「巨人の割にはやるじゃないですか。ま、アリーセ姉様がいなかったら勝てそうになったんですけど。それに比べて、姉様は見事なフォローでしたわ！ 次の戦闘では、是非ともその巨人ではなく私とペアになって下さいな」

「……あの」

「お願いですから私の方に持ってこないでください」

弱々しい声で話しかけてくる相棒から、俺はそつと目を逸らす。

そんな捨てられた子犬みたいな目で助けを請われても、俺にはどうする事もできない。

だつてラウラが俺を見る時は目からハイライトが消えるのに、アリーセを見る時はハートマークが浮かんでるんだぜ？

もう触れるな危険つて文字しか見えねえよ。

ここで「いや、ペアとか以前にお前が一人で勝手に突っ込んだじゃん？」とか言ってみろよ。あの子、間違いなく俺に向かって刃を向けるぞ。

もうこれ以上は関わりたくないの、俺は思考を切り替える。

何はともあれ、これで補給拠点の建設地点となる広場の周囲からは巨人の姿が消えた。

今なら邪魔される事なく、今回の壁外調査の目的が達成できるだろう。

剣を鞘に納め、指笛を鳴らして自分の馬を呼ぶ。

幸い、俺の馬はすぐに駆けつけてくれた。

建物から飛び降りて馬に乗り、手綱を握ると同時に横腹を軽く蹴つてやる。

ここから広場まで、直線で数百メートルほどだ。

調査兵団ご自慢のサラブレッドなら、数分も掛からずに到着できるだろう。

懐からナイフを取り出し、巨人化する準備を整えたその時。
パンツ！ と。

乾いた発砲音と共に、空に煙弾が打ち上げられた。

その色は黄色。

意味は、作戦遂行が不可能。

つまりは撤退。

な、何で……!?!

慌てて手綱を引いて馬を止め、俺は唾然としながら空を見上げる。

後ほんの数メートルだ。

移動時間と硬質化による建設時間を足して考えても、10分も必要ない。数分で補給拠点を作れる。

なのに、ここで撤退とか意味が分からねえ。

このまま目的も達成出来ずに引き返すのなら、死んだ兵士の命はどうなる？

俺を建設地点へと進めるために、少なくとも数の調査兵が死んだはずなのに。それを無駄にするほどの理由なんてあるのか？

くそが、どうなったんだよ。

舌打ちしながら再び立体機動へと移り、俺は指示を仰ぐためにリヴァイ兵長の許へ。

兵長の下にはもう既にフォルカー、テオバルト、ラウラ、アリーセが揃っていた。

4人とも俺と同じ考えのようで、分かりやすく不服の表情を浮かべている。

「兵長、どういう事ですか!? やつと全ての準備が整って、後は拠点を建てるだけなのに撤退なんて！ 自分は納得できません！ 死んだ仲間の命が、無駄になります！」

フォルカーのその叫びは、俺たち全員に共通する気持ちだった。

しかしリヴァイ兵長はそれを無視して、俺たちに背を向ける。

「お前ら、さっさと馬に乗れ。撤退するぞ！」

「兵長！」

「ピーピー喚くな！ エルヴィンが何の理由もなく、撤退の指示を出すとお前たちは本当に思うのか？ 奴は俺たちよりずっと多くのことを見ている。俺たちは黙って命令に従うのみだ」

そう言われてしまえば、もう従うしかねえ。

未練がましく目的地である広場を振り返りながら、俺は兵長たちと共にエルヴィン団長の許へと向かう。

……ちくしょうが。

判断を間違つてペトラさんたちを失い、女型に負けた時のエレンも、こんな気持ちだったのだろうか。

自分のために誰かが死んだという事実は、ひたすらに罪悪感を掻き立ててくる。後もう少し早く、あの2体の巨人を討伐していれば。

もしくはその後に無駄なやり取りなどせず、ノンストップで広場へと向かっていれば。

そんな後悔ばかり溢れてくる。

もしかしたら調査兵団とは敵対関係になるかもしれないのに、『原作』を知ってるから、どうしても感情移入しちゃうな。

ファンとしてはやっぱり、彼らに大手を振って帰還して欲しいと思ってしまう。

「ダイナさん、あまり気を落とさないでください。次こそは成功させましょう。今は後悔するより、目標達成寸前でありながら団長に撤退を決断させた『何か』に注意を向けるべきです」

「アリーセ姉様の言う通りですわ。知性のない巨人が、いくら悪い頭を動かしたところで意味がありません。黙って団長の指示に従いなさいな」

右にアリーセ左にラウラと、横に馬を並走させた2人から言葉が飛んでくる。

ラウラはもちろんのこと、調査兵団に所属していた経験のあるアリーセも切り替えが早い。

彼女たちからすれば、壁外調査など成功する方が珍しいのだろう。一度や二度の失敗

でうじうじしているようでは、調査兵団は務まらないということか。

後、ラウラよ。

うじうじするなどと発破をかけてくれるのは嬉しいんだが、その言い方は地味に傷つくからやめてくれ。冗談交じりならともかく、光の消えた瞳に加えてガチトーンで言われると辛い。

これでも、頭悪くて感情的なのは自覚してんだよ。

「励まし合う美女と美少女……良いな……」

「テオバルト……まさかお前、そんな趣味が……。普通はチラチラと見える白い首筋に反応するだろ」

オイ、後ろの男2人。

背筋が粟立つような会話はやめろ。小声で話してるつもりだろうが、がつつり聞こえてるぞ。

男に肌を見られてると思うと、ゾツとするな。フォルカーにはあまり近寄らないようにしよう。

テオバルトの方は……その、何だ。ちよつと俺には理解できないご趣味をお持ちのようだが。

ちよつと嫌な会話を聞いてしまったが、おかげで落ち込んでいた気持ちがいくらか軽

なくなった。

死んだ兵士たちの命を軽く見るのは良くないが、いつまでも引きずられるのは良くないのもまた事実。

今は次の事態に備えるか。

そう気を引き締めたのと、俺たちがエルヴィン団長と合流したのはほとんど同時だった。

リヴァイ兵長がエルヴィン団長のすぐ隣で馬を止め、俺たちは少し離れた位置で手綱を引いて馬を止める。

「目的地が目の前つてところで呼び戻したんだ。部下の死を無駄にするくらい理由はあるんだろな？」

冷徹な態度を取っていても、兵長が本心では誰よりも部下を想っているのが本当によく分かるな。

だから、兵長の部下たちは死地に飛び込めるんだろう。

自分が死んだとしても、兵長が次に繋げてくれると確信しているから。

そんな感慨を抱きながら会話の成り行きを見守っていた俺は、次のエルヴィン団長の言葉で頭を殴られたかのような衝撃を受けることになった。

「巨人が一斉に北上を始めた。5年前と同じ……壁が、破られたかもしれない」

『原作』が、始まった。



最高速度で馬を走らせながら、俺は必死で思考を巡らせる。

俺がもたらした『原作』との乖離は、トロスト区決戦の時にはまだ影響しないはずだ。いや、待てよ。

アニがいないって事は、ガスの補給所を奪還する作戦が失敗するかもしれないねえ。

リフトに乗ってガスの補給所に入り込んだ小型の巨人7体をおびき寄せ、ギリギリまで引きつけてから散弾による一斉射撃で視界を奪い、天井に隠れていた7人が一斉に攻撃を仕掛けるってシーンだ。

あの時、確かサシャとコニーが巨人を仕留めるのに失敗する。

そのフォローをミカサとアニがするんだが、アニがいないって事は……

「ダイナ、ボサツとするな！」

兵長に怒鳴られ、俺は思考の渦から帰還した。

慌てて周囲を見渡す。

俺の目の前に兵長がおり、兵長の両隣にテオバルトとフォルカー。俺の両隣にアリー

セトラウラという形だ。

そして真後ろには、

「オオオオオオッ！」

大地が震え、地鳴りのような足音が響く。

15メートル級。

四足歩行で追いかけてくるソイツは、運が悪いことに巨人の中でも足が速い方らしい。調査兵団の馬でも、なかなか引き離すことが出来ていない。それどころか、少しずつ距離が縮まってやがる。

チツ、このクソ忙しい時に……！

再び『原作』を思い返す。

調査兵団がトロスト区へと辿り着くのは、エレンが岩で穴を塞いだ直後だ。

力を使い果たしたエレンが巨人に食われそうになる直前で、リヴァイ兵長が助けに入る。

恐らく原作でも、調査兵団は全速力でトロスト区へと帰還しただろう。

つまり俺が下手なことをして少しでも到着が遅れてしまえば、エレンが死ぬ。それもかなりの高確率で。

「迎え撃つ余裕がない……！」

俺の気持ちを、前を走るテオバルトの眩きが代弁してくれた。

場所は平地で、しかもこの高速移動中だ。

一瞬で立体機動に移り、一瞬で巨人を仕留めて戻るなんて不可能に近い。

いや、巨人を討伐する事は出来るだろう。

しかしその討伐した兵士を、回収するほどの時間がねえ。

既に長距離索敵陣形は最高速度でトロスト区へと帰還中だ。巨人と交戦なんてすれば、確実に置いていかれる。

ならどうするか？

最善手は、誰か1人を見殺しにする事だ。

討伐に成功するにしろ失敗するにしろ、誰かが巨人の相手をすれば、残りは陣形に置いていかれる事なく帰還できるだろう。

……じゃあ、その1人は誰だ？

まず間違いなく、俺は選ばれない。

俺の持つ巨人の力と情報は、調査兵団にとっては絶対に失えないものだ。捨て駒に出来るわけがない。

アリーセもない。

ここでアリーセを見殺しにすれば、俺が調査兵団の敵に回ってしまうから。

そうなると残るはラウラか、フォルカーか、テオバルトか、もしくはリヴァイ兵長か。「後ろのしつけえ奴は俺が相手する。お前らはこのまま馬で駆ける！」

兵長が信じたのは、自分の力だった。

確かにリヴァイ兵長なら後ろの15メートル級を倒し、陣形に合流出来る可能性が最も高いだろう。

死人を減らすという観点では、間違いない最善手。

しかし俺は、反射的に叫んでいた。

「ダメです！ 本当に壁が破られたのなら、兵長こそ一刻も早く帰還すべきです！ 兵長の力を最も欲しているのは、今まさに巨人の襲撃を受けている駐屯兵团や憲兵团でしょう!？」

というのは方便だ。

俺の本心は、リヴァイ兵長がエレンを助けるといふ未来を守りたいというものなのだから。

流星に、主人公であり始祖の巨人を持つエレンに死なれたら困る。

ただでさえ木っ端微塵になっている原作が、さらに砕け散ってしまう。

そんな事になったら、原作知識による未来視が完全に意味なくなっちゃうだろうが。

「じゃあどうする？ お前に、これ以上の策があるのか？」

待ったをかけた俺に、振り返ったりリヴァイ兵長が冷ややかな視線と共に問いかけてくる。

考えろ。

このまま6人全員が、誰も脱落せずに15メートル級の脅威から逃れる方法を。

「兵長、私に巨人化の許可を下さい。私なら巨人を撃破した後、遅れずに合流出来ます。

なんなら、馬以上の速度を活かして少数の精鋭兵をいち早く壁まで運べます！」

「却下だ。まだ俺たちはお前を完全に信用できた訳じゃない。お前が鎧や超大型の仲間

だった場合の損失が大きすぎる」

やっぱり無理だよな。

人は巨人になれる。

その事実を知ったエルヴィン団長やハンジさんは、既に『鎧』や『超大型』が俺と同

じ巨人化能力者だと予想していた。

調査兵団から見れば、俺は壁を破壊した奴らと同じ力を持っている事になる。

さらに警戒されるのは当たり前だ。

本当に俺が敵だった場合、精鋭兵を預けて先に行かせるなんて出来るわけがない。そ

んな事をしたら、俺に精鋭兵に皆殺しにされて大損失になるうえ、鎧や超大型と同格の

「知性巨人」をさらに壁の中に送り込む事になるのだから。

ならば。

「……それならもう一つの策を」

緊張でカラカラになった口で、俺はリヴァイ兵長に必死に即興で考えた作戦を話す。

俺が作戦を伝え終えた後、リヴァイ兵長はしばらく無言だったが、やがて口を開いた。「本当にそんな事が出来るのか？ ハンジの前でやった巨人化能力の実演では見ていないが」

「リヴァイ兵長なら、自分の最後の切り札の全てを敵対する事になるかもしれない相手に晒しますか？」

俺がそう返すと、リヴァイは舌打ちして。

「テオバルト、全速力で近くを走ってるはずの荷馬車護衛班から荷馬車を借りてこい。後ろのデケエのが、俺たちに追いつくまであまり時間がねえ」

「了解ですー！」

兵長に指示を与えられたテオバルトが、威勢のいい返事を残して班から離脱していく。

アイツが荷馬車を借りて戻ってくるまで、数分つてところか。

ギリギリ追いつかれる前に戻ってきてくれそうだ。

この能力は馬の上からでも出来なくはないが、バランスを崩して転倒する可能性が高

いからな。

荷馬車の上でもバランスを崩す可能性はあまり変わらない気もするが、馬上より多少はマシだろう。

「ダイナ、準備をしておけ。一度だけ巨人化を許可してやる」

「はい！」

敢えて余裕のある笑みを浮かべ、俺は懐からナイフを取り出す。

さて、いっちょやったりますかあ！

右の拳を握りしめながら、俺はそつとナイフの刃を肌当てた。

第16話 順調の代償★

俺の想像よりかなり早く、テオバルトが荷馬車に乗って戻ってきた。

荷馬車を引く馬の上に乗ってること、さつきまで乗ってた自分の馬は向こうの荷馬車護衛班に預けてきたのか？

ま、今はそんなことを気にしてる場合じゃねーな。

自分から言い出した作戦なんだ、絶対に成功させる。そのためにも集中しろよ、俺。

「兵長、荷馬車を借りてきました！」

「すぐにダイナの後ろへ回れ。巨人はもう真後ろだ、モタモタするな」

「はっ！」

テオバルトが手綱を引き、荷馬車を並走する俺たちの後ろへと移動する。ちようど俺の真後ろに当たる位置だ。

よし、準備は整った。

俺は鞍から腰を浮かし、握っていた手綱を右側を走っていたアリーセへと渡す。

「アリーセ、私の馬を頼みます」

「任せてください。それと、お気をつけて。無理はしちやダメですよ」

「勿論です。私も死にたくありませんから」

心配そうな表情で気遣ってくれるアリーセを安心させるために俺は微笑を作り、荷馬車へと飛び移る。

……近い。

四足歩行で追ってくる15メートル級の顔が、もうすぐそこにあつた。少し手を伸ばせば、手首から先を食い千切られそうな距離。

俺が食いたくて堪らないとばかりに、巨人は涎を垂らしながらガチガチと歯を鳴らす。

「そんなに俺が食いたいなら、くれてやるよ」

小さく呟き、護身用としていつも懐に入れていたナイフで、俺は右手の平を浅く切り裂いた。僅かな痛みと共に、少量の血が白い肌から流れ出していく。

その流れ出した鮮血を握りしめるように拳を作り、俺は大きく右腕を振りかぶった。受け取れ、特大サービスだ。

閃光が瞬いて、『道』から傷口を通して巨人の肉体が送られてくる。骨が現れ、肉が纏わりつき、皮膚がそれらを覆う。

骨肉が渦を巻くようにして現れたのは、俺がア二から継承した女型の巨人。その右腕だ。

熟達した巨人化能力者ならば行うことができる、特定部位のみの巨人化。

荷馬車の上で大きく踏み込み、後ろへと引いていた右の拳を、15メートル級めがけて全力で放つ。硬質化によって青く輝く拳が、蒼白の残光を残して巨人の顔面に突き刺さった。

「ユミルの腕——ッ！」

無言で殴りつけるのも芸がないので、俺は気合いの雄叫びをあげる代わりに今この場で適当に決めた技名っぽいのを叫び、右の拳を振り抜く。

硬質化した拳は15メートル級の顔面を容易く粉碎し、あまりの威力に巨人の首から上が千切れて吹き飛んでいった。

うなじを破壊してないので討伐こそ出来ていないが、今の俺たちの目的はトロスト区への帰還。要するにこの巨人から逃げることにさえ出来ればいいので、トドメを刺す必要はない。

重症を与えて走行不可能にし、撃退するだけで逃げるための時間稼ぎは完了だ。

15メートル級の撃退を確認した俺はすぐに巨人化能力を解除し、女型の右腕から俺本体の右腕を引き抜く。

役目を終えた女型の右腕は、首から上を失って倒れ込んだ15メートル級の体と一緒に地平線へと消えていった。

ミツシヨンコンプリート、任務達成だな。

大きく息を吐いて、俺はアリーセへと預けていた自分の馬へと再び跨る。

「……よくやった。お前のおかげで、俺たちは誰もハズレくじを引かずに済んだ」

アリーセから手綱を受け取っていると、リヴアイ兵長が振り返ることなくそんな言葉をかけてくれた。

作中屈指の人気キャラから褒められてニヤケそうになる顔を必死で無表情に保ちながら、俺は端的に謙遜の言葉を返す。

これで少しでも調査兵団からの信頼度が高くなれば良いんだが。

と、そんな事を考えた次の瞬間。

「ところで、お前は巨人の腕で殴りつける時に何かを叫んでいたが、あれは一部分のみを巨人化するために必要なことなのか？」

馬から落ちそうになった。

顔が真っ赤になっていくのが、自分でも嫌という程にはつきりと分かる。

マジか、聞こえてたのか。馬での走行中は風のせいで声が伝わりにくいから、聞こえないと思ってたんだよ。

これはやばい。恥ずかすぎるわ。

今すぐ穴掘って入って蹲りたい気分だ。

アリーセやラウラは顔を赤くした俺を見て察してくれたが、リヴァイ兵長は前を向いているので、俺が急に無言になったと思っただけらしい。

容赦なく畳み掛けてくる。

「オイ、何とか言え。それともまさか、俺たちには話したくない事情でもあるのか？ 急に黙り込んだってことは、何か重大な情報に関係しているのか？」

もう本当にやめてください。

壁が破られて一大事という時にふざけてしまい、本当に申し訳ありませんでした。

土下座でも何でもして謝罪するから、これ以上俺の心を抉るのは勘弁してくれ。ライフはとつくにゼロだ。

「あの、兵長。その辺りで……」

見兼ねたアリーセがフォローを入れてくれてるが、それをラウラが台無しにする。

口の両端を釣り上げて三日月を形作った彼女は、嘲笑と共に言葉を発した。

「兵長、この巨人さんは『そういう時期』らしいです。顔真っ赤にして俯いて……」

これだけで十分に泣きそうになったが、何よりも辛かったのはこの後の兵長のセリフだった。

兵長は呆れ混じりの声音で。

「お前……いい歳こいて何バカなことしてやがる」

もしアリーセが支えてくれなければ、俺は間違ひなく落馬してたとと思う。
もう2度とやるまい。



途中でふざけたやり取りをしてしまったが、おかげで緊張感がいい感じにほぐれてくれたと思う。皆の手綱を握る力が、幾分か和らいだのが見て分かる。

巨人を前に油断するなど論外だが、気を張り詰めすぎるのも立体機動の失敗に繋がってしまふしな。

緊張で指先が震えて操作ミス、そのまま高速で壁に激突してミンチになりました、なんて笑い話にもならねえ。

リラックス出来たのなら、恥を描いた甲斐はあっただろ。

……まあ、そんな意図があつてやった訳じゃねえんだが。

余談だが、兵長は『皆』の範囲に含まれない。この人はそんなの関係なく、常にフルスベックだ。

流石は人類最強、恐るべし。

ともあれ調査兵団の長距離索敵陣形はトロスト区が見える位置にまで進み、俺たち特

別作戦班6人も欠員なしで全員帰還だ。

……だが、むしろ本番はここからと言える。

俺たちの視界に映るのは、超大型巨人によって大穴を開けられてしまったウォールローゼの外門。

トロスト区の前には数えるのも嫌になるほど巨人が群がっていて、我先にと穴へと向かっていく。

カルラ・イーターに憑依することでこの世界にやって来た俺が最初に見た、あの地獄のような景色が再現されていた。

しかし、いつまでも愕然としているヒマはない。

こうしている今もまた、巨人が2体ほど穴の中へと入ってしまったているのだから。

誰もが無意識のうちに、超硬質ブレードの柄を握りしめた。その、瞬間。

耳をつんざくような轟音と共に、馬が転倒してしまうのではないかと思うほど大地が震える。大穴の所で巻き上がった粉塵が晴れた時には、大穴が塞がっていた。

……エレンか！

調査兵団が帰還したタイミングと、ほぼ同時。

『原作』の通りの展開に、俺はひとまず安堵の溜息をつく。

しかし、俺が見ているのは漫画やアニメの世界ではなく現実だ。『原作』ならばエレン

が穴を塞いだ時点で場面が暗転して、次の話へと時間が飛ぶが、現実ではそんなカットはない。

穴が塞がったのなら、次は一刻も早くトロスト区内に入り込んでしまった巨人を掃討する必要があるだろう。

「お前ら、俺に続け！　中で何があつたのか確認する！」

「はっ！」

リヴァイ兵長から指示が飛び、俺たちは立体機動へと移行した。

ウォールローゼへとアンカーを突き刺し、ワイヤーに引っ張られながら飛翔。ガスを吹かして一気に上昇し、50メートルの壁を乗り越える。

すぐさま壁の内側を覗き込めば、今まさに壁を塞いだばかりのエレンの姿が見えた。近くにはミカサやアルミンの姿もあるな。

だが、原作通りならば油断はできない。

穴を塞いだ直後のエレンたちは、巨人に襲われるはずだ。

鞘からブレードを引き抜いて、俺が壁から飛び降りようとするよりも早く。

超硬質ブレードを逆手に握ったリヴァイ兵長が俺の横を通り抜け、相変わらず意味のわからない速度でエレンの下へと向かっていった。

そして俺の予測通りにエレンを襲おうとしていた巨人のうなじを、目で捉えることす

ら困難な速度で削ぎ落とす。

なんか、兵長の戦いを見れば見るほどに勝てる気がしなくなってくる。

マジで兵長とは敵対したくねーよ。

本気になったあの人と殺し合うくらいなら、獣の巨人と殴り合った方がまだマシだ。

『獣』は確かに強えが、近づけばあの投石攻撃は使えねえし。素の殴り合いなら、俺にも十分に勝ち目があるはずだ。

仮にも戦士長と呼ばれるジークが弱いとは思わないが、俺は『獣』と相性がいい。

——つと、リヴァイ兵長の戦闘能力の高さにビビってる場合じゃねえ。

ひとまず、エレンは兵長が保護してくれた。

なら俺がやるべきことは、トロスト区内の巨人を1体でも多く討伐することだろう。

この辺で活躍しとけば、調査兵团以外に俺の正体がバレた時にも有利になる可能性もあるはずだ。

必死で壁内人類のために頑張る感を出しておいて、損はない。

あと純粋に、少しでも多くの人々が助かってくれた方が良いしな。特に普通の市民の人たちは。

「アリーセ、外門付近の巨人から討伐していきましょう」

「了解です！ けど、その前にまずは補給です。壁外調査でガスも刃も随分と消費して

しまいましたから」

そう言われたので、俺はガス管をコンコンと軽く叩いてみる。おおう、本当に補給がいりそうだな。半分も残ってねえ。

あのまま勢いで突っ込んでたらヤバかった。アリーセに感謝だ。

手早く鞆に新しい刃を補充し、フォルカーが持つてきてくれた補給機でガスを補給する。

その間に軽く立体機動装置を点検して、不備がないかを確認。

よし、問題なしと。

補給と点検を終えて顔を上げれば、同じく準備を整えたアリーセたち特別作戦班の4人が俺を見ていた。

……訂正。

ラウラを除く特別作戦班の3人が、俺を見ていた。

彼女は俺など全く見ておらず、相変わらず隣のアリーセをガン見している。こんな時でもブレねーな、ホント。

アリーセを除けばまだ付き合いの浅い面々だが、壁外調査を通じてある程度の信頼関係を築けた仲間たちに向かって、俺は口を開いた。

「これより、特別作戦班はトロスト区内に侵入した巨人の掃討作戦を開始します！」

俺がそう言うと、アリーセ、テオバルト、フォルカーが超硬質ブレードを引き抜いた。ラウラは俺が仕切るのが気に入らないのか不満顔だが。

しかし、アリーセが俺についてきてくれる限りはラウラもついてくるだろう。

一応、彼女も兵士だ。

いくら俺のことが気に食わなくても、この緊急時に私情を挟むような真似はしな……いと……良いなあ。

ひとまずラウラのことは置いておき、俺も超硬質ブレードを引き抜く。

そして剣先を壁の下を歩く巨人に突きつけ、俺は号令をかけた。

「総員、戦闘開始ッ！」

「了解ッ！」

勢いよく地面を蹴って壁から飛び降り、俺は空中に身を踊らせる。その後にはアリーセ、フォルカー、テオバルト、ラウラの順にトロスト区へと飛び込んだ。

上下が反転する世界で俺はぐるりと見渡し、素早く周囲の地形を確認。

付近にいる巨人の位置と、地形を把握していく。

そしてアンカーを突き刺す場所を決めて、トリガーを引いた。

螺旋を描きながらワイヤーが飛び、体の落下が止まる。腹筋の力だけで上体を起こして姿勢制御し、ガスを吹かして加速。

「右方に12メートル級と14メートル級！」

後ろのフォルカーが、巨人発見の報告を叫んだ。

すぐさまワイヤーを射出し、方向転換。フォルカーが発見した12メートル級の方に狙いを定める。

視線だけで、右側にいるアリーセに合図。彼女はすぐに俺の意図を理解して頷くと、ガスを吹かして一気に加速した。

2体の巨人が人間の接近に気づくよりも早く、アリーセの斬撃が放たれる。

12メートル級の右腕を斬り落とすと、彼女はそのままの勢いで急降下。14メートル級の足首を切り刻む。

足の腱を削がれた14メートル級が倒れ込んだところで、俺が飛び込んだ。転倒した14メートル級のうなじを削ぎ落とし、ついでに12メートル級の右足に斬撃を放つ。

今度は12メートル級が転倒する。

「テオバルト！」

「おう！」

標的が転倒したのを見たフォルカーとテオバルトは両手をつなぐと、振り子のようにスイング。勢いをつけて、テオバルトがフォルカーを投げ飛ばした。

振り子運動で加速したフォルカーは一気に転倒した12メートル級へと接近し、見事

にうなじを削ぎ落とす。

地面スレスレの超低空で立体機動していた俺は、建物の屋根にアンカーを突き刺して上昇しながら、ファインプレーを見せた男二人組に向かって喝采を送る。

刹那の間に、大型を2体討伐。

上々の滑り出しに、連携した俺たち4人の顔が綻んだ。

その隙が、取り返しつかない失敗となってしまう。

あまりにも上手く行き過ぎていて、俺はきつと忘れてしまっていたんだろう。

この世界が、どれほど残酷なのかを。

「姉様、下です!!」

少し遠くから観戦していたラウラが悲鳴をあげた。

真下。

4メートル級の小型の巨人が大口を開けて、アリーセに向かって飛びかかる。

俺とラウラが最大出力でガスを吹かして加速するが、僅かに間に合わない。

ふざけんな。

守るって誓ったんだ。

こんな簡単に、こんなアツサリと、一番大切な人を奪われてなるものか。

超硬質ブレードを逆手に持ち、その剣先を自分に向ける。そして刃で自傷して巨人化

しようとした、その一瞬前。

「おおおおおおおつ！」

テオバルトが絶叫のような雄叫びを上げながら、アリーセへと体当たりをぶちかました。華奢なアリーセの体が吹き飛び、彼女が元いた場所にはテオバルトが収まる。

つまり、巨人の口の中——！

バチンツ!! と。

巨人の口が閉じられる音と共に、赤い花が咲き乱れる。

呆然とする俺の目の前を切断されたテオバルトの右腕が、真紅の線を引きながら、舞った。

第17話 2つのリヴァイ班

人の死。

それは、この世界に来てからもう数え切れないくらいに見てきたものだ。

壁を破られた直後のシガンシナ区で。鎧によつて内門まで破られたウォールマリヤ領地で。4年前の口減らしで。つい先ほどの壁外調査で。顔を、名前も知らない人たちが、虫のようにあっさり死んで行く姿を見た。

肉が裂ける音。骨が砕ける音。断末魔。飛び散る血の赤。撒き散らされる臓物。

それらを見て、死にたくないと思つた。

生きたいと、生き延びたいと。

アリーセと出会つた後は、この世界で得た最高の友人を守りたいという気持ちも芽生えた。

けれども。

これまで見てきた『死』は、あくまで顔や名前も知らない人たちのものだった。

今、初めて。

初対面ではなく、名前も知り、会話もした相手が、目の前で死ぬ。その衝撃は、俺の

想像以上のものだった。

アリーセを突き飛ばし、身代わりとなったテオバルト。

そんな彼に跳躍した4メートル級が食らいつく。

ちようど左腕の付け根から腰にかけての左半身が巨人の口の中に収まったかと思うと、次の瞬間にはバチンツという音とともに巨人の口が閉じた。

紅の華が視界一杯に咲き乱れ、切断されたテオバルトの左腕が赤い線を引いてあらゆる方向へと消えていく。体の半分を食われたテオバルトは血と臓物をぶち撒けながら家屋の屋根の上に落下して、ピクリとも動かない。

一目で分かる。致命傷だ。

その無残な姿を見てしまえば、いっそ即死の方が良かったのではと思ってしまう。

それ程までに、半身を食い破られたテオバルトの姿は痛々しい。

テオバルトとの付き合いは、アリーセほど長いわけではない。初めて顔を合わせたのも数日前だ。親友というほど仲が良かったわけでもねえ。

けど、調査兵の大部分が俺を怪物として扱う中で、普通に話しかけてきてくれる数少ない者の1人だった。

それなりに会話もしたし、つまらない冗談で笑いあったこともある。一緒に飯だって食った。協力して巨人を倒した時は、ハイタッチだって交わした。

そして何より、俺の最も大切な人をその身を挺して守ってくれた人物でもある。

アイツは紛れもなく、一緒に死線を潜った『仲間』だった。

テオバルトを食った4メートル級が、何事もなかったかのように背を向けて去っていく。

ミシリツ……と。

超硬質ブレードを握る俺の両手に力が入る。

「……オイ」

無垢の巨人に、人の言葉は通じない。

そんな事は分かっているが、俺は無意識のうちに4メートル級の背中に言葉をかけていた。

「人の仲間に手エ出しといて、生きて帰れると思ってるのか？」

悪いが、俺は日本人だ。

この世界で生きる他の兵士とは違って、達観などしていない。

身近な人間が食われたのに、巨人との戦いはそんなものだど割り切ることなど出来ない。

やられたらやり返す。

きつちりとカタつけてやるぞ、肉袋が。

トリガーを引いて、右の射出口のみからワイヤー発射。

アンカーを4メートル級の右肩に突き刺して、急降下を行う。

渾身の斬撃を4メートル級へと叩き込み、右腕を斬り落とす。と、同時に左の射出口からワイヤーを飛ばし、アンカーを建物の屋根へ。今度は一気に急上昇し、4メートル級の左腕を削ぎ落としながら再び空へと戻る。

完璧なV字の軌道を描いて4メートルの両腕を落とした俺は、斬れ味の落ちた刃を、スナップを利かせて投擲。回転しながら飛んだ2つの刃は、巨人の両目に突き刺さった。

両目を潰されて悲鳴をあげる4メートル級。

その姿を見下ろしながら、俺は鞘の替えの刃を持ち手と接続。火花を散らしながら新しいブレードを引き抜く。

換装を終えた俺は再び急降下し、今度は地を這うような低空飛行で4メートル級の足の間をぐぐり抜けた。その際に、両足の腱を切断する。

これで、四肢は全て封じた。

うつ伏せに倒れた4メートル級の頭へと着地し、その頭頂部をありったけの力で蹴り飛ばす。

巨人も俺を食おうとするが、四肢と視力を失ったダルマ状態では何も出来ずにもがく

のみだ。

仇は取ったぞ、テオバルト。

心の中で呟いて、俺は4メートル級のうなじを削ぎ落として絶命させる。

……ちくしょう、最悪の気分だっつーの。

こんな怒りに任せて復讐しても何の意味もないと、終わった後で分かっちゃうんだから。

ため息をついて返り血を拭い、俺はテオバルトの下へと向かう。

テオバルトは、既に息をしていなかった。

このまま遺体を持って帰る……のは、流石に無理か。

強引に動かしたら、その、なんだ。腹の中身が出ちまって、さらに無残な姿にしてしまおう。

が、何もせずにこのまま放置するのもあんまりだ。

俺は懐から護身用ナイフを取り出すと、テオバルトの兵服についている自由の翼の紋章を切り取る。

要するに、アニメでリヴァイ兵長がやってたのと同じことだな。

切り取ったそれをナイフと一緒に懐へ仕舞い込んだ時、壁の上から信煙弾が打ち上げられた。

意味は、トロスト区内にいる全兵士の撤退。
トロスト区奪還作戦の、終了の合図だった。



撤退命令が出た、その後すぐ。

再びトロスト区へと投入された兵士達によって大多数の巨人は壁際へと誘導され、壁
上固定砲台から放たれた榴弾で死滅。

榴弾から逃れた僅かな巨人も調査兵団によって討伐され、丸一日かけて掃討作戦は終
わりを迎えた。

「そんな訳で、しばらく待機ですか……」

すっかり住み慣れた調査兵団の旧本部で待機命令を出された俺は、机に突っ伏しながら
ら思わずそう呟く。

ぶっちゃけ言おうと、暇でしようがない。

エルヴィン団長、リヴァイ兵長、ハンジさん、ミケ分隊長と、調査兵団の主要メンバ―
たちは皆まとめてエレンのところへ行っている。

今頃は軍法会議でエレンを調査兵団に入れるために、憲兵団らと舌戦を繰り広げてい

るだろう。

リヴァイ兵長にボッコボコに蹴られるエレンに合掌。

まあ、原作の通りに進むことを祈るばかりだ。

「兵士が退屈なのは良いことですよ。平和の証ですから」

と、そこでアリーセが向かいの席に座って話しかけてきた。

いや、まあ、そうかもしれないけどさ。

俺って正式な兵士じゃねーんだよな。

もうガッツリ調査兵団の一員として活動しているような気がしないでもないが。

「相変わらず巨人の監視役を命じられたのは不満ですが、姉様と1つ屋根の下で暮らせ

るので我慢してあげます。感謝なさいな」

いつの間にか現れたラウラが、当たり前のようにアリーセの隣に座る。

この子、もう完全にアリーセのストーカーだな。

仲が良いのは構わねえけど、そのうちアリーセがノイローゼになるかもしれない。

昨日の夜はラウラがベッドに潜り込んできたとかで、半泣きのアリーセが俺の部屋に

突撃してきたし。

おかげで寝不足だ。

「巨人と言え、掃討作戦の折に捕獲に成功したらいいですね。それも2体」

「ああ、確かソニーとビーン……でしたっけ……?」

「げえ……ハンジ分隊長、また捕獲した巨人に名前を……」

確か、ハンジさんにそんな感じの名前が付けられていたはず。

『原作』ではマルコの立体機動装置を使ったアニに殺されることになる2体だが、俺がアニを食った以上、あのイベントはなくなるだろう。

ここからはそのような『原作』との乖離が頻発する。

気を引き締めねーとな。

「ところで、フォルカーはどこに行ったの? 今日はまだ姿を見てないんだけど」

「テオバルトの遺族の所に行きましたよ。私が回収した自由の翼を、遺族に渡してあげたいと言っていました」

俺がラウラの問いかけに答えると、彼女は無言でそっぽを向いた。

テオバルトの件は、ラウラも何か思うところがあつたらしい。

百合百合ヤンデレガールの内心など俺には測りきれないので、あくまで推測だが。アリーセと2人で会話しているだけでガチの殺気を飛ばしてくる少女の心情など読めたまるか。

と、そこで外から馬の嘶きが聞こえてきた。

予定より随分と早いな。もう軍法会議が終わったのか。

席を立てて窓に駆け寄って外の光景を見てみれば、伝説の『旧リヴァイ班』の面々とエレンの姿が見えた。

あ、オルオさんが舌を噛んだ。

『原作』通りの旧リヴァイ班の様子に癒されてると、乱暴に扉を開けて兵長が入ってくる。

「顔合わせだ。さっさと来い」

相変わらず乱暴ですね、兵長。

返事をする暇もなく、俺たち3人は指示に従って兵長の後をついていく。

旧本部の玄関を出て庭に出れば、いきなり原作主人公と目が合った。

やつはろー、駆逐ボーイ。

カルラさんの生死が分からないので、駆逐ボーイになってるかどうかは知らんがな。

何にせよ、俺は絶対にエレンと接触してはいけない。

間違つて『座標』が発動しちまったら、大惨事になること確定だ。下手したら『鎧』と

『超大型』が突っ込んでくるぞ。

もつと最悪なパターンは、いきなり地ならしが発動することだが。

……ちよつと怖くなってきた。

念のために、少し後ずさりしてエレンから距離を取る。

「えつと……兵長、この人たちは？」

いきなり出てきた俺を見て、エレンが遠慮気味に兵長に質問する。

エレンの声が少し震えているのは……まあ、あれだけ蹴られたら仕方ないよな。

エレンに尋ねられた兵長が、視線で「自分で自己紹介しろ」と命令してきた。

え、自己紹介って何を言えればいいんだ？

あなたのお父さんの前妻で、あなたとは血は繋がってないけど一応は親子ですとか？

……エレン大パニック間違いなしだ。このことは伏せとくか。

取り敢えず、必要最低のことだけを言っておこう。

「えーつと。あなたの巨人化能力の指導をすることになりました、ダイナです。一応、あなたと同じ巨人化能力者です」



旧本部にある大広間。

そのど真ん中に置かれた長机に、俺たちは集められていた。

今この場にいるメンバーは俺、アリーセ、ラウラ、フォルカー、リヴアイ兵長、エレン、ペトラさん、オルオさん、グンタさん、エルドさんの10人。もうすぐハンジさん

が来るらしいから、あの人を合わせれば11人か。

無表情を保っている俺だが、内心は狂喜乱舞である。

きつと進撃ファンの同士ならこの気持ちを理解してくれるはずだ。このメンツはやばい。興奮しない方がおかしいだろ。

目の前に、旧リヴァイ班が、勢揃い。

素晴らしいの一言だ。

「俺たちへの待機命令は数日続くが、その間にやっておくべきことがある。エレンの巨人化能力の制御だ」

全員が集まったのを見計らって、リヴァイ兵長がそう切り出した。

兵長はまずエレンを見て、その後には俺の方を見る。

「30日後に新兵を混じえての大規模な壁外遠征を行う。ダイナ、それまでに何としてもそのガキが巨人化能力を制御出来るようにしろ」

「さ、最善を尽くします」

兵長……随分と簡単に言ってくれな。

そりゃあ全力を尽くすが、30日でどこまでマスター出来るかはさっぱり分かんねえぞ。

俺の時はどうだったっけな……。

開拓地で憲兵の目を盗んで毎晩部屋を抜け出し、巨人化能力の修練をした日々を思い出す。

30日って言ったたら、確か硬質化能力も使えるようになってたか。

それなら、エレンも自由に巨人化する程度のことには出来るようになるだろう。上手くいけば、力を温存する方法を獲得出来るかもしれない。

「30日後……随分と急だな」

「しかも新兵を混じえてか。今回の巨人襲撃は、随分と堪えたらうに」

何から教えるか考えていると、リヴァイ兵長の言葉にエルドさんとグンタさんが反応した。

確かに急な話ではある。

前回の壁外調査から1ヶ月とちよつとで、また壁外調査だからな。

俺は『原作知識』があるのだから、エルヴィン団長の考えていることはお見通しなんだが。

今回の壁外調査はエレンと俺をエサにして、壁内に紛れ込んだ他の巨人化能力者を釣り上げることが目的だ。

『原作』ならばアニが釣れるが、さてこの世界ではどうなるかな。

超大型巨人は論外として、鎧の巨人が動くかどうか……。

「あの、ダイナさん」

そこで、エレンに名前を呼ばれた。

顔を上げれば、こちらを食い入るように見てくるエレンと目が合った。

いや、よく目が合うな。

「ダイナさんも巨人化能力者、なんですよ？ 俺、自分が何でこんな力を持つてるのか分からなくて……。力のことも、まだ全然……」

あー、うん。

そら気になるわな。

原作ではそんな事を聞ける相手がいなかったが、この世界でなら俺という存在がいるんだから。

しかしグリシャ食って力を継承したんだよ、とは言えん。

どうしたものか。

少し考えた結果、俺は逃げることにした。

「焦らなくても、あなたは全てを知っているはずですよ。時間が経てば思い出すでしょう」
漫画アニメあるある。

立ち位置の謎なキャラクターが、主人公に意味深なことを言って肝心なことをボカすやつ。

兵長がはつきり答えろみたいな視線で睨んでくるが、俺は目を合わさない。

嘘は言つてねーよ。

グリシャの記憶を継承しているエレンは、俺と同じくらい『全て』を知つてんだから。「巨人化能力については、明日の指導から使い方など色々教えていきます。安心してください。次の壁外調査までには、あなたの疑問は半分以上解消されるでしょうから」俺が微笑を浮かべながらそう言えば、エレンは渋々といった様子で引き下がる。

いや、本当に渋々といった様子で。

誤魔化して悪いけど、感謝して欲しいところもあるんだぞ。

俺がエレンより早くここに来たから最初の大掃除はエレンがする必要が無かったし、ハンジさん主導の強引な巨人化能力の実験を俺が全部肩代わりしたんだから。

気を失うほど限界まで巨人化能力を行使させられる辛さ、分かるか？

フルマラソンよりキツイんだぞ、アレ。

心の中でそんな言い訳をしていると、扉が開いてハンジさんが入ってきた。

「こんばんは、リヴァイ班の皆さん！ お城の住み心地はどうかかな？」

うわ、噂をすれば何とやら。

ドンピシャなタイミングだな。

「明日のエレンとダイナの合同巨人化能力実験についての内容について再確認しに来たんだ」

薄っすらと頬を赤くしているハンジさんを見た瞬間、俺の中の何か警鐘を鳴らす。今すぐここを離れろと。

そして警戒は正しいと、俺は次の瞬間に確信した。

「巨人化実験というのは、具体的に何をやるんですか？」

……やりおった。

原作知識あるから予想はしてたけど、やりおったよ。

オルオさんが慌ててエレンを肘で小突くが、もう遅い。満面の笑みを浮かべたハンジさんが、エレンの両手をガツシリと握りしめた。

それを見たリヴァイ兵長が無言で席を立って部屋から退出し、旧リヴァイ班の面々も後続く。

俺もアリーの手を引いて慌てて部屋から逃げ出し、その後にはラウラとフォルカーも慌てて部屋から飛び出してきた。

頑張れ、エレン。

俺も最初にここに来た時に、ハンジさんに捕まってるから苦しさはよくわかる。

嬉々として巨人実験の内容を語るハンジさんの声が漏れてくる部屋に背を向け、俺は自室のベッドに潜り込んだ。

さて、明日からはエレンに巨人化能力を教えなければいけない。

寝る前にカリキュラムを組んでおくか。

明日の予定を頭の中で立てながら、俺はゆっくりと眠りに落ちた。



ドンドンドン！ と。

乱暴なノックの音で起こされた俺は、眠気まなこを擦って扉を開ける。

「はい、誰でしょうか……？？」

「ダイナさん、大変です！ 被験体の巨人が2体とも、何者かに殺されたようです！」

悲鳴のようなアリーの声に、俺の眠気も一瞬で吹き飛ぶ。

ソニーとビーンが、殺された……？

第18話 狂い始めた歯車

被験体として捕獲した2体の巨人、ソニーとビーンが何者かによつて殺された。その知らせが旧本部に届いた時、真つ先に反応したのはやはりハンジさんだ。

朝日が差し込むまでエレンと2人きりで巨人の話に花を咲かせていたハンジさんは、伝令兵から報告を聞いた瞬間に奇声を発しながら旧本部を飛び出していく。

調査兵団に所属する証である、深緑のマントすら纏っていない。

「ソニーイイイイイッ！ ビーンツツツッ！」

うわあ……。

涙を流しながら馬に乗って去っていくハンジさんの背中を見て、俺は一人でドン引きする。

本当に、あの人がほど巨人を好いている者は壁の中にも外にもいないだろうな。原作知識を持っている俺ですら、無垢の巨人の何が良いのかさっぱり分かんねえのに。

そんな感想を抱きつつも、ひとまず旧本部に集まっていた面々と共に事件の現場へと向かう。

俺が到着した時には、ソニーとビーンがいた場所に既に大勢の兵士が集まっていた。

マントのフードで顔を隠しながら、俺も女性にしては高いダイナの身長を活かして人垣の奥を見る。

恐らくはソニーとビーンを拘束していたであろう器具と、蒸気と共に消えていく巨大な骨。その前で、涙を流して絶叫するハンジさん。

おう、カオス。

漫画でも見たシーンだが、現実で目にとこれまた筆舌に尽くしがたいな。

しかし、混乱しているのはハンジさんだけじゃない。

俺だって内心ではミニパニックだったの。

ソニーとビーンを殺した犯人は、原作ではアニだ。彼女はこの後に行われる立体機動装置のチェックを、トロスト区での戦いの際にマルコから奪った立体機動装置を提出することで審査を免れるんだが……。

当然ながら、この世界ではアニは既に死んでしまっている。

他ならぬ、俺が食ってしまったのだから。

故にこのイベントは起こらないものだと思っていたのだが、残りの2人のどちらかがやったのか？

既に仲間を2人失い、これ以上の失態は絶対に許されないのであろう戦士組。そんな彼らが、無垢の巨人の情報を抹消するためだけにリスクを負うだろうか。

つーか、そもそもマルコの生死はどうなってるんだ？

ア二がいらないなら、生存の可能性も……ねえな。

もしこの世界でもマルコに会話を聞かれてしまったのなら、あの2人が野放しにするわけが無い。

確実に情報を抹消するために、間違はなく口封じするはずだからな。

……まあ、その辺りは自ずと分かるだろう。

マルコの立体機動装置を奪っていなければ、この後に行われる立体機動装置の審査を潜り抜けられないのだから。

犯人が炙り出されたならマルコは生存。原作通り不明のままなら、マルコは死亡したと見ていい。

と、そこでエルヴィン団長が現れた。

あの質問が来るか、と身構えたが団長は見事に俺をスルー。

すぐ近くにいたエレンの両肩を掴むと、その耳元に口を寄せて小声で囁いた。

「君には何が見える？ 敵は何だと思っ？」

最初に読んだ時は何を言ってるのか分からなかったが、後から読み返すとこの質問の意図が分かるんだよな。

恐らくここで、鎧や超大型が人の姿に化けて人類の中に紛れ込んでいる、的々な答えを

返せば知性巨人捕獲作戦の内容を教えてもらえるんだろう。

ドヤ顔で答えるつもりだったんだが、団長は俺には質問してくれなかった。

……まあ、当たり前だわな。

俺に聞いても何の意味もねえんだから。

団長の質問の意図が分からず、未だにはなマークを浮かべているエレン。

そんな我がが原作主人公の肩を叩く……ことは出来ないので、小声で名前を呼ぶ。

「エレン、そろそろ戻りましょう。今はこの後に行われる、巨人化能力の実験の方に集中してください」

「は、はいー」

よし、いい返事だ。

俺はエレンと共に来た道を引き返し、旧本部へと向かって足を踏み出した。

「……むう」

「お姉様？ 頬を膨らませて、どうしたんですの？」

「別に何でもありません。……ダイナさんのバカ」

……おい、今なんか嫌な予感したぞ。

俺の知らないところで、面倒ごとが起きてる気がするんだが。



そんな訳で帰還して、再び旧本部。

そこに用意された広大な実験場のど真ん中で、俺はエレンと向き合っていた。もちろん、ある程度の距離を開けて。

接触厳禁な。

周囲にはフル装備した旧リヴァイ班の面々に加えて、アリーセ、ラウラ、フォルカー、ハンジさん、モブリットさんが俺とエレンをぐるりと取り囲んでいる。

もしもエレンが暴走した場合、次の瞬間にはズタボロにできる布陣だ。

兵長だけでも戦力過剰なのに、何だこれ。

俺でも生きて帰れねーわ。

一応俺も立体機動装置は装備してるけど、意味ないと思う。俺がワイヤーを射出するより早く、エレンがうなじから切り離されてるって。

まあ、安全性が高いのは良いことだ。

たったの1ヶ月で巨人化能力をマスターさせろと地味に無茶なご命令が出されてい
るし、速やかに始めようか。

俺は人にものを教えるのがあまり得意じゃねえから、どのくらい時間がかかるのか分

からない。スタートはなるべく早い方が良いだろう。

咳払いして、俺は不安そうな表情をしているエレンに話しかける。

「それでは、巨人化能力の実験を始めましょう。エレン、肩の力を抜いてください。そんなに気を張る必要はありません」

「はいー」

俺がそう言うと、握り拳を作って威勢のいい返事を返してくれるエレン。

なあ、言葉通じてる？

力を抜けて言ったのに、余計に力を入れちゃったよ。

……いや、トロスト区での出来事を考えたら力が入るのも仕方ないから。既に一度、暴走しちまつてるしな。

幼馴染を危険な目に合わせた経験があるから、尚更だろうし。

「まずはおさらいです。巨人化するのに、自傷行為が必要なのは知っていますね？」

「何でか分からないですが、初めからそれだけは分かっていました」

「ですが、自傷行為だけでは不十分です。巨人化能力を発動させるには、明確な意思が必要なんです。巨人化した時のことを思い返してください。いずれも、自傷行為に加えて巨人化する理由があつたでしょう？」

俺の問いかけに、エレンがハツとした表情を浮かべる。

反応がいいから教えやすいな。

エレンパパ、あなたの息子は素直で良い子に成長しています。……マーレ編に入ってから、幼馴染のアルミンをボコボコにしたりとキャラが大きく変わっちゃまうが。

つと、思考が逸れた。

今は目の前のことに集中すべし、だ。

「繰り返ししますが、大切なのは自傷行為と明確な意思。この2つがあつて巨人化能力は発動します。……それでは、早速やってみましょうか」

「も、もうですか……？」

「心配はしなくても大丈夫ですよ。周りには調査兵团の中でも選りすぐりの精鋭兵がズラリですから。もし暴走しても、ほんの数秒でズタボロにされて巨人体から引きずり出されるでしょう。安心して巨人化してください」

両手両足の先がちよつと切断されるだけですよ、と。

エレンを安心させようと俺は微笑と共にそう告げる。

すると、エレンは俺の意図したのとは正反対に顔を強張らせた。

脅しすぎたか……？

いや、我らが駆逐ボーイなら大丈夫だろう。根性は全キャラクタートップなのだから。

青い顔をしたまま涸れ井戸へと入っていくエレン。

エレンが井戸に入ったのを確認して、俺はハンジさんへ手を振って合図を送った。すぐにハンジさんが信煙弾を打ち上げ、エレンに巨人化の合図を出す。

巨人化の爆風を浴びるのは勘弁なので、俺も速やかに井戸から距離をとった。しばらくして、空から閃光が降り注いだ。

井戸の中から蒸気が噴き上がり、それを引き裂くようにして巨人の腕が現れる。

おお、原作と違って一回で成功した。

これはなかなか順調な出だしになるかもな。

あくまで、制御が出来ていればの話だが。

超硬質ブレードを構え、いつでも戦闘を始められるように静かにエレンの様子を見守る。

徐々に立ち込めていた蒸気が薄れて、巨人化したエレンの姿が見えてきた。いきなり動き出す気配は、ない。

胸部から上だけを井戸から出しているエレンに少し近づいて、俺は大きく息を吸って叫ぶ。

「エレーンッ！ 私の声が聞こえますか!? 巨人体の制御が出来ているなら、手を振ってください！」

俺の声にピクリと反応したエレンが、ゆっくりと右腕を持ち上げる。直後、全てを吹き飛ばすような勢いでエレンが右腕で周囲をなぎ払った。

咄嗟にガスを噴出させ、後ろに大きく後退することでその一撃を躲す。巨人の指先が俺の前髪を掠るほど、スレスレでの回避。

流星に一発でマスター出来ました、なんて都合のいい結果は出ないか……！

「巨人体の制御失敗！ 総員、エレンを引きずり出してください！」

地面を転がりながら俺がそう叫べば、周囲で待機していた兵士達がすぐさま動き出した。

一斉にワイヤーが射出され、都合10のアンカーがエレンの体に突き刺さる。総勢10人による全方位同時攻撃。白刃乱舞とはまさにこのこと。

一瞬にしてエレンの両腕が吹き飛び、両目が潰され、リヴァイ兵長によってエレンの本体が巨人体から分離させられた。

リヴァイ兵長によって、地面へと乱暴に投げ捨てられるエレン。

幸い、両手の指先が少し切断された程度の損傷しかない。両足に至っては完全に無傷だ。

流星は兵長、このくらい優勢なら手加減する余裕すらあるってことか。

気を失っているエレンに近寄り、超硬質ブレードで軽くつつく。

もちろん、これ以上は傷を増やさないように気をつけながら。
むう……なかなか目を覚まさないな。

巨人の力を制御出来てないから、今の巨人化だけで随分と無駄に体力を消費しちまつたんだろう。

少なくとも2回は連続で巨人化出来るようにならないと、実戦はきつい。

この特訓の成果が出るのは、もう少し後になりそうだ。

なんて考えていると、超硬質ブレードを納刀しながらリヴアイ兵長がエレンに向かって歩いていく。

あ、もう何するか分かった。

遠い目になる俺の前で、兵長はエレンの脇腹あたりに容赦なく蹴りを叩き込んだ。エレンの体が吹き飛び、その衝撃で激しく咳き込みながら目を覚ます。

そんな事だろうと思ったよ。

巨人化能力者はどんな重傷でもほぼ完璧に再生することができる。それを知った時から、兵長が巨人化能力者に対して容赦がなくなった。

兵長曰く、どうせ再生するなら構わねえだろうとのこと。

「オイ、起きろエレン。もう一度だ」

悪魔だ、悪魔がいるぞ。

数ヶ月前の自分の姿と、今のエレンの姿を重ねて俺は空を仰ぐ。

一応は女性ということでも今のエレンほど乱暴にされなかったが、本質的には似たようなものだったな。気を失うほど無理やり巨人体で活動させては、気を失ったところを強引に叩き起こして、もう一度巨人化させられる。

うん、地獄以外の何物でもねーな。

こうして、今日はエレンが力を使い果たして完全に倒れるまで実験は続いた。



エレンの巨人化練習を始めてから数日後。

旧特別作戦班と旧リヴァイ班は、調査兵団の新兵勧誘式へと来ていた。

この勧誘式が終わった後、俺の所属する班は再編成されるらしい。

リヴァイ兵長はエレンの方へと付くし、テオバルトはトロスト区で死んだからな。

俺、アリーセ、ラウラ、フォルカーの4人に、新兵を2人加えて新しい班にするんだとか。

任務内容は主にリヴァイ班の補佐と、次の壁外調査であぶり出した「知性巨人」との

戦闘。『鎧』の巨人が現れた場合は、兵士の刃だと太刀打ち出来ねえ。そこで俺の出番つてわけだ。

エレンは……まあ、今回はただの餌だろう。

流石に今のエレンじゃ、鎧を相手に勝つことは難しいだろうし。

「新兵、どのくらい入団してくれるでしょうか」

エルヴィン団長が勧誘演説している最中、舞台袖でそれを聞いていた俺にアリーセが耳打ちで話しかけてくる。

そもそも調査兵団は不人気だし、前のトロスト区での戦いでも新兵は大きく減ってしまってるからな。

原作知識も含めて予想すると、

「……20人くらいでしょうか」

「やっぱり、団長の演説を聞く限りそのくらいですよね」

「あれだけ脅せば、20人も残るか怪しいですけどね」

「俺たちの人手不足が解消されることは無さそうだな……」

次々と舞台の前から立ち去っていく新兵を見て、俺たち旧特別作戦班は小声で囁き合う。

原作では、エルヴィン団長が入団したのは21名だと言っていたはず。

一回の壁外調査で軽く20人以上は死んでそうなんだが、よく全滅しないよな。今でも調査兵団は約300人いるし。

明らかに死亡者数に入団者数が釣り合っていない気がするんだが。

舞台袖から僅かに顔を出し、残っている新兵の顔を確認する。

アルミン、ミカサ、ジャン、コニー、サシャ、クリスタといった、104期の主要メンバーは全員いるな。

ライナーとベルトルトがいないのは、まあ、俺の引き起こした『原作』との乖離が原因だろう。

トロスト区の壁が破られる直前の壁外調査に出発する直前に、俺は顔を晒してしまっている。そこをライナーかベルトルトに見られていたとしたら、彼らは絶対に調査兵団を避けるよな。

……？

そう言えば、誰か1人、重要キャラであるのにいない奴が……？

もう一度じっくりと、新兵の顔を見渡す。

――！

誰がいないのかが分かった。

ユミルが、いねえ。

第19話 第57回壁外調査——開始★

第57回壁外調査まで、あと1日となった。

相変わらず旧本部から出ることが許されない俺は、窓から庭を見下ろして暇つぶし中である。

班の再編成も作戦内容の確認も終わっちまったから、訓練以外に何もやることがねえ。

娯楽の1つでも欲しいところだが、こんな世紀末な世界ではそれすら難しい。

せいぜい読書くらいか。

A二の記憶を継承しているおかげで文字の読み書きは問題ねーし、壁外調査から無事に生還したらハンジさんに何冊か本を貰おう。

……なんか、こんな思考すら死亡フラグに思えてきて怖いな。

頭を振って、嫌な思考を振り払う。

ネガティブなのは俺らしくねえよ。何事も前向きに。

改めてもう見慣れた庭へと意識を向けると、ちょうどアリーセにエレンが放り投げられていた。その光景を見たラウラが歓声を上げている。

うわあ……今のは痛そうだ。エレンのやつ頭から落ちてたぞ。

次の壁外調査では、高確率で「知性巨人」が襲来してくるはずだ。

『超大型』は走って調査兵団を追い回すなんて事は無理だから、出てくるのはまず間違
いなく『鎧』だろうな。

硬質化能力の使えない今のエレンが、鎧の巨人に勝つのはかなり難しい。つか、
ぶつちやけ無理だろ。

この1ヶ月間休みなく訓練したとはいえ、まだまだ荒削り。暴走の可能性も孕んでい
るし、巨人の力をセーブ出来ないこともある。

なので少しでも勝率を上げようと、対鎧の巨人用にエレンに極め技と投げ技を叩き込
むことにした。先生はもちろん、アリーセだ。

104期の中で対人格闘術の成績がトップクラスなだけあって、エレンは信じられな
い早さでアリーセから技を学んでいる。

あれが才能ってやつか……。

気を引き締めないと俺も簡単に追い抜かれそうだ。

やべえ、なんか不安になってきたぞ。

窓際の椅子から立ち上がり、俺は兵服に着替えて自室を出る。

早足で廊下を歩き、俺と同じく暇そうにしていたフォルカーの首根つこを掴んで引き

ずりながら庭へ。

ちようど試したいこともあったし、エレンと一緒に対人格闘術の訓練といこう。

まあ、エレンと組手は出来ねえんだけど。

「あ、ダイナさん」

「……チツ、余計なのが」

庭に出てきた俺の姿を見て、アリーセとラウラが正反対の表情を浮かべた。

アリーセが花が咲いたような笑顔を見せてくれるのに対して、ラウラは舌打ちしながら眉間にしわを寄せる。相変わらず嫌われてんなあ。

「少しやってみたいことがあったので、私も訓練に混ぜられますね。良いですか？」

「もちろんです。エレンとの組手も、ひと段落ついたところですし」

そう言つて、地面に転がるエレンを指差すアリーセ。

ボッコボコである。

生死に直結することだから厳しく訓練してあげてとは確かに言つたけど、やり過ぎじゃね？

顔が変形しちまつてるぞ、おい。

アリーセがエレンに対して個人的な恨みでも抱いてるのかと、邪推してしまいそうになるレベルだ。

「エレン、起きてますか？」

「何とか……」

声をかけてみると、意外としっかりした返事が返ってきた。

流石に頑丈だな。

「今からエレンに見せたい技があるので、そこに座って見物してして下さいね。……
フォルカー、組手の相手をお願いします」

「組手の相手が欲しいなら、最初からそう言ってくれよ……。何も首根っこ掴んで引き
ずることないだろう」

ブツブツを文句を言いながらも、フォルカーは構えを取って俺と向かい合う。

よし、やってみつか。

両拳を握りしめて頭の高さまで持ち上げ、軽く膝を曲げ、腰を落として、俺も構えを
取る。

俺の構えを見たフォルカーとアリーセが、同時に目を細めた。ラウラですらも、光の
消えた瞳を俺の方へと向けてくる。

そう、これは訓練兵団で習う格闘術じゃない。

俺の対人格闘術は全てアリーセから学んだものだが、1つだけ例外が存在するんだ
よ。

即ち——アニの記憶から得た、アニの格闘術。

「どうぞ、何処からでも。先手はお譲りします」

俺がそう言うのと、フォルカーは口元を吊り上げた。

「オレも随分と舐められたな。じゃあ、勝負しようぜ。勝った方が負けた方の言うことを一つ聞くつてのはどうだ？」

勝負？

確かに面白そうではあるが、俺は別にフォルカーにやって欲しい事とかねえしな……。

でもまあ、暇つぶしにはなるか。

「構いませんが、先に私が負けた時に何をさせられるのか聞いても？」

変なことをさせられたら堪ったもんじゃないので、念のために負けた時のリスクを確認しておく。

するとフォルカーはさらに笑みを深め、俺を指差しながら何故かドヤ顔でこう言い放った。

「その時は、ダイナには丸一日オレとデートしてもらおう！」

予想の斜め上の返答に、俺は思わず咳き込んでしまう。

アリーセがパニックになり、ラウラは面白いことになったとニヤニヤ嗤い、エレンは

何を見せられてるのか分からずに無表情だ。

この野郎、今なんつった？

俺の聞き間違いでなければ、コイツは子供持ちの元人妻相手に、その義理の息子の前でデートを申し込まなかったか？

「それ、本気で言ってます？」

「無論」

絶対に負けられねえ戦いが、ここにある。

何が悲しくて男とデートしないといけねーんだよ。断固拒否。

壁外調査の直前に何を言ってるんだマジで。

「そんな勝負ダメに決まっています！ ダイナさんにはエレンという義理のむ——」

「あああああああつ！ よし、勝負しましょう！」

エレンのいる前では絶対に言ってはいけない事を言おうとしたアリーの声を遮り、俺は構え直す。

エレンにアニの格闘術を見せて、少しでも鎧の巨人と戦う時に有利にしてやろうと思っただけなのに、どうしてこうなった。

退屈から一転、崖っぷちじゃねーか。チクシヨウが。

「それでは、ダイナとフォルカーの対人格闘術による模擬戦を始めましょう」

薄ら笑いを浮かべたラウラが俺とフォルカーの間に立つと、審判を始めた。ハイライトの消えた彼女の瞳には、ダイナ負けろと書いてあるのがよく分かる。

こういう時だけ張り切るから、ラウラはタチが悪い。

しかし勢いでやると言ってしまった以上は、もう引き下がれねえ。覚悟を決めて、俺は集中力を高めていく。

「では……始めっ！」

スタートの合図と同時に、フォルカーが大きく前に踏み込んだ。

引き絞られたフォルカーの右拳が、俺の胸元あたりを狙って繰り出される。それを僅かに首を傾け、姿勢を低くすることで回避。

右肩の上、耳を掠めるようにしてフォルカーの拳が通り過ぎた。

フォルカーが放った拳を引き戻そうとするより早く、俺は彼の懐へと飛び込んでいく。

俺は自分の右腕でフォルカーの右腕を下から押し上げ、彼の腕と首をまとめて右腕で抑え込む。そして同時にフォルカーの足を払い、体重を前に倒して相手もろとも地面へと倒れ込んだ。

対人格闘術の訓練の際、アニがエレンに使用した技。エレンが鎧の巨人に対して使った技でもある。

地面に後頭部をぶつけて抵抗するのが遅れたフォルカーを、俺は全力で締め上げた。負けたらデートしなければならぬ俺に、容赦という文字はない。

フォルカーの顔が赤くなり、そして少しずつ紫色へと変わっていく。

流石にこれ以上はマズイな。

俺は紫色からついに蒼白になりつつあったフォルカーを離し、軽く土を払って立ち上がる。

「私の勝ちですね」

肩まで伸びた髪を後ろで結わえながら、勝利宣言。

観戦していたエレンとアリーセが同時に歓声を上げた。

けど、2人の歓声の意味は間違いなく違うだろう。

アリーセは俺がデートを免れたことに対して、エレンは凄惨な格闘術を見れたことに対して歓声を上げているだろうから。

2人が同時に駆け寄ってくる。

ちよつ、アリーセは構わんがエレンは来るな。間違つて接触したらどーすんだよ。

しかし流石に、お前に触りたくないから近づくなとは言えんし。

仕方ない、さりげなくアリーセをクツションにするか。

「今の技、どうやったんですか!? ぜひ俺にも教えてくださいー!」

もの凄い食いついてくるエレン。

そんな純真な表情で尊敬してくれるのは嬉しいけど、マジでもうちよつと離れてくれ。

アニの記憶からこの技のコツを探り出し、エレンに伝える。

才能のあるエレンなら、すぐに原作同様に使えるようになるだろう。これで硬質化が使えなくても、多少は鎧の巨人に対抗できるようになったはずだ。

そして一通りコツを伝え終わった後、俺は未だに悔しさから拳で地面を叩いているフォルカーへと駆け寄る。

さて、デートなんていうふざけた要求したんだ。

それなりの罰ゲームは覚悟してるんだろ？

俺はフォルカーに向かって微笑を浮かべながら、慈悲なく罰ゲームの内容を告げた。「それじゃあ、負けたフォルカーにはリヴァイ兵長と組手をやってもらいましょうか。もちろん、どちらかが気を失うまで終わらないデスマッチです」

この世の終わりと言わんばかりに絶叫する、フォルカー。

そんな感じで、壁外調査の前日は終わりを迎えた。

平和な日常はひとまずここまで。

ここから先は、死と絶望が渦巻く壁外の世界となる。



ウォールローゼ、カラネス区。

現在は開閉門の前で隊列を組み、壁外調査の開始を待っている状態だ。

馬の手綱を握りながら、俺は頭の中で作戦内容を反芻する。

今回の壁外調査は状況によって発動する作戦が変わっちゃうから、結構ややこしいんだよな。

「知性巨人」の襲撃があつた場合に発動するのが、プランA。

これは原作の通りの作戦で、後列の班が時間を稼いでいる間に立体機動装置の真価が発揮できる巨大樹の森へと入り、捕獲作戦を行うというもの。

プランAでは、俺は捕獲地点で待機だ。

万が一捕獲出来なかつた場合は、俺が巨人化して「知性巨人」を叩き伏せなければいけない。

『鎧』が出てきた場合、ほぼ間違いない俺の出番が回ってくる。一時的にアニを捕獲したあの兵器も、鎧の巨人の前には無力だろうから。

先端のアンカーが刺さらず、全て弾かれて終わりだろう。

で、「知性巨人」が襲来しなかった場合のプランB。

これは純真に、カラネス区からシガンシナ区までのルート形成を行うというもの。こちらでは、エルヴィン団長に指定された場所に補給地点を築くのが俺の仕事だ。

Aと比べるとかなり楽だから、俺個人としてはBが発動することになれば良いと思うんだが……無理だよな。

ダイナ
エレン・イエーガー
女型と進撃と始祖が揃って壁外に出るなんて、向こうからしたら絶好の襲撃チャンスなんだから。

軽く周囲を見渡す。

第二特別作戦班——通称ダイナ班となったのは、俺、アリーセ、ラウラ、フォルカーに加えて、我らが女神クリスタと、初対面となるドミニクという男兵士。

クリスタとドミニクの2人が新兵枠として、第二特別作戦班に入った。

クリスタの方は原作知識で分かるが、ドミニクの方はさっぱり知らん。

顔合わせの時の印象としては、ひたすらビビリという印象しか受けなかったしなあ。俺がエレンと同じ巨人化能力者だと知った時のドミニクは、生まれたての子鹿より震えていたし。

お前、何で調査兵団に入ったんだよ。そんなに怖がるくらいなら、駐屯兵団に行けばよかつただろうに。

身長はアリーセより少し高いくらいだから、俺ダイナより低い。髪の色は明るい茶色で男にしては少し長い。

何にせよ、戦力になることを願うばかりである。

簡単に死なれてしまったら、こちらとしても寝覚めが悪い。

と、そこで動きがあつた。

ひつきりなしに鳴り響いていた壁上固定砲台の砲撃音が止み、エルヴィン団長の叫びがここまで聞こえてくる。

「これより、第57回壁外調査を開始する！ 前進せよおおおおおッ!!」

「おおおおおおおッ!!」

団長の掛け声に兵士達も雄叫びで応じ、我先にと言わんばかりの勢いで壁外へと飛び出し行つた。

俺も馬の横腹を軽く蹴つて「走り出せ」と合図を送り、先行する兵士達に続く。

「右方に8メートル級！」

「援護班に任せろ！ 止まるな！ 進め、進めえ！」

大勢の人間の気配に引かれ、次々と現れる巨人。

あらかじめ壁上固定砲台で開閉門近くにいた巨人を一掃していても、どうしてもこれだけの数が現れてしまう。

何気に、1番の貧乏くじは援護班の皆さんかもしれない。

「長距離索敵陣形、展開！」

団長から命令が飛んでくると同時に、一斉に散開し始める。

俺の班の配置は3列中央。

エルヴィン団長のすぐ後ろに位置しており、陣形の中でもかなり安全な場所だ。後ろには補給物資を積んだ荷馬車を挟んで、エレンたち旧リヴァイ班がいる。

「おい新兵、そんなに青い顔をしなくても大丈夫だ！ 何度も伝えた通り、俺たちダイナ班の配置場所は巨人との交戦が少ないからな」

フォルカー……班長に任命されたから、張り切ってるのかな。

今にも吐きそうなドミニクの背中をバンバン叩き、下手くそな励ましの言葉をかけている。

取り敢えず叩くのやめてやれ。余計に気分が悪くなってるっばいぞ。

俺も手綱を引いて、ドミニクの横へ並ぶ。

そしてなるべく小さな声で彼に話しかけた。

「そんなに怖いのなら、どうして調査兵団に入ったんですか？」

まだ巨人化能力者が怖いのか、ドミニクはビクビクしたまま喉の奥から声を絞り出して返事をする。

「……しても……どうしても、クリスタさんと同じ兵団に入りたかったです」

あ、もう良い理解したわ。

興味を失った俺はドミニクから離れ、元の位置へと戻る……その時だ。

右翼側から黒い煙弾が次々と打ち上げられる。

あれは普通の奇行種なのか、それとも「知性巨人」なのか。

今のところ陣形が乱れている様子はないし、対して気になるようなこともない。

順調のはず——？

ちよつと待て、右側からまた黒の煙弾だ。

また索敵の取りこぼしで、奇行種が陣形の内部に入つちまったのか……？

……いや、これは違う。

黒の煙弾が打ち上げられる位置が、どんどん中央に近くなつていつている。

間違いない、来やがった。

プランAかよ……！

俺の予想を裏付けるように、伝令兵が班に合流する。

「口頭伝達です！ 右翼索敵、奇行種により壊滅的打撃！ 索敵が機能していません！

以上の伝達を左に回してください！」

「よし、聞いたなドミニク！ お前が行け」

「は、はい！」

フォルカーに指示され、ドミニクが左翼側へと馬を走らせて班から離脱する。……直後。

入れ替わるようにして、左翼からも伝令兵がやって来た。

「口頭伝達！ 左翼後方索敵が壊滅！ 陣形の内部にまで、奇行種が侵入しました！
以上の伝達を右に回してください」

「な……っ!？」

思わず、変な声が出た。

俺だけではなく、他のメンバー全員が俺と同じような表情をしている。

左翼後方からも奇行種……どうなってんだ？

片方が『鎧』なのは間違いない。アニの代わりに、鎧の巨人が俺とエレンを狙うのは分かる。

だとするならば、もう片方からは何が来ている？

フォルカーに命じられたクリスタが、口頭伝達を行うべく離脱するのを見送って俺は奥歯を噛み締めた。

俺たちは一体、何に挟み撃ちされている……!？」

第20話 第57回壁外調査——迫り来るアギト

長距離索敵陣形の右翼と左翼の後方が壊滅という最悪の状態で、俺たちは巨大樹の森へとぶつかる事となった。

さて、どうすつかな。

エルヴィン団長や「捕獲兵器」を積んだ荷馬車と共に、一足先に森に入った俺たち第二特別作戦班。

本来ならこのまま捕獲地点で待機し、「知性巨人」を待ち構える予定だったのだが……生い茂る木々の枝葉の隙間から、次々と黒の信煙弾が打ち上げられているのが見える。

流星のエルヴィン団長でも、まさか「知性巨人」が2体同時に襲ってくるとは想定外だろう。つーか、これを予測するのまず不可能に近い。

そして、既に用意していた策はもう使えねえ。

当初は「捕獲兵器」のアンカーを鎧の巨人の弱点部位である関節に打ち込む予定だったが、そうやって捕獲してもすぐにもう1体の方が助け出して終わりだ。

2体同時に捕獲できるほど物資の余裕はないし、まず2体が同タイミングで捕獲地点

に来てくれるとは考えにくい。絶対にバラける。

俺が襲撃する側なら片方はエレンを、もう片方は指揮官であるエルヴィン団長を狙うし。軍隊つてのは、頭を潰されると途端に脆くなるからな。

つまり現時点で俺が巨人化して交戦するのは決定事項になっちまったんだが……まあ、無理だろ。

いくら何でも、巨人化能力者を2人同時に相手にするなんて無理だつーの。鎧とのタイマンだつて、勝率は5割かそれをちよつと上回る程度だ。

2対1とか、流星に勝ち目がねえよ。

特に、もう1体の方が顎の巨人なら最悪と言える。

何せ俺たちが今いる巨大樹の森は、顎の巨人が最も力を発揮することができる地形で——ちよつと待て。

「まさか……」

「……？ どうした？」

思わず喉の奥から漏れ出た掠れた声が聞こえたらしく、前を走っていたフォルカーが振り向いて何事かを尋ねてきた。

俺は背中冷や汗が流れるのを感じながら、今思いついた推測を口にする。

「襲撃して来ている2体の知性巨人の片方が『顎』なら、向こうにとって巨大樹の森は私

とエルヴィン団長を仕留める絶好の場所になる。もしも『顎』がエレンの追跡を片割れに任せて、私と団長が自分にとって有利な地形にいるうちに襲撃することを優先していたら、既に顎の巨人はこの森の中に——」

その俺の言葉は、最後まで発することができなかった。

理由は単純。背後から聞こえて来た悲鳴によって、俺の台詞は強制的に中断させられたから。

咄嗟に超硬質ブレードを引き抜いて背後を振り返れば、何かが凄まじい速度で木々の上を駆け抜けている姿が見える。

巨人にしては小柄な体軀、まるで刃のような牙が並んだ口元、猛獣の鉤爪のように鋭い指先。

間違いない。

九つの巨人が一体——高い機動力と硬質化すら引き裂く爪牙を持つ、顎の巨人。ソイツが、まるで猿のように枝を伝って俺たちを追いかけてくる。

「アレが左翼側から来ていた知性巨人ですよ!？」

「何なんだよ、あのデタラメな動きは!？」

立体機動装置を用いた兵士に比肩するほどの機動力を見せる顎の巨人の姿に、ラウラとフォルカーが驚愕の声を上げた。

その速度は、アニの全力疾走の速度にも負けてねえ。俺たちと顎の巨人との距離が、目に見えて縮まっていく。

「背後より増援です！」

もはや馬の速度で振り切るのとは不可能。

そう判断したフォルカーが交戦命令を出す直前に、アリーセが顎の巨人へと追いつく兵士の姿を見て叫ぶ。

俺たちの後ろにいた、荷馬車護衛班の兵士か……!?

いや、誰にせよこのタイミングで顎の巨人に攻撃を仕掛けるのは無謀すぎる。

大半の場合、巨木が乱立する巨大樹の森は兵士に有利な地形となるが、『顎』が相手の時だけ話は別だ。奴とやり合うなら、平地で戦う方がまだ楽だろう。

そして俺の考えが正しいことは、果敢に顎の巨人へと挑んだ兵士の命で証明されてしまった。

足首を狙った兵士の斬撃をあつさりと躲した顎の巨人は、木の幹を足場に跳躍。空中に身を踊らせると、体を横に回転。攻撃を外したばかりの兵士をその鋭い爪で引き裂いた。

空中で引き裂かれた兵士の鮮血と肉片が撒き散らされる中、顎の巨人は鋭い爪を使って木の枝を掴み、すぐさま枝を伝つての追跡を再開する。

ふざけんな、猿だってそんな動き出来るか！

軽業師と見紛うほどの軽快な動きに、思わず俺は心の中で絶叫する。

今ので理解した。無理だ、この地形でやり合ったら敗北する確率の方が圧倒的に高い。

立体機動装置で兵士として戦うとしても、巨人化能力で『女型』となって戦うにしても、だ。

もちろん女型の巨人となって戦う方が勝率は高くなるが、顎の巨人を相手に消耗したら、今度は鎧の巨人に勝てなくなる。

交戦すべきか、このまま後列の決死の時間稼ぎを頼りに馬で逃げ続けるか。

交戦するなら、巨人化するのかもしれないのか。

俺が超硬質ブレードを握りしめながら判断に迷っていると、フォルカーが勢いよく鞘から刃を抜き放った。

「——っ！ ラウラ、立体機動に移るぞ！ オレたち2人で奴を倒す！」

「はあ!? あなたの目は飾りですか？ 今まさに、仲間がその命を使ってあの奇行種のデタラメさを教えてくれたのが見えなかったのかしら？ 無意味な自殺なら1人でしなさいな！」

「無茶だということとは分かっているが、このままだと今回の作戦は根元から瓦解しちゃう

！　まだ団長達は「捕獲兵器」の準備も終わっていないはずだ。このまま奴を進ませれば、せつかくの「捕獲兵器」が使う前にぶつ壊されるぞ！　そうしたら作戦は失敗、仲間たちは無駄死にだ！」

無謀な交戦命令に抗議したラウラだったが、フォルカーの次の言葉で拳を握りしめて押し黙った。

確かに、フォルカーの言うことにも一理ある。

このまま顎の巨人を準備中の捕獲地点に引き連れて行ってしまったら、大惨事になるのは間違いない。

エレンたちリヴァイ班だって、そう遅くないうちに鎧の巨人を引き連れてやってくるだろう。

『顎』と『鎧』が揃ったら、それこそお終いだ。

だが反対に、もしもここで『顎』を仕留めることが出来たのならば。

本来の作戦が息を吹き返して、鎧の巨人の捕獲を試みることで出来ようようになる。

腹を括るしかねーか。

「……やりましょう。私たち4人で挑めば、あるいは足の腱を削ぐことくらい出来るかもです。幸い、新兵の2人は口頭伝達から戻って来ていません。言い方は悪いですが、

やるなら足手纏いのいない今です」

俺が交戦に同意を示すと、ラウラではなくフォルカーが首を振った。

「駄目だ、ダイナとアリーセに戦わせる訳にはいかない。2人の……特にダイナの力と情報を、調査兵団は絶対に失えないからな。お前らはオレとラウラが戦っている間に、団長と合流しろ」

そう言つて、オレに任せておけとサムズアップするフォルカー。

カッコつけるなバカ野郎。

いくらフォルカーとラウラが調査兵団の中でも平均以上の実力の持ち主とは言え、たった2人で全力全開の顎の巨人は倒せない。

「私だつて死ぬつもりはありません。自己犠牲の精神など持ち合わせていませんよ。本音で言えば、アリーセを危険な目に合わせたくもありませんし。ですが、純粹に4人の方が勝率は高くなります」

「オレが4人でも勝てないと判断した時は、ちゃんとオレとラウラを置いて撤退してくれるか？」

自分をあつさりで見殺しにしろと言うあたり、コイツもやつぱり調査兵なんだろうな。

真つ直ぐに俺の目を見て聞いてくるフォルカーに、俺は微笑と共に頷く。

「勝てそうにない時は、悪いですがアリーセを連れてさっさと逃げます。私は公に心臓を捧げた兵士ではありませんから。調査兵団に協力しているのも、私の命とアリーセの命を守るため。本末転倒なことはいけません」

自分で言つたという何だが、随分なクス発言だ。

しかしフォルカーは俺と同じニヤリと笑い、両手に握る剣を掲げた。

「……分かった。よし、行くぞダイナ班！ 立体機動に移れ！」

フォルカーの号令に従い、俺たちは一斉に立体機動へと移行。

心臓の鼓動が加速する。

ああ、やっぱり巨人と戦うのは怖えな。

だが巨人に怯えて逃げ続ければ、その先に待つのはきつと死の袋小路だろう。

戦つて、抗つて、勝たなければ、生き残れない。

要するにまあ、イモ引いた奴が負けだ。

「アリーセ！」

「はい、合ませます！」

親友の名を呼んで恐怖を払いのけ、俺はトリガーを引いてワイヤーを射出する。

顎の巨人が足場になっている木の枝へとアンカーを突き刺して加速した。狙いは足。

まずはご自慢の機動力を奪つてやる。

伸びきったワイヤーを巻き取りながら回転し、俺は顎の巨人へと突っ込んだ。

狙いをつけた場所を、俺の握る剣が斬り裂く。

だが手応えはなく、空を斬った虚しさだけが両手に伝わってきた。

チツ、外した……！

すぐさま体勢を立て直せば、別の木の枝へと跳躍して回避したと思われる顎の巨人と視線が交差した。

顎の巨人が再び跳躍し、その鋭い牙で俺を噛み砕こうと大口を開けて向かってくる。

甘えよ、バカ。

顎の巨人の牙が俺に届く直前、アリーセが横から割り込んできた。

そしてブレードを一閃して、顎の巨人の両目を潰そうと試みる。だが流石の機動力で、顎の巨人はこれを回避。奴はすぐさま俺とアリーセから距離を取り、鋭い爪を立てて木の幹へと着地した。

そこに、今度はラウラとフォルカーが仕掛ける。

上から下へ。

縦一文字の軌道を描いて、2人が全く同じタイミングで顎の巨人の腕の付け根を狙う。

咄嗟に木の幹を蹴り飛ばし、別の巨木へと跳躍して回避した『顎』だが、今回は完璧

に避けきれなかったらしい。顎の巨人の両肩から、僅かに血が吹き出す。

一瞬で蒸気が吹き出て再生されてしまったが、何にせよダメージを与えることはできなかった。

このまま畳み掛ける！

向こうに反撃の隙は与えてやらん！

「フオルカーー！」

班長の名前を呼び、ハンドサインを送る。

彼が頷いたのを確認して、俺は再び顎の巨人へと攻撃を仕掛けた。

跳躍する顎の巨人。

『顎』の飛んだ先にある木の枝に先んじてアンカーを打ち込み、着地の瞬間を狙って奴の首首に斬撃。

今度は外さなかった。肉を切った手応えが、刀身を伝って両手に伝わってくる。

……が。

「浅い……っ！」

顎の巨人の首首は切断されていない。

俺はすぐさまガスを吹かして距離を取ろうとするが、顎の巨人が逃すかと言わんばかりに爪を振り下ろす。

と、そこで顎の巨人の背後からフォルカーが襲いかかった。

急所^{うなじ}を狙われた顎の巨人は俺への攻撃を中断し、すぐさま反転すると、向かってくるフォルカーに爪で振るう。

躲しきれなかったフォルカーが、虫けらのように吹き飛んでいった。

テオバルトの半身が食い千切られた瞬間の映像が、否応無しに脳裏でフラッシュバックする。

「ダイナさん——ッ!!」

つんざくようなアリーセの悲鳴で、俺は現実へと復帰した。

目の前には、大きく開かれた顎。

ズラリと並んだ牙を見て、咄嗟に俺は後ろへと飛ぶ。

だが僅かに間に合わず、右肩のあたりを顎の巨人に浅く食い千切られた。

肉を裂かれた痛みを奥歯を噛み締めて耐え、俺は少し離れた巨木の上に着地。すぐさま巨人の力で傷の再生を行いながら、吹き飛ばされたフォルカーを探して視線を彷徨わせる。

すぐに、慌てて俺の方へと飛んでくるフォルカーを見つけた。

「オイ、大丈夫か!?!」

「擦り傷です。むしろ、貴方の方が派手に吹き飛ばされたように見えました」

「こつちも擦り傷だ。咄嗟にブレードを交差させて防いだからな」

そう言つて半ばからへし折れたブレードを捨て、新しい刃を鞘から引き抜くフォルカー。

彼の言う通り、目立つた傷跡はない。

ひとまずホツとして、俺は思わず大きく息を吐く。

「何ボサツとしてるんですの!？」 体勢を立て直したなら、さつさと戦線復帰しなさい!」
フォルカーと互いの無事を確認し合っていると、紙一重で顎の巨人の攻撃を避けたラウラから厳しい言葉が飛んできた。

見れば、アリーセとラウラが交互に攻撃を仕掛けているようだ。

右側からラウラが右肩を狙つて攻撃を行い、顎の巨人がそれに対応しようとするれば、背後からアリーセがうなじを狙う。ならばとアリーセに反撃すれば、今度はラウラが背後を取る。

延々と交互に両サイドから攻撃され、ついに業を煮やした顎の巨人が反撃に出た。

ラウラに攻撃されたタイミングで、顎の巨人は枝の上から飛び下りる。今まで絶対に木の上から下りようとしなかった顎の巨人が突然に木から離れたことにラウラの対応が遅れ、その隙を顎がつく。

顎の巨人は地面に下りようとしたのではなかった。

奴は飛び下りた直後に木の枝を掴むと、逆上がりの要領で再び枝の上へ。そしてラウラに向かって、爪を振り下ろす。

「るるるあああッ！」

「つらああああッ！」

顎の巨人の攻撃がラウラを捉える直前。

俺とアリーセが同時に割り込んだ。

独楽のように回転したアリーセがラウラを狙っていた顎の巨人の指先をまとめて斬り落とし、俺はラウラの華奢な体を抱えて顎の巨人から離脱する。

急襲を仕掛けられて指先を奪われた顎の巨人が怯み、そこにフォルカーが突っ込んだ。

彼の斬撃は浅いが足首を捉え、太い枝の上で顎の巨人が膝をつく。

「いつまで私を抱き締めているんですの!?! 好機です、さっさと離しなさい! 追撃しますわ!」

「り、了解!」

ほとんどアリーセの功績だったが、俺も一応は助けに入ったんだぞ。少しくらいお礼を言ってくれても良いだろうに。

ラウラに突き放され、そんなことを思いながらも飛び出した彼女の後に続いて追撃へ

と入る。

俺が両目を。ラウラがアキレス腱を。

体勢を崩した顎の巨人では、俺とラウラの同時攻撃を完全に防ぐのは不可能だ。

片方なら奴もまだ躲せるだろうが、構わない。俺とラウラの攻撃のどちらかが当たれば、次は一気にうなじを狙えるのだから。

「殺^とったッ！」

今まさに俺とラウラによって、顎の巨人に決定打を与えられる。

その、直前。

俺たちの真下を、リヴァイ班が駆け抜けた。

ゾワツツと。

強烈な悪寒を感じた俺は、再びラウラを抱えて離脱。

そしてその直後、リヴァイ班を追いかけてきたのだろう鎧の巨人が姿を現わして、俺とラウラがいた空間を巨大な腕で引き裂いた。

あのまま攻撃を仕掛けていたら、あの鎧に包まれた腕で強打されていた事だろう。

間一髪で死を逃れたことを実感して、俺は無意識のうちに止めていた息を吐く。

だが顎の巨人を仕留める最高のチャンスを逃してしまい、鎧の巨人と合流させてし

まった。

——後一步、僅かに届かず。
俺たち第二特別作戦班は、顎の巨人の討伐に失敗した。

第21話 第57回目壁外調査——咆哮

しつかりとラウラの華奢な体を腕に抱いたまま、俺は体を横に回転。空中で姿勢を制御しながらワイヤーを射出し、鎧の巨人の手が届かないくらい高い位置にある木の枝に着地する。

チクシヨウが。

後たつたの一撃で、顎の巨人から本体を引きずり出せたつーのによオ……!

リヴァイ班の追跡を中断し、走るのをやめた鎧の巨人。

奴はそのまま顎の巨人が乗っている木の枝の真下まで歩くと、手を振って顎の巨人へと何か合図を送る。合図を見た顎の巨人はすぐに枝から跳躍すると、鎧の巨人の肩に飛び乗った。

しかしエレンの追跡は開始せずに、奴らは揃って俺の方を見上げて動かない。

目標をエレンから俺に変えたのか？

……そうか。

『原作』でマーレの戦士がエレン＝始祖の巨人つてことに気づくのは、エレンがカルラ・イーターと2度目の接触した時。つまり、ハンネスさんが食い殺された直後だ。

つまりそれまでは、エレンのことを進撃の巨人としか見てねえ。

今の奴らの目的が巨人化能力者なら、別にエレンでなく俺でも構わねえってことだろう。

いや、むしろ、アニを殺された恨みがある分、俺の方を積極的に狙う可能性の方が高い。

もしエレンが『座標』を持ってしていると知っていれば、流石に私情は挟まずに狙いをエレン一択に絞る筈だろうからな。

鎧の巨人の全身から放たれる濃密な殺気に、俺は思わず冷や汗を流す。

絶対に逃がさないって気迫が嫌でも伝わってくる。

さて、どうすれば良い？

現在の兵装で鎧の巨人を倒すのは不可能。兵士が『鎧』を相手に出来ることは、関節を狙って動きを阻害する程度だろう。

尤も、刃が通ったとしても鎧の巨人を仕留めるのは困難を極めるが。

動きこそ『女型』より鈍いが、運動性能は無垢の巨人とは比べ物にならないほど高いし。

加えて、顎の巨人と完全に協力体制に入ってやがる。

あの2体、地味に相性良いな。

耐久の『鎧』と機動力と高火力の『顎』。

鎧の巨人はそのパワーと防御力で軸となり、襲ってくる兵士を顎の巨人がはたき落とすしていく。それだけで陥落不可能な要塞の出来上がりだ。

俺が巨人化してやり合ったとしても、突破は難しいか。

鎧の巨人と殴り合っている間に、顎の巨人がその機動力を活かして俺の背後へ回り込む。あとは鎧の巨人がそのパワーで俺を押しえつけ、回り込んだ顎の巨人が俺のうなじを齧り取れば決着だ。

理想は、奴らをもう一度分断すること。

『鎧』と『顎』が別行動を取ってくれば、こちらにも勝機が戻ってくる。

もしかしたら、捕獲のチャンスすら得られるかもしれない。

特に顎の巨人は小型だから、あの「捕獲兵器」で捉えれば絶対に逃げられることはねえ。

逆に言えば、分かれてくれない限りは勝機は薄いつてことになるんだけどな。

「……で、やっぱりいつまで抱きしめてますの？」

そこで俺に後ろから抱きつかれていたラウラが、不快感を滲ませた声で話しかけてきた。

すまん、完全に忘れてたわ。

慌てて謝罪してラウラを離す。

「どうせ抱きしめられるなら、貴女ではなくアリーセ姉様が良かったですわ」

「私で悪かったですね」

「……助けて貰ったことには一応感謝しますが、私の貴女に対する意識は変わりませんので」

そう言つて俺に背を向け、アリーセの下へと飛んでいくラウラ。

感謝すると言いつつも、俺に対する警戒心や嫌悪感が全く揺るがないところが彼女らしい。

彼女が油断も隙もなく俺を監視しているせいで、思うように動けねーんだよなあ。

ある意味、調査兵团の中で最も危険なのはラウラかもしれないねえ。

当然、エルヴィン団長やリヴァイ兵長とは異なるベクトルで。

「おい、ダイナ」

現状を打破する作戦をいくつか考えていたら、リヴァイ兵長が俺の下にやって来た。

兵長の後ろには、グンタさんとエルドさんの姿もある。

エレン、ペトラさん、オルオさんの姿はないから、その3人は当初の予定通りに捕獲地点へと進ませたんだらう。

「状況は大体把握した。あの小せえ方は何て巨人だ？」

「『顎』ですね。並みの兵士を遥かに凌駕する立体機動能力を持っています。相手が『顎』の場合に限り、この地形は兵士に不利になります」

リヴァイ兵長の質問に口早に回答すると、兵長はしばらく思考して口を開く。

「『鎧』に兵士の刃は通らねえ。ダイナ、そつちはお前が相手しろ。残りで『顎』をやる」
「……了解。ですが、巨人化能力者3人が入り乱れての戦場となります。兵長ならともかく、他の兵士が割り込むのは危険でしょう」

下手したら、俺の攻撃が仲間に当たりかねない。

鎧の巨人と戦いながら、顎の巨人と戦って周囲を飛び交う調査兵団に配慮する余裕は流石にねーよ。

そう思つての発言に、リヴァイ兵長は鞘から超硬質ブレードを引き抜きながら端的に返した。

「『知性巨人』2体を相手に、犠牲なしで勝てる訳ねえだろうが」

思わず口を閉じる。

そうだった、ここはそういう世界だ。

誰も死なせずに切り抜けるなんてのは、夢物語だよな。

だから俺は、自分の命とアリーの命を守るために、他のものを切り捨てる覚悟をしたんだろ。陣形の後方の兵士や、単独で顎の巨人に挑んだあの兵士の死を利用したんだ

ろ。

フォルカーに言った通り、本質を見失うな。

俺と調査兵団は協力関係ではあるが、本当の仲間じゃねえ。本当に大切な親友もを守りたいなら、それ以外を切り捨てろ。

自分の中にある、命の優先順位を見失うな。

俺は、何もかもを救い出せるヒーローじゃねえんだから。

木の枝を蹴って空中へと身を踊らせ、俺は懐から取り出した護身用ナイフで自分の手のひらを切り裂いた。

鮮血が飛び散り、閃光と共に現れた骨肉が渦を巻いて巨人の体を生成していく。本体が女型の巨人のうなじへと収まり、本体と巨人体の肉が癒着。神経系が接続され、巨人体の感覚が伝わってくる。

そうして女型の巨人と化した俺は、『鎧』と『顎』の前に着地した。

「オオオオオオッ！」

俺の着地の瞬間を狙って、鎧の巨人が拳を振り下ろす。

それを硬質化した右腕で受け止め、俺は反撃のハイキックを繰り出した。

蒼白に輝く俺の右足が、鎧の巨人ごとその左肩に乗っている顎の巨人を吹き飛ばす

……直前。

顎の巨人は跳躍してその場から離脱し、鎧の巨人は左腕で俺の蹴りをガードする。「ガアアアアアアッ！」

蹴りを防がれて体勢を崩す俺に、真上から顎の巨人が飛びかかって来た。

すぐさま右足を引き戻して、俺はカウンターを仕掛けるべく握りしめた右の拳を引きしぼる。だが、その拳を放つ必要はなくなったらしい。

顎の巨人の体に、アンカーが突き刺さった。

そして銀の光が顎の巨人を一閃。顎の巨人の腕から、鮮血がぶち撒けられる。

「エルドー！」

「了解です、兵長ー！」

『顎』の右腕を切り刻んだリヴァイ兵長が部下の名を呼ぶ。

名前を呼ばれたエルドさんが、リヴァイ兵長と入れ替わるようにして顎の巨人へと向かう。

顎の巨人も空中で身を振り、無事な方の腕を振り回して迎撃を試みるが、エルドさんには当たらない。

振り回される巨人の腕を掻い潜ったエルドさんが刃を振るい、その眼球を潰す――

「……………」

その直前、顎の巨人を守るようにして鎧の巨人がエルドさんに向けて右拳を放った。

まるでアツパーカット。

眼球を狙って刃を振り上げたエルドさんを、真下から撃ち抜く軌道。

俺は咄嗟に鎧の巨人を蹴り飛ばし、何とか拳の軌道を逸らす。

だが僅かに遅かったらしく、エルドさんの立体機動装置を『鎧』の拳が掠った。

それだけで体勢を崩し、エルドさんが吹き飛んだ。

木々の奥に消えていってしまったので、俺の位置からは生死は分からない。

「くそッ……よくもー！」

再び『鎧』の肩の上へと戻った顎の巨人を見て、グンタさんが歯をくいしばって叫ぶ。

チッ、やっぱり強え。

リヴァイ兵長なら単独でも顎の巨人に勝てそうだが、鎧の巨人がそれを許さない。

ともかく、まずは鎧の巨人だ。

何とかして俺が鎧の巨人を押さえ込めば、その隙にリヴァイ兵長が顎を倒してくれるだろう。

ここは少し強引にでも、奴らを分断してやる……！

大きくバックジャンプして一旦距離を取り、俺はアリーセに合図を送った。

すぐさま彼女は頷くと、俺の送った合図通りに動き始めてくれる。

よし、アリーセなら間違いなく完璧に援護してくれるだろう。

俺は彼女を信じて、ただ突っ込め！

硬質化した両の拳を握りしめ、俺は真正面から『鎧』と『顎』に突貫する。

腕の再生を終えた顎の巨人が跳躍して、頭上の枝へと掴まってぶら下がった。鎧の巨人の方はその場で腰を落として、俺を迎撃する姿勢。

ほら、お得意のパワーバトルをしてやる。

来いよ、鎧の巨人！

顔を狙って、俺は拳による大ぶりの一撃を放つ。

それを鎧の巨人は僅かに首を傾げるだけで避け、反撃として俺の顔を狙って拳を繰り出して来た。

クロスカウンター……ッ!?

マジかよ、そんな大技まで使えんのか。

冗談じゃねえ……完璧に、予想通りだ。

膝を曲げて腰を落とし、首を傾けて鎧の巨人の拳を躲す。

最初に放った大ぶりの一撃は、相手のカウンターを誘発するただのブラフだ。

鎧の巨人の腕の下を潜り抜け、奴の腕を首ごと右腕で締める。そして足を払い、渾身の力で投げ飛ばした。

俺と共に背中から倒れ込んだ、鎧の巨人の目が見開かれる。

アニの格闘術が鎧の巨人に効果的ってことは、原作のエレンが教えてくれているんだよ。

そのまま極技へと移行し、鎧の巨人の関節を締め上げる。

『女型』が鎧の巨人を投げ飛ばした！

「やったぞー！」

「ダイナ、上だー！」

兵士たちの歓声に混じって、警告を発するフォルカーの声が聞こえた。

鎧の巨人を拘束する力を緩めずに上を見れば、顎の巨人が俺に向かって爪を振り下ろしてくるところだった。

うなじを硬質化で守る余裕はない。

だが、鎧の巨人の拘束を解く必要もない。

「るるるあああああああッ！」

狙っていたかのような絶妙なタイミングで飛来したアリーセが、顎の巨人の眼球を切り裂いていた。

視力を奪われた顎の巨人が俺への攻撃を外し、すぐ横に頭から墜落する。

「ここだ……っつ！」

渾身の力を込めて鎧の巨人の右腕を引き千切り、その勢いのまま首を掴んで上体を後

ろへと反らす。

バックドロップ。

持ち上げた鎧の巨人を後ろへ倒れた勢いを利用して、頭から地面に叩きつける。

軽度の脳震盪を起こしたのか、動きが鈍くなつた鎧の巨人を放置して、次は視界を奪われてまともに動けない顎の巨人に拳を叩き込んだ。

小柄な『顎』が水切りの石のようにバウンドしながら吹き飛んでいく。

「ダイナさん、今です!!」

『鎧』と『顎』の距離が大きく開いたのを見て、アリーセが叫んだ。

これが最後のチャンス。

もう今の技は鎧の巨人には通じないだろう。何度も同じ技が通じるほど、鎧の巨人は弱くない。

ここで絶対に分断しろよ、俺。

両手のひらを地面につけ、力を解放。

範囲硬質化——!

俺の両手を起点として、硬質化によって生み出された結晶が巨大な壁を構築していく。俺と鎧の巨人を取り囲むようにして現れる、高さ25メートルの円形の壁。半径は30メートルと壁の中は狭くて、網状の天井つき。

これなら、外から顎の巨人が入ってくることは出来ねえだろ。だが網状なので、兵士は入ってこられる。

当然、鎧の巨人も簡単には外に出られない。

が、硬質化による構築が完全に終わるより早く。

立ち上がった鎧の巨人が、残された左腕を振り上げた。

もう動けるのか!? バックドロップのダメージが思ったより無かったのかよ……!

まずい。今は硬質化能力の発動中。防げない。当たる。顔が狙われてる。重度の脳

震盪が起きたら、鎧の巨人に負ける——

「これで、先ほどの借りは返しましたよ」

ラウラの声がした瞬間に、ガクンツと鎧の巨人が膝から崩れ落ちる。

見れば、ラウラが鎧の巨人の膝裏を深く切り裂いていた。

アリーセにも負けないくらい完璧な支援。

おかげで「壁」は完成し、完全に鎧の巨人と顎の巨人の分断に成功した。

今ごろ、外ではリヴァイ兵長たちが顎の巨人と向き合っているだろう。

確かに巨大樹の森での『顎』は驚異だが、今は兵長に加えて精鋭兵が何人もいる。十

分以上の戦力。

負ける要素の方が少ねえくらいだ。

と、そこで網状の天井の隙間からさらに増援が現れたのが見えた。

おそらく先行して捕獲地点に向かったエレンたちが、エルヴィン団長に状況を伝えただろう。

「……………アア」

俺に千切られた右腕を再生しながら、鎧の巨人が立ち上がった。

ここからは完全にタイマンとなる。

しかし、有利なのは圧倒的に俺だ。

鎧の巨人は壁外調査の開始から巨人化して俺たちを追いかけてきたからな。調査兵団を追ってそれなりの距離は走っただろうし、道中で兵士の妨害も受けたはず。調査兵

今までの戦闘で『鎧』にも『顎』にも少なくともダメージを与えたから、その再生にも体力を使っただろうか。

今さっき巨人化したばかりの俺より、かなり体力を消耗しているはずだ。

そして、それは顎の巨人も同じ。

……勝てる。

大きく息を吐いて、俺は拳を構える。

そのまま鎧の巨人と睨み合うこと数秒、先に動いたのは鎧の巨人だった。

全身の筋肉を膨張させ、口から蒸気を吐き出しながら鎧の巨人が俺に向かって突進し

てくる。

シオルダータツクル……！

猛烈な勢いで迫り来る鎧の巨人。

しかし、俺は小さく笑った。

半径30メートルしかないこの壁の中で、体当たりを選ぶのは悪手だろう。

まともにも助走も出来てねえタツクルなど、簡単に避けられる。

ギリギリまで引きつけたところで半身となり、タツクルを回避。

無様にも壁に激突した鎧の巨人の背中に向かって蹴りを放つが、これは当たる直前で回避され、俺の足は壁を蹴りつけて終わる。

俺の蹴りを躲した鎧が、横薙ぎの拳で俺の頭部を狙う。

それを硬質化した腕で受け止めるが、想像以上のパワーで僅かに吹き飛ばされてしま
う。

チツ、受け止めた右腕の骨にヒビが入った。

すぐさま修復のために、力を右腕に注ぎ込む。

だが鎧の巨人は再生させてたまるかと、止まることなく追撃を仕掛けてくる。

再びのシオルダータツクル。

これもギリギリまで引きつけて躲し、また壁にぶつかった鎧の巨人に左の拳を放つ。

が、鎧の巨人が素早く膝を曲げてしやがんで俺の左拳を回避。すぐさま拳を引き戻すが、間に合わずに鎧の巨人に掴まれる。

やべえ、純粋な腕力勝負じゃ分が悪い。

何とか振り解こうと蹴りを繰り出す、俺の足が鎧の巨人に当たるより早く、体が持ち上げられた。

これ以上もがくのは諦め、受け身の体勢に。

直後、背中から壁に叩きつけられてしまう。

咄嗟に顎を引いたので頭は守れたが、背骨から嫌な音が聞こえてきた。

右腕の次は背中かよ……っ。

膝をつく俺の頭を狙って、右足を持ち上げる鎧の巨人。

それを転がって回避し、鎧の巨人の足が壁に当たるのを見ながら、壁を背に立ち上がる。

そんな俺に向かって、鎧の巨人は三度めのシールドタックルを繰り出してきた。

だから、当たったの！

先ほどと同じ光景が繰り返される。

直撃を食らう直前に俺が回避し、鎧の巨人がまた壁にぶつかる。

……？

何でこいつ、当たらねえのが分かってたツクルばかり——……!?

そこで、ようやく俺は気づく。

この壁の中での戦闘が始まってから、奴が常に壁の近くで戦っていたことを。そして、事あるごとに壁に攻撃していたことを。

最初のタツクルに始まり、俺を持ち上げて投げた時も壁にぶつけた。

踏みつけの攻撃も、本当は俺の頭ではなく壁を狙っていたのだとしたら？

咄嗟に自分の手で作り上げた壁を見る。

そこには幾度となく鎧の巨人の攻撃と戦いの余波を受けて、ヒビが入っていた。

確かに即興で作った壁だが、榴弾だって傷一つなく防げる硬度なんだぞ……!!

くそが、どんなパワーをしているんだよ!

思わず奥歯を噛み締めてしまうが、もう遅い。

鎧の巨人はその頑強な体にさらに硬質化を加え、口から大量の蒸気を吐き出す。一目で分かる、次に渾身の一撃を繰り出すのだと。

間違いない。次で壁を破るつもりだ。

どうする？

躲せばせつかく作り上げた壁が破壊され、だが受け止めれば俺は大ダメージを受けてしまう。

……あの技は？

いや、確かに鎧の巨人の渾身のタツクルすら防げるかもしれないが、準備に時間がかかる。

そんな時間はねえ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツッ!!」

俺が対策を講じるより早く。

鎧の巨人が地面が陥没するほどの力で踏み込み、渾身のタツクルを繰り出した。

慌てて横っ飛びをして避けるが、相手はそもそも俺など狙ってはない。奴の狙いは、俺の背後にあるヒビが入った箇所なのだから。

地震かと思うほど大地を揺るがしながら、壁へと激突する鎧の巨人。

高さ25メートルの壁が震えて、巨大な穴が開いた。

砕け散った壁と共に、鎧の巨人が外へと飛び出していく。

慌てて俺も外に飛び出した。

そこで俺の視界に飛び込んできたのは、全身を斬り刻まれ血塗れで地面に倒れ伏す顎の巨人。そして今まさに『顎』にとどめを刺そうとしていたりヴァイ兵長。

その周囲には最初からアリーセたちに加え、増援として来たらしいペトラさん、オルオさん、クリスタ、ドミニクの姿もあった。

壁を破った勢いをそのままに、鎧の巨人が『顎』の下へと疾走。

周囲を飛び交う兵士たちの中を突っ切ると、鎧の巨人は何かから守るように顎の巨人に覆い被さった。

そして、鼓膜が破れるかと思うほどの雄叫びを上げる。

その声量は、周囲のリヴァイ兵長たちが思わず耳を塞いで蹲ってしまうほど。

顎の巨人が回復するまで盾になるつもりか……？

いや、もう無理だろう。

俺の見る限り、顎の巨人はもういつ巨人の体を維持できずに力尽きてもおかしくない程に消耗している。

今さら時間稼ぎをしたところで、何の意味も——

パシユン、と。

木々の奥からそのワイヤーの射出音が聞こえたのは、間違いなく奇跡だったと思う。

また増援かと音が聞こえた方向へと視線を向けると、深くフードを被った兵士が巨木を利用して大きく飛び上がるところだった。

真上から攻撃を仕掛ける気か？

どの角度から攻撃しても、鎧の巨人が防御に徹している限り何の意味もねえだろ……
そこで。

フードの奥に隠れたその兵士の顔が、一瞬だけ見えた。

おい、まさか、嘘だろ!?

お前まで来てるのかよ……ッ!!

それを見た俺は、残る力の全てを消費する勢いで走り出す。

王家の血筋の力まで解放して身体能力をブーストし、一瞬で最高速度に。

そしてアリーセとその周囲にいた兵士をまとめて鷲掴みにし、胸元に抱えて蹲った。同時に力を振り絞って出来る限り大きな壁を築く。そして全身を硬質化した俺は、次の瞬間に襲ってくるだろう衝撃に備えて地面を踏みしめた。

その直後。

巨大樹の森を丸ごと吹き飛ばすのではないかと思うほどの、強烈な熱風が吹き荒れた。

樹高80メートルを超える巨木が小枝のように吹き飛び、僅かに残った枝葉が燃えていく。

もちろん、吹き飛ばされたのは木々だけではない。

俺が庇いきれなかった兵士が黒焦げとなり、ボロ雑巾のように吹き飛んでしまう。

そして更地と化した巨大樹の森の中心部に、途方もなく巨大な影が姿を現わす。

実に60メートル級。

マーレからは破壊の神とまで呼ばれる超大型巨人が、燃え上がる殺意を閉じ込めた眼で俺を見下ろしていた。

第22話 第57回壁外調査——友に捧げる心臓

樹高80メートルを超える巨木が凄まじい高熱に炙られて、刹那の間に灰燼と帰す。吹き荒れる暴風が、そうして生まれた大量の灰を空へと巻き上げていく。

ほんの一瞬。

僅か数秒で、観光地としても有名だった大自然——巨大樹の森が更地と化した。

乱立していた巨木は消えて、後に残るは俺が防御のために築き上げた硬質化による「壁」と、それに守られた者のみ。

この場の全てを吹き飛ばして作り上げた、未だに炎が燻る焦土に現れるのは破壊の神。

全身から大量の蒸気を放出しながら、超大型巨人が憎悪を宿す眼で俺を見下ろしている。

さらに超大型巨人の足元には、灰燼の中から蒸気を纏って起き上がる鎧の巨人の姿。その下にいた顎の巨人も無事らしい。

調査兵団の敗北だ………！

今の爆発で、この場に集まっていた精銳兵のほとんどが消し炭にされちゃった。

恐らく捕獲地点に用意してあった「捕獲兵器」も、爆風によつて全壊しただろう。もう用意していた全ての作戦が機能していない。

それどころか、カラネス区に帰還出来るかすら怪しいくらいだな。

「ああもう、何が起きたん……です……の……?」

「ダイナさん、急に私たちを掴んでどうしたん……です……か……?」

と、そこで俺の手の中からアリーセとラウラが身をよじつて顔を出す。

ラウラの苛立ち混じりの声とアリーセの困惑の声は、外の光景を見た瞬間に揃つて尻窄みになっていった。

まあ焦土と化した巨大樹の森と、こつちを見下ろす超大型巨人を見ればそうなるかな。

咄嗟に庇えたのは、彼女たちと……フォルカー、ペトラさん、オルオさんか。あと数人ほど、名前がわからない兵士が『女型』の手の中から這い出てきている。

超大型巨人が出現する直前に、咄嗟に庇えたのはこれだけか。

いや、俺が築いた「壁」で庇えた人たちもいるだろう。その人たちも含めたとしても、助かったのは20人にも満たないかもしれない。

全身の硬質化を解除して立ち上がった俺は、黒く変色して灰に覆われた大地を見下ろして拳を握りしめた。

灰燼に埋まるようにして倒れ伏す、黒焦げになった兵士達。損傷がひどい死体に至っては、誰なのかすら判断できない。

『原作』でエレンと共に超大型巨人を倒した時に、黒焦げになったアルミンがそこらに散乱しているよう。

いや、人型のもはまだマシかもしれない。

最も損傷の激しい死体に至っては、風が吹くたびに炭化した体が吹き飛ばされて、少しずつ消えてしまっているのだから。

やってくれたな、超大型巨人……!!

俺はこの凄惨な景色を作り上げたクソ野郎を見上げた。

奴はまず瀕死状態の『顎』を掴み上げると、それを口の中へと放り込む。

まずは味方を回収ってことか。

確かに超大型巨人が本気で暴れたら、敵味方の区別なく全てまとめて薙ぎ払っちゃう。

って、言ってる場合じゃねえ。

本格的に超大型巨人が攻撃を行う前に、1人でも多くの兵士をこの場から逃す必要がある。

俺は未だに手の中にいたアリーセを肩に乗せると、うなじから本体の上半身のみを露

出させた。

「アリーセ、信煙弾を。すぐにこちらが壊滅したことをエルヴィン団長に伝えてください」

「了解です、ダイナさん」

俺の頼みに即座に応えた彼女は、黄色の信煙弾を打ち上げる。

意味は作戦続行不可能。

これは全ての兵士が打ち上げる権利を持っているのだが、団長が認めない限りは撤退はできない。

もしエルヴィン団長が黄色の信煙弾を返してくれなければ、俺たちはこのまま超大型巨人、鎧の巨人と徹底抗戦に入らなければいけないのだが……

「団長から返答です。……撤退の許可が出ました！」

その心配は杞憂に終わったようだ。

まあ、尤も、徹底抗戦の指示が出たとしても無視してたけどな。

そうなったら、俺はアリーセを連れて2人で全力離脱してただろう。

生存率を上げるために調査兵団と協力関係を築いたのに、彼らと心中したら本末転倒だつっの。

「……………」

が、当然ながら向こうも簡単には見逃す気がないらしい。鎧の巨人が全身の筋肉を膨張させて戦闘態勢に入り、超大型巨人はその巨腕を振り上げる。

すぐさま本体をうなじの中へと戻して、神経系を再接続。

チツ、さっきの爆発を防いだけいで力が残り少ない。今の状態であの2体の同時攻撃を防ぐとか、どうしても無理だぞ。

迫り来る「敗北」と「死」の感覚に、俺はせめて自分とアリーセだけでも生き延びるべく、防御を諦めて全力での逃亡を試みたその時だった。

森の外側で無垢の巨人の侵入を防いでいた兵士と、捕獲地点で待機していた兵士を引き連れて、エルヴィン団長がこちらに向かってくる姿が見えた。

荷馬車の数が激減していると、俺の予想通り「捕獲兵器」やその他の物資は先ほどの爆風によって全滅したのだろう。

「総員、出来る限り生存者を救出した後には巨大樹の森から離脱せよ！」
「はッ！！」

エルヴィン団長の指示に従い、兵士たちが一斉に動き出した。

生き残った兵士に予備の馬を与え、足りなければ2人乗りし、次々と救出していく。これなら、生存者は全員救出してもらえそうだ。

……鎧の巨人と超大型巨人の妨害がなければの話だが。

一軒家に匹敵するほど巨大な拳が、蒸気を纏って降ってくる。

狙いはエルヴィン団長。

まずは指揮官を潰して、兵士を混乱させようって魂胆かよ……！

俺は灰に覆われた大地を蹴り飛ばし、エルヴィン団長の元へと疾走する。

チツ、ギリギリ間に合うかどうかってところか。

ここでエルヴィン団長を潰されたら、調査兵団は指揮系統が乱れて確実に大混乱に陥ってしまう。そうなれば全滅は必至だ。

頼む、間に合え——

「随分と派手に俺の部下を殺してくれたな、オイ」

全身から黒い煙を立ち上らせたリヴァイ兵長が、灰燼を巻き上げながら神速で飛翔した。

あつという間に俺を追い抜かすと、団長を抱えて離脱。ついでに伸ばしたワイヤーでエルヴィン団長の周囲にいた兵士をまとめて引き寄せるといった、冗談のような神業を見せた。

結果として超大型巨人の拳は数匹の馬を潰すだけで終わり、兵士に死傷者は1人も出していない。

死んでる訳がないと思つてたけど、やっぱり流石の一言だ。
俺も負けていられねえ。

生存者の救出が終わるまでの時間稼ぎをするか。

何も言わなくとも、リヴァイ兵長なら超大型巨人に攻撃を仕掛けてくれるだろう。すると奴は兵長を迎撃するために熱風を放出し続ける必要がある、あのデカブツは熱風を出している間は動けなくなる。

となれば、あとは鎧の巨人だ。

アイツさえ抑えれば撤退できる。

そんな感じで思考を纏めた俺は、拳を構えて鎧の巨人に向き直る。

その、瞬間。

視界に映る一面の焦土の中に、まだ黒く焦げていない人の腕が埋まっているのが見えた。

慌てて駆け寄り、指先で灰を掻き分けて埋まっている人物を引つ張り上げる。

「そんな……」

灰の中から現れたのは、クリスタとドミニク。

2人を見て、肩に乗っていたアリーセが口元を押さえて絶句する。

灰の中から引つ張り上げたドミニクは、その背中の肉が真っ黒に焦げていた。

おそらく骨まで焼け焦げている。もう間違ひなく死んでいるだろう。対照的に、ドミニクの腕の中にいるクリスタには傷一つない。

あの爆発から、その身一つでクリスタを守ったのか。壁外調査開始の瞬間から、常に恐怖で震えていたあの新兵が。

——好きな女の子を庇って死ぬとか、カッコつけすぎだバカ野郎。

気を失っているクリスタをアリーセへと預け、俺はドミニクの亡骸を口に含む。

こうすれば、壁の中に連れて帰ってやれる。

それがドミニクに対してビビりなんて言っちゃまった俺にできる、最低限のことだろう。

「総員、撤退ッ！」

ここでようやく救出作業が終わったらしく、エルヴィン団長が撤退命令を出した。

巨大樹の森へ来る時と比べるとかなり規模が縮小してしまっているが、まだ長距離索敵陣形を維持できる程度の兵士は残っているらしい。

エルヴィン団長を先頭にして、全ての兵士が一斉に反転。

この場からの全力離脱を開始する。

「——ツツオオオアアアアアアアアッ！」

それを見た超大型巨人が、絶対に逃すかと言わんばかりに咆哮を上げた。

撤退する調査兵団の後ろから、灼熱の暴風が迫り来る。

そう何度も同じ手が通用するなと思うなよ、木偶の坊が。

アリーセとクリスタを横髪の中へと隠し、髪を硬質化することでまず2人の安全を確保。

そして拳を地面に打ち付け、横幅の長さを重視した高さ3メートルほどの壁を生み出す。

何とか熱風から調査兵団を守り切ったところで、俺の頭の上にはリヴァイ兵長が着地した。

「ダイナ、今の力で立体物を作れ。俺が超大型巨人を足止めする」

こつちも力がカツカツなのに、簡単に言ってくれな。

しかし進撃ファンの性さがなのか、ガチトーンの兵長に命令されるとイエス以外の答えが出てこねえ。

力を振り絞り、極細ではあるが高さ25メートルを超える塔を無数に打ち建てる。

これだけ細いと並みの兵士ならアンカーを外しかねないが、リヴァイ兵長なら大丈夫だろう。この人は飛び回っているハエにすらアンカーを当てれそうだ。

事実、リヴァイ兵長は普段と全く変わらない速さで超大型巨人へと攻撃を仕掛けていく。

俺の作り出した「塔」と奴の体を利用し、一瞬にして超大型巨人のうなじにアンカーを打ち込むリヴァイ兵長。

超硬質ブレードを逆手に持ち替えたのが、地上からでも見えた。

ワイヤーを巻き取りながら高速回転した兵長が、銀光の輪となつて超大型巨人のうなじを狙う。

超大型巨人も熱風を放出して迎撃を行うが、

——凄え。

兵長の握る刃が、熱風を切り裂いた。

あまりに高速で振るわれる刃によつて、兵長がいる部分だけ熱風が裂けている。

もしも熱風ではなくて激流ならば、モーセの十戒のような光景になつたかもしれない。

よし、リヴァイ兵長の方は何の心配もねえな。

もうあの人を心配するのは無駄だ。

万全の状態ならば、兵長は地獄の底からでも戻ってくるだろう。

俺は超大型巨人に背を向けて、長距離索敵の後を追う。

出来ればもう巨人化を解除して馬に乗りたいが、後ろから俺を追ってくる鎧の巨人がそれをさせてくれない。

……引き離せねえ。

ストーカー野郎め、さては今まで足の鎧を剥がしてやがったな。

向こう側からすれば、調査兵団が超大型巨人の爆発によつて半壊し、混乱していたさつきまでが追撃する最高の機会だった。なのに鎧の巨人は全く動くことなく、追撃を超大型巨人に任せていた。

何故か。

その理由が、追跡の準備をするためだったということだ。

流石に万全の時の俺と比べると遅いが、疲弊した今の俺よりも速い。

このままだと、壁内に帰還するよりも早く追いつかれるか。

……アレを使うか？

しかし下手したら味方まで巻き込んでしまい、俺が調査兵団を壊滅させてしまう可能性もある。

細かな制御までは、いくら王家の血筋を引く俺でも難しいんだよな。

エレンに協力して貰えれば鎧の巨人のみに狙いを絞ることも出来そうだが、その場合は切り札の情報として取っておいた『座標』のことがバレちまう。

「ダイナさん、右の方向から巨人が接近。10メートル級と13メートル級の2体です。その後ろから、さらに無数の敵影を目視しました」

尻目で縮まっていく鎧の巨人との距離を見ながら策を練っていると、肩に乗っているアリーセが無垢の巨人の接近を報告してくれた。

恐らく兵士によって足止めされていた、巨大樹の森の周りの奴らだろう。

……このくらいの数なら、いけるか？

いや、『叫び』の力を使うなら今しかない。

見せてやるよ、鎧の巨人。

俺が『硬化』の能力だけでなく、『叫び』の力までもを王家の血筋の力によって強化していたことを。

ハンドサインで、アリーセに耳を塞ぐように伝える。

アリーセはすぐに自分の耳を塞ぎ、同時に未だに気を失っているクリスタを抱きしめて彼女の耳を塞いであげた。

優しい、流星は天使。

これが天使と女神のコラボか。

久しぶりに『叫び』の力を使う緊張感を下らないことを考えることでほぐし、俺は大きく息を吸う。

「ツツオオオオオオオオオオオオ——ツツツツ!!」

大地が震えるほどの音量を以って、俺は天を仰いで叫ぶ。

直後、周囲にいた無垢の巨人が鎧の巨人に向かって一斉に走り出した。

本来の女型の巨人の『叫び』は、あくまで無垢の巨人の標的を自分自身に設定し、引き寄せる能力でしかない。

しかし王家の血筋の力によって性能が増したことで、自分以外の相手を標的に設定出来るようになったって訳だ。もちろん普通の『叫び』と比べると操れる巨人の数も減るし、範囲も半分以下に低下してしまうのだが。

十数体に及ぶ無垢の巨人が、我先にと鎧の巨人に噛み付く。

彼らの歯はほとんどが「鎧」によって弾かれるが、奴の足の肉は噛み千切られた。

速度向上のために足の「鎧」を剥がしていたのが仇となったな。

無垢の巨人に足止めされ、どんどん小さくなっていく『鎧』の姿を見て、俺はうなじから本体の上半身を露出させる。

俺の巨人体から大量の蒸気が吹き上がり、少しずつ消えていく。

先ほどの『叫び』で、完全に力を使い果たした。

「もう、これ以上は……限界です。アリーセ、すみませんが、近くを走っている兵士から私の分の馬も借りてきてもらえますか？」

「分かりました。すぐに戻りますから、もう少しだけ頑張ってください」

そう言い残すと、アリーセはクリスタとドミニクの死体を担いで立体機動で飛び去っ

た。

やばい、フラフラする。マジで限界だ。

もう巨人の体を維持する力すら残ってねえ。

つか、もう立体機動を行う力もねーよ。

今なら3メートル級が相手でも抵抗できずに食われちゃう。

うわ、視界が明滅してきたぞ。

これ……本当に、無理……

「ダイナさん！」

巨人体を走らせることも出来なくなり、無様に女型の巨人ごと倒れ込む。

それを見ていたのか、慌てた声で俺の名前を呼びながらアリーセが戻ってきた。

手綱を引いて馬を止めた彼女は、俺の元に駆け寄ってくると両脇に腕を通して俺をう

なじから引き抜こうとしてくれる。

あ、ちよつと待て。

気遣いはすごく嬉しいんだが、今の俺に触ったら……

「熱っ!?!」

ああ、言わんこつちやない。

パソコンなどの機械類で例えるなら、今の俺はオーバーヒートしてる状態に近いか。

素手で触ったら、まあそうなるわな。

「限界まで巨人の力を酷使した後は、こんな感じに熱を持つんです。アリーセ、火傷しますから離してください」

「自分で癒着した巨人の肉も剥がせない状態で、人の心配をしている場合ですか。今回、私はダイナさんに助けられてばかりだったんです。大きな活躍は何も出来ませんでした。だから、せめてこのくらいはさせてもらいます」

彼女は自己評価が低すぎる。

顎の巨人と鎧の巨人を分断する時に、顎の巨人を抑えてくれたのはアリーセだ。

彼女の支援がなければ、奴らを分断することは出来なかった。

そう考えたら、十分以上に活躍してるだろう。

ただ、リヴァイ兵長があまりにも圧倒的すぎたから他の全員が霞んでしまったただけだ。

相手からすると、兵長はもう怪物にしか見えねーだろうな。

「ちよつと強引に引つ張りますけど、我慢してくださいね！」

「……………つえ?」

今もまだ巨大樹の森で超大型巨人と戦っているだろう、人類最強の兵士に思いを馳せていると、もの凄い力でアリーセが俺を引っ張った。

思わず変な声が出たぞ。

相変わらず、その華奢な体のどこから馬鹿力が出てるんだろうか。

アリーセのおかげでようやく巨人体から分離出来た俺は、彼女に支えられながら馬に乗る。

「1人で大丈夫ですか？ 辛いなら私の後ろに乗ってください」

「このくらいは大丈夫ですよ」

自分も馬に乗りながら、心配そうにこちらを覗き込んでくるアリーセに俺は苦笑混じりに返す。

周囲の巨人はほとんど鎧の巨人へと差し向けたから、しばらくは巨人の襲撃もないはずだ。ただ馬を走らせるくらいなら、何とかなる。

足で軽く横腹を蹴って馬を走らせ始めると、すぐ横にアリーセが並ぶ。

「お疲れ様でした。ダイナさん、大手柄でしたね」

「こんなに辛いのは、もうしばらく遠慮したいですけどね」

残念ながら、壁内に戻っても休める時間はないだろうけど。

帰還したらずぐに鎧の巨人と超大型巨人、そして顎の巨人の中身の搜索が始まるはずだ。

尤も、俺が協力しても見つけ出せるかは分からないが。

戦士組はアニの記憶から、俺に自分たちの正体やら名前やらがバレていることに気づいてるだろう。

実際はそんなことは関係なく『原作知識』なのだが、それはまあ置いて。

ともあれ、向こうは訓練兵団に入団する時点から、偽名とかを使って少しでも正体を隠蔽しようとしているに違いない。団長に中身の名前だけ伝えても意味ないだろう。

104期生の名簿の中に、彼らの本名がない可能性の方が高い。

現状、奴らの正体を割り出せるのは俺しかない訳だ。

どうしたものやら。

——そんな、帰還した後のことを考えていた時だった。

「ダイナさん、上です!!」

反射的に空を見上げれば、5体の巨人が宙を舞っていた。

当然、そいつらは重力に引かれて落ちて落ちてくる。

慌てて手綱を引いて落下地点から逃れるが、落ちてくる巨人は5体で終わらなかつた。

次から次へと、無垢の巨人が降り注ぐ。

鎧の巨人じゃねえ。

アイツが一度になげとばせる巨人は、多くても1体か2体だろ。

10メートルオーバーの個体を数体まとめて投げ飛ばせる奴なんて、この世界に1人しかない。

なあ、そうだろう？

超大型巨人……ツ!!

遙か後方の地平線。

そこに日の光を浴びて揺らめく巨人の——否、巨神の影。

もはや殆どの筋繊維を消費し尽くし骨が浮かび上がった姿の超大型巨人は、まるで日本の妖怪であるガシヤドクロを連想させた。

巨人化能力者はより強く無垢の巨人をひきつける。

その特性を利用して無垢の巨人を集め、奴はひたすらに俺たちに向かって投擲を行う。

未だに降り注ぐ、無垢の巨人の群れ。

ようやく超大型巨人が限界を迎えて倒れた頃には、俺とアリーセは既に数十人の巨人に囲まれていた。

巨人の力は尽き、俺は立つことも難しいくらいフラフラで、場所は平地で立体物もなく、ガスと刃も十全ではない。

絶体絶命という言葉を、そのまま体現したかのような状況だ。

アリーセと背中合わせに立ちながら、俺は鞘から超硬質ブレードを引き抜いた。背後では、同じようにアリーセが剣を抜いている。

「……ダイナさん、あとで団長に抗議に行きましようか。これは明らかに超過勤務です」
「ええ、そして団長の財布が空になるまでお酒を奢らせましよう」

「あれ？ ダイナさんってお酒飲めましたっけ？」

「そう言えば、飲んだことありませんでしたね。帰ったら挑戦してみましよう」
軽口を言い合って、俺とアリーセは笑みを浮かべる。

絶望的な状況？

だからどうした。

この程度の地獄なら、シガンシナ区でのサバイバル生活で経験済みだ。

確かに俺の実力はそこらの調査兵より多少はマシな程度だし、アリーセも強いとは言え、リヴァイ班のメンバーを僅かに上回る程度だ。

お互いに、数十体の巨人を平地で駆逐できるほど強くはない。

だが、2人でなら。

俺とアリーセが連携すれば、リヴァイ兵長にだって負けないくらいの戦闘力を発揮できるという自負がある。

背中にアリーセが立ってくれている限り、俺は戦い続けられる。

軽く右手を左胸に当て、俺は兵士の敬礼を取った。

公に心臓を捧げるという意味の敬礼。

だが、俺が心臓を捧げる相手は壁内人類全体ではない。後ろに立つ、彼女にのみだ。

「アリーセ、私の心臓はあなたに」

「はい。そして私の心臓は、ダイナさんのものです」

笑い合い、俺は信煙弾を打ち上げる。

色は緑。意味は救援要請。

果たして俺と彼女が生きている間に救援が来るか分からないが、死ぬまで生き足掻こう。

空へと打ち上げられた信煙弾を合図に、俺とアリーセは躊躇なく巨人の群れへと飛び込んだ。

第23話 第57回壁外調査——決着

ダイナに作らせた高さ25メートルの極細の「塔」の上に着地し、リヴァイは大きく息を吐く。

超大型巨人の放つ高熱を浴び続けたせいで、調査兵団の象徴たる深緑のマントは完全に燃えてしまっていた。兵服も大部分が灰になってしまい、胸元や背中、手足が大きく露出してしまっている。

そのせいで肌に直接に熱を浴びる事となり、露出している肌の全てが熱を持って赤く腫れあがっていた。黒い煙が立ち上るほどの大火傷だ。

しかし彼は余裕の表情を崩さない。

酷使し続けてなまくらとなったブレードを捨て、新しい刃に換装しながらリヴァイは「塔」の上から地平線——調査兵団の仲間たちが去った方向へと視線を向ける。

(エルヴィンたちは……撤退できたか)

リヴァイの視線の先には、既に調査兵団の姿はない。

高さ25メートルの「塔」の上からでも見えないほど離れることが出来たのなら、もう撤退は成功したと見ていいだろう。

尤も、無垢の巨人と鎧の巨人の脅威が去ったかは、ここで殿を務めて超大型巨人と戦い続けていたリヴァイには分からないが。

頃合いか。

己の立体機動装置を見下ろして、リヴァイはそう判断を下す。

ガスの残量は3割を下回り、予備のブレードも後1対しか残っていない。

この巨大樹の森（今やほぼ跡地だが）から壁内へと戻ることを考えれば、物資をこれ以上消費するのは避けたいところだ。

（まあ、敵も余裕はなさそうだがな）

リヴァイの猛攻を高熱を放出することで防ぎ続けていた超大型巨人は、もはや殆ど肉が残っていないかった。

骨が浮き上がり、立っているのもやっとの状態のようだ。

もう少し粘れば『超大型』の中身を引きずり出せそうだが、中身を抱えて帰還できるほどの余力がない。兵士の装備では歯が立たない鎧の巨人が戻ってくる可能性も考慮すると、深追いは悪手だろう。

未だに熱を放出したまま不動を貫く超大型巨人から距離を取り、リヴァイは指笛を吹き鳴らす。

すると、十数秒も経たないうちに愛馬がこちらへ向かって走ってきた。

超大型巨人に馬を殺される前にリヴァイは素早く立体機動で愛馬へと飛び乗ると、ブレードを鞘に納め、手綱を打ち付けて襲歩の合図を送る。

全速力で超大型巨人から離脱。

背後からの追撃を警戒して視線を後ろに向け続けていたリヴァイは、超大型巨人が地平線へと消えたのを境に視線を前へと戻した。

(幸い、周囲に巨人はいねえようだ。今のうちに陣形と合流しねえとな……)

そう、思考を巡らせた瞬間。

大気を引き裂きながら、巨大な影が頭上を通過して行く。

弾かれたように顔を上げて影の正体を確認すれば、それは宙を舞う5体の10メートル超えの巨人だった。

「あの野郎……!」

思わず舌打ちして振り返れば、全身から蒸気を吹き上げ、今にも倒れそうになりながらも、巨人を投擲し続ける超大型巨人の姿。

自分を通り越して遙か先へと降り注ぐ巨人の群れを見て、落下地点にいる相手を想う。

超大型巨人の狙いはエレンか、ダイナか、それとも調査兵团全体の壊滅か。

何にせよ、あれだけの巨人の大群に襲われて無事で済むわけがない。

程なくして、巨人の落下地点から緑の煙弾が打ち上げられた。予想よりも距離が近い。

愛馬の横腹を蹴り、最高速度で煙弾の元へと駆けつける。

数分ほど馬で駆け続けていると、ついに戦場が見えた。

涎を垂らして大口を開け、まるで砂糖に群がる蟻のように密集する数十体の巨人。

その中を鉄翼の翼で飛翔するのは、2人の女性だった。

巨人の返り血で白い肌を紅に染め上げ、降り注ぐ血の雨の中でさらに赤を上塗りしながら、刃を振るうダイナとアリーセ。

雄叫びを上げ、凶相を浮かべて巨人の肉を削ぎ落とし続ける姿は、普段の彼女たちとは想像もできないほどに凄絶だ。

アリーセが巨人の腕や足の腱を削いで援護を行い、ダイナがそこに飛び込んで確実にトドメを刺す。

巨人の急所へと突っ込むダイナには、微塵の躊躇も見られない。アリーセが確実に隙を作ってくれると信じているからこそ出来る、特攻紛いの動き。

互いを完全に信頼できるからこそ生まれる、圧倒的なまでの連携。

平地という不利な戦場で、数十体の巨人を相手に立ち回る2人に、さしものリヴァイも目を細めた。

ダイナとアリーセの個別の実力は、リヴァイやミカサほど桁外れなものではない。

リヴァイから見たアリーセの実力は、ミケ・ザカリアス分隊長と同等くらいか。精鋭の中の精鋭と言つていい実力者だが、本来の彼女は平地で巨人の群れを相手に立ち回れるほど規格外ではなかったはずだ。

ダイナの方はアリーセよりも更に劣り、リヴァイ班に所属するペトラやオルオと同等かもしくはそれ以下といったところ。

彼女もまた確かに精鋭兵に匹敵する実力を持っているが、やはりリヴァイやミカサ、ケニーらのアツカーマン一族が住む『限界の先の領域』に足を踏み入れられるほどではない。

あくまで凡庸よりは上といったレベル。

……だというのに。

彼女たちに向かって伸びる無数の巨人の腕が、まとめて赤をぶち撒けて肉片と化す。高速回転したアリーセが、自分とダイナを狙う腕をまとめて斬り刻んだのだ。

切断面から溢れ出る、巨人の血の濁流。

その中を、ダイナが突っ切った。

「おおおおおああああああッ!!」

リヴァイの元まで聞こえるほどの咆哮と共に、ダイナが3体の巨人のうなじをまとめ

て削ぎ落とした。倒れゆく巨人の屍を足場に、ダイナは即座に空中へと舞い上がる。

明らかに、本来の実力を遙かに超える力を見せる2人。

個別の力は、確かに『限界の先の領域』には届かない。

しかし2人が連携すると、彼女たちはアッカーマン一族に匹敵する戦闘力を発揮する。

まるで2人1組なのが正しい姿だと言わんばかりに。

例えるならば『翼』だ。

どちらか片方のみでは、空を舞うことは出来ない。しかし両翼が揃ったのならば、高く飛ばすことができる。

——ただし、翼の片割れが万全であればの話だが。

ガクンツ、と。

15メートル級の巨人を仕留めたダイナが、空中でバランスを崩した。

人間の姿での顎の巨人との戦闘。その後には鎧の巨人と戦い、巨大な建造物を生み出して『顎』と『鎧』を分断し、さらに戦闘を重ね、超大型巨人の爆風から調査兵団を庇い、リヴァイが戦えるように「塔」を作り、追撃してくる鎧の巨人を『叫び』の力で迎撃し、巨人の体を維持できないほどに力を使い果たしたのだ。

今まで動いていた方がおかしい。

力を使い果たした直後の巨人化能力者は、立つこともままならないほど消耗してしま
うのだから。

まさに、アリーセを守るといふ意地と根性のみで動いていたのだろう。

だがいかに並はずれた気力を持っていても、体力の限界を超えた体はやがて動かなくな
る。その時が来た、それだけの話だ。

「ダイナさん！」

バランスを崩したその瞬間、巨人に右足を掴まれたダイナの姿を見たアリーセの悲痛
な声が響く。

数十体の巨人を相手にも立ち回れるほどの連携が崩れてしまい、アリーセの動きまで
鈍ってしまった。

そこに伸びる、無数の巨大な腕。

13メートル級に、アリーセまでもが捕まってしまう。

これ以上は観戦し続けることは出来ない。

まだ調査兵団には、ダイナが持つ力と情報が必要なのだから。

そう判断したリヴアイが鞘から超硬質ブレードを引き抜き、立体機動に移ろうとした
その瞬間。

「アリーセに、触るなあああああアッ!!」

右足を掴まれ、宙吊りにされていたダイナの瞳に力が戻る。

巨人の指を斬って脱出するのは不可能だと判断した彼女は、全く躊躇うことなく自分の右足を超硬質ブレードで切断した。

自分で自分の膝下から下をバツサリと斬り落とし、自由を得たダイナが、鮮血を撒き散らしながら飛翔。独楽のように回転してアリーセを捕らえていた巨人の腕に突っ込み、ズタズタに斬り裂きながら巨人の後ろへと回り込む。

そしてうなじにアンカーを打ち込むと、刃が碎けるほど強引な軌道でうなじを削ぎ落とした。

「クソツ、手間かけさせやがる！」

そこで完全に気を失ったのか、巨人の群れの中へと落ちていくダイナを見てリヴァイが叫ぶ。

巨人のうちの一体にアンカーを打ち込むと、連携時のダイナとアリーセを上回るほどの速度でリヴァイが飛んだ。

残像すら残さずに宙を舞い、巨人を5体まとめて斬殺して群れの中を突っ切ると、ダイナの体を空中で掴む。

「リヴァイ兵長!?!」

「さっさとコイツを連れて離脱しろ！」

突然の救援に、安堵と喜びと困惑が入り混じった表情を浮かべるアリーセ。彼女に氣絶したダイナを押し付け、リヴァイは戦闘態勢に入る。

顎の巨人、超大型巨人との連戦で既にガスの残量は僅か。

しかしその僅かな残量を駆使して残る約20体の巨人を駆逐し、ダイナを助けださなければ、人類が勝利できる可能性がさらに下がってしまう。

現状、鎧の巨人を倒せるのはダイナかエレンしかないのだから。

アンカーを射出し、我先にと襲ってくる巨人を迎え撃つ——その直前。

リヴァイが来たのとは正反対の方向から、調査兵団の一団が現れる。どうやら一部の兵士だけが反転して、救援に来たようだ。

その一団の中にエレンとリヴァイ班の生き残りであるペトラ、オルオの姿を見たりヴァイは、攻撃を中断して空中で身を捻り、エレンたちの方向へと向かう。

エレンのすぐ近くを走っていた荷馬車に着地したりヴァイは、自分の立体機動装置からガスを外しながらエレンに向かって叫んだ。

「エレン、ガスと刃を寄越せ。時間がねえ、早くしろ！」

「は、はい！ しかし、俺はどうすれば……」

「巨人化を許可する。ダイナから1ヶ月かけてやり方を教えて貰ったんだろう。やれ。何としてもこの場の巨人を駆逐し、ダイナを回収する」

リヴァイの命令に、エレンが飢えた猛獣のような凶悪な笑みを浮かべる。

「了解です！」

エレンは即座に自分のガスと刃を全てリヴァイに渡すと、馬から飛び降りて己の右手を噛み千切った。

晴天から雷光が降り注ぎ、傷口を起点に「道」から送られてきた巨人の骨肉が形を成していく。

現れるは進撃の巨人。

ようやく訪れた巨人との戦いの機会に、エレン・イエーガーは雄叫びをあげた。でさえ害虫共が。俺がこの世から、1匹残らず、駆逐してやる——ッ！



——一面に広がる、砂の世界。

そして星々が輝く夜空に、雲のような、天の川のようなものが、いくつも存在している。

——あれが、「道」か。



眩しい。

顔に日光を浴びて、俺は目を覚ました。

ゆっくりと目を開けて上体を起こすと、旧本部の城内にある見慣れた自室の光景が飛び込んでくる。

……あの状況から、ほんとに生還できたのか。

しばらくベッドの上で殺風景な自室を眺めてボケーっとならしていると、ノックもなしに部屋の扉が開いた。

そちらに視線を向けると、ノックの音と共に部屋の扉が開いた。

そちらに視線を向けると、体中に包帯を巻いたアリーセの姿が。

俺を見たアリーセの榛色の瞳が、大きく見開かれる。

そのまま無言でアリーセと見つめ合うこと数秒、彼女は弾かれたように駆け出すと、凄い勢いで俺に抱きついてきた。

「ダイナさん、目が覚めたんですね！ 良かった……っ！」

「アリーセ、締まってる。ギブです、苦しいっ」

涙を流しながら喜んでくれているのは嬉しいが、めっちゃ首締まってるから。

ちよっ、マジでやばい。

息が出来ねえ。

ジタバタもがいていると、ようやく俺の首を締めていることに気づいたアリーセが離れてくれる。

「すみません、つい……」

喜色満面の表情から一転してシユンとなったアリーセに、俺は思わず苦笑してしまふ。

どうやら、アリーセは命に関わるほどの怪我は負ってないらしい。

包帯だらけだったから心配したが、杞憂で済んで良かった。

「感動の対面をしているところ悪いが、邪魔させてもらうぞ」

半泣きの状態で俺の胸に顔を埋めるアリーセの頭を撫でて落ち着かせていると、今度はノックもなしにいきなり扉が開く。

入って来たのはエルヴィン団長とリヴァイ兵長だ。

「起きてすぐのところ悪いが、我々には時間が残されていない。少し話しても良いだろうか？」

ぶっちゃけ疲労が抜けてないので断りたいところだが、団長と兵長の表情や声のトーンから「ノー」とは言えない雰囲気を感じる。

仕方なしに頷くと、エルヴィン団長は俺が気を失ってからの内容を大まかに説明し始めた。

まずは兵士たちの生存者と死者について。

第1特別作戦班——リヴァイ班は、グンタさんとエルドさんの2人が死亡。エレン、リヴァイ兵長、ペトラさん、オルオさんが生還。

だがリヴァイ兵長が『超大型』との戦闘で全身に大火傷を負ってしまったらしく、『原作』同様にしばらくは本来の戦闘能力は発揮できないらしい。

これからの戦いを考えると、兵長のスペックダウンはかなりの痛手だな。

第2特別作戦班——ダイナ班は、ドミニク以外は全員生還。

ただし俺はカラネス区に帰還した日から丸一日の間は目を覚まさない状態で、アリースも最後の戦闘で昨日はまともに動けないような状態だったらしい。

フォルカーとクリスタは特に大きな怪我はないそうだ。

今回の第57回壁外調査は、全ての作戦が失敗して終了。

調査兵団は精鋭兵の多くを失い、何の成果も得られないままカラネス区に帰還したとのこと。

「そのため2日後に私を含む調査兵団の責任者が王都に召集される事となり、エレンの引き渡しも決定した」

「ここも、一応は『原作』と同じか。」

俺は頷いて、エルヴィン団長に話の続きを促す。

「エレンの引き渡しを回避するには、後2日で壁内に潜む巨人を見つけ出し、これを捕獲する必要がある。ダイナ、君にも協力して欲しい」

「はあ……………」

『原作知識』から今後の展開はある程度は予想していたが、改めて向き合うとあまりに厳しい状況だ。

後たった2日で、巨人化能力者を捕獲する必要があるとか。

無理ゲーにも程があるな。

しかしそれをやり遂げなければ、エレンの引き渡しは避けられず、エルヴィン団長を含む調査兵団の上層部は全員がアウト。俺は調査兵団を隠れ蓑にすることが出来なくなる。

それは避けたい。

となれば、もう俺が選べる選択肢は1つしかねえ。

「分かりました、私も全面的に協力します。壁の中に潜む巨人の特定については、私に任

せてください」

「そうか、助かる」

俺が協力要請に肯定を示すと、エルヴィン団長が手を差し出してきた。その手を握り、握手を交わす。

「今回の壁外調査での助力と、次の巨人化能力者捕獲作戦の協力。見返りは期待していませんよ、エルヴィン団長」

俺がそう言うのと、エルヴィン団長は微かに笑って、「了解した」

こうして、私とエルヴィン団長の同盟関係は継続となった。

もちろんだが、お互いに突き付けた銃口は逸らさぬままに。

俺は木製のベッドのささくれを利用して指先につけた傷を、巨人の力で再生する。

同時に、リヴァイ兵長も懐から手を引き抜いた。

お互いに引き金を引かなくて済んで、何よりだ。



「冗談じゃない、もう沢山だ！」

薄暗い路地裏に、女性の叫び声が響き渡った。

その場にいるのは声を荒げている女性と、彼女に向き合う2人の男。

その全員が、兵服を纏っている。

「今回ので十分に借りは返しただろう!? 言われた通り調査兵団をお前とは反対側から攻撃した! 巨大樹の森では、殺される寸前まで戦った! ああそうだ、2回も殺されかけた! 運が悪けりや、今ごろ私は手足をちよん切られて調査兵団に捕まっていただろうな!」

そばかすの目立つ黒髪の少女の怒鳴り声に、しかし2人の男は動じない。

「お前にはまだ協力してもらおう。調査兵団はまだ俺たちを捕らえることを諦めていないだろう。奴らに尻尾を掴まれるのは、もう時間の問題だ。それより前に、エレンかあの女のどちらかを捕獲する必要がある」

そう言い、男のうちの片方——金髪と恵まれた体格の青年は、黒髪の女性の肩を掴む。「この壁の中に未来がないことは分かっているだろう? クリスタを守りたいなら、エレンかあの女を捕まえるんだ。無理なら、俺たちはお前を故郷に連れて帰るしかない。自分の命とクリスタの命を守りたいなら、やるしかないんだ。ユミル」

「……………つ。雪山訓練で、馬鹿なことしなきゃ良かったよ。ああ、そうだ。なんで私は、巨人化してまでダズを助けちゃったんだ」

そばかすの女性——ユミルはそう吐き捨てて、男2人に背を向けた。

第24話 束の間の平和を

カーテンの隙間から差し込む朝日を浴びて、俺はゆっくりと目を開く。

もはや見慣れた自室の部屋の天井……ではなく、穏やかな笑顔を浮かべたアリーセの顔が目に入った。

どうやら、寝ていた俺の顔を覗き込んでいたらしい。

いつもは兵服を着ているアリーセだが、今日は訳あって私服だ。普段と違って綺麗な衣装に身を包む彼女は、一段と綺麗になっていた。

「お早うございます、ダイナさん」

「はい、お早うございます」

ベッドから上体を起こして、アリーセと挨拶を交わす。

それにしても、毎朝毎朝俺のところに来てよく飽きねーな。おかげで俺も早起きの習慣がついたんだが。

まだ少し疲れの残る体を引きずりながらベッドから降り、俺は身支度を整えるために俺は化粧台の前に座る。

引き出しの中から適当にリボンを選んで掴み、肩まで伸びる金髪を後ろで一つに束ね

ようとして、アリーセに止められた。

「またそうやって櫛も通さずに髪を括ろうと……せめて寝癖を直してからにしてください」

「だって面倒くさいじゃないですか、櫛を通すのって」

「もう……今日は任務ではなくプライベートで出かけるんですから、しつかりしてください。ほら、髪を梳かしますから動いちゃダメですよ」

頬を膨らませながらそう言うと、アリーセは櫛を手にして俺の髪を梳かし始めた。

みるみるうちに寝癖が消え、俺の金髪ダイナが綺麗に整えられていく。それを化粧台に備え付けられている鏡ミラー越しにぼーっと眺めていると、アリーセは手は止めずに話しかけてきた。

「右足、大丈夫ですか？」

「……？ ああ、はい、大丈夫です。膝から下を失った程度なら、数分程度で再生できますから」

心配そうに俺の右足に視線を向けるアリーセに対し、俺はその右足をプラプラと動かして異常がないことを知らせる。

違和感も特にない、万全の状態と言って差し支えないだろう。

しかしアリーセは俺の返答が気に入らなかつたのか、表情をさらに険しくした。

「そういう問題じゃないです。例え巨人の力で再生するとしても、自分で自分の足を切り落とすなんてこと、出来ればもうして欲しくないです……」

「ええ……気をつけます」

随分と心配をかけてしまったらしい。

最初の笑顔とは真反対の、泣きそうな表情を浮かべるアリーセ。

彼女を悲しませてしまったのは痛恨だが、俺はあの時に自分の足を斬り落としたのが判断ミスだとは思っていない。

ああでもしなければ、アリーセは今ここにいなかったのだから。

悔いはない……が、次からはもう少し気をつけるべきだな。

もしこの立場が逆だったなら、アリーセに四肢を欠損させてまで助けられてしまったら、俺はきつと同じことを言っただはずだ。

「少し、怖いんです。もしかしたら突然ダイナさんが凄く遠くに行ってしまうんじゃないかって。貴女は無理をする人ですから。どうしても置いていかれてしまうような気がして——」

そこで一度言葉を区切り、目を伏せる彼女。

しばらくの間黙って手を動かし続けていた彼女は、やがて意を決したように口を開いた。

「ダイナさん、私にまだ何か隠していることがありませんよね？ それも、きつと凄く大切なことを」

本当に、アリーセには敵わねえな。

いつかは話さないといけないなかったことだ。

遅いか早いかの話だろう。

どちらにせよ、エレンたち調査兵団がイエーガー家の地下室に辿り着いた時点で明らかになる。

「巨人の肉体を纏うことができ、即死さえしなければ大抵の傷は完璧に再生できる巨人化能力。確かに凄まじい力ですが、何の代価も払わずに手に入るものではありません。

「九つの巨人」の力を継承した者は、継承したその瞬間から13年で必ず死ぬんです。

……私の場合、残りあと8年もないですね」

ガタンと音を立てて、アリーセの手から櫛が地面に滑り落ちた。

鏡に映るアリーセの顔は、涙で濡れていた。

「どうして、もつと早くに言ってくれなかったんですか……」

「アリーセを泣かせたくなかったんです。言ったところで、どうしようもありませんから」

膝から崩れ落ちたアリーセが、背中に顔を押し付けてくる。

ああ、もう、やめてくれよ。

だから言い出せなかつたんだっつーの。

そんなに悲しまれると、俺も死ぬのがどんどん怖くなっちまうだろうが。

寿命が残されている間に、何としてもアリーセが笑って天寿を全うできる世界を作り上げるって覚悟に、ヒビが入ってしまいかねない。

「本当に、何の手段もないんですか？ 私は、大切な人を死なせないために努力することも許されないんですか？ そんなのあんまりです。どれだけ頑張っても隣で貴女が笑っていてくれる未来が得られないなんて……なら、私は何のために戦えば良いんですか!？」

喉から絞り出すようにして放たれたアリーセの言葉に、俺は返事をする事が出来なかつた。

こればかりは、本当にどうしようもない。

巨人化能力者は「ユミルの呪い」からは絶対逃れられないのだから。

そう、絶対に――、

振り返って涙を流すアリーセを抱きしめようとして、俺は動きを止める。

それはまさに、蜘蛛の糸を掴むかのような微かな希望。

自分で思いついておきながら、絶対に成功しないと切り切れるようなものだ。

「ユミルの呪い」を克服出来るかもしれない、たった1つの方法。

しかしそれは、この世の全てを敵に回すことになる選択肢でもある。

エルヴィン団長やリヴァイ兵長たち調査兵団を、エレンやミカサ、アルミンたち104期を、ジークやライナー、ベルトルトラマーレを、そしてその他の人類を、全てを敵に回す。

俺とアリーセ以外の命を全て切り捨てれば、もしかしたら俺は生き長らえることが出来るかもしれない。

尤も、それだけのことをしても結局8年後に死んでしまう可能性の方が圧倒的に高いのだが。

俺は、どうすりや良いんだよ。

俺とアリーセにとって、最高の未来ってのは何だ？

そんなのは当然、2人揃って争いのない平和な世界で暮らし、寿命で死ぬことだ。

アリーセが恋人を作り、結婚し、子供を産んで母となり、やがて孫ができて祖母となり、彼女が彼女の家族に見守られて息をひきとるまで、側で見守り続けることが出来ることだ。

それが「ハッピーエンド」というやつだろう。

だが、そんな未来はあり得ない。

何もしなければ俺はあと8年足らずで死んでしまおうし、だからと言って延命措置を行えば俺とアリーセを除く多くの命が失われる。

俺とアリーセが2人揃って生き残るという未来は、屍山血河の上にしか存在しない。

「2人揃って」と「平和な世界」は絶対に両立できないのだ。

つまり、選ぶしかないということだ。

当初の目的通りに、残りの命を全て燃やし尽くしてアリーセのために「平和な世界」を作り上げるのか。

世界を地獄に変えてでも、彼女と2人で生きるのかを。

俺は。

どっちを選ぶ——？

ゴンゴンゴンゴンッ！ と。

そこで俺の部屋の扉が、もの凄い乱暴な勢いでノックされた。

アリーセが涙を拭きながら弾かれたように立ち上がり、俺も頭を振って今まで考えていたことを一旦吹き飛ばす。

まだ、今は決断すべき時じゃねえ。

選ばなければいけない時が来るまでに、もう少し時間はあるんだ。

それまでに決めれば良い。

悔いの残らないように。

「はい、どうぞ」

湿っぽくなつてしまつた空気を打ち消すように、俺は努めて明るい声を出した。

すると、ノックの時と同じくらいの乱暴さで扉が開かれる。

「まつたく、いつまで準備しているんですの？ 私とお姉様がせつかく買物に誘つてあげたというのに、未だに出かける支度も終えていないなんて。やはり、巨人はノロマでクズですわね」

痛烈な罵倒と共に部屋に入ってくるのは、アリーセと同じく日頃の兵服ではなくお洒落な衣装に身を包んだラウラだ。

サイドテールの髪型はいつも通りだが、髪を結わえているリボンがいつもと違う。普段身につけているものより、綺麗で高価そうなものを使っている。

「少しアリーセと話し込んでしまつて。すぐに準備しますよ」

「最大限にお急ぎなさいな。こうしている間にも、お姉様とお出かけ出来るという素晴らしい日の時間が減つていきますのよ」

「はいはこ」

急かしてくるラウラに苦笑混じりに返答し、俺はアリーセによつて綺麗に整えられた髪を改めてポニーテールにした。

そして歯磨きと洗顔を済ませると、クローゼットの中から私服を見繕う。

えーっと、どれ着れば良いんだ。

取り敢えず動き易いやつが良いよな。それと今日は少し暑いから、薄手のやつ。

コレとコレにすつか。

俺が選んだのは、薄手のシャツと丈が膝下までのフレアスカート。本当はズボンが良いんだが、生憎と俺の私服は全てアリーセに選んでもらって買ったものか、彼女から貰ったものかだ。

残念ながら、その中にはズボンはない。

寝巻きを脱ぎ捨てて、さっさと選んだ服に手を通す。ゆっくりしているとまたラウラに罵倒されちまうしな。

身支度を整えて準備ができたと言おうとしたところで、アリーセに手を掴まれた。

「……アリーセ？」

「ダメです。まさか、本当にそんな格好で外に出るつもりですか？」

な、何か分からねえが何かやべえ。

アリーセの背後に仁王像が立ってやがるぞ。

気持ちが悪く落ちて泣き止んでくれたのは良いが、今度はめっちゃ怖え。

「そのシャツ、薄すぎて肩と胸元が丸見えじゃないですか！ 上にもう一枚羽織ってく

ださい！」

だつて暑いし、という俺の言い訳は封殺される。

仕方ないので露出部分をショールを肩にかけて隠すと、ようやくアリーセからオーケーが出た。

そんじゃあ、行きますか。



今日は巨人化能力者捕獲作戦の前日。

俺、アリーセ、ラウラの3人は、私服姿でストヘス区を訪れていた。

理由はもちろん、捕獲作戦の決行場所となる街の下見——などではなく。

「お姉様、お姉様！ 見てください、アレすっごく美味しそうです！」

「ラウラ、あまり大声出さないの。ちゃんと買うから。あつ、ダイナさんも食べますか？」

「……じゃあ、私の分もお願いします……」

スイーツを販売しているらしい露店に駆け寄っていくアリーセとラウラの後ろ姿を、俺は死んだ目で見送る。

何やってんだろうな、俺。

調査兵団の存続に関わる重大な作戦の前日に、街を遊び歩いてるとか。ようやく旧本部での監禁状態が解除されたからって、これは違うと思う。

先日、俺はエルヴィン団長に壁内に潜む巨人化能力者についての情報を提供した見返りとして、旧本部から出ることが許された。

尤も、完全武装の調査兵の監視付きではあるが。

背後に視線を向けると、少し離れた路地裏からマントに身を包んだ男たちが俺を凝視している姿が見える。

そりゃ、俺を監視も付けずに街を歩かせる訳にはいかないだろう。

しかし、アイツらって側から見たら完全に不審者じゃねーか？ 女3人組をストーキングして、誘拐しようとしている犯罪者集団にしか見えねえよ。

あ、あの真ん中の奴フォルカーだ。

ガッツリ目が合ったな。

何故かドヤ顔で手を振ってくるフォルカーを無視して、俺は視線を未だに露店に張り付いているアリーセたちに戻す。

思い返すのは、昨日の作戦会議だ。

会議に参加したのは俺、アリーセ、エルヴィン団長、リヴァイ兵長、ハンジさん、モブリットさん、ミケ分隊長、エレン、アルミン、ミカサの計9人。

そこで俺は、エレンたちから104期の成績上位10名の名前を聞いた。

結果、2位と3位が俺の知らねえ名前に変わっていた。

奴らが偽名を使っているという俺の予想は、大当たりだったらしい。

念のために2位と3位の人物の身体的特徴を聞いてみると、ライナーとベルトルトと完全一致したし、間違いないだろう。

余談だがアニがないのでエレンが4位、ジャンが5位といったように順位が繰り上がっていた。下は9位がクリスタで10位がユミルとなっている。

現在、俺の情報を元にエルヴィン団長とアルミンがその頭脳を以って作戦の詳細内容を組み立てていることだろう。

今日の夜に、その詳細な作戦内容が説明される予定だ。

それまでは参謀以外の兵士は特にやることがないので、決戦に備えて十分に身体を休めておけて話になったが……

「はい、ダイナさんの分です！」

「ありがとうございます！」

露店から戻ってきたアリーセからスイーツらしきものを受け取る。

あ、甘くて美味しい。

これってクレープか？

この世界って、生クリームを作る技術あるんだな。

外見や味がにってるだけで、全くの別物って可能性もあるだろうけど。

スイーツと睨めっこしながら端の辺りを齧っていると、同じく片手にスイーツを持ったラウラが俺の右足の脛を蹴ってきた。

「ちよっ、普通に痛いですから！」

「どーせ再生するんでしょう？ 平気で自分で斬り落とすくらいですし？」

「あれは必要に迫られたからやっただけで、好きで斬り落とした訳じゃないですからね
!？」

この子、巨人化能力者のことをいくらでも修復できるサンドバッグとして見てないか
？

地味に痛む足をさすりながらラウラを見上げると、彼女は俺以上に険しい表情で見下ろしてくる。

「先ほどからそんな響めつ面で、私とお姉様があえて明るく振舞っている理由が分からないんですか？ ああ、申し訳ありません。巨人にそんな知性はありませんものね。わ

ざわぎ声にして教えて差し上げますわ。重大な作戦の前日にも関わらず、なぜ私たちが訓練もせずに遊んでいるのか」

ラウラはそこで残ったスーツを口の中に放り込み、咀嚼して嚥下すると口元を拭いて話を再開する。

「そんなの、明日死ぬかもしれないからに決まっています。人類と敵対する巨人化能力者たちとの戦いは、非常に苛烈なものとなる。恐らく、調査兵団からも市民からも夥しい数の人間が死にますわ。呆気なく、虫けらのようにその命を失うでしょうね。そして私やお姉様、ついでに貴女も例外ではない。……明日で死んでしまうのなら、最期に楽しい思い出でも作っておこう。そんな人間として当然の心理すら、巨人には理解できないのね」

言われて、俺はようやく気づく。

今日ずっと笑顔だったラウラの手が、僅かに震えていたことに。

彼女と一緒にはいしゃいでいたアリーセの笑顔が、少し引きつっていたことに。

明日死ぬかもしれない、か。

確かにそんなこと、全く考えてなかったな。俺はずっとその先のことばかりを気にしていた。

そうか。

明日、死ぬかもしれないのか。

確かに、それは、怖いな。

こんな道半ばで力尽きて果てるのは、怖くて仕方がない。

壁外調査で死にかけながらも何とか生還して、それなのに数日後には再び命をかけた戦いに臨まなくてはならない。

未来も大事だ。

戦いに意識を向けるのも大切だ。

訓練も、装備の点検も、作戦の立案も。

だけどここの世界にやって来てから、延々とそんなことばかりしていたから完全に意識の外だったな。

何も考えずに、ただ遊ぶなんてことは。

俺もスイーツを口の中に押し込み、立ち上がる。

今まで戦って、戦って、戦って、戦ってきたんだ。

今日1日くらいなら、平和を満喫したって誰からも文句は言われなだろう。

「アリーセ、次はどこに行きたいですか？」

オロオロしながら俺とラウラを交互に見ていたアリーセに、俺は笑いながら問いかける。

彼女はしばらくポカンとした後、同じように笑顔を見せて言った。

「ダイナさんとなら、何処でも」

嬉しい答えだが、それじゃあアリーセの行きたいところが分らねえんだよなあ。

どうしたものかと辺りを見渡すと、少し気になる店を発見。

次はアレにするか。甘い物を食べた後つて、塩辛いものが食べたくなるよな。

なんて考えていると、無視されたラウラがジト目で睨んでくる。

「随分と見事な手のひら返しですわね。そこで響めつ面のまま、貴女にしか分からない難しいことで悩んでいても結構ですよ？　もしくは壁外に出て行って、お仲間と戯れるのも構いませんが」

「どれもお断りですね。私は難しいことを考えるのも嫌いですし、血を見るのも嫌いですから」

もしも俺が明日で死ぬのなら。

「ユミルの呪い」で8年後に死んでしまうのなら。

俺がいなくなっても、アリーセが泣かなくて済むくらい、楽しい思い出を作るのも悪くないかもしれない。彼女が度々思い出しては、笑えるくらい沢山の思い出を。

アリーセの手を握り、ラウラの首根っこを掴んで俺は先ほど見つけた店へと歩みを進める。

「さつきから、あの特大骨つき肉のお店が気になっていたんですよ」

流石はウォールシーナに属する街。

お肉なんていう高級品まで売ってやがる。

調査兵団の上官と同じ食事をして、肉はほとんど食べねーからな。

この機会に是非ともガッツリ食べておきたい。

「はああああああつ?! 今さつきスイーツ食べたばかりですよ?! なのにすぐ肉とか、やっぱり巨人は巨人ですわね! お姉様も反対でしょう?! っていうか肉?! そんな高級品よく売ってましたわねえ!」

うわ、急にパニックなつたぞこの子。

そう言って助けを求めるラウラに、アリーセは申し訳なきように言った。

「ごめんラウラ。私も結構、大食漢なんだ。むしろさつきのスイーツで食欲が湧いてきちゃった。お肉なんて、滅多に食べられないし」

「食事の時に気づかなかったんですか? アリーセ、毎回フォルカーの倍くらいの量を食べてますよ」

ラウラがこの世の終わりみたいな顔をする。

しかし彼女はすぐに首を振って気を取り直し、アリーセへと縋り付く。

……俺に引き摺られたまま。

「ほら、食べ過ぎると太ってしまいますわ！ 姉様の美しい容姿が損なわれてしまうのは良くありません！」

「私、食べても太らない体質なんだよね」

「……………」

アリーセの細い腰を見たら分かるだろ。

彼女が食べたカロリーは、全て脂肪ではなくあの怪力パワーの源になってるらしいからな。

全くと言っていいほどに太る心配がねえ。

「そんなに嫌なら、無理して食べなくて良いでしょうに」

「嫌ですわ！ お姉様が食べるものは私も食べるんですの！ というかこのご時世に肉はふつうに高級品ですよ!! 食べないとか勿体ないでしょう!!」

この子めんどくせえ。支離滅裂じゃねーか。

冷徹な瞳で俺を監視する、いつものラウラはどこへやら。

今の彼女は、大好きな姉の真似をした妹にしか見えない。

俺と2人の時は冷酷で嗜虐的な性格になるのに、アリーセが絡むとこれだからな。

ラウラにとって、アリーセは一体なんなのか。

少し聞いてみたい気もするが、無遠慮に他者の心に踏み入るのは良くないだろう。

特に俺はラウラに嫌われてるし、信用もされてねーし。

店員に特大骨つき肉を3つ注文。

うわ、馬鹿みたいに高い。

ウォールマリアが陥落して肉が高級品になったのは知ってたが、この値段は想像以上だ。

下手したら、この特大骨つき肉1つで数日は暮らせるぞ。

つーか、特大を売り文句にしてるくせに商品ちっせえな。

ハンバーガー程度のサイズじゃねーか。

いや、まあ、数が少ない肉ならこの程度でも大きい方なのか。

ともあれ、肉はめっちゃ美味かった。

明日死ぬとしても、これなら悔いはない。

あくまで食事的な視点の話で、本当に死んだら悔いしか残らないけどな。

「さてと。ラウラがスイーツで私がお肉でしたから、次は今度こそアリーセの番ですよ」

俺は未だに幸せそうに頬を抑えているアリーセに向かってそう言う。

すると彼女はしばらく考えて、

「ダイナさんはどこが良いですか?」

「もうっ、この女に聞くのは無しですわ! お姉様が行きたいところをお考え下さいな」

！」

「ええ、私もアリーセと一緒になら何処へでも行きますから」

俺とラウラにそう言われたアリーセは、遠慮がちに口を開く。

「それじゃあ——」

アリーセが向かった店は、アクセサリーショップだった。

綺麗な宝石が使われたペンダントやブローチ、イヤリング、ネックレスがズラリと並んでいる。

……こつちも肉に負けねえぐらい高いな。

エルヴィン団長から多めにお金を貰つといて良かった。

本来はまともな兵士ですらない俺に正規のルートから給料は出ないが、エルヴィン団長は調査兵団の金庫から俺に給料をくれている。

団長曰く、兵器の維持費だそう。

俺のことを兵器と言い切るあたりが、実に団長らしい。

「せっかくなので、3人でここのお店のアクセサリーを付けたらなあと思ひまして。

……嫌ですか？」

ピカピカと輝く店内を凝視していると、隣でアリーセが恐る恐る聞いてくる。

まさか、嫌なんて言うわけねーだろ。

アリーセの頼みなら全て即答でオーケーだ。

俺は普段アクセサリーなんて付けないが、そういう事なら付けても良い。

「もちろん良いですが、アリーセが選んで下さいね。私はこういうの全く分かりませんから」

「それだと服と同じじゃないですか……。なら、私がダイナさんのを選びますから、ダイナさんは私を選んで下さい」

「ええ……。変なものになっても知りませんよ?」

「良いです。私はダイナさんが選んでくれたものを付けたいんです」

何だこの天使。

クリスタと比較しても全く引けを取らねえぞ、オイ。

私のも選んで下さいとアリーセに縋り付くラウラはスルーして、俺は店内を物色する。

ダメだ、何が良いのかさっぱり分からん。

もう使われている宝石の色が違うようにしか見えねえ。

選ぶ基準が色以外にないんだが……

と、そこで1つの商品が目に残まった。

これは、あー、なんて言うんだっけか。

確か……そう、ブローチってやつだ。

黄金で形作られた（本物の金かどうかは知らないが）花の中心に、翠玉が埋め込まれたそれ。

アリーセに似合いそう……なのかはセンスのない俺には分からないが、やたらとそのブローチに引つ張られる。

試しにブローチを手を取って見ていると、既に俺の分とラウラの分を選び終わったらしいアリーセが隣にやって来た。

「それがダイナさんが選んでくれたものですか？」

「何故か、これがやたらと目についてしまつて……アリーセが嫌なら、他の物を探しま——」

「それが良いです！」

俺が良い終わるより早く、アリーセが言葉を被せてくる。

良く分からんが、気に入ってくれたらしい。

俺からブローチを受け取ると、彼女はそれを胸に抱きしてめて笑つた。



「そろそろ帰らなければいけませんわね」

懐中時計を見ながら、ラウラが残念そうに呟く。

アクセサリーショップを出ると、既に太陽が沈みかけていた。

もうすぐエルヴィン団長が全調査兵を招集して、作戦内容の伝達を行うだろう。

普通の市民のように街を歩くのも、これで終わりだ。

俺は調査兵団の抱える兵器に、アリーセとラウラは巨人と戦う兵士に戻らなければいけない。

「必ず壁の破壊を狙う巨人化能力者たちを捕まえて、またこうして3人で街を歩きましょう。大丈夫です、私たちは負けません」

そう言つて、アリーセは胸元につけたブローチに手を当てる。

隣では、ラウラがアリーセに選んでもらったらしいイヤリングを触っていた。

そして俺もそれを見て、星を象ったクリスタルの中に、青い宝石が輝くペンダントを手で包む。

「……そうですね」

首から下げたペンダントを持ち上げて2人に見せながら、俺は言葉を返す。

「確かに今日は一日、明日死ぬかもしれないという気持ちで思い切り遊びました。けれど、負けて死ぬ気は毛頭ありません。勝ちますし、生き延びますよ」

十分に平和は満喫した。

では、戦場へと向かおうか。

この世界は残酷で、最高の未来への道は完全に閉じてしまっていて、人の命を踏み台にしなければ先に進めない地獄ではあるが。

戦わなければ、希望の欠片すらも手に出来ないのだから。

第25話 巨人化能力者捕獲作戦

ストヘス区にある、憲兵団の支部の1つ。

上官たちが酒を飲みながら賭け事をして盛り上がる部屋の前に整列した新兵たちは、突如として与えられた任務に困惑の表情を浮かべていた。

「調査兵団との連携を強化するために、新兵同士で合同訓練を行うのは分からんでもない。だが、装備をせず私服で待機とはどういうことだ……?」

生来の性格から雑な仕事を行う上司に対してバカ真面目な発言をしてしまった為、指揮官に選ばれてしまったマルロ・フロイデンベルクは訝しげに呟く。

特に何の目的があるのかも分からない雑務を押し付けられるのは日常茶飯事だ。もはや慣れてしまつてすらいる。

だからそれは別に構わないのだが、今回の仕事は特に意味がわからない。合同訓練とあるのに私服で待機するだけで、立体機動装置すら身に付けないとはどういうことなのか。

真剣な表情で上司に押し付けられた任務内容が纏められた書類と睨み合うマルロの背中を、隣に立っていた女性兵士が強く叩いた。

「何するんだ、ヒッチ！ 俺は今、与えられた仕事の意義を……」

「そんなのどうでも良いでしょー。要するに私服でぼーっとしてるだけでしょ？」

憤慨するマルロの声に自分の声を被せた女性兵士——ヒッチは、自分の髪を弄りながら、

「楽な仕事でラッキー、くらいの感覚で良いんじゃないの？ せつかく腐敗した組織な

んだから、利用しないとね。新兵のうちには雑務を押し付けられるのは面倒いけど」

そう言つて木桶を蹴り飛ばすヒッチを見て、マルロが奥歯を噛み締めた。

「自分のことしか考えられないクズが……」

喉の奥から絞り出すようなマルロの声に、近くにいた同期が反応して口を出す。

「マルロ……自分は違うとでも言いたいのか？ 憲兵団を選んだ時点でお前も同類だろうが」

「違う！ 俺はこの腐った組織を正すために入団したんだ！

「えー!? すごーいマルロ、アンタそういう奴だったの？」

拳を握りしめて熱弁を振るうマルロに、可笑しくて堪らないとヒッチが手を叩いて笑う。彼女につられて、周囲にいた他の新兵たちも苦笑を浮かべた。

憲兵団に入団する者のほとんどは、内地での快適な生活が目的だ。そんな者たちからすれば、憲兵団が腐敗している方が都合が良い。

自分から茨の道を行くマルロの姿は、彼らからの目にはさぞ滑稽に見えただろう。

しかし、そんな新米憲兵の中でもマルロのことを笑わなかった者が2人。

「いいや。お前は間違ってるぞ、マルロ。どんな仕事であれ、全力で臨むのが本当の兵士だ」

「ああ……その通りだ」

マルロの肩に手を置いて彼を庇うのは、2人の男性兵士。

それは短い金髪に角ばった輪郭が特徴的な大柄で筋骨隆々な青年と、高身長で黒髪のことろって目立たない青年だった。



ウォール・シーナ西部、ヤルケル区駐屯兵团支部近くの裏路地にて。

「久しぶりだね、ユミル」

「お前……アルミン、か……？」 その格好は一体どうしたんだ？」

「荷運び人さ。立体機動装置を雨具で隠してるんだ」

そう言つて雨具の下にある立体機動装置を見せたアルミンに、ユミルは目を見開く。

「おい、そりや何の真似だ？」

「ユミル、エレンを逃がすことに協力して欲しいんだ」



寝巻きを脱ぎ捨て、もう着慣れた兵服に腕を通す。

腰に立体機動装置を装着し、調査兵団の象徴である深緑のマントを羽織った俺は、エ
ルヴィン団長、リヴァイ兵長、エレンの影武者のジャンそして憲兵団のトップであるナ
イル・ドーク団長と共に馬車へと乗り込んだ。

言わずもがな、アリーセも一緒だ。

フォルカー、ラウラ、クリスタの3人はすでに対顎の巨人に備えて、ヤルケル区内の
持ち場で待機中だろう。

エレンたち幼馴染3人組が上手く作戦を進めているなら、今ごろユミルと接触してい
るくらいか。

5人全員が乗車すると、すぐさま馬車は動き出した。

さて、随分と『原作』とは違う内容の捕獲作戦になっちまったが……果たして成功するのやら。

個人的な考えだが、アニと比べればユミルの方が弱い。

まあ、当たり前だわな。

アニが厳しい訓練の末に選ばれたマーレの戦士であるのに対して、ユミルは俺と同じで偶然奴らから巨人の力を奪うことに成功した略奪者に過ぎないのだから。

巨人化能力の熟練度がまるで違う。

そして、巨人化には意外と「適性」がモノを言うらしい。

同じ『顎』を継承しているのに、ユミルとポルコ・ガリアードの巨人体は大きく姿や性能が異なるのがその証拠だな。

無垢の巨人の中にも個体差が現れるのも、元となった人間の適性が大きく作用するからだろう。

要するに高い適性を持つ奴が素体になると、その適性の高さに比例して巨人体のスペックも高くなるってことだ。足の速さやスタミナ、大きさとか。

で、恐らくユミルはそんなに適性が高くない。

ガリアードと比べると、そこまで顎の巨人の力を引き出せている訳ではなさそうだ。

強敵であることには変わりないが、どうしても勝てない相手じゃねえ。

アニには通用しなかった「捕獲兵器」も、小柄な『顎』が相手なら効果は抜群だろうし。

勝算は、ある。

「お前がエルヴィンの鬼札か。確か名前は——」

「ダイナです。よろしくお願ひしますね、ナイル・ドーク師団長」

顔を強張らせ、冷や汗を流しながら話しかけてくるナイルさん。

気持ちはもちろん十分に理解できるが、その反応は地味に傷つくな。まあ、こんな密室空間に巨人化能力者がいると知ればそうなるか。

そう、今回の捕獲作戦における『原作』との最大の違いは、憲兵団がグルということだ。それと駐屯兵団も憲兵団の下に位置するので、自然と駐屯兵団の兵士も利用させてもらってる。

尤も、俺の正体や作戦の全貌を知っているのは、トップであるナイルさんだけなんだけどな。

『原作』では憲兵団にもまだ巨人化能力者が潜んでいる可能性があるために、憲兵団に協力を依頼することが出来なかった。

しかし、俺がいるなら話は変わる。

既に全ての巨人化能力者を炙り出せたのだから、何の心配もなく協力を依頼できると訳だ。

ライナーとベルトルトが2人揃って憲兵団にいたのは、流石にビビったが。

ともあれ、今回の作戦内容はこうだ。

まずはエルヴィン団長とナイルさんが協力して、調査兵団と憲兵団の新兵による偽の合同訓練を行う。

これによって、憲兵団に入ったライナーとベルトルトをターゲットであるユミルから隔離。

今ごろヤツら2人は、捕獲作戦に参加しなかった104期の調査兵や憲兵団に入った104期と共にウォールローゼの南区にいるだろう。

ミケ分隊長が率いるフル装備の精鋭調査兵に囲まれて。

多少の差異はあれど、これは『原作』と同じだな。

そしてエレン、アルミン、ミカサの3人が、これまた『原作』通りにユミルに接触。

地下深くに誘導して捕獲する一次作戦に始まり、ハンジさんの部隊が行う「捕獲兵器」で捕獲を試みる三次作戦まで用意してある。

もうエレンが巨人化する必要すらない気がするが、戦場は立体物の多いヤルケル区内。

前回の巨大樹の森程ではないだろうが、顎の巨人の機動力が活かせる地形だ。高速機動する『顎』を仕留め損なう可能性は十分にある。

その時は、まあ、エレンに頑張ってもらおう。

大丈夫、相手がユミルなら勝ち目はあるぞ。対人格闘術ならエレンの圧勝だろ。

じゃあ俺たちは何するかって話だが、こっちは襲来するだろう獣の巨人の相手だ。

獣の巨人を捕獲するか、討伐するか、撃退するのが俺の任務だな。

今俺たちが乗っている馬車は、獣の巨人の出現予測地点であるウトガルド城に向かっている。

もちろん、ラガコ村を経由して。

出来れば村人が巨人化させられるのを防ぎたい。人命救護だけでなく、相手側の戦力低下と一石二鳥だし。

しかし獣の巨人の出現するタイミングは大雑把にしか予想出来ないので、必ずラガコ村の住民を助けられるとは限らない。

この辺りは、悪いが運任せだ。

俺だって全知全能の無敵キャラって訳じゃないからな。

つまりは、鎧ライナーの巨人と超大型巨人を隔離している間に顎ユミルの巨人と獣ジークの巨人をやっつまおうぜ作戦だ。

大雑把な戦闘の構図としては、以下の通り。

ハンジさんの分隊、エレン、ミカサ、アルミン、ペトラさん、オルオさん、フォルカー、ラウラ、クリスタ等VS顎の巨人。

ミケ分隊長、ナナバさん、ゲルガーさん、リーネさん、ヘニングさん、隔離された104期生VS鎧の巨人& amp ; 超大型巨人。

エルヴィン団長、リヴァイ兵長、俺、アリーセ、ナイルさん、ジャンVS獣の巨人。もはや総力戦だな、これ。

まあ、真ん中はあくまで隔離してるだけの予定だから戦闘にはならないと思うけど。万が一ベルトルトとライナーが異変に気付いて動き出したら、ミケ分隊長たちはかなり厳しい戦いになるだろう。

何せ鎧の巨人は兵士には倒せないからな。

あそこが戦闘に発展しないことを祈るしかねえよ。

因みに獣の巨人についてをエルヴィン団長にどう説明したかという点、巨大樹の森で戦った時に奴らの記憶に干渉して情報を抜き取ったと嘘をついた。

要するに『抜き取った奴らの記憶によると、捕獲作戦決行時に新手が出現するようです』と言った訳だ。

「まさか、調査兵団がエレンの他にもう1体巨人を隠し持っているとはな」

「説明した通り、彼女は人類にとって必要な存在だ。今は敵対するべきではない」
「ああ。その女が巨人化して壁内で暴れるのを防ぎたいのなら、このことは黙っておくことだ」

何故もつと早く俺の存在を公表しなかったのだと遠回しに責めるナイルさんに対して、団長と兵長がそう返す。

するとナイルさんは苦虫を噛み潰したような表情で、

「エルヴィン。お前のやり方の全ては受け入れられないが、お前が今までこの女を制御していたのも事実だ。一年以上もな。お前の能力は信用している」

「そうか、なら良い」

相変わらず、いつ暴発するか分からない不発弾みたいな扱いされてるわ。

これ以上エルヴィン団長たちの会話を聞いてても良いことは無さそうなので、俺は窓の外へと視線を向ける。

流れていく景色をぼーっと見ていると、ほんの一瞬だけ空が光った。

……誰か巨人化したな。

タイミング的に考えると、ユミルである可能性が高い。

ということは地下深くに誘導して捕獲する、第一次作戦は失敗しちまったか。

頼む、第二次作戦と第三次作戦で何とか捕獲してくれよ……!!



空から雷が降り注ぎ、轟音と共に蒸気が充満する。

そして現れたのは、およそ5メートルの巨人。

「始まりましたわね」

顎の巨人が現れた位置からは少し離れた場所で、望遠鏡を覗いて様子を見ていたラウラが呟く。

すると隣に立っていたフォルカーが、超硬質ブレードを引き抜きながら応じた。

「そのようだな。どうやら相手は、ホイホイ地下に誘導されてくれるような間抜けじゃないらしい」

「この程度は想定内ですの。二次作戦に移行しますわよ」

そう言うと同時に、ラウラはワイヤーを射出して顎の巨人の元へと向かう。

その後を、フォルカーが慌てて追いかけた。

「なあ、ラウラ。俺の方が階級上ってこと忘れてねえか？」

「偉ぶるのは、私の討伐数を上回ってからにして下さいな」

「上官侮辱罪で牢屋に入れてやろうか……」

緊張をほぐすためにそんな軽口を叩き合いながら、2人は建物の屋根を伝って疾走する顎の巨人へと追いつがる。

……が、

「くそ、速ええ！」

舌打ち混じりにフォルカーが叫ぶ。

どうやら顎の巨人はエレンの捕獲は早々に諦め、撤退に全力を尽くすと決めたようだ。

『顎』は少しもその速度を緩めることなく、壁へと一直線に向かっていく。

精鋭兵であるフォルカーやラウラですら、建物を利用して高速機動する顎の巨人には追いつけない。だからこそ、そんな精鋭兵すらあっさりと追い抜いた少女の姿に2人は目を見開いた。

ラウラとフォルカーを一瞬にして突き放し、顎の巨人へと迫って行く黒髪の女兵士。

その名をミカサ・アッカーマン。

今はまだリヴァイの住む領域に届いてはいないが、片足を踏み込んでいる『常識外の怪物』。

「ユミル、止まって」

ミカサは顎の巨人にそう囁くと同時に、アンカーを『顎』の背中へと打ち込む。

咄嗟に身を捻りワイヤーを掴もうとする顎の巨人だが、ミカサの方が速かった。ガスを最大出力で吹かしたミカサの華奢な体が加速し、残像すら見える速度で顎の巨人に肉薄。彼女が刃を一閃すると、顎の巨人の右肩が大きく裂ける。

それによつて四足歩行していた顎の巨人は大きく失速し、屋根の上で動きを止めてしまふ。

そして刹那の間に生まれたその好機を、ハンジ・ゾエは逃さなかった。

「撃て——ッ!!」

用意されていた「捕獲兵器」が一斉に火を吹き、樽から放たれたアンカーが顎の巨人目掛けて殺到する。

まさに完璧なタイミング。

傷を負ったばかりの顎の巨人では、まず回避は不可能。

「つしゃあ! 決まった!」

捕獲の成功を確信してようやく追い付いたフォルカーがそう叫んだ瞬間、顎の巨人がその本領を発揮した。

『顎』は建物の屋根に穴を開けるほどの力で跳躍すると、空中で硬質化した巨人の皮膚

すら引き裂く爪で、次々と飛来するアンカーを迎撃する。その結果アンカーは半分も刺さらず、顎の巨人はあっさりと拘束を振り払った。

そして油断していたフォルカーに向かつて、その爪を振り下ろす。
パツと。

ラウラの視界が、赤く染まる。

第26話 交錯する思惑

振り下ろされた顎の巨人の鉤爪が、フォルカーの胴体に三本線の爪痕を与える。大きく肉を削がれたフォルカーの体から、赤色がぶち撒けられた。

体と共に立体機動装置を固定するベルトまで千切られた彼は機動力を失い、痛みに悲鳴を上げる暇すらなく地面へと落ちて行く。

「フォルカー……」

咄嗟にラウラは体を捻り、2本のワイヤーを落下するフォルカーの下に敷くように伸ばした。ちょうどワイヤーがフォルカーの首裏と膝下に引っかけかり、彼の体を空中で受け止める。

トリガーを引いてワイヤーを巻き取ったラウラは、気を失ったらしいフォルカーを抱えて前線から離脱。

兵服のジャケットを脱ぐと、それをフォルカーに巻きつけて乱暴に止血を行う。

「本当に馬鹿ね。あなたの得意分野は指揮官として後方から命令を出すことでしょうに。司令塔が前に出るなんて……死んだら、承知しませんわよ。後で私が油断した間抜けを殴れなくなるでしょう……！」

氣を失ったフォルカーの耳元で、ラウラは罵倒の言葉を放つ。すると、フォルカーが僅かに身じろぎして呻き声を漏らした。

「……生きてるのなら上々ね」

血を吐きながらも何とか呼吸を繰り返す姿を見て、ラウラはそう呟く。

そしてフォルカーを抱えて一気に後方まで移動すると、待機していた衛生兵に彼を預けて再び戦場へと舞い戻った。

再び逃走を始めた顎の巨人を追いながら、ラウラは戦況の把握に努める。

現在、地下深くに誘い込んで巨人化させずに捕獲する一次作戦、ハンジの部隊による「捕獲兵器」を用いて捕獲する二次作戦が失敗。

本来なら真ん中に二次作戦……つまり、エレン・イエーガーが巨人化してユミルを捕らえるという作戦があったのだが、それはまず発動すらしていない。

考えられる理由は大きく2つ。

1、既にエレン・イエーガーが戦死した。

2、何らかの理由があつて巨人化出来ない状況にある。

まだ2番ならマシだが、最悪の事態については常に考えなければならぬ。こちらの巨人が1体減った可能性もあると思っておくべきだろう。

「……？」

そこまで思考を巡らせた辺りで、ラウラは異変を感じて眉をひそめた。

顎の巨人の動きが、止まっている。

奴は周囲の建物と比べてひとときわ高い塔のてっぺんにぶら下がる形で、完全に移動を中断していたのだ。

理由は不明だが、仕留めるのに絶好のチャンス。

そう判断したラウラはすぐに顎の巨人がいる塔に向けてアンカーを打ち込もうとして、更なる違和感を覚える。

誰が見ても、一目でわかる好機。

なのに、他の兵士はなぜ動かない……——？

「お願いです、ユミルと話をさせて下さい！」

聞こえてきたのは、高い少女の声。

それが第57回壁外調査で同じ班となった新兵、クリスタ・レンズのものだという事にすぐに気付いた。

クリスタは顎の巨人の頭の上に両手を広げて立っており、あろうことか人類の敵を背に庇っている。そのせいで、周囲の兵士も攻撃を仕掛けられないのだろう。

ただでさえ『顎』は背を塔に付けた状態なのに、頭頂部にまで障害物を作られてしまうと、アンカーを打ち込める場所がかなり限られてしまうのだ。

なれば顎の巨人にアンカーを打ち込む場所が予測されてしまい、最悪、アンカーを射出した瞬間にワイヤーを掴まれて殺される。

だからと言つて、強引にクリスタを斬り殺す訳にもいかない。
完全な膠着状態だ。

思わず舌打ちして、ラウラは顎の巨人から少し離れた位置の建物の屋根に着地。そして未だに顎の巨人との和解を呼びかけるクリスタに向けて刃の先端を突きつけながら、最大音量で叫ぶ。

「クリスタ、貴女のやっていることは重大な軍規違反ですわ！ 敵を背に庇うその行為は反逆罪に該当します！ 今すぐ顎の巨人からお離れなさい！ さもなくば、貴女の命は保証しません！」

殺意すら込められたラウラの言葉に、クリスタは顔を青くして怯む。

しかし引き下がりはしなかった。

「待つてください！ 私ならユミルと話し合えます、こんなに近づいても私は攻撃されていません！ 仲間になつてくれるかもしれない！ 彼女は何の理由もなく人を殺したりする人じゃないんです！ きつと理由があるはずです！ もしユミルが味方につけば、人類の大きな力になります！」

ラウラに引けを取らないほどの勢いで、クリスタも叫び返す。

彼女の言葉の内容に思わず周囲の兵士が動きを止めてしまおうが、ラウラだけは全く止まらない。

「『顎』が第57回壁外調査の際にどれほど多くの仲間を殺したか、分かっていますの？
今だって、フォルカーが殺されかけましたわ。大切な仲間が瀕死の重体に追い込まれましたのよ。もしかしたら死ぬかもしれない。それだけやられた後に、例え顎の巨人が仲間になると言われてもすんなり受け入れられる訳がないでしょう!？」

殺意が爆発する。

超硬質ブレードが震えるほどの力で持ち手を握りしめ、ラウラは刃を翻した。

「死者が絡んだ戦闘というものがどれだけ重たいのか、教えてあげますわ。何せ唯一戦いを止められる死者が、この世のどこにもいないのですから!」

もう「話し合い」が出来る段階は過ぎ去ってしまった。

顎の巨人は明確に人類に対して攻撃している。

例えクリスタが顎の巨人の説得に成功して、味方になったとしても、どれだけの兵士が納得できるだろうか。信用できるだろうか。

この「捕獲作戦」は絶対に失敗できない。

エレンの命運と、エルヴィン団長を含む調査兵団の中核を担う人物たちの首がかかっているのだから。

例え『顎』の力を天秤にかけたとしても、調査兵団はこれ以上のリスクは背負えないのだ。

ラウラがトリガーを引き、右のアンカーを塔に打ち込む。

すぐに顎の巨人がワイヤーを掴もうと手を伸ばすが、それより早くラウラは射出したワイヤーを回収。空中で身を捻り、次は左の射出口からワイヤーを放つてアンカーを伸ばした顎の巨人の手に打ち込んだ。

一気にワイヤーを巻き取りながら回転したラウラが、顎の巨人の指先から肩にかけてを大きく斬り裂く。

「——いあああああッ！」

「ユミル!？」

血飛沫が舞い、右腕をズタズタにされた顎の巨人が絶叫した。

そんな『顎』の残ったもう片方の腕にアンカーを突き刺して、ラウラが宙を舞う。

「大勢の仲間を殺したその両腕をズタズタにしてから、本体の方を引きずり出してあげますわ。その際に中身の方も腕が無くなりそうですが、構いませんわよねえ!？」

銀色の刃が閃き、顎の巨人の左腕がミンチと化す。

両腕の機能を奪われた顎の巨人が頭から大地へと落下する……ことはなかつた。

振り抜かれたラウラの刃が顎の巨人の左腕に届いていない。左腕の代わりに、クリス

タの握る剣の刃が火花を散らして碎け散る。



ラウラの攻撃をクリスタが防いだのを見て、ユミルの全身から血の気が引く。

両腕を斬り裂かれ、巨人体から引きずり出されかけた事が原因ではない。クリスタが兵団に対して、明確な敵対行動を取ってしまったことだ。

これでクリスタは完全に反逆者だ。処刑されたっておかしくない。

——もし今のが原因でクリスタが殺されてしまったら、自分は一体何のために壁内人類を裏切って鎧の巨人と超大型巨人の味方になった？

クリスタが死んでしまったら、今までの自分の行いは全て水泡に帰してしまう。

そう考えた時、ユミルは巨人体から本体の上半身を引き抜いて叫んでいた。

「やめろクリスタ！ お前が死んじまったら、私の努力が全て無駄になっちゃうだろうが！ 今すぐ私から離れろ！」

突然に本体を露出させて言葉を発したユミルに、鏢迫り合いをしていたラウラとクリ

スタは同時に、しかし全く異なる反応を見せる。

「ユミル、やっぱり理由があるんでしょ!? 鎧の巨人や超大型巨人に、協力しなくちゃいけないかった理由が! ならちゃんと話してよ!」

「総員、全力攻撃! 絶対に『顎』を逃すな!」

クリスタの叫び声が虚しく響く中、ラウラの号令に従って今まで静観していた周囲の兵士が一斉に動き出した。

まるで針のむしろのように顎の巨人に次々とアンカーが突き刺さり、全方位から兵士が一斉に渾身の斬撃を叩き込もうとする。

何人かの兵士の軌道上にはクリスタがいるが、彼らが止まる気配はない。

クリスタごとユミルを斬り裂いて捕獲してやると。例え人殺しとなろうとも、顎の巨人をここで止めるのだと。

その覚悟が彼らの表情がありありと読み取れる。

新兵の少女を斬ってしまうことに、思うところはあるのだろう。

しかしクリスタ1人の命と、これから顎の巨人によつて奪われるかもしれない無数の命を天秤にかけて彼らに躊躇いはない。

「チツ——!」

襲ってくる無数の兵士の姿にユミルは舌打ちし、すぐさま本体を巨人体の中へと戻して

神経系を再接続。

塔から飛び降りて落下を始めると共に、頭上にいたクリスタをまだ無事だった左手で掴んで口の中へと含んだ。

そして身軽さを活かして空中で大きく動き、体中に刺さったアンカーから伸びるワイヤー同士を絡ませる。すると必然的に、攻撃を仕掛けようとしていた兵士たちが立体機動に失敗して次々と吹き飛ぶことになった。

罅迫り合いの相手が突然に消え去った挙句、足場にしていた顎の巨人が動き出したことでバランスを崩したラウラは、ユミルの頭の上から振り落とされながらも咄嗟に立体起動を行なって近くの建物に着地する。

ラウラはクリスタを口に含んだまま遠ざかっていく顎の巨人を見て拳を地面に叩きつけ、苛立ちを露わにしながら近くにいたミカサへと言葉を発した。

「アッカーマン、エレン・イエーガーはどうしましたの!? 二次作戦は!」

「エレンは今、何とか巨人化しようとしていますが……」

歯切れの悪いミカサの態度にラウラは舌打ちしそうになるが、指先で軽く彼女の宝物であるイヤリングに触れることで平静を取り戻す。

「まあ、生きているのならまだマシですわ。アッカーマン、貴女はエレンの元へ向かって彼の護衛をなさい。巨人化出来ないなら、腕でも足でも斬り落として発破かけてやりな

さい。ヤルケル区を抜けられて平地戦になれば、兵士は無力になりますもの」
「了解です！」

もの凄い速さでエレンの元へと向かっていくミカサを見届けると、ラウラは刃毀れしたブレードを換装。

そして周囲の兵士に対して命令を出した。

「フォルカーが負傷して戦線離脱した為、指揮権は私が引き継ぎます。……全力で追撃しますわよ。顎の巨人と、ついでに反逆罪を犯した新兵を何としてでも捕獲なさい！」
「「はっー」」

第一次、第三次作戦が失敗し、第二次作戦は不発。

顎の巨人捕獲作戦は、さらに苛烈なものへと化していく。



エルヴィン団長らと、馬車でヤルケル区を出発してから数時間が経過した。

……馬車での長距離移動、マジで辛え。

舗装されていない道とかも普通に通るからめっちゃ揺れて尻が痛いし、めっちゃ酔う。もしも今、少しでも気を抜いたら俺は間違いなく胃の中のもの全部吐き出すな。

こんな密室空間で吐いたりしたら、潔癖症のリヴァイ兵長にぶつ殺されるから死ぬ気で耐えるけどさ。あとダイナさんの名譽のためにも。

つーか、俺以外は全員平気な顔してるってどうなってるんだよオイ。

「ダイナさん、顔が真っ青じゃないですか。乗り物が苦手なら早く言ってくださいー!」
ぐったりして窓の景色を眺めていると、俺が不調なことに気付いたアリーセがそう
言ってる俺の体を優しく倒す。

並んで座っている時に体を横に倒せば、自然と俺の頭はアリーセの膝の上に乗る訳
で。

「少しでも楽になると良いんですけど……!」

天使か。

膝枕に加えてそつと背中をさすってくれるアリーセ。

一気に気力が戻ってくる。

振動がより伝わってくる気がしないでもないが、取り敢えず俺の尻は救われた。

「オイ、何くつろいでんだ!」

「体調管理の一環って事で、見逃してください」

膝枕が至福すぎて寝かかっていると、向かい合って座っている兵長から厳しい言葉が飛んでくる。

確かにくつろいでいる場合じゃねえが、ラガコ村に着くまでは馬車の中でじつとす
以外にやることはない。なら休んでおくのは悪い事ではないだろう。

と、心の中で言い訳しておく。

まあ、吐きそうな状態で獣の巨人と殺り合う訳にもいかんだろ。

何せ中身のジークは戦士長。

その実力は、鎧の巨人とタイマンして圧勝してしまうほどなのだから。

それでもこのメンツなら、十分に勝機はあるだろうが。

リヴァイ兵長は先の戦いで負った全身火傷が完治しておらず、未だに包帯でぐるぐる巻きの状態だが、本人曰く戦闘に支障はないとか。

全身火傷してても戦えるとか、アツカーマンマジでやべえ。

『原作』では兵長一人で獣の巨人を完封してたし、そこに俺たちのサポートを加えればきつと勝てる。

「……見えてきたな。あれがラガコ村だ」

そこで窓の外を無言で眺めていたエルヴィン団長が、目的地が近づいてきたことを告

げた。

アリーセに支えてもらって上体を起こし、俺も窓の外へと視線を向ける。

まだかなり距離はあるが、確かに遠くに小さく村の影が見える。

どうやら、まだ村人たちは巨人化してないらしい。

何とか間に合つたと、俺が安堵の表情を浮かべたその瞬間だった。

まるで霧が立ち込めるようにして、白いガスのようなものが村を覆っていく。

ゾツツと。

背中に悪寒が走る。

まさかアレ、ジークの脊髄液を気化した——!?

俺の思考を掻き消すように、無数の雷が雲一つない晴天から村を目掛けて降り注いだ。

第27話 ダイナとジーク

晴れ渡る空から、無数の雷光が降り注ぐ。

爆音が鳴り響くと共に蒸気が充満し、その中から巨大な影が次々と姿を現した。

その光景を目にした俺は、咄嗟に窓から顔を出して御者の人に向かって叫ぶ。

「敵の攻撃です！ 馬車を反転させて、ラガコ村から出来るだけ距離を取ってください！」

「お、おうよー！」

俺の叫び声を聞いた御者の人がすぐさま手綱を引き、馬車の進行方向を変更。

ラガコ村を覆い隠す白い霧は、巨人の発する蒸気じゃねえ。

ガス兵器だ。

気化させたジークの脊髓液をばら撒いていやがる。

巨人化能力者である俺やアッカーマン一族の血を引くリヴァイ兵長ならガス兵器の影響は受けないが、他の4人は気化した脊髓液を吸い込めば無垢の巨人に変えられてしまう。

幸い、俺たちの乗る馬車は風上だ。

これだけ距離を取っていれば、風向きが変わらない限りは大丈夫だろ。

……多分な。

ガスの正確な拡散範囲が分からねえから、断言は出来ないけど。

つか、ラガコ村にいるあのガスマスク被ってる奴らってマール人だよな？

いや、マスクをする必要があるって事はエルディア人か？

どちらにせよ、マールの軍人なのに変わりはないはず。捕まえれば『原作知識』になりマールの情報まで得られるかもしれん。

余裕があれば捕虜にしたいが、それは流石に高望みしすぎか。

この世界に来てから5年も経過してるせいで、俺の『原作知識』も所々が抜け落ちてる気がするんだよな。

しかし、『進撃の巨人』は最も好きだった作品で何度も読み返したものだ。

頭に染み付いた『原作知識』はそう簡単には消えない。まだ9割近くは残っている。

……まあ、その欠けた1割が怖いんだが。

ともあれ、まずは獣の巨人の侵攻を退けることに集中しねえと。

こちらの戦力も強大だが、ジークは簡単に負けてくれるほど弱くない。

まずは、無垢の巨人にされたラガコ村の住民から片付ける。その後には獣の巨人を討

伐、捕獲——

「おいダイナ。エルヴィンが呼んでるだろうが」

俺の思考はリヴァイ兵長の声によってそこで途切れてしまう。

直後に首根っこを兵長に掴まれ、俺は窓から身を乗り出していた体勢から元の体勢へと戻された。

再び向かい合って座った俺に視線を合わせ、エルヴィン団長が口を開く。

「なぜ君は先ほど馬車を反転させた？ 攻撃とはあの霧のようなものか？ どうしてあの霧が敵の攻撃だと判断した？」

おお、久しぶりに団長の質問攻めがきたな。

初めて調査兵団と接触した後に行われた情報提供の「取り引き」の時ほど激しくはないけどさ。

なんて地下牢で鎖に繋がれ、朝昼晩と延々と尋問されていた頃を思い返しながら俺は質問に答える。

「団長、あの白い霧のようなものは壁外の兵器である『ガス兵器』です。毒を気化したもの、と認識してもらって構いません。もしあの霧を吸い込んでしまったら、まさに今見たように調査兵団に馴染み深い「通常種の巨人」に変えられてしまいます。『毒』の効果範囲が分からないので、まずは安全を確保すべく距離を取りました」

俺にしてはなかなか上手く答えられた方だと思う。

調査兵団に入ってからでは色々と説明してばかりだったからな。これだけやれば、お世辞にも舌が回るとは言えねえ俺でも少しはマシになるもんだ。

俺の回答にエルヴィン団長は顎に手を当ててしばらく思考すると、窓の外へと視線を向けて、

「あの毒が消えるまでは、白兵戦が不可能という訳か……」

「色々と対策を立てたいところですが、あまり時間は無いようです」

そう言い、俺は指先で窓を指す。

俺の指差した先では、数十体以上の無垢の巨人が揃って俺たちの方を凝視していた。

まあ、この距離なら無垢の巨人の探知圏内だよな。

それでもまだ奴ら……いや、彼らが一斉に襲ってこないのは、彼らを巨人化させたジークが「動くな」と命令を出しているからだだろう。

が、間も無くその命令も解除されるはずだ。

獣の巨人とマーレの目的は、フアルコ曰く威力偵察。

それならせつかく作り出させた無垢の巨人を、いつまでも手元に置いておくわけがない。

さて、どうするか。

数十体の無垢の巨人は、リヴァイ兵長なら単独で駆逐できるだろう。

しかし、あの辺り一帯はガス兵器が充満していて近づけない。

残された手段は「ガス兵器」が効果を失うまで待機するか、無垢の巨人をこちらに誘い出すかの二択。

……待機つてのは無いか。

放置したら数十体以上の無垢の巨人が、ウォールローゼ内部に解き放たれる。

『原作』と同じくらい被害が出てしまう。

それに壁を破壊していかないのに無垢の巨人が壁内に現れたら、ライナーやベルトルトが獣の巨人がやって来たことに気づくかもしれない。

そしたら最悪だ。

顎の巨人捕獲作戦との同時進行のせいで、『鎧』と『超大型』の元で待機している戦力が不足している。

ミケ分隊長らだけでは『鎧』と『超大型』を止められず、獣の巨人との合流を許してしまうかもしれない。

となると、残るは無垢の巨人を誘い出して駆逐するしかない。

ラガコ村の住民には悪いが、彼らを元の姿に戻す手段はないからな。

ジークを食わせたなら戻れるが、それでも助かるのはたったの1人だけ。

それに今回の任務においての最優先は「捕獲」となっている。

「ここでジークを殺すは無しだ。

「皆さん、私が無垢の巨人をこちらに誘き寄せてみます。成功するか分かりませんが……成功した場合、数十体以上の巨人が一斉に襲って来ることになります。準備して下さい」

「な……っ!?!」

再び窓から身を乗り出して放った俺の言葉に、ナイルさんとジャンが絶句する。

並みの兵士の感覚からすれば、巨人は少人数では1体倒すのも難しい相手。数十体を超える数の巨人が同時に襲来すると言われたら、そんな反応するのは当然と言えるだろう。

「つーか、あの数は下手したら3桁に届く規模だしな。

それに対して、エルヴィン団長とリヴァイ兵長は僅かに目を細めただけだ。

彼らの目には驚愕はなく、ただ「本当に出来るのか?」という問いかけが宿っているのみ。

出来る、はずだ。

彼らはジークの脊髄液で巨人化した個体のため、命令権はジークの方が強いだろう。

が、『獣』に無垢の巨人を操る力はない。

巨人化させる、巨人化させたそれらを操るといふ能力は、全て中身であるジークに由

来するものだ。

対して、こちらは同等の力に『女型』が本来備えている力も乗る。

ダイナの力と女型の巨人の『叫び』の力が合わされば、無理やり指揮系統に横入りして、ジークから命令権を一時的に奪い取ることは可能なはず。

「絶対に……やってみせます」

「……分かった。リヴァイ、戦闘の準備だ。まずは壁内に出現した無数の巨人を討伐する。これ以上は決して、民間人に被害は出させない」

「了解だ、エルヴィン」

俺の答えを聞くと、リヴァイ兵長は窓から飛び出して馬車の屋根上に着地する。上から超硬質ブレードを抜刀する、金属同士が擦れ合う独特の音が聞こえてきた。

「エルヴィン、正気か!? 不確定要素が多すぎるぞ!」

「だが、我々には時間がない。このままでは「ガス兵器」によって、壁内の人類全てが巨人に変えられてしまう可能性もあるだろう。そうなる前に、敵対巨人化能力者を何としても捕らえる必要がある」

「ぐ……っ」

どうやら話は決まったらしい。

エルヴィン団長とナイルさんの会話が終わったのを見て、俺は大きく息を吸い込む。

ジークは人間の姿のままでも、脊髄液を摂取させた人間を巨人化させる事が出来る。

なら、俺もわざわざ巨人化しなくとも『叫び』の力を発動できるはずだ。

既に前例はあるしな。

ウォールマリアが陥落した日。

俺が初めて女型の巨人となり、シガンシナ区からトロスト区までマラソンした時のこと。

街に入るために巨人化を解除した俺は、人の姿のまま開閉門へと走った。

俺は門まであと少しのところまで巨人に捕まりかけたその時、止まれと強く念じて叫んだら後ろから迫り来る足音が止まったんだよ。

恐らく、無意識のうちに王家の力と『叫び』の力を発動させたんだろう。

要するに『叫び』の力は人の姿のままでも使える。

無理だったら、その時は巨人化すりゃ良い。

蒸気とガスの中からこちらを凝視する無垢の巨人たちに意識を集中させ、俺は吸い込んだ息を叫び声として吐き出した。

「おおおおおおおおおおおッ!!」

瞬間、見えない何かによって無垢の巨人と自分との間にラインが生まれる。

繋がった——ッ!

『叫び』が届いたと感じた瞬間、俺は目に見えないラインを通して無垢の巨人に命令を送り込んだ。命令を与えられた無垢の巨人の全身に電気のようなものが走ったかと思うと、彼らは俺に向かって一斉に走り出す。

「馬車を走らせるんだ。ただし、ラガコ村からは離れ過ぎないように。それと風向きも留意せよ」

「了解！」

我先にと襲い来る巨人の群れを見たエルヴィン団長が、俺と同じように窓から身を乗り出して御者に指示を出した。

すぐに馬車が走り出し、自然と巨人と鬼ごっこする形になるが……

「追いつかれるのは時間の問題ですね」

「ええ。馬は調査兵団のサラブレッドではない普通の種ですし、6人も人が乗った馬車を引いています。疾走する巨人から逃げ切れるほどの速度はまず出ません。……しかし、今は逃走ではなく駆逐が目的ですから」

「つまり、篩い分けを行うために馬車を走らせたんですね。まずは足の速い個体から倒すために」

あつという間に大きくなる巨人の姿を前に、俺とアリーセは会話をしつつ抜剣。

2人一緒に窓から出て屋根の上に登り、リヴァイ兵長の横へと立つ。

「ダイナ、お前は無理しなくて良い。村人をまとめてノツポにしゃがったクソ野郎の顔を殴り飛ばすための体力を温存しておけ。アリーセ、お前は援護に徹しろ。奴らのうなじは俺が削ぐ」

「了解」

兵長の指示に俺とアリーセが同時に頷くと同時、兵長が疾駆する馬車の屋根上から掻き消えた。

消えた兵長を追って顔を上げれば、真つ先に馬車に追い立ててきた巨人の背後へと回り込んでいる姿が。

全身に火傷を負ってるのに、全く速度が衰えていないとはこれ如何に。

戦慄する俺の目前で、15メートル級の巨人があっさりと命を絶たれた。崩れ落ちる15メートル級の頭を足場に兵長が跳躍し、馬車にアンカーを打ち込むと屋根の上へと戻ってくる。

ここまで、わずか5秒未満。

「今の俺の動きを模倣しろ。馬車から離れず、追い付いてきた奴から順に始末するぞ」

そんな超人的な動きが簡単に真似できるわけねーじゃん！ と思ったが口には出さない。

俺の役目は援護って言われたしな。

近づいてきた巨人の手や眼球を潰すことに専念して、トドメは兵長とアリーセに任せよう。

そこまでズバ抜けた才能がある訳でもない俺には15メートル級を数秒で倒すなんて芸当は無理だが、アリーセなら出来るだろうし。

そう結論付けた俺は、こちらに手を伸ばしてくる巨人の手に右のアンカーを打ち込む。ガスを吹かして一気に飛翔し、指をまとめて斬り落とすと同時に左のアンカーを馬車へ。

少しフラつきながらも、走行中の馬車に舞い戻ることに成功。

俺に指を落とされて動きが鈍った個体を、アリーセが討伐したのを見届ける。

よし、援護くらいなら何とかかなりそうだ。

……まあ、援護すら必要なさそうな気もするけど。

「らアッ！」

刃が閃いたかと思うと、巨人が8体まとめて木っ端微塵となる。

巨人の腕を、肩を、頭を足場にしながら、ガスの消費すら抑えてリヴァイ兵長が空を舞う。

その姿は、まるで弓から放たれた矢の如く。

兵長が通り抜けた軌道上の巨人は全て血と臓物をぶち撒けて絶命し、次々と蒸気と化して消えていく。

—— ツツ!!

ほんの数秒で半数近くの巨人を駆逐した兵長の姿を唾然としながら眺めていたその時、体に電気が流れたかのような痺れが走った。

次の瞬間に生き残っていた無垢の巨人が、一斉に活発化する。

運動性能の上がり方が異常だ。殆どの個体が馬車より速くなりやがった。

チツ、ジークが何かやったな!?

間違いなく今の痺れは、こちらの様子を見ていたジークがこのままだと無垢の巨人が全滅すると察して『叫び』で追加命令を出した余波だ。

運動性能が飛躍的に上がった13メートル級が、もの凄い速さでリヴァイ兵長に向けて手を伸ばす。

並みの兵士どころか、精鋭兵だって避けれるか分からない速さ。

ミケ分隊長やアリーセほどの実力者で、ギリギリ躲せるかといったところか。俺なら無理だ。回避が間に合わん。

そんな速さで伸びる腕に対して、リヴァイ兵長は真正面から突っ込んだ。

螺旋を描きながら飛翔した兵長と、巨人の腕が交差する。

結果、巨人の腕の方が輪切りとなった。

それどころかうなじまで削ぎ落とされ、13メートル級が大地に沈む。

え、えげつねえ……！

調査兵団と敵対する事になったら、マジでどうやってあの怪物兵長を凌げば良いのか。

無垢の巨人の大群で攻撃するのは無意味。

硬質化は間に合わず、巨人化して放つ蹴りや拳は兵長に斬り落としてくださいと四肢を差し出すのと同じ。

ダメだ、勝てるビジョンが全く浮かばねーわ。

……この戦いが終わったら、対兵長の能力やら戦法やら組み立てよう。

俺がそんなことを屋根上で考えられる余裕が生まれるほど、兵長の強さは圧倒的だった。

3桁に迫る数だった巨人が、今や数えられる程度にまで減っている。

「進行方向をラガコ村へ！ 相手は短時間で多くの戦力を失った状態だ。対応する猶予を与えずに捕獲を行う」

巨人の数が大幅に減ったことに加え、ラガコ村を覆い隠していたガスが晴れたのを見てエルヴィン団長が叫んだ。

確かに今ならいける。

ジークはまだ巨人化してねえ。

獣の巨人が現れるより早く、距離を詰めておくべきだろう。

遠距離からラガコ村の家屋やらを投擲されたら、こっちは一気に不利になっちゃう。

ほぼ使わなかった超硬質ブレードを鞘へと戻し、俺は護身用ナイフを懐から取り出して巨人化の用意。

そして、俺たちを乗せた馬車がついにラガコ村へと侵入する。

「アリーセ、念のためにハンカチなどの布で口元と鼻を抑えてください。他の皆さんも」
「ダイナさんは大丈夫なんですか？」

「ええ、私は巨人化能力者ですから」

「アリーセとそんなやり取りを交わした、次の瞬間だった。

「嘘だ……そんなことが、あり得ない…………」

倒壊した家々の奥から、ジーク・イエーガーが呆然とした表情で現れる。

彼の視線は当然、俺に向けられたまま動かない。

「あんたは楽園送りになった。もう十数年も前に。親父と一緒にだ」

目を見開き、体を震わせて、首を振ってそう呟くジーク。

そんな相手を屋根上から見下ろしながら、俺は思考する。

この場において、どう反応するのが最適解だ？

——化け物をも凌ぐ必要に迫られたのなら、人間性をも捨て去ることが出来る人のことだ。

脳裏に、そんな言葉が浮かび上がる。

ああ、そうだよな。

この場における最善手というのは、ジークを出来る限り混乱させて、その間に叩き潰してしまうことだ。

だから俺は最もジークがパニックを引き起こす言葉をよく考え、そして口を開く。

「ええ、そうよ。あなたがマーレに私とグリシヤを告発したことで、私たちは楽園送りになった。あなたはエルディア人みんなのために、戦わなければいけなかったのに。この——役立たず」

「あ、ああ、ああああああっ!?!」

頭を抱え、髪を掻きむしりながらジークが叫ぶ。

『原作』で見た常に余裕を保ち、エルヴァイン団長にも届きうるほどの知略を見せ、圧倒的な力で調査兵団を蹂躪したあのジークと同一人物だとは思えないほど狼狽する彼を見下ろして、俺は小さく呟いた。

「兵長、今です」

俺が言い終わるより早く。

リヴァイ兵長がジークの背後に現れ、大混乱に陥っているジークに向けて刃を振り下ろした。

第28話 『女型』 & 兵士長VS 『獣』 & 『車力』

——死んだはずだ。悪い夢だ。そうに決まっている。あり得ない。楽園送りになった。あの父親と一緒にだ。俺が告発した。もう十数年も前に。アレは偽物だ。他人の空似だ。いや違う。俺のことを知っていた。本物。ダイナ・イエーガー。母親。俺の。まさか父親も生きているのか？ それとも俺が告発したことで楽園送りになった全員が生きていて、俺のことを今も恨んでいるのか？

8 & a m p ; , g l l e a @ m 6 . ^ — — + + . * < ! ! ? ?

／○…／…j%#・a\$j€



まるで何かの限界が訪れたかのように、ジークは頭を抱えて絶叫する。

その背後に現れるのは、超硬質ブレードを振り上げるリヴァイ兵長。

刃が霞むほどの速度で横薙ぎの斬撃が走り、鮮血が舞う。刃の軌道上にあったのは、

ジークの両腕だ。

「ああああああ、っあ、ああ、があああああああっ!？」

「うるせえぞ、髭面野郎。どうせお前もまた生えてくるんだろ? トカゲみてえにな」

赤い線を引いて吹き飛んでいく己の腕を見て絶叫に絶叫を重ねるジークの背中を、リヴァイ兵長が蹴り飛ばす。

両腕を失い、頭から地面に倒れ伏して血の海に沈むジークはピクリとも動かない。

あまりに呆気ない決着。

しかし、覆しようのない決着だ。

今ならまだ腕の傷をトリガーに巨人化できるだろうが、再生が始まれば巨人化が出来なくなる。

そして今のジークに巨人化に必要な「強い意思」は持てない。

戦闘終了。

ジークから視線を外し、俺は何気なくボロボロになったラガコ村を見渡す。

おそらく、殆どの住民が家の中にいたのだろう。どの家も内側から爆散したような形で壊れていた。

『原作』で見た、自分の母親が巨人になったと知った時のコニーの顔が浮かんでくる。

……俺たちが後もう少し早くここに来ていれば、助けられたのだろうか。

ふとそんなことを思った、その時だった。

リヴァイ兵長とジークを挟んで、馬車の対面にある瓦礫の山と化した家。その中で息を潜めている誰かと、俺の視線が交錯する。

村の生き残りじゃねえ。

俺は目が合った相手の顔を、知っていたのだから。

ラガコ村に知り合いはいない。なのに見覚えがある。

それはつまり『原作知識』に色濃く残る人物だということ。

自分の頬をナイフで浅く切り裂いて鮮血を流す、長い黒髪その女性は。

「兵長、後ろです!!」

反射的に叫んでいた。

凄まじい反射神経を発揮してリヴァイ兵長が振り返り、俺も愛用の護身用ナイフで自傷しようとするが、ほんの僅かに間に合わない。

空が眩く輝き、落ちてきた雷が廃屋へと突き刺さる。

轟音と共に爆風が吹き荒れ、俺はリヴァイ兵長や馬車もろとも大きく吹き飛ばされた。それでも空中で何とか姿勢を制御し、新手の姿を確認すべく俺は目を見開く。

蒸気の中から現れたのは、面長の顔の四足歩行の巨人。

『車力』……ッ!?

予想外の不意打ちを受けて頭が真っ白になるが、奥歯を噛み締めて必死に思考を回

す。

何でここに車力の巨人がいやがるんだよ。

『原作』を思い返してみても、ウトガルド城での戦いでピークさんはいない……あ。いた。

ジークが巨大樹の森でリヴァイ兵長に「ガス兵器」の説明をしている時の回想に、車力の巨人は確かにいた。

ちくしょう、やつちまった！

一番やつてはいけないことを、こんな大切な時にやらかしてしまった。

『原作知識』を持ちながら、重要な情報をド忘れするという大失態。思わず拳を握りしめてしまうが、今さら後悔しても何も変わらない。

巨人化の際に引き起こされた風圧でなす術なく吹き飛ばされる俺の前で、車力の巨人がジークの下半身を啜え込んだ。

「クソ……ッ！」

リヴァイ兵長が俺と同じく吹き飛ばされながらも体勢を整え、車力の巨人に向けてアンカーを放つ。だが、射出したワイヤーは風圧によってあらぬ方向へと飛んで行ってしまふ。

そして、後退を始める『車力』。

こんなチャンスはもう二度と訪れない。

ここで逃したら、ジークはパラディ島に対して高い警戒心を抱くはずだ。なら、次に行われる攻撃はさらに苛烈なものとなる。

マールに本気で攻められたら、俺たちに勝ち目はねえ。アリーセも死ぬ。

そんな未来は許さない、絶対に逃がさん！

大地に手について、受け身をとって転がりながら着地。

護身用ナイフで手のひらを斬り裂いて自傷を行い、「獣の巨人を捕らえる」という意思の元、俺は巨人化すべく顔を上げる。

すると、同じように傷口から稲妻を迸らせるジークと目が合った。

「クサヴァアーさん、見ててくれよ！俺はもう一度母さんを殺して、全てのエルディア人をこの残酷な世界から救う未来を作るから！」

「アリーセの未来を奪う安楽死計画など、私は認めない！^{オレ}未来を作るのは私たちだ！」俺が血が流れる拳を握り締め、ジークが切断された両腕を掲げる。

直後、空から2つの雷光が交錯しながら落ちてきた。

傷口が目に見えない「道」と繋がり、巨人の血肉と骨格が刹那の間に生み出されていく。本体に巨人の肉が癒着し、神経系が接続。

同タイミングで巨人化した俺とジークは、膨大な量の蒸気を放出しながら向かい合

う。

互いに巨人の力の真価を引き出すことが出来る、王家の血を引く者。

巨人化能力の練度は、おそらく同等かジークが僅かに上回ると思われる。

俺が15メートル級、ジークが17メートル級とサイズも相手が有利だ。

さらに向こうには『車力』も控えている。

しかし『女型』と『獣』なら女型の巨人の方が戦闘向き。『車力』の持久力は凄まじいが、『原作』を見る限りじゃそこまで戦闘能力が高くはないだろう。

加えて至近距離で向かい合っているため、奴は得意の投擲攻撃が使えない。

それに、こちらには作中最強たるリヴァイ兵長とエルヴィン団長ら精鋭兵がいる。

戦力は、ややこちらが有利か。

「チツ、どいつもこいつも直ぐにデカくなりやがる」

拳を構えて『獣』と『車力』の出方を窺っていると、舌打ちしながらリヴァイ兵長が俺の頭の上に飛び乗った。

兵長は吹き飛ばされた際に折れたと思われる刃を捨て、新しい刃を鞘から引き抜きぬく。

そして口を開いた兵長から、

「ダイナ、お前は奴らの動きを止めることに集中しろ。中身は俺が引き摺り出す」

という心強いお言葉を頂いた。

敵に回したら笑えないが、味方となると本当に頼りになるな。

『原作』で何度も『獣』を圧倒したりヴァイ兵長がいる今なら、勝機は十分にある。

ここで『獣』と『車力』を纏めて潰す。

ジークとピークを捕獲して情報を吐かせた後に、信頼できる人物を俺の脊髄液で巨人化させて食わせれば良い。

妥当な相手は、フォルカーとラウラか。

フォルカーは巨人化能力者である俺にも幾らか心を開いてくれてるし、ラウラはアリーセをダシにすれば味方になるだろう。

そうすれば俺とアリーセの陣営は、『女型』、『獣』、『車力』の3つの力が手に入る。硬質化能力を発動。

両拳が青白く輝く膜に覆われたのを確認。

行くぞ、獣の巨人。

俺は獣の巨人に向かって大地が陥没するほどの力で右足を踏み込み、体を捻ってエネルギーを腰、肩、腕、拳へと伝えていく。

全体重を乗せた渾身の右ストレートだ。

あまりの威力と速度に衝撃波すら生み出すそれを、俺は容赦なく獣の巨人の顔面へと

放つ。

しかし、ジークは咄嗟に首を傾けることでこれを回避。カウンターの拳が俺の顔を狙って飛んでくる。

すぐさま膝を曲げて腰を落とし、紙一重で躲す。元から俺と『獣』には2メートルの身長差があるので、腰を落とせば比較的簡単に拳打は避けられるんだよな。

体がデカいってのは確かにアドバンテージだが、何のデメリットもない訳じゃない。拳を掻い潜るようには避けた俺は、さらに足を踏み出して前へ。

獣の巨人と密着するほど近づき、下顎を狙ってアッパーを繰り出す。『獣』は仰け反ることで回避に成功したが、敵がゼロ距離にいる状態で体勢を崩すのは悪手だろう。

右肘を硬質化させ、渾身の肘打ちを獣の巨人の鳩尾へと叩き込む。

肋骨がまとめてへし折れる凄絶な音が鳴り響くと同時、獣の巨人の巨体が吹き飛んだ。

このまま追撃でトドメを――

「オオオオオオッ!!」

「ッ!?!」

そこで、今まで沈黙していた車力の巨人が大口を開いて真後ろから飛びかかってきた。

ギリギリのところまで体を反転させ、『車力』の口内に硬質化した拳を叩き込んでやる。歯が砕け、顔をひしゃげさせて、カウンターを受けた車力の巨人が大地に沈んだ。

倒れ込んだ『車力』の腹を蹴り飛ばし、獣の巨人と同じく吹き飛ばす。

「これが巨人化能力者同士の戦いか……!?!」

「こんなの、兵士の出る幕じゃねえぞ……!」

ひとまず最初の攻防を終えたところで、吹き飛んだ馬車から出てきたナイルさんとジャンの掠れた声が聞こえてきた。

「どうやら、今まで馬車の中にいることで俺たちの戦いの余波から身を守っていたらしい。援護しようと出て来たのは良いけれど、巨人同士の戦いを見て絶句してるってところか。」

「支援しようとしてくれるのは嬉しいんだが、下手に動かれたら巻き込んでしまいそうで怖いんだよな。」

スケールの的には、人間と人間が喧嘩しているところを虫が飛び回るようなもんだし。まあ、1つ例外を挙げるなら……

「——ッ!」

俺に与えられた傷を再生して、立ち上がろうとした『車力』の両手両足がまとめて千切れ飛んだ。

言わずもがな、躊躇なく3体の巨人が入り乱れて戦う場に飛び込んできたリヴァイ兵長だ。

周囲に家はあるが、その大部分は瓦礫と化していて立体物として機能していない。要するにほぼ平地なんだが、どうしてこの人は知性巨人を圧倒してるんだろうか。

俺が援護する必要もなく、攻防不能に陥った車力の巨人のうなじにリヴァイ兵長が迫る。

決まっと思ったその瞬間、兵長の元に無数の巨大な何かが飛来した。咄嗟に『車力』のうなじを狙っていた兵長を驚掴みにし、俺は自分の体を盾にして庇う。

あつづ……つ!?

まるで鈍器で殴られたかのような重たい衝撃が、後頭部と背中中に走った。

背骨が折れた、いや、まだヒビが入った程度か。これならすぐに再生できる。

兵長を解放しながら、すぐに傷の修復を開始。

つーか、今の何だ。

獣の巨人が何かを投擲しやがったのか？

そう思って獣の巨人が吹き飛んでいった方向に視線を向けると、そこには生き残っていた無垢の巨人を引き裂き肉塊を作っている『獣』の姿。

あの野郎、ラガコ村の住人を『無垢』にした挙句にバラバラにして武器にしてやがる。

無垢の巨人はうなじさえ傷つかなければ無限に再生するので、実質獣の巨人の残弾は無限だ。

胸糞悪い戦法だが、効果的なのは間違いないねえ。

「ダイナ、硬質化で壁を作れ！」

獣の巨人が投擲モーションに入ったのを見て、リヴァイ兵長が俺の手の中で叫んだ。

兵長の指示に従い、俺は兵長がいるのとは反対の手のひらで地面に触れて硬質化能力を発動する。

まるで散弾のように、獣の巨人から無数の肉塊が放たれた。

しかしそれらは俺と兵長には届かず、瞬時に形成された高さ20メートルの長方形型の壁にぶち当たって蒸発していく。

『な……っ!?!』

『女型』が『戦鎚』のような能力を使うのは流石に予想外だったらしく、獣の巨人の動きが止まった。

その隙を、俺もリヴァイ兵長も見逃さない。

「右方に2つ。20メートル間隔で「塔」を建てろ！」

イエッサー！

兵長に命じられるままに、俺は立体物として使用できる「塔」を打ち建てる。

「塔」が建つと同時に、兵長がそれを利用して獣の巨人へと突っ込んだ。すぐに獣の巨人も肉塊を投擲して迎撃を試みるが、兵長は「塔」を盾にして距離を詰めていく。

このまま援護のみで終わるのもアレだ。

俺も攻勢に出るか。

自分で作り出した壁を少しだけ壊し、巨人の手のひらサイズの瓦礫を入手。

それを握りしめて、俺は大きく振りかぶる。

投擲のモーション。要するに意趣返し。

兵長の迎撃に集中するあまり、俺に対する警戒が疎かになっていた獣の巨人の顔面を目掛けて全力で瓦礫を投げた。

当たると一瞬前に獣の巨人は飛来する瓦礫に気づき、腕で防ぐが、その腕を兵長が切り落とす。

『いけええ——ッ!!!』

また腕を斬り落とされた獣の巨人が、叫びの力を発動させた。

「道」を通じてジークの意思が10体の無垢の巨人に伝わり、彼らは一斉に兵長を狙って走り出す。

が、甘い。

『動動くくおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

今度は天を仰いで俺が叫んだ。

ジークの意思を上書きするように俺の意思が「道」を通じて無垢の巨人に刻まれ、彼らの動きがピタリと止まる。

これでリヴァイ兵長を妨げるものは何もない。

獣の巨人の肩にアンカーが突き刺さり、立体機動装置がガスを吹いた。

高速回転することで銀光の輪と化した兵長が『獣』のうなじを削ぎ落とし、ジークを強引に引き摺り出す。

……その筈だった。

ダンッ、ダンッ、ダンッ、ダンッ!! と。

重低音が連続して響いた。

ジークによる投擲とは比べ物にならないほどの速度で、人間大の何かがリヴァイ兵長を狙って放たれる。

その『何か』が巨大な鉄塊で、重低音は発砲音だと俺が気付いた時には手遅れだった。

咄嗟に回避行動を取った兵長だが、いくら怪物染みた彼でも流石に音より速く放たれる人間大の銃弾までは躲せない。

直撃こそしなかったが、無数の弾丸が兵長の体や立体機動装置に掠った。

立体機動装置が空中でバラバラとなり、装備を失った兵長が地に落ちる。

俺が走ったんじゃ間に合わねえ！

兵長に最も近い無垢の巨人に向けて命令を出し、全力疾走させて落下予測地点へ。兵長が大地に激突する直前で、何とかキャッチに成功した。

が、安心している暇などない。

リヴァイ兵長を握りしめている無垢の巨人をこちらに呼び寄せながら、俺は車力の巨人を睨みつける。

壁の中にそんなもん持ち込んでんじやねえぞ、クソツタレどもが……っ！

頭部を覆う鋼鉄の仮面を被り、巨大な大砲を背負う『車力』。

そして車力の巨人の背中で、巨大な大砲を操る数人のマーレ人。

——巨人を木っ端微塵にしてしまう超威力の大砲の砲門が、静かに俺へと向けられた。

第29話 起死回生の一手を

車力の巨人に背負われた巨大な大砲が、耳をつんざくような轟音と共に人間大の砲弾を俺に向かって射出した。

とは言うものの、当然ながら俺に砲弾を視認するような馬鹿げた動体視力はない。

砲弾の大きさが分かったのは、砲台から放たれたソレが俺の足元に着弾したからだ。巨人化した俺が吹き飛ぶほどの爆発が引き起こされ、爆炎が体の肉を焼く。

見た目で分かってたが、マジもんの兵器じゃねーか……！

後方へ跳躍して炎から逃れながら、俺は火傷した箇所を再生しつつ奥歯を噛み締めた。

どうする、どうすれば良い？

リヴァイ兵長は立体機動装置を破損してしまい、行動不可能。

しかも獣の巨人は未だに健在だ。回復を終えたジークが再び投擲攻撃を開始したら、その時こそ本当の終わりとなる。この砲撃に加えて投擲とか、どうやっても対処出来ん。

俺の考えが纏まるより早く、再びの巨大な大砲の先端が俺に突きつけられる。

咄嗟に自分の前に硬質化能力で「壁」を形成して盾にするが、あっさりと砲弾に打ち砕かれてしまった。

クソツ、硬質化能力でも簡単には防げねえのか。

ただの瓦礫と化した「壁」と共に吹き飛ばされ、俺は水切りの石のように地面の上を何度もバウンドして転がる。

何とか両腕で頭部を庇い、うなじを硬質化して、勢いに逆らわずに吹き飛ばされることでダメージを軽減。

チィ……ッ、このままじゃジリ貧で負けちまう。

落ち着け、そして現状を正確に把握しろ。

何としてでも勝ち筋を見つけろよ、俺。

現在、俺、『車力』、『獣』は50メートル以上も距離を開けて向かい合っており、ちょうどトライアングルを描く形だ。

獣の巨人も車力の巨人も遠距離攻撃が主体なので、これは圧倒的に俺が不利な状況と言える。俺も投擲攻撃は行えるが、流石に獣の巨人ほど高い投擲技術はねえ。

野球とか体育の授業でくらいしか経験ないしな。

あんまり距離が離れると、そもそも命中しない可能性の方が高くなる。

理想はクロスレンジの殴り合いに持ち込むことだが、相手もそう簡単には接近させて

くれない。

どうやって距離を詰めたものか。

俺の思考を遮るように、ガシャンッ！ と音を立てて砲台が動く。

リロードが早すぎるんだよ、こんちくしょう……！

横幅は最低限に。高さも膝をついた俺がギリギリ隠れる程度。

その代わり厚さを5メートルにして防御力を底上げし、またまた「壁」を作り出す。

こんなものは時間稼ぎにしかないが、何にもしないと巨人体ごと本体まで砲弾でミンチにされちまう。

ダメだ、焦りで良い案が思いつかねえ。

よほど賢い人間でもなければ、起死回生の策なんてポンポン出てくるわけがない。

——そう、賢い人間でもなければ。

俺の腕のあたりにアンカーが突き刺さる感触。

続いてもう聴き慣れたガスの噴出音が聞こえ、左肩に誰かが着地した。

少しだけ眼球を動かして肩の上を見てみると、そこにはエルヴィン団長の姿が。

団長が動いたということは、つまり何か策を思いついたということ。

すぐさま俺は本体の上半身をうなじから出す。

車力の巨人が側面に回り込んでくる心配はない。

「奴は未だにリヴァイ兵長に切断された手足が完治しておらず、まともに動いていないからな。」

「壁」を維持していれば、砲撃は受けずに済む。

「そのまま「壁」で砲撃を防ぎながら聞いて欲しい。これより作戦を告げる。……リヴァイは？」

「……だ」

俺が答えるより早く、無垢の巨人の手の中からリヴァイ兵長が俺の肩の上へと飛び降りてきた。

おっと、見間違いか？

兵長を乗せていた『女型』の支配下の無垢の巨人は15メートル級で、俺の『女型』は膝をついている状態だ。立っている15メートル級の手の上から『女型』の肩まで、高さ5メートル以上もあつた気がするんですが。

立体機動装置も無しにその高さから飛び降りて、何で平然としているんだこの人。骨密度とかおかしいだろ。

普通なら絶対に骨折だ。

「リヴァイ、継戦は可能か？」

「体力的には問題ねえ。だが、立体機動装置がこのザマだ。今の俺は囿にもならねえだ

ろうよ」

エルヴィン団長の問いかけに、リヴァイ兵長は腰にぶら下がっている立体機動装置の残骸を指差してそう返す。

だが団長はむしろ笑みすら浮かべて、

「いや、動けるのなら問題ない」

これが人類の矛盾である調査兵団を率いる者の貫禄か。

まだ作戦内容も聞いていないのに、何とかなるのではないかと思ってしまう。

要するに安心感がすごい。

硬質化能力で「壁」を補強して砲撃を防ぎつつ、時間稼ぎに徹しながらエルヴィン団長の口から紡がれる言葉を必死に頭に叩き込む。

1つでも手順を間違えたら、連携が崩れて皆まとめて即死だ。

博打みたいな賭け要素の強い作戦だが、確かにこのくらい無理しないとこの劣勢は打破できないだろう。

腹を括れ。

アリーセを守りたいのならば、必死でやる以外に道はない。

「——以上が作戦だ。ダイナ、可能か？」

作戦を言い終えたエルヴィン団長からの、端的な問いかけ。

かなり無茶振りをされたが、出来るか出来ないかで言えば出来るだろう。

……多分な。

正直やってみたいと分らないが、確率はゼロじゃない。

「ええ、過去に似たようなことをやった事があります。余力が残るかにもよりますが……」

俺が肯定を示すと団長は無言で頷いた。

そろそろ『獣』と『車力』が再生を終えるだろう。

作戦会議は終了だ。

「また最後はコイツ頼みか」

「しかし、我々が勝つには彼女に——『諸刃の剣』に縋るしかない」

「情けねえ話だ」

リヴァイ兵長はそう言うが、お互い様だろう。

リヴァイ兵長の戦闘力とエルヴィン団長の知略がなければ、俺は『獣』と『車力』を退けられないのだから。

例えば巨人化能力者だとしても、1人で出来ることは本当に少ない。

「これより、知性巨人同時討伐作戦を開始する！ 公に……否、己が信ずるものに心臓を捧げよ!!」



本体をうなじの中へ。

神経系を再接続。

残された力を女型の巨人へと注ぎ込み、俺はゆっくりと立ち上がる。

ほぼ同時に、獣の巨人と車力の巨人が雄叫びをあげた。

完全に再生を終えた2体の敵が、俺たちを撃滅せんと動き出す。

「ダイナ!!」

新品同様の立体機動装置を装備したリヴァイ兵長が、鞘から超硬質ブレードを抜き放って叫んだ。

右足から大地へと力を送り、硬質化能力を発動。

俺と獣の巨人との間に、5メートル間隔で、高さ15メートルの「塔」を次々と打ち立てていく。

全ての「塔」が完成するよりも早く、エルヴァイン団長とリヴァイ兵長が「塔」を利用

して獣の巨人へと突っ込んだ。すぐ後には、ナイルさんとジャンが続く。

——まず始めに女型の巨人の力で立体物を建設。立体物を利用し、私とリヴァイ、ナイル、ジャンの4人で獣の巨人に攻撃を行う。

いきなり獣の巨人へと突貫した4人に向けて『車力』の砲台が火を噴くが、俺の指示に従って動いた無垢の巨人が身を挺して4人を庇った。

血肉を撒き散らして無垢の巨人が爆ぜるも、リヴァイ兵長らは無傷。

獣の巨人への接近に成功、『獣』の周囲を旋回する。

すぐさま次弾を放とうとしたマーレ軍人だが、そこである事に気付いて動きを止めた。

そりゃ撃てねえだろうよ。

今砲撃したら、味方である獣の巨人まで巻き込んでしまうもんな。

——我々は接近に成功した時点で、砲撃を受ける心配がなくなる。後はリヴァイを中心に獣の巨人を仕留めるだけだ。

ひとまず獣の巨人は封じ込めた。

これで俺とアリースは、車力の巨人にだけ集中すれば良い。

『車力』の注意が逸れた隙について、俺は一気に「壁」の後ろから飛び出して走り始める。

——次に、ダイナは車力の巨人の周囲を移動。敢えて敵の砲撃を誘う。砲弾を躲すのは至難ではあるが、不可能ではない。砲身から着弾地点が予測でき、『車力』の背中に乗る敵の動きで発射のタイミングが予測できるだろう。

王家の血筋の力を発動し、女型の巨人の力を解放。

底上げされた運動能力を以って、砲弾を紙一重で回避していく。

と言っても簡単ではないし、全てを避けるなんて真似は不可能だ。躲しきれなかった砲弾が体を掠めて肉を抉り、至近距離で起きた爆発でさらにダメージを受ける。

だが、それで構わない。

——敵は巨人の力を使い、「無知性巨人が跋扈する壁外」を通って壁内へと侵入した。壁の外の人間でも無知性巨人に襲われる以上は、行動が制限されるほど多量の物資は持ち込めないだろう。つまり、敵の「残弾」はそこまで多くないはずだ。

少しずつ、だが確かに連射の速度が落ちていく。

恐らく闇雲に撃ち続けられるほど余裕がないことに気づいたマーレ軍人たちが、残弾を気にし始めたのだろう。

人間の基本的な心理だ。

物が急激に少なくなると、その消費を抑えようとする。

お金に例えれば分かりやすいだろう。高価なものを無理して買った後は、節約を考え

るようになるのと同じだ。

ここまで、全て団長の読み通り。

俺の力が尽きて、巨人化能力が強制解除されるのが早いのか。

残弾が尽きて、砲台がただの重りになるのが早いのか。

そんな消耗戦が始まる。

尤も、馬鹿正直に付き合ってやる気など毛頭ないのだが。

——敵が残弾を気にする素振りを見せたら、硬質化で自分を囲むようにして円柱状の建物を形成。その中に閉じこもるんだ。

残された力を振り絞るようにして、俺は円柱状の建物を建設する。

ここから先は博打だ。

成功するかどうかは、半分以上が運に左右される。



「くそつ、売女の末裔どもがあああああッ！」

円柱状の建物に閉じこもった女型の巨人に向けて、罵声を浴びませながら砲撃を行う
マーレ軍人。

こんな筈ではなかった。

今回のパラディ島遠征は獣の巨人を中心に行う「威力偵察」が目的であり、こんな大規模な戦闘は予想の範囲外という他ない。

ジークの脊髓液を含むガスで無垢の巨人を生み出した瞬間に、歯車が狂い始めた。

ジークが命令を出した訳でもないのに無垢の巨人は一斉にあらゆる方向へと動き出してしまい、そして謎の機械で飛び回る人間たちによってあつという間に蹴散らされたのだ。

マーレの人間からすれば、白兵戦で巨人を仕留めるなど信じられないことだ。

そもそも、人が飛び回ることにすらあり得ない。

見たこともない兵器に驚いている間に、あっさりと巨人軍団の8割が駆逐されてしまった。

だが、それだけでは終わらない。

無垢の巨人を駆逐した一団の1人を目にした瞬間に、作戦の要とも言える存在のジークがパニツクに陥ったのだ。

マーレ高官からも一目置かれるあの驚異の子が、巨人化も出来ずに敵に捕まってしま

うという事態。

もしも咄嗟にピークが倒壊した家屋に隠れるように指示を出していなかったら、あの場でマール軍人の全員がジークと共に捕まっていたことだろう。

対巨人用の砲台をもって来たピークを「心配症」と嘲笑った者は、彼女の判断力の前に何も言い返すことができなかった。

そして始まる、パラディ島の悪魔との戦い。

『車力』がジークを見事に取り戻し、ジークが巨人化できるほど冷静さを取り戻した時は、大部分のマール軍人が勝利を確信した。

あの空を飛び回る機械は確かに凄まじいが、九つの巨人を打ち倒せるほどではないだろうと。

そんな考えは、獣の巨人に呼応するようにして現れた女型の巨人を見て消し飛んだ。奪われていたのだ。

マールの誇る「7つの巨人」の1体が、パラディ島の悪魔に。

その衝撃はマール軍人たちを硬直させるには十分であり、その間に『獣』と『車力』は女型の巨人と黒髪の兵士の前に倒れ伏していた。

これを絶望と言わず何と言おう。

女型の巨人と黒髪の兵士の注意が『獣』に向いている僅かな時間に何とか車力の巨人

を復歸させる事は出来たが、それでも戦況は芳しくない。

砲台は元より使う予定がなかったため、持ち込んだ砲弾の数もかなり少ないのだ。

閉じこもった女型の巨人を引きずり出す程度の砲弾は残っているが、トドメを刺せるかは怪しいところ。

「何なんだ、あの女型の巨人は?! まさか『戦鎚』まで食っているのか?!」

「冗談言うな! 『戦鎚』はタイバー家が保持しているんだ、パラディ島の悪魔に奪われる訳がない!」

「なら、あの能力は何なんだ!? 完全に『戦鎚』の能力じゃないか!」

「俺が分かる訳ないだろう!」

互いに怒声をぶつけ合いながらも、円柱状の建物に向かって砲撃を行う。

5発目を撃ち込んだところで、ピシツという音と共に亀裂が走った。

「やったぞ、後1発だ!」

「島の悪魔にマールレの鉄鎚をくれてやれ!」

駄目押ししの6発目を放ち、女型の巨人が作り出した建物に風穴が開く。そしてその穴の奥に見えた『女型』の顔面に、トドメの7発目を叩き込んだ。

うなじごと頭部が吹き飛び、女型の巨人が瓦礫と化して大地へと倒れこむ。

「っしやああ!」

「島の悪魔に裁きを下したぞー」

車力の巨人の背中に乗っていたマーレ軍人たちが、拳を突き上げて歓声を上げる。

ピークも敵勢力の撃破を確認して、大きくため息をついた。

残るは謎の兵器を身につけた、獣の巨人を襲う4人の悪魔のみ。

すぐにジークの援護に向かおうと車力の巨人を反転させたピークは、そこで違和感を感じて動きを止める。

今、何かがおかしかった。

本来起きるはずの何かが、起きなかったような。

違和感の正体を探るべく、ピークは女型の巨人の死骸へと視線を向ける。

別に、何もおかしいことはない。

うなじごと頭部を吹き飛ばされた女型の巨人の中身は、間違いなく死んでいるだろう。

瓦礫と化した女型の巨人もそれを証明するように、ピクリとも動かな——

『……………ツ?!?』

——瓦礫と化した？

あり得ない。

巨人の肉体は、核となる能力者はうなじ部位が破壊されると蒸気と共に消滅していく

はずだ。

なのに、『女型』の死骸は消えない。

いや、そもそもアレは死骸ではない。

アレは女型の巨人の形をした、硬質化能力で作られたただのハリボテだ。

『皆、気をつけて！』『女型』の中身がまだ——』

咄嗟に警告を発したピークだが、その言葉が最後まで紡がれることはなかった。

真上。

そう、車力の巨人の真上を、2人の女性が舞っている。

片方はあの謎の兵器を腰につけた、榛色の瞳をした短髪の人物。もう片方は綺麗な金髪をポニーテールにし、手に護身用ナイフを握りしめた人物。

金髪の方は、腰に例の機械を装備していない。

「団長曰く、敵の砲台の仰角はおよそ65度。真上に向けては砲撃できない」

「はい。私たちの勝利です、ダイナさん」

榛色の瞳の女性が、抱えていた金髪の女性を車力の巨人へと放り投げる。

すぐにピークは全力でその場からの離脱を試みるが、一步遅かった。

金髪の女性がナイフを自分の白い肌に突き立てた瞬間、雷光が閃いて巨人が姿を現わす。

形成された女型の巨人の下半身はなく、上半身のみ。

しかしその手には、硬化化で作られた8メートルを越す長大な槍が握られていた。

「——ッオオオオオオオオオ!!」

女型の巨人が雄叫びを上げ、落下の威力を乗せて車力の巨人に槍を突き立てる。硬化の槍は砲台ごと『車力』の肉体を貫き、まだ残っていた砲弾が大爆発を引き起こした。

ゼロ距離で爆発を受けた車力の巨人が木っ端微塵と化す。

——そして、ラガコ村での戦いに決着がついた。

第30話 『進撃』 VS 『顎』

——先の第57回壁外調査で、我らを襲った鎧の巨人、超大型巨人、そして顎の巨人の正体が判明した。

朦朧とする意識の中、エレンの脳内で巨人化能力者捕獲作戦実行前夜の記憶が蘇る。

旧調査兵団本部の古城にある一室。

幼馴染であるミカサやアルミンと共にそこへ呼び出されたエレンに向かって、エルヴィン・スミスは開口一番にそう告げた。

第57回壁外調査で無念にも敗走した直後に飛び込んできた朗報だ。思わず笑みを浮かべたエレンだったが、そんな喜びの感情はエルヴィン団長の次の言葉で消されてしまう。

——我ら調査兵団が誇る『諸刃の剣』……ダイナによると、敵性巨人化能力者は104期訓練兵の中に潜んでいるらしい。

104期。

つまりエレンの同期だ。

トロスト区で共に戦った仲間たちの中に、裏切り者が存在する。信じられないと首を

振るも、現実には変わらない。

そして狼狽するエレンに、『壁』を破壊して人類の大量虐殺を行った敵の名前が告げられた。

——彼らの名は……

エルヴィン団長が口にした名前に、エレンは衝撃のあまり硬直してしまふ。

特に鎧の巨人と超大型巨人の正体は、104期の中でもエレンと特に仲の良かった2人だった。

自然と、彼らとの思い出が蘇る。

「な、何かの間違いでは……。証拠があるんですか!？」

「いや、確たる根拠はない。しかし情報源がダイナだ。『敵性巨人化能力者』と同じ壁外出身の彼女なら、敵の正体を知っていてもおかしくはないだろう。何より、彼女は隠し事をするが嘘はつかない人物だ。……尤も、彼女が嘘についていることに我々が気づいてすらない可能性も無くはないが」

思わず立ち上がって叫ぶエレンに、エルヴィン団長はそう切り返す。

確かに彼女が今まで齎らした情報に、大きな間違いはなかった。

そのほとんどが紛れのない真実であったし、調査兵団にとつて非常に重要なものだった。

ダイナが情報源というだけで、信憑性は高いだろう。

「でも、だからって、もしその3人が敵じゃなかったら……」

「その時は、3人の疑いが晴れるだけ」

「そうだったら3人に悪いとは思うし、今度はダイナさんと敵対することになるけど……。僕らはもう、ダイナさんの情報が正しいことに賭けるしかない。何もしなければ、エレンが中央の奴らの生贄になるだけだ」

戦う以外に道はない。

エルヴィン団長ではなく幼馴染2人に両側からそう言われ、エレンは拳を握りしめたまま椅子に座った。

せめてもの配慮として最も付き合いの浅いユミルの捕獲作戦に割り振られることになったが、それでも――

「……ン、……レン………エレン！」

「……は……」

聞き慣れた声に名前を呼ばれて、エレンの意識が回想の中から浮上する。

遠くから聞こえてくる怒号。破壊音。血の匂い。全身を駆け抜ける激痛。

それらを感じながら強引に目を開けると、自分の顔を覗き込む黒髪の少女が視界に飛び込んできた。

「ミカサ……?」

「エレン! 良かった! アルミン、エレンの意識が戻った!」

「……! エレン、大丈夫か!」

安堵の表情を浮かべて、すぐにアルミンを呼ぶミカサ。

どうやらもう1人の幼馴染も近くにいたらしく、すぐに視界の中にアルミンの姿が映った。

「エレン、今の状況を正確に把握できているか!? 記憶に混濁は……」

ミカサと同じく安堵の表情を浮かべていたアルミンだったが、すぐに焦燥に駆られた様子でエレンの肩を掴む。

そのまま何かを叫びながら体を揺さぶってくるが、エレンは頭がボーンとしていて幼馴染がなにを言っているのかイマイチ分からない。

「アルミン離れて。怪我人を無闇に動かすのは……」

「ああもう、焦れたいですわね! イエーガー、いつまで寝ぼけているつもりですの!」

ミカサが自分からアルミンを引き剥がしたと思えば、また誰か別の声が聞こえてきた。

視界に3人目の姿が映る。

エレンの巨人化能力の師匠であるダイナよりは明るい金髪に、格闘術の師匠であるアリーセよりは長めの髪をサイドテールにした女性。

第57回壁外調査の際に、巨大樹の森で顎の巨人と激闘を繰り広げていた『第二特別作戦班』に所属する兵士の1人だ。

名前は確か、ラウラ・ローヴァイン。

最前線で顎の巨人と戦っているはずの彼女が、なぜ自分のところにいるのか。

「ミカサ、アルミン、ラウラさん……？ 俺はどうなって……」

「二次作戦で『顎』の巨人を地下に誘い込むことに失敗した貴方は、無様にも瓦礫の下敷きになったのですわ。そして同期と戦う覚悟が出来ず巨人化に失敗した挙句に、瓦礫に下半身を潰された痛みで気絶していた。自分の現状は理解できましたか？」

ラウラにそう言われ、エレンは徐々に作戦開始直後のことを思い出す。

アルミン、ミカサ、クリスタと共に『憲兵から逃げるのに協力してくれ』とユミルに頼み、地下に誘い込もうとしたが、その途中でこちらの意図に気づかれて巨人化されてしまったのだ。

その衝撃でユミルを捕獲しようと近場で待機していた兵士共々エレンは吹き飛ばされ、一次作戦は失敗。

すぐにエレンも巨人化して『顎』の捕獲を行う二次作戦に移行しようとしたが、何度自傷行為を繰り返しても巨人化出来なかった。

そうして失敗を重ねるうちに、自分は気絶してしまったらしい。

「ユミルは!?!」

ようやく混濁していた記憶が回復し、意識がクリアになったエレンは下半身の激痛も忘れてかろうじて動ける上体を勢いよく起こした。

「『顎』ならクリスタを捕らえて逃走してますわ。既に三次作戦も失敗しています。このままでは、敵はヤルケル区外に出てしまうでしょうね。貴方が無能なせいで」

「……ここでエレンを追い詰めることに、意味はありません!」

冷たい瞳でエレンを見下ろして罵倒するラウラにミカサが食ってかかるが、彼女はその怒りをアツサリと受け流して言葉を紡ぐ。

「いいえ、アツカーマン。イエーガーが巨人化に失敗したことで、より多くの死傷者が出た事実は変わりありません。もしイエーガーが速やかに二次作戦を実行出来ていれば、死なずに済んだ兵士もいたでしょう」

エレン・イエーガーのせいで、死んだ命がある。

そのどうしようもない事実が、どこまでもエレンを打ちのめす。

ラウラはしやがみ込むと、俯いて歯をくいしばるエレンと視線を合わせた。

「貴方はなぜ、調査兵団に入ったんですの？」

「——は？」

突然の質問に、思わず間抜けな声を出すエレン。

ラウラの意図は全く分からないが、エレンは出された問いに答える。

「巨人を駆逐して、ミカサやアルミンと一緒に外の世界を見るためです」

それは幼い頃から「あの日」を経ても変わらない、エレンの夢。

塩の湖、炎の水、氷の大地、砂の雪原……。

アルミンの祖父が憲兵に隠して持っていた「外の世界」について記述されたその本を見て、調査兵団に入りたいという思いがより強くなったのだ。

そんなエレンの夢を聞き、ラウラはゆっくりと口を開いた。

「ですが、貴方の夢は叶いませんわ。このまま顎の巨人を逃せば調査兵団は解体され、貴方は中央に引き渡された後でバラバラに解剖されて、外の世界を何一つ見れないまま死ぬ。そして『壁』は再び敵に破壊され、人類は絶滅するでしょう。調査兵団が解体された時点で、あの女——ダイナも人類のために戦うのはやめるでしょうから」

分かっている。

戦わなければいけないことは。

だがどうしても、共に厳しい訓練に耐え抜いた3年間の記憶が戦う覚悟の邪魔をする。

「貴方は顎の巨人を、鎧の巨人を、超大型巨人を倒さなければいけない」

分かってている。

「仲間だった相手と戦いたくないという甘えた考えが通るほど、この世界は優しくありません」

分かってている。

「例えば友人でも、恋人でも、兄弟でも、両親でも、それが人類に弓引く相手なら、兵士である貴方は刃を向ける必要がある」

分かってている。

「それでも彼らと敵対するのが辛いのなら、友人のままであれば良い」

「……え？」

辛い現実を突きつけていたラウラから、突然そんな言葉が放たれてエレンはもう何度目か分からない疑問の声を出す。

「物事はどう捉えるかによつて変わりますわ。例えば各地の貴族から大金を盗んでいた大泥棒がいたとします。もちろん盗みは重罪ですから、兵士の私たちから見ればその人

物は犯罪者でしょう。ですがもしその大泥棒が、盗んだ金品を貧しい子供達を養うために使っていたとしたら？　子供達からすればその大泥棒は犯罪者などではなく、ヒーローに見えるでしょうね」

「は、は、は」

そりやそうだと、エレンは微妙な表情で頷く。

そんなエレンに向けてラウラは片目を閉じて笑みを浮かべると、

「要するに同じことです。ユミルたち3人を「敵」とするのが無理なら、規則違反をした友人と捉えなさい。人類に弓引く大罪人と戦うのではなく、嫌いな同期をぶん殴りに行くのだと捉えなさい。今回の作戦目的は、敵の殺害ではなく捕獲です。なので彼らを捕らえた後に、顔面に拳を叩き込んで怒鳴れば良いのですわ。「よくも裏切つたな馬鹿野郎」と」

とんでもないことを言い出したラウラに、エレンは唾然として言葉も出ない。

この大切な戦いに、そんな心持ちで挑んで良いのだろうか。

そんなエレンの内心を呼んだかのように、ラウラは言葉を続ける。

「もちろんこれは貴方個人の話ですよ。人によつては彼らを「侵略者」と捉えて戦うでしょうし、あるいは貴方の同期の中には「裏切り者」と捉え、裏切られた怒りで戦っている者もいるかもしれません。要するに、どんな形でもうじうじせずに割り切ることが

出来れば良いのですわ」

そこでラウラは立ち上がると、鞘から火花を散らしながら勢いよく剣を抜き放つ。

「戦いなさいエレン・イエーガー。失敗すれば人類滅亡の崖っぷちですが、この作戦は反撃の嚆矢ともなり得ます。彼らの先には、貴方の望む「外の世界」が待っていますわ」
そう締め括ってラウラが口を閉じると、同じように黙って話を聞いていたアルミンがエレンに笑いかけた。

「そうだよエレン！ ユミル達を捕まえて、一緒に外の世界を見よう！ ダイナさんに教えてもらったじゃないか。僕らが夢見ていたものは、確かにあるって！」

エレンの脳裏に、再び過去の光景が蘇る。

調査兵团旧本部の古城で、アルミンと共にダイナに「外の世界」について色々なことを聞いた日のことを。

その時のダイナの言葉を。

——塩の湖？ ああ、海のことですね。はい、ありますよ。炎の水も、氷の大地も、砂の雪原も確かに。貴方たちなら、きっと見られるはずですよ。

エレン・イエーガーの中で、闘志が燃え上がる。

そうだ。

俺が外の世界を求めたのは、その光景を見た奴が世界で最も「自由」だと思ったから

だ。

「自由」の為なら、俺は——！

「戦え、戦え、戦え、戦え。貴方は私たちの、人類の希望なのだから」

「オオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

雄叫びを上げたエレンに、雷が降り注ぐ。

傷口から巨人の骨肉が渦を巻いて現れ、体を形作っていく。

——「九つの巨人」には、それぞれ名称があります。私の巨人にも、エレンの巨人にも。

エレンに覆いかぶさっていた瓦礫が吹き飛ばされ、蒸気の中から15メートル級の巨人がその姿を現す。

——その巨人はいついかなる時代も、自由を求めて進み続けた。自由のために戦った。

通常の巨人とは異なる尖った耳。筋肉質な肉体。光を放つ双眸。

大地が震えるほどの雄叫びを上げて、巨人と化したエレンが顎の巨人に向かって疾走する。

——その名は、進撃の巨人。



家屋を粉碎しながら、凄まじい勢いで突き進んで行くエレンを追ってラウラは一人で頬を朱に染める。

発破をかけるためとは言え、随分と偉そうなことを言ってしまった。

アレか、後輩ができて自分は実はちよつと嬉しかったのか？

よく考えたら今までずつと下つ端だったし、部下を鼓舞することなんて無かった。

初めてそんな立場に置かれたせいで、ちよつと張り切ってしまったらしい。きつとそうだ。そうに違いない。恐らく。

脳内で顔も知らない誰かにそんな言い訳を並べている内に、エレンが顎の巨人に追いついた。

調査兵団の精鋭すら追いつかなかつたというのに、これだけ遅れてなお簡単に追いつくとは。

『進撃』の運動性能の高さに、思わずラウラは冷や汗を流す。

ダイナの『女型』はもう語るまでもなくデタラメなスペックと強さを誇るが、破壊力

や苛烈さはエレンも負けていない。

調査兵団の一部ではエレンをダイナの劣化版などと揶揄する者もいるが、今のエレンを見て同じことが言えるか見ものだ。

間違はなく漏らして泣いて逃げ出すだろう。

「——ツアア！」

疾走の勢いを乗せて踏み込むと、進撃^{エレン}は渾身の拳を顎の巨人へと放つ。

得意の身軽さで『顎』は跳躍して回避するが、一瞬前まで顎がいた建物が木っ端微塵となった。石造りの建物が豆腐のようだ。

『進撃』の拳をまともに受ければ一撃で負けると悟った顎の巨人は、いくらか距離を取ってエレンと向き合う。

どうやら、逃げ切るのは不可能だと判断したらしい。

「総員、一度下がりがなさい！ 『進撃』と『顎』の戦いに巻き込まれたら、あつという間に肉片になりますわ！ 顎の巨人を取り囲むようにして兵を再展開！ 絶対に逃がすな！」

「『了解』」

豪風を引き起こすほどの威力で両の拳を振り回すエレンと、それを紙一重で回避していく顎の巨人を見て、ラウラは咄嗟に班員に向けて指示を出す。

あの戦いに割り込める化け物は、それこそリヴァイ兵士長のような規格外だけだ。並みの兵士100人以上の力を単独で有するほどの怪物でなければ、あの戦場に加わる資格すらない。

……つまり裏を返せば、それだけの実力者なら割り込めるということ。

「エレンツ―！」

烈風より速く、ミカサ・アッカーマンがエレンの援護をすべく巨人同士の戦場へと突っ込んだ。

たった今エレンの拳を回避した『顎』に向けて、ブレードを一閃。

だが閃く刃を顎の巨人は空中で身をよじって躲し、その捻れを利用して加速させた横薙ぎの爪撃でミカサに反撃を叩き込む。

しかし、それすら不発。

振り抜かれる爪をミカサは両の刃で受け流し、ガスを吹かして一時離脱する。その後、未だに空中の『顎』に『進撃』がハイキックを繰り出した。

咄嗟に両腕を交差してガードした顎の巨人だが、小柄なユミルではエレンの一撃を防ぎ切るのは不可能だ。大きく吹き飛び、建物に激突する。

すかさず追撃を繰り出そうとエレンが走り出すが、遠目に観戦していたラウラが大声で動きを制止した。

「イエーガー、顎の巨人の口内にクリスタが捕らえられています！ 頭部への攻撃は避けなさい！」

ラウラの声にエレンが一瞬止まり、こちらに向かつて小さく頷くと再び走り出す。

その後ろ姿を見送っていると、いつの間にか真横に立っていたハンジ分隊長から指示を出された。

「ラウラ、君はあそこで待機しておくんだ。時間がない、急いで」

「……了解」

ハンジ分隊長が指差した先は、確かに兵士が待機していない場所だった。少し前までは逃走防止のために何人かの兵士がいたが、作戦が2つ失敗したことで追撃班の兵力が減少したため、待機していた兵士も呼び寄せたのだ。

もしも今、顎の巨人がエレンの隙を突いて逃げ出したら止める者がいない。

全速力で指示された場所へと移動を開始しながら、ラウラはさらに苛烈さを増す『進撃』と『顎』の戦いへと視線を向ける。

家屋を粉碎しながらエレンの拳が顎の巨人に迫るが、それを『顎』は横に跳躍して回避。真横を通過した相手の拳を、その鋭利な爪でズタズタに引き裂いた。

が、進撃の巨人は全く怯むことなく反対側の拳で攻撃を繰り返す。

負傷を意に介さない反撃に『顎』は反応が遅れ、躲しきれずに脇腹に『進撃』の拳が

掠った。

それだけで顎の巨人の肋骨から嫌な音が鳴り響く。

「——ギィアアアアッ!?!」

絶叫しながら何度もバウンドして吹き飛ぶ『顎』の姿に、戦いの行方を見守っていた全ての兵士が歓声をあげる。

顎の巨人の傷が再生していない。恐らく巨人化してかなりの時間が経っているため、瞬時に傷を塞げるほどの力が残っていないのだろう。

対して、エレンはまだかなりの力を残している。

『進撃』の勝利だと誰もがそう思い、気を緩めた瞬間を、顎の巨人は見逃さなかった。顎の巨人は敢えて吹き飛ばされた勢いを殺さず、むしろその勢いを利用して兵士の包囲網を潜り抜ける。そして一気に『壁』へと辿り着くと、その機動力を活かして凄まじい速度で登り始めた。

「しま——ッ!?!」

「追え! 我々の命と引き換えにしても、奴の逃走を止め!!」

指先が掠めるほど近づいた『勝利』が遠ざかり、兵士たちが血相を変えて顎の巨人に追いつがる。

しかし、追いつけない。

顎の巨人が『壁』を登る速度は『原作』の女型の巨人の比ではなく、もう下からエレンがミカサを投げても届かないだろう。『顎』はすでに、『壁』の頂きまで残り数メートルにまで迫っている。

もはや顎の巨人を止めるのは不可能だ。

……もしもラウラがハンジの指示に従って、予め『壁』の上で待機していなければの話だが。

「流石はハンジ分隊長、見事な読みですわー！」

顎の巨人の腕にアンカーが突き刺さる。

最大出力でガスを吹かし、ワイヤーを巻き取りながらラウラが手に握る剣を振り抜いた。

鮮血が飛び散り、顎の巨人の指が10本まとめて千切れ飛ぶ。

支えを失った『顎』は呆気なくウォールシーナから突き落とされ、しかしユミルは諦めない。

残された力を右腕に集中することで指を高速再生し、下で待ち構えていたエレンに渾身の貫手を放つ。

硬質化すら穿つ『顎』の爪による、最後の一撃。

まともに受ければ、エレンの首から上はいとも容易く貫かれて行動不能に陥るだろ

う。

「イエーガー、躲しなさい！」

無茶だと思いながらも、『壁』にアンカーを打ち込んで自分の落下を止めながらラウラが叫ぶ。

敏捷性に特化した強襲型の顎の巨人が行う、不意打ちにも等しい攻撃だ。その攻撃速度は咄嗟に回避できるほど遅くない。

『進撃』が頭頂部から貫かれ、『顎』の爪がうなじにまで届いてエレンが死ぬ。

ラウラは思わず、そんな光景を幻視した。

そう、幻視した。

膝を曲げ、腰を落とし、首を傾けてエレンが致死の一撃を寸前で回避する。ユミルの爪はエレンの右肩を浅く抉るだけで終わり、直後に『進撃』のカウンターが飛んだ。

自分の右肩の上にいる『顎』の腕と首を、エレンは自分の右腕と首で押さえ込む。そのまま勢いよく前に倒れ、顎の巨人を地面へと叩きつけた。

完璧なまでの投げ技。相手の勢いを利用したカウンター。

ラウラの目に、進撃の巨人と重なるようにして、ダイナの姿が浮かび上がる。

それは、旧本部の古城でダイナがフォルカーに対して使った格闘術。

恐らく今のをダイナが見ていれば、彼女は間違いなく先代の女型の巨人継承者である

ア二・レオンハートの姿を視ただろう。

後頭部を強打した顎の巨人は脳震盪を引き起こしたらしく、脱力して動かない。

エレンは力尽きた『顎』をうつ伏せにし、うなじの部位を喰い千切った。肉塊と共に、完全に気を失ったユミルが巨人の体内から引き摺りだされる。

「すぐにユミルを拘束するんだ！ 彼女の意識が回復する前に！ それと救護班を呼べ！ 『顎』の口内に兵士が一人捕らわれている！」

「了解！」

ハンジの指示で一斉に動き出した兵士たちがユミルを拘束し、口内からクリスタを引つ張り出してタンカーに乗せて運んで行く。

巨人化能力者捕獲作戦、成功。

調査兵団が首の皮一枚で助かったことに、ラウラは額の汗を拭いながら大きく息を吐いた。

（もしもイエーガーが巨人の力を発動させる事が出来ていなければ、私たちは『顎』を捕獲することに失敗してしまいましたわ。結局のところ、最後は巨人の力頼みとは。何と情けないことでしょう）

己の無力さを自嘲しながら、自分も地上に降りるために壁の頂上付近に打ち込んでいるアンカーを回収しようと何気なく上を見上げた瞬間、ラウラは視界に飛び込んできた

モノに硬直する。

顎の巨人の爪で抉られたのか、『壁』に小さな穴が開いていた。

それは別に構わない。修繕すれば良いだけの話だ。

問題は、

「……………は、……………あ？」

息が止まる。冷や汗が止まらない。

気がつけば、ラウラは目尻に涙すら浮かべて弱々しく首を振っていた。

「嘘、ですわ……………」

壁に開いた穴の中から、直立する超大型巨人が僅かに眼球を動かしてラウラを見ていた。

調査兵団に更なる絶望を叩きつけ、ここに1つの戦いが決着する。

第31話 失態の埋め合わせは敵兵の首で

「……ら、あ、ああーッ！」

喉の奥から声を絞り出し、渾身の力で巨人の肉体と癒着した本体の腕を引き抜く。ブチブチと肉の千切れる嫌な音と共に、何とか腕を分離させることに成功した。

くそ、限界以上に力を使った弊害だ。

巨人の力を引き出せば引き出すほど、本体と巨人体の接合は強くなっていくからな。まあ、当たり前と言えば当たり前だろう。

より本来の体と近い形で巨人体を動かしたいのなら、より深く互いの神経系を接合する必要がある。

何っーか、エヴァン○リオンみたいだ。

シンクロ率が高まるほど、エ○アの力は増していく。イメージとしてはそんな感じか。

それにしても、最後の最後でやってくれたな。

地面に倒れ伏す上半身のみ『女型』は、それはもう無残な姿になっていた。

頭部は半分ほど吹き飛んでおり、脳と頭蓋骨が見えてしまっている。全身は灼け爛

れ、両腕は炭化し、骨や内臓が見えている箇所も少なくなない。

18禁のホラゲーでもここまでグロイのは出てこねえだろう。

もう死体は見慣れてしまった俺だが、それでもこれだけ損傷が激しいと見てて気分が悪くなる。

つーか、ここまでズタボロにされてよく生きてたな、俺。

本体が無傷なのはまさに奇跡としか言いようがない。

エルヴィン団長の策略通り、俺とアリーセは確かに車力の巨人の死角を取った。

その時点でもう完全な巨人体を生成するほどの力は残ってなかったが、俺は上半身のみを生成することで力の消費を抑え、余剰分の力で槍を作り出して間違いなく『車力』の胴体を砲台ごと貫いた。

ここまでは良かったんだが、問題はその後だ。

避けられないと悟った車力の巨人がとった行動は、道連れ戦法。

どうやら砲台の中にはまだ幾らかの砲弾が残っていたらしく、車力の巨人は僅かに体を動かすことで敢えて俺にその砲弾を貫かせたらしい。

結果は言わずもがな。貫かれた砲弾が大爆発し、俺、車力、マーレ軍人は等しく吹き飛んだ。

生き残れたのは、ぶつちやけただけの奇跡だな。

巨人化能力を酷使した疲労で思うように動かない体に鞭を打ち、何とか下半身も『女型』から引き抜く。

あ、くそ、兵服のジャケット持っていかれた。

また団長に頼んで新しいの貰わねーと。

そんなことをぼんやりと考えながら『女型』の体から飛び降りると同時にフラついた俺を、アリーセが支えてくれる。

「熱っ!? ダイナさん、大丈夫ですか!? 怪我は!?!」

「幸い無傷ですよ。幸運に恵まれました」

「良かった……。ダイナさんと車力の巨人と一緒に爆発した時は、私、心臓が止まったかと……」

「私も走馬灯が見えました。油断大敵とはこの事ですね」

何はともあれ、敵の侵攻を退けることには成功した。

問題は、俺と一緒に吹き飛ばししまった『車力』の中身が生きてくれるかどうかだが……。

少し遠くにある車力の巨人の死骸は、大量の蒸気に隠されていてよく見えねえ。

どうすつかな。

今の俺は巨人化能力は使えないし、立体機動装置も兵長に渡したから装備してない。

不用意に近づくのは危険すぎる。

蒸気が晴れるまで様子見するしかないか。

「アリーセ、リヴァイ兵長たちは……」

「……だ」

俺の問いにアリーセが答えるより早く、後ろから兵長の声があった。

振り返れば、そこには両手両足を切断したジークを引き摺りながらこちらへ歩いてくるリヴァイ兵長の姿。後ろにはエルヴィン団長らもいる。

流石は対獣の巨人特攻持ちのリヴァイ兵長だ。

あの獣の巨人を少数で相手にして、誰一人として死んでいない。

こちらの被害は、ナイルさんと馬づ……ジャンが少し手傷を負ったくらいかな。

「随分と派手に吹き飛んでいたようだが……『車力』はどうなった？」

「あそこです。本体の生死はまだ」

未だに蒸気に包まれている車力の巨人を指差して答えると、兵長は一瞬だけ『車力』に視線を向けた後、すぐに俺の方へと戻した。

兵長の三白眼には、俺に対する疑念が浮かんでいる。

まあ、それは予想通りだ。

ジークが俺を母親と呼び、俺はそれを否定しなかったのだから。

侵略者と親子関係にあると知った兵長たちが、俺に対する警戒を強めない訳がない。ほとんど会話として成立していなかったが、ジークとのやり取りも全部聞かれたしな。この後は質問攻め間違いなしだろう。尋問とも言う。

今のうちに吐いたら後々不利になりそうな情報だけでも選別して……いや、無駄か。『原作』の流れでは、この後に控えているのは中央憲兵団との戦いだ。

即ち、エレンの中に眠るグリシャの記憶が蘇り始める。

今までの俺の情報が良いと裏付けられるメリットはあるが、情報戦における有利さを失うというデメリットの面も大きい。

下手に隠し事するより、素直に全部吐いておいた方が信頼は得られるかも知れん。

まだ、調査兵団は敵に回せないし。

「また君に色々聞きたいことが増えたが……まずは、よくやってくれた。君のおかげで『獣』と『車力』の侵攻による被害は、最小限に留められたと言っただいだろう」「いえ、団長たちの力があってこそその戦果です」

全力で出来の悪い頭を働かせていると、リヴァイ兵長の後ろから現れたエルヴィン団長が、微笑を浮かべながら健闘を称えてくれた。俺も慌てて当たり障りのない返事をす

る。
それにしても、最小限ね。

その言葉に思わず更地と化したラガコ村を見渡してしまおうが、それで何が変わるわけでもない。

知性巨人が2体、無垢の巨人が数十体以上も壁内に現れたというのに、村が1つ壊滅した程度の被害で済んだのだ。

これ以上は、ない。

「……ラガコ村の住民たちは残念だった。しかし、今の我々には人類の礎となった英霊たちを弔う時間はない。——『車力』の中身を捕縛次第、ヤルケル区に帰還する」

そんなに顔に出てたかな。

まるでこちらの思考を読み取ったかのような団長の言葉に、俺は指先で自分の顔に触れる。

むう……『原作』のダイナは表情豊かなキャラだったっけか。

……ダメだ、そもそもダイナの登場シーンが少な過ぎてよく思い出せん。

記憶が綻び始めていることを痛感しながら、車力の巨人の元へ向かうエルヴィン団長たちの後を追って足を踏み出しその時。

——膨大な量の蒸気の中で、小さな光が閃いた。

背筋が粟立つ。息がつまる。冷や汗が止まらない。

嘘だろ……!?

相手は間違いなくあの爆発で俺よりも深手を負っていたはずだし、その前にもリヴァイ兵長に四肢を切断されるほどのダメージを与えられている。

余力なんてない筈だ。

絶対に、あり得ない。

あり得ないのに、光は消えなかった。

一筋の雷光が蒸気の中へと降り注ぐ。

「——ッ！ アリーセ、下がって！」

敵の襲来を前に、俺が出来ることはアリーセを庇うことだけだった。

既に彼女の立体機動装置のガスは空っぽだ。

『車力』の死角を取るために急上昇を行ったのと同時に、ガスは切れてしまっている。

もうアリーセは戦えない。

立体機動装置なしで巨人と向かい合えば、例えどんな精鋭でも食い殺されるしかないのだから。

「リヴァイ、『獣』と共にすぐに戦線離脱せよ！」

「チィ……ッ!!」

同じく巨人化の光に気づいたエルヴィン団長が指示を出し、兵長は舌打ちしながらジークを抱えて走り出す。

まさか、兵長もガスが切れてんのか!?

慌ててナイルさんとジャンにも視線を向けるが、2人とも立体機動を行う様子はない。

これ、もしかして、もう誰一人としてガスが残ってな――

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!」

大地が震えるほどの咆哮が放たれ、充満していた蒸気が吹き散らされた。

もはや骨のみになっていた『車力』の屍を踏み碎きながら、車力の巨人がこちらに向かって疾走する。

ふざけんなよ。

ここまで死に物狂いで頑張って、ようやく『獣』を無力化して捕らえたんだ。砲台を破壊して、車力と一緒に吹き飛んでやったんだ。

なのに、最後の最後で全て掻っ攫われるなんて、冗談じゃない。

もう一度ぶつ潰してやる、車力の巨人!!

懐から護身用ナイフを取り出す。

「……!?! ダイナさん、やめて下さい! 誰よりも貴女自身が分かっているでしょう!? もういくら自傷したって、女型の巨人を生み出す力は……!」

俺がやろうとしている事に気付いたアリーセが飛びついて自傷行為を止めようとする

るが、ナイフの切っ先が未だに赤い痣が残っている左腕の肌に刺さる方が早い。

鮮血が飛び散り、傷口からスパークが……放たれなかった。

代わりに激痛に襲われて、元からフラついていた俺はその場に崩れ落ちてしまう。

「……………あ、……………そ……………」

最後は抵抗することすら許されず。

俺の意識は、そこで途切れた。



全身が気怠い。

体が眠りから目覚めることを全力で拒否している。

それでも気力を振り絞って目を開けたのは、世界で最も大切な友人がずっと俺を呼んでいたからだろう。

重たい瞼をなんとか持ち上げると、俺にしなだれかかっていたアリーセと目が合った。

「……は……？」

「馬車の中です。もうすぐヤルケル区に着くところです」

馬車……？

顔を上げると、目の前にはエルヴイン団長が座っていた。俺から見て団長の右隣にはナイルさんが、左隣にはジャンが。

そして俺の右隣にはアリーセ、左隣にはなぜか俺が自傷アイテムとして愛用している護身用ナイフを手の中で弄ぶりヴァイ兵長。

窓の外に視線を移すと、外はすっかり夜になっていた。

頭がぼんやりして、直近の記憶が曖昧だ。

確か『車力』の真上から貫いて——………車力の巨人と獣の巨人はどうなった!?
慌てて馬車の中を見渡すが、ジークの姿もピークの姿もない。

嫌な汗が背を伝う。

「……兵長」

「ようやくお目覚めか？ 随分と良いご身分だな、オイ」

「車力の巨人とジーク……獣の巨人はどうなりましたか？」

呼びかけると返ってきた皮肉には取り合わず、俺は今なによりも確認しなければならぬ事を探ねた。

俺の問いかけに兵長は答えず、代わりに正面のエルヴィン団長が口を開く。

「再度出現した車力の巨人によつて、獣の巨人は連れ去られてしまった。我々は敵の侵攻を退けることは成功したが、巨人化能力者の捕獲は失敗だ」

「……………」

意識が途切れる直前の状況から、ある程度は予測できていた答え。だがそれでも、あの激闘の末に何も得られなかったという事実は心に重くのしかかる。

進撃の巨人らしい展開と言つてしまえばそれまでだが、当事者になると残念では済まない。

拳を握りしめて黙り込む。

相変わらず、弱いままだ。

アリーセを、たった1人の大切な人を守るだけの力を、未だに掴めてねえ。

力、力がある。

それこそ、全世界を敵に回しても跳ね除けられるだけの強大な力が。

俺が思いついた強くなる方法は、今のところ2つだな。

片方は非現実的で、出来るかはかなり怪しい。失敗率8割、成功率2割つてところだ。だが成功した時は、リヴァイ兵長と肩を並べられるほどの力が手に入るだろう。

コツコツ頑張るしかない。

もう1つは、近いうちに接触してくるであろうレイス家から、最強の巨人というラベルが貼られた巨人化薬を奪うこと。

ロッド・レイスが服用して、120メートル近い史上最大級の巨人と化したアレ。

100メートルオーバーのサイズになるのは困るが、あのサイズになってしまったのはロッド・レイスが正しく薬を服用しなかったのが原因ではないかというのが俺の予想。

もしもロッド・レイスが元から『最強の巨人』とやらがああサイズだと知っていたら、あの空間内でクリスタを巨人化させようとはしなかったはずだ。継承を行うあの空間は確かに広かったが、120メートル級が収まるほどじゃなかったしな。

まともに使えば、あの空間内に収まる程度のサイズになる……かもしれない。確証はないが。

「ダイナ。てめえ、『獣』の中身に「母さん」と呼ばれていやがったが、アレはどういう事だ？ 随分と老けた息子じゃねえか。壁の外では、子供の方が親より年をとるのか？」

どうやってロッド・レイスから巨人化薬を奪うかという俺の思考は、リヴァイ兵長のそんな言葉で打ち切られる。

……うわあ、やっぱり突っ込まれるよな。

戦闘終了後すぐに『車力』による2度目の襲撃を受けたから、言い訳考えてねえ。マズい、下手したらスパイ容疑で拉致監禁だ。

というかダイナにはジークを「戦士」にして壁に送り込み、座標を奪取しようとした過去がある。

そう、もう既にダイナは敵対行動をしてるんだよ。

グリシャの記憶からコレがバレたら大惨事になっちゃう。

だから今のうちにジークを捕まえて、壁の外との繋がりはないことをアピールするつもりだったんだが……

「俺たちは今、お前が諜報員である可能性を疑っている。言い訳するならさっさとしろ。ヤルケル区に到着したら、のんびりお喋りする時間はなくなるからな」

鋭い視線で俺を射抜きながら、兵長は護身用ナイフの切っ先を首筋に当ててくる。

俺のナイフを奪ったのはコレのためかよ……っ！

完全に信用を失ったら終わりだ。

『車力』を仕留め損なったことすら故意と思われかねない。最悪の場合は、調査兵団の核である兵長とエルヴィン団長を殺すために『獣』と『車力』がいるラガコ村に誘い込んだと思われるかもしれん。

「……確かに、ジークは私の息子です。それもエレンとは違って、血の繋がった」

俺の言葉に、兵長たちの視線が一層険しくなる。

萎縮しそうになるが、ビビったら負けだ。

毅然とした態度を保て。堂々としろ。負い目などないと、胸を張れ。

アリーセが俺の右手を強く握るのを感じながら、俺は話し続ける。

「ですが私とジークは間違いなく敵対関係です。私は夫……グリシャが、ジークを道具として利用するのを止めなかった。だからジークは私とグリシャを敵に売り、無垢の巨人……壁内世界で言う通常種の巨人にして追放したのです」

ピクシス司令が言っていた。

上手い嘘のつき方は、真実を織り交ぜて話すのだと。

エレンパパには悪いが、全ての罪は彼に被ってもらおう。強ち間違いではねーし、許してくれ。

俺が語った内容はこうだ。

まずはエルディア人とマーレ人との関係を語り、グリシャがエルディアの復権を望んでいたことを話す。そして俺は^{ダイナ}グリシャと同じく、エルディア人の酷い現状が変わることを望んでいたと。

グリシャと意志が一致したことが結婚に繋がりが、子供を授かったが、先ほど言った通りグリシャは自分の息子でさえエルディア復権の道具として扱った。

さらに思うように結果を残さないジークをグリシャが追い詰め、俺は息子^{ダイナ}を擁護したが、結局はグリシャに言い負けてジークを道具として扱うことを止めなかったと。

結果、親に愛されなかったジークは両親をマーレに売り、俺は無垢の巨人^{ダイナ}に。グリシャは何とか『楽園送り』を免れて、進撃の巨人の力で壁に辿り着いた。

無垢の巨人となった俺は十数年間に渡って壁外を彷徨っていたが、5年前にウォールマリアの破壊を行ったマーレの戦士の一員を偶然にも捕食することに成功し、人の姿に戻ったのである。

エルディア人の楽園である壁内世界で第二の人生を手に入れた俺は過去を捨て、ただ自分の幸せのみを追い求めるようになった。

その過程で自分の命より大切な親友のアリーセと出会い、俺はアリーセのために壁内世界を守るべく、マーレとの敵対を決めた。

「……なので、私とマーレの「戦士」であるジークが仲間ということはありません。それに向こうは未だ私と夫を恨んでいるでしょう。私も既に、エルディア復権には興味がありませんしね。私がグリシャに同調したのは自分の置かれた劣悪な環境を改善したかった為であり、虐げられることのない壁内世界で暮らせている時点でもう目的は達成されているようなものです」

自分だけ逃げ延びて新しい家庭を築いて暮らしているグリシャと、自分を『楽園送り』

にしたジークに、今は特別な感情は何も抱いていない。

そう締めくくり、俺は口を閉じる。

真実4、嘘6くらいか？

重たい沈黙が支配する中、馬車が止まった。どうやらヤルケル区に到着したらしい。それを皮切りに、リヴァイ兵長が静寂を破った。

「今の話が本当かどうかは、てめえの夫の記憶を継承したエレンが判断出来るだろう。あのガキが真偽を下すまでは、信じておいてやる。エルヴィン、異存はねえな？」

「私もそれで構わない」

エルヴィン団長が頷くと、リヴァイ兵長が俺に護身用ナイフを差し出して来る。受け取ったそれを鞘に戻し、懐に仕舞うと、俺は不敵な笑みを浮かべた。

そうだ、このままでは終われねえ。

レイス家からこつそりと巨人化薬を奪うには、奴らとの戦いである程度の自由行動を認めてもらう必要があるからな。

疑念を抱かれた現状では、それは難しい。

故に、早急に信頼を取り戻す。

「車力の巨人を仕留め損なつた失態は、『鎧』と『超大型』という脅威を退けることで埋め合わせましょう」

今回の件で生まれた俺への疑念を、戦果を以って打ち払ってやるよ。

第32話 転、転、転

『獣』及び『車力』捕獲作戦を終え、ウォール・シーナ西部に位置するヤルケル区に帰還すると同時に、もの凄い形相でハンジさんが俺の元へと走ってきた。

何事かと問う間も無く、俺の華奢な体が馬車から引き摺り出されてハンジさんに担ぎ上げられる。

……俵担ぎで。

「ちよつ、何ですか突然!？」

「悪いけど説明は全部後回しにさせてもらおうよ。君に急ぎの用事だ」

言うが早いかハンジさんは俺を担いだままトリガーを引いてワイヤーを射出。ヤルケル区を守る外壁の上へと、一気に上昇する。

こ、怖っ!？」

今の俺は立体機動装置を装備しておらず、巨人化能力も使えない。落ちたら普通に死ぬ。

なのにハンジさんは御構い無しと言わんばかりに、不安定な体勢で強引に上昇を行う。

これ、上昇の勢いで腹が圧迫されてなかったら、間違いなく情けない悲鳴をあげてたな。

少しでも高所の恐怖を和らげようとそんなことを考えているうちに、壁上に到着したらしい。ほとんど投げ捨てるような形で降ろされた。

……痛つてえ、思い切り頭から落ちたぞ。

死にさえしななければどんな傷でも短時間で完治するとは言え、もう少し丁寧に扱われても良いと思うんだが。

ぶつけた箇所を手を当て、若干フラつきながら立ち上がると、騒然とした光景が視界に飛び込んできた。

調査兵、憲兵に関わらず、全員が混乱と不安と恐怖を隠し切れないといった表情で、俺とハンジさんを見ている。

何かあったのか？

まさか、顎の巨人の捕獲にまで失敗したとかじゃねえだろうな。

ついさつきエルヴィン団長とリヴァイ兵長に『『鎧』』と『超大型』の脅威を退けましよう』とかドヤ顔で言った直後なんだが、その為にはユミルの協力がいるんだよ。

もちろんユミル無しのパターンは考えてあるが、成功率がまるで違う。

『顎』を取り逃がしました、なんて展開ならもう俺は命がけでライナーに挑むしか

ねえ。『超大型』の方はアルミンの作戦を参考にした対処法を練ってるから、タイマンに持ち込めれば多分勝てる……筈だ。

やってみないことには分かんが。

ともあれ何が起きたのかを把握すべく、俺は黙ってハンジさんに続く。

ハンジさんは10秒ほど歩くと、壁の内側の側面を指差した。

俺も壁から身を乗り出して、ハンジさんの人差し指の先を見る。

……?

ウォール・シーナの一部分が、布みたいなもので覆われてるな。顎の巨人との戦いで破損でもした……の……か……。

プツリと、俺の思考が停止した。

ハンジさんの指示のもと、兵士たちによつて壁を覆っていた布が引き剥がされる。

その下にあつたのは、俺がギリギリ通れるかどうかといった程度の小さな穴。そしてその穴の中で鈍い光を放ち、僅かに動く巨大な眼球。

「——っ!? ハンジさん、すぐに布を戻してください! それと、布は出来るだけ遮光性の高いものを!」

穴の中を見た瞬間、俺は弾かれたように立ち上がりながら叫ぶ。

なるほど、そういう事かよ。

奇しくも『原作』とほぼ同じタイミングで、三重の壁の秘密が明らかになったんだ。調査兵团との最初の交渉で、巨人は日光によって活性化し、反対に光のない夜は不活性化するという情報を渡しておいて本当に良かった。

ここヤルケル区にはニツク司祭がいねえからな。

もし俺がその情報を渡していなかったら、壁の中の巨人が動き出すという、最悪の事態が起きてた可能性すらある。

再び布が被せられ、壁の中の巨人が隠れたのを見て大きく息を吐く。

取り敢えず、これで動き出すことはない……と思う。恐らくは。

「君は、壁の中に巨人がいると知っていたの？」

「……ええ。私としては、出来る限り隠しておきたかったです」

険しい視線でこちらに向けるハンジさんを真っ直ぐに見つめ返し、俺は言葉を返す。

『壁』の巨人、及び『座標』はこの世界最強の力だ。

この2つさえ手に入れることが出来たのなら、世界の全てを敵に回しても対等に立てる。

理想は、壁の秘密を秘匿したまま機会を窺い、アリーセを除く信頼できる誰かにエレンを食わせて『始祖』を奪うことだった。

そうすれば『王家』と『始祖』が揃い、地鳴らしの発動権を握れるからな。

後は地鳴らしを脅しの材料とすれば、アリーセとその次の世代の子が寿命で逝けるくらいに安寧が手に入る……筈だったのだが。

ハンジさんは、そして調査兵団は、壁の中の巨人についての全ての情報を俺が吐くまで、尋問をやめないだろう。

ニツク司祭を問いつめた時のハンジさんを思い返せば、それは容易に想像できる。

「ダイナ、答えてもらおうよ。これは私たち人類の、生存権に関わることだ。見て見ぬ振りをするなんてことは、絶対に出来ない。君に答える意思がないと言うのなら、拷問しても吐かせる」

「……」

言い終えたハンジさんが右手を挙げると、周囲の兵士たちが一斉に超硬質ブレードを構えて俺を取り囲む。

巨人化能力が使えず、加えて立体機動装置もない俺に対抗の手段はない。

「お話します。エルヴィン団長とリヴァイ兵長を始めとする、調査兵団幹部の方々も一緒に聞かれた方が良いでしょう」

「物分りが良くて助かるよ。ラシヤド、エルヴィンたちを連れてきてくれ。大急ぎで、だ」

「了解ッ！」

俺が観念して両手を挙げると、命令を受けたハンジさんの部下がすぐに『壁』から飛び降りてエルヴィン団長の元へと向かっていく。

ほんの数分ほどで、下で待機していたと思われる兵長たちが登ってきた。

獣の巨人と車力の巨人を取り逃がした時よりも険しい表情を浮かべていることから、既に事情は聞いたのだろうと察せられる。

「それじゃあ、話してもらおうか」

兵団の上官たちが揃ったのを確認したハンジさんが、そう切り出した。

上官らの鋭い視線を一身に受け、怯んで後退りしそうになる自分を心の中で鼓舞しながら俺は話を始める。

ウォール・マリア、ウォール・ローゼ、ウォール・シーナからなる三重の壁は、無数の超大型巨人による硬質化能力によって形成されたものである。

築き上げたのは壁の王たる、カール・フリッツ。

これは王家と上位貴族、及びウォール教の人物は知っている情報である。

そして『壁』の巨人を含む王家が秘匿しているその他の情報を開示する権利を持つのは、真の壁の王たるクリスタ・レンズのみ。

エルヴィン団長、リヴァイ兵長、ハンジさん、ナイル師団長、その他の上官の前で俺が話したのは、『原作』でニック司祭が話したこととほぼ同じものだ。

まあ、ニツク司祭の話したことより、少し多めに情報を開示しているが。

ダイナも間違いなく王族であるので、勝手に秘密をバラしたことに關しては大目に見てもらえるだろう。多分。

一応、クリスタとは遠い親戚に当たる筈だしな。

……待てよ。

だとしたら、俺の義理の息子であるエレンはクリスタと親戚関係になるんじゃないやねえの？

おおう、ダイナってやつぱり凄い立場だなオイ。

俺の暴露した情報を巡って、侃侃諤諤と議論を重ねる団長たちを眺めながらそんなことを思う。

情報を喋った後、俺は用済みだと言わんばかりに議論の場から弾かれた。

実際、正式な調査兵じゃない俺は部外者だが。

ここ最近で、一気に疎外されるようになった気がする。

「ダイナさん」

と、そこで壁を登ってきたアリーセが俺のすぐ隣に着地した。

今やっとガスを補給できたらしい。

どこか浮かない表情の彼女はしばらく口を開いたり閉じたりしていたが、やがて決心

したように話しかけてくる。

「あの、私、短い間に色々なことが起きたせいで、何から話したら良いのか分かりません。だから、細かいことは何も気にしないことにしました。でも、これだけは確認させて下さい。私、ダイナさんに無理をさせていませんか？ 私が隣に立っているせいで、苦しんだりしてませんか？」

どこまでも優しい彼女は、きつと俺が息子と戦うことを、気にしているのだろう。

自分のせいでダイナが息子と戦う決意をしたのではないかと、思ってしまったのだろう。

それは要らない心配だ。

『俺』はダイナでないのだから、ジークと戦うことに何も感じない。グリシャを貶めて利用することに躊躇いはない。

しかし、憑依のことを説明する訳にはいかないだろう。

何より俺はアリーセに、この世界は創作物の中の世界で、この世界の人々は全て運命が決められたキャラクターに過ぎなくて、アリーセ・エレオノーラは名前も出ずに死ぬ予定だったモブキャラなんだとは、口が裂けても言えない。

だから、俺はどこまでもダイナの贗作であり続けるのだ。

アリーセの髪を撫で、心の底からの笑みを浮かべ、俺は言葉を紡ぐ。

「アリーセ。私の横にいてくれて、有難う。貴女がいるから、この残酷な世界でも頑張れ
たんです。私はアリーセ・エレオノーラの親友、ダイナ・フリッツ。ただの一度たりと
も、ダイナ・イエーガーとは名乗っていませんよ」

さあ、気合いを入れ直していこう。

ここから先は、更なる死闘が待っているのだから。



蚊帳の外に置かれていたのでどのような結論に至ったのかは知らないが、ひとまず団
長たちの話し合いは終わったらしい。

呼ばれた俺は、再びエルヴィン団長らの前に立つ。

邪魔な時は放り出して、必要になった時だけ呼びつけるとか、本当に雑な扱いされて
んな。

レイス家が干渉してくる前に、必ずある程度の信頼を取り戻してやる。

「おいダイナ。てめえ、馬車の中で『鎧』と『超大型』の脅威を退けるとか言いやがったな。具体的な作戦を説明しろ」

と、意気込む俺に向かってリヴァイ兵長がそう切り出した。

『壁』の巨人から、随分と話が飛んだな。どんな議論をしたのか気になるが、それは後で聞くか。

今は大人しく、言われた通りのことをした方が良さそうな雰囲気だ。

「……分かりました。その前にハンジさん、顎の巨人捕獲作戦はどうなりましたか？」

「ああ、ちゃんと成功したよ。顎の巨人……ユミルは今、巨人化できないように両腕を切断した状態で拘束している」

よし、ユミルの捕獲に成功してるなら次の作戦もやり易い。

「私の考案した作戦は——」

時折エルヴィン団長やハンジさんに作戦内容の綻びなどを指摘されながらも、何とか作戦内容を伝える。

不確定要素が多いのは否めないが、そこまでデタラメな作戦つて訳でもねえ。

後は採用して貰えるかだが……

「肝心のユミルをこちら側に寝返らせるといふ部分だけど、その方法はどうするの？」
ハンジさんから当然の疑問が投げかけられた。

そう、この作戦はユミルが俺たちに協力しなければ何も始まらない。

「ユミルと話をさせて下さい。私が彼女をこちら側に引き込みます」

未だにユミルがライナーたちに味方している理由ははっきりとしないが、予想はついている。

なら同じことをすれば、ユミルはこちらに寝返るはずだ。

勝算は、ある。



「貴女がユミルですね？」

「——ああ？」

ヤルケル区内の地下牢。

その中で両腕を切断され、足に鎖をつけられた状態で監禁されていたユミルに、俺は檻を挟んで話しかけた。

俺の問いかけに、ユミルは敵意を露わにしながら顔を上げる。

そんな彼女の目を真っ直ぐに見返し、俺は微笑すら浮かべて、

「率直に言います。ライナーとベルトルトを裏切つて、調査兵団に味方しなさい。そうすれば、クリスタの命は保証します」

「……………」

俺の言葉を聞いたユミルの瞳に、殺意の光が宿った。

ユミルの全身から放たれる濃密な敵意と殺意を、しかし俺は軽く受け流して言葉を続ける。

「貴女がライナーとベルトルトに加担するのは、恐らくクリスタを人質に取られているからでしょう。それに強大な力を持つ彼らに、貴女は抗えなかった。これは、そんな貴女にとつても良い提案ですよ。ライナーたちはまだ、貴女が調査兵団に捕獲されたことを知りません。今なら寝首をかける」

「ライナーとベルトルトを倒しても、アイツらの背後にはもつと巨大な敵がいる。調査兵団にそれを跳ね除けられる力は……………」

「あると言つたら？　世界そのものを敵に回してなお、勝算があると云つたらどうしますか？」

被せるように発せられた俺の言葉に、ユミルが目を見開いた。

そんな彼女を前に、俺は息を大きく吸う。

まだ巨人化するほどの力は戻ってないが、少し『道』を開く程度の力ならある。ユミルを手つ取り早く引き込むには、分かりやすい証拠を見せてやれば良い。

「——ッ!!」

腹の底から放たれた俺の叫び声が地下牢に反響する。

それと同時に『道』を通じて、ユミルの中の『顎』に命令を送り込んだ。

もちろん他者の中にある「九つの巨人」を操るなんて真似は出来ないが、王家の持つ『叫び』の力を『座標』だと誤認させれば、ユミルは勝手に理解するだろう。

『原作』でも、一時的に覚醒したエレンの『座標』の力を見て、ユミルは壁の中にも希望があると判断したのだから。

巨人化能力者が『座標』や『叫び』の効果を受けると、体中に電流が流れたような感覚を覚える。

まさに今それを感じただろうユミルが、自分の体を見下ろしながら驚愕の表情で俺を見た。

「アンタ、何者だ?」

「貴女と同じ略奪者ですよ。貴女がライナーの仲間の1人を食って人間に戻った後、彼らは残る3人で『壁』を目指しました。そして何とか超大型巨人で『壁』を破壊することに成功した彼らですが、その直後に消耗しているところを狙われて2人目が無垢の巨

人に食い殺されたんです。2人目の死亡者は『女型』の継承者アニ・レオンハート。捕食者は私、ダイナ。マルセルの記憶を継承した貴女なら、この意味が分かるでしょう？」

ダメ押しとばかりに、俺はさらに言葉を重ねる。

「ユミル、私の、調査兵団が差し出した手を取ってください。『女型』、『進撃』、『顎』に、先ほどの力が加われば、壁の中にも未来はあります。貴女もまだ死にたくはないでしょう？」

何分、いや何十分経っただろうか。

ユミルは静かに、首を縦に動かした。

第33話 未来への意志

にへら、と。

酒がなみなみと注がれた木製のコップを両手で持ったアリーセが、頬を赤く染め、瞳を潤ませて破顔する。

そこに普段の凛々しさなどカケラもない。

うん、完全にただの酔っ払いだわ。

「ほんとーに、ほんとに心配したんれすよお!?! しゅぐに無茶するしい、死にかけるし、ダイナひやんの馬鹿あ! 生きててくれてありがとうとございます!」

全く呂律が回ってねえ。

テーブルをバンバン叩きながら笑顔で怒るアリーセの姿に、俺とラウラは無言で顔を合わせる。

どうすんだこれ。

何とかユミルを寝返らせることに成功したあの日から、7日の時が流れた。

調査兵団は顎の巨人の捕獲、そして『獣』と『車力』の撃退という戦果によって、何とか解体を免れることに成功。

エレンは『顎』の捕獲に大きく貢献したと言うことで、中央憲兵への引き渡しは無く
なつた……のだが。

三重の壁は超大型巨人の硬質化能力によつて形成されていたという真実に、それを王族や一部の貴族が秘匿していたという事実が明らかとなり、さらに先にある『情報』を開示する権利が一介の調査兵に過ぎないクリスタにあると判明したことで、兵団の上層部は大荒れしている。

尤も、今回の件で明らかになつた事実はまだ公表されていないので、現場にいなかった104期生や下っ端の兵士は何も知らないままだ。

故にそもそも部外者である俺だけでなく、アリーセとラウラにも暇が出来たわけだな。……アリーセが未だに調査兵として扱われているのは知らねえけど。

ともあれ、現在エルヴィン団長は会議に会議で、ウォールシーナ内の王都ミットラスに引きこもり中。

代理としてハンジさんが指揮を執つて、俺が立案した『鎧』及び『超大型』の討伐作戦の準備を行なっている。順調との報告を受けたので、近日中には終わるだろう。

この作戦内容も、やっぱり一部を除く104期には伝えられていない。コニーやサシャたちは、未だにライナーとベルトルトが敵だと知らない状態ってことだ。

作戦が伝達された104期生はエレン、ミカサ、アルミン、クリスタ、ジャン、ユミ

ルくらいか。後は蚊帳の外だな。

ユミルは相変わらず地下牢に監禁中。

面会できるのは俺とクリスタのみで、その俺たちにしてもリヴァイ兵長、ハンジさん、ミケ分隊長のうちの誰かが同伴していないと面会することが出来ない。

まあ、顎の巨人捕獲作戦でクリスタは負傷したらしく、彼女がユミルと面会出来たのはつい先日とのこと。それまでクリスタは怪我でベッドの上から動けなかったとか。

ユミルに対して効果的だって理由で、クリスタを前線に送り込むように提案したのは失策だった。

未来の女王陛下に死なれるのは流石に困る。

主に、原作との乖離が激しくなって更に先が見通し辛くなるという理由で。

今まで俺に大きなアドバンテージを与えてくれていた『原作知識』の力も、少し陰りが見えてきた。

主な理由は2つ。

まずはストーリーが進むに連れて調査兵団が情報を手にするので、情報戦の有利が失われていくから。

エレンの中で眠るグリシャの記憶が完全に蘇り、調査兵団が手記を手にした瞬間に情報面でのアドバンテージは7割近く失われてしまい、情報提供によって調査兵団の力を

借りることは難しくなる。

もう一つは、記憶の欠落だ。

別に俺はもの凄く記憶力が良い人間じゃねえ。

むしろ前日に覚えた英単語が、次の日の朝には全て忘れているなんてことがザラにあるくらい記憶力が悪い。

そんな俺が5年間近くも『原作』の内容を忘れずにいられたのは、ひとえに延々と漫画とアニメを見返し続けたからだ。

もはや二度と『原作』を見返すことが出来なくなつた今、記憶し直すのは不可能。となれば、当然ながら記憶は……『原作知識』は欠落する。

せめてもの対策として、まだ忘れていない『原作知識』を手帳とかにメモしようかと考えたが、無くした時や奪われた時のデメリットが大き過ぎるので止めた。

「ままならないか……」

「あーっ！ ダイナひゃん、また自分しか分からないこと考えてる！ 隠し事ばかりしにやいで、もつと私にダイナひゃんのことを話してくらさいよお！ うう、グリシャ殺す……」

あ、寝落ちした。

テーブルに突っ伏して寝息を立て始めたアリーセを見て、俺は盛大にため息をつく。

第57回壁外調査の最後、俺とアリーセが超大型巨人が投擲した多数の巨人に囲まれた時のことだ。

心が折れないようにエルヴィン団長のポケットマネーでお酒を飲みに行こう、なんて軽口をアリーセと交わしたことを唐突に思い出した俺たちは、多忙な日々の中にある僅かな休日を利用して酒場に来ていた。

そこまでは良かったんだが、

「まさか、お姉様がここまでお酒に弱いとは思いませんでしたわ」

「一番アルコール度数の低い安酒を一口飲んだだけでここまで酔うのは、流石に予想外です」

どうやら、アリーセはメチャクチャお酒に弱いらしい。

お酒を飲み始めて1分と経たずに、面倒くさい酔っ払いになってしまった。

酔ったアリーセも色っぽくて可愛かったが、流石にこの状態が小一時間も続くと疲れな。

何せ口外禁止という約束で話したこと（例えば俺の家名はフリッツであるなど）を、大声で言いそうになったりするんだぜ？

常にアリーセがヤバいことを言わないか気を張り続け、もし言いそうになったら咄嗟に口を塞げるようスタンバイしとく必要があるのは、普通に疲れる。

羽休めに酒場に來たのに疲労が溜まるとか、本末転倒だ。

「……アリーセも寝ちやいましたし、そろそろ帰りましようか。先ほどからずっと周囲の視線を集めていて、居た堪れないです」

「兵服を着ていて正解でしたわ。もしも私服を着ていたら、間違いなく男たちに絡まれていたでしょう」

ダイナ、アリーセ、ラウラと、3人とも容姿が整ってるからな。

入店した瞬間から、男の客たちがチラチラ俺たちの方を見て來て煩わしい。

俺も元男として気持ちは分かるが、だからといって容認するかどうかは別問題だ。

「ラウラ、お願いなんです……」

「お断りしますわ」

「まだ内容すら言っていないんですけど!? 断るにしても、せめてどんな頼みごとかくらい聞いても良いでしょう!?!」

コンマー秒で拒絶され、思わず大声を出してしまう。

慌てて音量を下げ、

「酔ったアリーセを部屋まで抱いて運ぶという大役を頼もうとしたのですが、嫌なら仕方ないですね」

「私にお任せなさい。ついでに一緒に湯浴みして、服を着替えさせて、一緒のベッドで一

夜を共にしますわ」

「運ぶだけで良いです。あと泥酔した人を入浴させないで下さい」

そういう言動をするから、いつまで経ってもアリーセに距離を置かれるんだよ。

手首がねじ切れんばかりの勢いで手のひらを返したラウラの姿に俺はそんな感想を抱くが、心の中で呟くだけにしておく。

わざわざ口に出して下らない問答をするなんて、時間の浪費以外の何でもねえ。

ラウラがアリーセをお姫様抱っこしている間に、俺は会計を済ませる。

恍惚の表情を浮かべるラウラと共に店の外へ出ると、既に空は暗くなっていた。

しばらく夜空を見上げた後、俺とラウラは無言で歩き出す。

かなり長かった沈黙を破ったのは、ラウラの方だった。

「……それで、貴女はまた真夜中に外で瞑想するなんて意味不明なことをするつもりですか？」

「あれは修練です。……まあ、側から見たらかなり不気味に見えるだろうことは自覚してますが」

しかし、他に何をどうしたら良いのか分からねえんだから仕方ないだろ。

『原作』でも副産物として生まれただけで、狙って作り出したモノじゃねーし。そんな訳で真夜中に行う瞑想に、これと言った成果は今のところないな。

が、やめるつもりは全く無い。

とにかく力があるのだ。可能性があるのなら、何だってやってやる。

「何をやっているのかは知りませんが、怪しいと判断した時は容赦なく首を刎ねますので」

「既に一度斬りかかれたので、それは良く理解してますよ」

あれは3日前の事だったか。

調査兵団旧本部の古城の庭で、ひたすら自傷を繰り返して『道』への干渉を繰り返している時のこと。

傷口から放たれるスパークを巨人化の光と思ったラウラが、俺が裏切るつもりなので勘違いして襲い掛かってきたんだよ。

何とか手に持っていた護身用ナイフで応戦しながら説得を行い、2時間の死闘の果てによりやく敵対の意思がないということが伝わった。

相変わらず、ラウラの中では俺の評価が全く向上していないらしい。

「……今でも、貴女を調査兵団の協力者としておくのは反対ですわ。貴女から得られた情報は有用で、強大な巨人の力はこれからの戦いで不可欠なものとなるでしょう。しかし、そのメリットを考慮してもリスクが大き過ぎると私は思いますの。そんなに大きなリスクを背負うくらいなら、さっさと貴女の首を刎ねてしまった方が良いのではと」

それはきつと、今でも調査兵の大部分が抱いている思いだろう。

エレンが巨人化能力者として覚醒して、その力の制御が安定してからは、俺を排斥しようという動きはさらに大きくなったしな。

『超大型』や『鎧』を始めとして、巨人化能力者が人類に与えた被害は余りにも大きい。俺の排除を願う兵士が多いのも、当然のことだろう。

しかし意外なのは、

「ラウラなら間違いなく、『ダイナ排除派』に参加していると思っただんですが」

「もちろん、貴女が消えるのは喜ばしいですわ。……けれど、貴女が死ぬと姉様が悲しむでしょう。どんなお姿、表情でもお姉様は素敵ですが、やはり笑顔が最も魅力的ですもの。本当に癪ですが、姉様が一番笑顔になるのは貴女の隣にいる時ですから」

そう言つて、ラウラは心底気に入らないと顔を背ける。

どれほど罵倒されても、嫌悪されても、暴力を振るわれても、俺がラウラを嫌いにならないかつた理由がこれなんだろうな。

自分の内で、他の何よりもアリーセという存在が上位にある。アリーセを守る為なら、微塵の躊躇もなく自分の命を犠牲性に出来る。

俺とラウラは、根元が全く同じだ。

ラウラが俺を嫌う理由は、アリーセの身を案じての事だと分かっていたから、俺はラ

ウラを嫌わなかった。

「つーか、そうでもない」と短気な俺がここまでボロクソに言われて頭に来ない方がおかしいわな。

一人で勝手に納得していると、再び俺たちの間に沈黙が降りる。

2度目の沈黙を破ったのは、俺の方だった。

「私は間もなく、大きな選択を迫られます。今はまだ調査兵団の味方として戦い続けませんが、その時がくれば私とアリーセは調査兵団と敵対するかも知れません。……もしくは、壁外人類を含めた全世界すら敵に回す可能性もあります。だから、ラウラも今のうちから考えておいて下さい。世界とアリーセ、どちらを取るか」

「質問が抽象的すぎますわ。要するに人類と調査兵団を裏切って味方になれと？」

「……その程度で済めば良いのですけどね」

「相変わらず煙に巻くような言い回しを……」

苛立ちを露わに舌打ちするラウラ。

そんな彼女に、覚悟を決めて俺がこの先何をするつもりなのかを打ち明ける。

選択肢は、2つだ。

1つ目は調査兵団に味方し続けることでマーレを打ち倒し、エルディア国を復権させ、俺の命を燃やし尽くすことで平和な世界を築いてそこにアリーセを送り出す未来

か。

2つ目は世界の全てを敵に回して『ダイナの延命』を行い、屍山血河が生まれるほどの戦いの果てに、2人で生き続けるというアリーセとの約束を守る未来か。

かなり大雑把に説明すると、こんな感じだな。

それぞれの選択肢にはまた更に数多くの選択肢が続くのだが、最初はこの2つだろう。

「……私からすると、貴女が1番を選んでくれると喜ばしいのですけど。ダイナという脅威が最後まで裏切ることなく調査兵団の味方であり続け、尚且つ最後には死んでくれると。平和な世界でお姉様と2人なんて、理想以外の何物でもありませんわ」

「私も簡単に1を選べたら、楽で良かったんですけどね」

「……………」

星を象ったクリスタルの中に、青い宝石が埋め込まれたペンダントに触れながら、俺はそう呟く。

胸元で輝くそれは、巨人化能力者捕獲作戦の前日にこの3人で遊びに出かけた時に買ったものだ。

その日の朝を思い出す。

アリーセに残りの寿命が8年しかないと伝え、そして彼女にもこの選択を迫った。

他者を殺して2人で生きるか、俺の命を使って平和な世界を作るのか。優しいアリーセが、選べるわけが無いと分かっている。

その時の彼女の言葉をはつきりと覚えている。

『そんな未来しかないなんて、絶対に認めませんから！ 平和な世界で、ダイナさんも私と一緒に生きるんです！ もし先に死んだら、私も自殺しますよ。地獄の底まで後を追って、ぶん殴ります』

……そんなこと言われたら、簡単に死ねなくなるっつーの。

俺だって死にたい訳じゃねえ。

出来ることなら、寿命で終わるその瞬間までアリーセの隣にいたい。

そんな感じで思考がループして、結局は選べなくて終わっちゃう。

だから1番を選ぶにせよ、2番を選ぶにせよ保険を用意しておきたいんだよ。

「そんな訳で、もし私が死んだらアリーセが自殺しないように見張って下さい。せつかく自分の命を使ってアリーセのために「平和な世界」を築いたところで、すぐにアリーセが死んだら甲斐がないでしょう？ これが本当の『お願い』です」

幸い酒場の時のようにすぐに断られることはなく、3度目の沈黙が降りる。

ようやくラウラが口を開いた時には、既に調査兵団の旧本部が見え始めていた時だ。

「ダイナ、貴女は………いいえ、何でもありませんわ。ところで、その選択の期限は？」

「早くて1年後、遅くとも後3年以内には決断を下す必要がありますね」

エレンが負傷兵を装ってマールレに入り込む1年前くらいには、選んだ未来に向けて動き始めたいしな。

アリーセの未来を奪う安楽死計画は絶対に阻止だ。

故にジークは潰す。エレンがジークに協力するのなら、エレンも潰す。

「取り敢えず、その『お願い』は聞いてあげます。私としても、お姉様が死ぬのは嫌ですもの」

「ありがとうございます」

「それと、私は世界もお姉様も選びませんわ。確かに何よりもお姉様が大切な存在なのは事実ですし、揺らぎません。しかし、人類の前進を願って心臓を捧げ、死んでいった仲間たちは裏切れない。彼らは私の大切な友人ですし、中には恋人もいました。私は仲間たちの屍の上に立っている。そう簡単に、その屍の山に背を向けることなど出来ないですもの」

もしも調査兵団とアリーセが争うのなら、どちらの味方もしない。

そう言ったラウラの横顔は、どこか寂しげだった。

「何故そこまでアリーセを慕うのか、聞いても?」

「次の『鎧』及び『超大型』撃退作戦で、お姉様を守りきれたのなら話してあげますわ。

とは言うものの、大した話ではありませんが。割とどこにでも転がっているような、ありふれた話ですよ」

……まあ、今は目の前のライナーとベルトルトに意識を向けるか。

あと数日の間に、準備は全て整うだろう。

ここで鎧の巨人と超大型巨人を打ち倒せたのなら、ウォールマリア最終奪還作戦の難易度が大きく下がる。

まだ修行の成果こそ出てないが、絶対にこの作戦は成功させる。

俺は俺とアリーセのために、全ての障害を駆逐する。



「よう、ライナーにベルトルトさん」

「———」

隠しているはずの本名で呼ばれた2人の青年が、弾かれたように振り返る。

背後へと向けた視線の先にいるのは、黒髪を首の後ろで留めたソバカスの目立つ女兵士の姿。

「ユミルか。憲兵の兵舎にまで、わざわざ何の用だ？」

「情報を持って来たんだよ。調査兵团のだ。エレンとあの『女型』が、また壁外に出るぞうだ」

第34話 第58回壁外調査

調査兵団の証たる自由の翼が描かれた深緑のマントを羽織り、腰には白銀に輝く巨人殺しの武器——立体機動装置を装備。

腰のベルトのポーチには信煙弾と、最悪の場合に備えての切り札を入れておく。

そして黒い毛並みが美しい愛馬に跨がれば、壁外調査へ向かうための準備は終わるだ。

ウオールローゼ東、ヤルケル区。

その開閉門の前で轡を並べて、俺たちはエルヴイン団長が第58回壁外調査開始の合図を出すのを待っていた。

フードで顔を隠しながら、馬上から辺りを見渡す。

「この殺潰しが！俺たちの税を無駄遣いしやがって！」

「さっさと全員巨人に食われちまえ！」

「前回の半分も数がいねえのに、何が出来るってんだ！」

暴言、罵倒の嵐だな。

それどころか、石を投げつけてくる奴までいる。

痛っ!?

今ので顔面に石が当たったの8回目だぞ。

いや、顔や体に当たるのはまだマシな方だ。馬や立体機動装置に当たる方がヤバイ。もし馬が暴れ出したり、立体機動装置が壊れたりしたら大惨事だ。

平民の一生涯分の稼ぎに等しい巨額をつぎ込んでるだけあって、調査兵団の馬はそう簡単にパニックに陥ったりはしないが、万が一って事がないとか限らねえ。

「ちゃんとアンタに言われた通りやって来たぞ。クリス……いや、ヒストリアは無事なんだろうな？」

「ええ、お疲れ様です。それと彼女ならウォールシーナ内できちんと保護しているので、ご心配なく」

と、思考を遮って話しかけて来た相手に労いの言葉を返す。

俺の右隣に馬を並べたのは、同じくフードで顔を隠したユミルだ。彼女が土壇場で裏切るのが最大の懸念だったが、杞憂で済んだらしい。

これで作戦を開始するために必要な準備は全て整った。

「……ライナーたちは？」

「私らから見て、右方の壁上だ。敵さんは血眼になってアンタを探してるよ」

右上の壁上……あの辺りか？

ユミルが示した方向へと視線を向け、フードを少しだけ引いて敢えて顔を晒す。

もし向こうが望遠鏡やらでこちらを確認しているなら、今で俺の顔が見えたはずだ。今ここにいる調査兵団は本来の半分くらいだし、ちよつと見渡せばすぐに俺に気づく。多分。

前回の第57回壁外調査で、俺は奴らに『叫び』の力で巨人を操るところを見せている。必死になって『座標』を探してる奴らなら、俺の『叫び』の力を『座標』と勘違いしてもおかしくない。

勘違いしているのなら、エレンよりも俺を優先的に狙うだろう。アニを食い殺した事で、ベルトルトの恨みも買っているし。

フードを被り直し、再び前を向く。

開始まで後数分くらいか……やべえ、緊張してきた。手綱を握る手が僅かに震えている。

あー、情けねえ。

どれだけ戦場を経験して、死線を潜っても、巨人と戦う恐怖つてのは和らがない。気を抜いたら即死する地獄に飛び込むのは、元日本人にとっては決して慣れる事が出来ないのかもしれない。

「ダイナさん、体調は大丈夫ですか？」

首を振って心の中の恐怖を追い払っていると、左からアリーセが俺の顔を覗き込むようにして聞いてきた。

作戦の立案者が及び腰なのは良くねーよな。

敢えて強気な笑みを浮かべ、アリーセに言葉を返す。

「問題ありませんよ。アリーセは？」

「私もバッチリです。今なら15メートル級を3体纏めて相手にしても勝てますよ」

なんかさ、戦いを経るごとに強くなってねえか？

15メートル級を3体同時とか、俺は勝てる気しねーんだが。

結局、真夜中に延々と繰り返した瞑想もこれといった効果は出なかったしな。

アレか。

お酒。パワーか。

そう言えば、泥酔して眠った次の日のアリーセは肌がツヤツヤしてた。

「お酒は百薬の長とはよく言ったものですね」

「あ、あの時のことは忘れてください！」

アリーセが顔を真っ赤にして両手で顔を覆う。

かなり泥酔していた彼女だが、どうやら記憶はしっかりと残っていたらしい。次の日の朝、今みたいに真っ赤な顔で謝りに来たアリーセは可愛かった。無論、今も可愛い。

異論は認めん。

余談だが、ダイナは全く酔わない。

あの時のアリーセの3倍は飲んだ筈だが、素面の時と何も変わらなかったし。

「アリーセもそうだが、お前もかなりの体力馬鹿だよな。昨日は一晚中穴掘りしてたのに、平気な顔をしてんだから」

「瀕死の傷を負って、未だに包帯も取れてないのに嬉々として作戦に参加したフォルカーにだけは言われたくありません。というか、本当に体は大丈夫なんですか？ 頭の包帯に血が滲んでますけど」

「出血なんか気合いで止まるぜ？」

「その2人と違って、貴方は巨人じゃないでしょう！ 無理して足を引つ張ったら許しませんわよ」

ミイラ状態でサムズアップするフォルカーの頭を、彼の右隣にいたラウラが引つ叩く。

おい、包帯がさらに赤くなったぞ。

コイツまじで死ぬんじゃないの？

だがまあ、フォルカー以外に「第二特別作戦班」の指揮を執る奴がいねえのも事実だ。事あるごとに死者を出してメンバーが入れ替わる俺たち第二特別作戦班。現在のメ

ンバーは俺、アリーセ、ラウラ、フォルカー、そしてユミルだ。クリスタ……もといヒストリアは離脱。ユミルに言った通り、彼女は今ウォールシーナ内の調査兵団支部で保護されている。

俺がヒストリアと言い直したのは、彼女がユミルと面会を行った時にクリスタは偽名で、ヒストリアが本名だと言ったからだ。

『原作』でのウトガルド城攻防戦が無くなったから、ヒストリアが覚悟を決める切っ掛けが無くなったんじゃないかと心配だったんだよな。

そして指揮の話だが、まず俺とアリーセは論外。

ただの協力者に過ぎない俺たちに、班1つの指揮権が与えられる訳がねえ。

ユミルも同じく。こっちは調査兵団と敵対して殺し合ったから、俺たちよりも警戒されてるしな。

ラウラは指揮官としての才能があまり無いらしく、人の上に立つ役割に適さない。

ならば他の分隊や班から指揮官を引っ張ってこいって話だが、完全な味方とは言い難い巨人化能力者が2人もいる班に入りたいと思う変人はいないだろう。

「あー、ダイナがこの辺りにキスしてくれたら、鎧の巨人でもぶっ殺せる気がするなー」自分の頬を指しながら、チラチラと俺の様子を窺うこのバカを除いて。

コイツ、格闘技の賭け試合をやった後からどんどんセクハラ発言が増えたな。

野郎にキスなんかしねーよ。

つーか元人妻に向かつて何言つてんだテメエ。

アリーセとラウラにゴミを見るような目を向けられることに気づけ。そのうち巨人に食われかけても助けてもらえなくなるぞ。

と、そこで先頭のエルヴィン団長が手を挙げたので口を閉じる。

緊張をほぐすために談笑していた他の調査兵たちも一瞬で会話を止め、全ての意識をエルヴィン団長へと向けた。

「これより、第58回壁外調査を開始する！ 前進せよッ!!」



《現在公開可能な情報》

調査兵団はなぜか本来の数の半分ほどしか、カラネス区から出発しなかった。残りの半分が何処にいるのかは不明。

市民の視点では調査兵団は第57回壁外調査以降活動をしておらず、解体直前に行わ

れた苦し紛れの行動にしか映らない。ヤルケル区とラガコ村での戦いは徹底的な情報規制が行われた為、カラネス区の住民はその戦いが起きたことすら知らない。

第58回壁外調査の表向き理由はウォールマリア奪還。真の目標である『鎧』及び『超大型』撃退作戦を知るのは、調査兵団に所属している者のみ。

エレン、ミカサ、アルミン、ユミル、ヒストリアを除く104期は、未だに『鎧』と『超大型』の正体を知らない。これは鎧の巨人と超大型巨人がライナーとベルトルトだと知った104期の戦意が低下するのを防ぐため。

第58回壁外調査の前日、ダイナは一晩中『穴掘り』をしていた。

ダイナが真夜中に行なっていた謎の訓練は、今のところ何の成果もないらしい。



カラネス区から出発して、30分くらい経った時だろうか。

人員が本来の半数しかない為、随分と小さくなってしまった長距離索敵陣形の後方から、遂に黒の煙弾が連続して打ち上げられた。

もの凄い勢いで増える黒の煙弾の数が、襲来したのがただの奇行種ではないことを知

らせている。

……お出しました。

ユミルから聞いた、今回のライナーたちの作戦は以下の通り。

予想通り俺を暫定『座標』保持者としたらしく、俺の捕獲が奴らの最優先目標だそう
だ。

まずは顔が割れていないユミルが人の姿のまま調査兵団の中に潜り込み、俺の近くで
待機。壁外調査開始後にライナーが巨人化し、予めユミルから聞いていた俺の居場所へ
と向かう。

『鎧』が俺に追いついたと同時にユミルも巨人化し、援護が来る前に全力で俺を捕獲。
逃走の際には敢えてゆっくり走ることで調査兵団の追撃を受け、敵が集まった頃合い
を見計らってベルトルトが巨人化。追っ手をまとめて吹き飛ばす。

『超大型』の爆発で敵に大ダメージを与えた後、鎧の巨人が装甲を剥がして全力離脱を
行う。

……何つーか、ガチだ。

この作戦がまともにハマっていたら、俺は間違ひなく捕獲されていた。

鎧の巨人を倒そうと巨人化した瞬間に、顎の巨人という伏兵に襲われたら流石に敗北
は免れない。敵の視点通り俺がユミルⅡ顎の巨人だと知らなければ、この奇襲は絶対に

成功するだろう。

俺の配置は陣形の中央なので、無垢の巨人を呼び寄せる『叫び』は調査兵団を巻き込むから使えねえ。

うん、これは死ぬ。

ま、ユミルが寝返った以上この作戦は根っこから機能しないがな。

ユミルに頼んでライナーに敢えて俺の居場所を教えたのも、あくまで俺を囿に鎧の巨人を誘導するため。

顎の巨人による奇襲は行われず、ライナーが俺の場所に来るのは飛んで火に入る夏の虫だ。

「ダイナ、来たぞー！」

頭の中で作戦内容を反復確認していると、フォルカーが鋭い声で警告を発した。

瞬時に後ろを振り返ると、地平線の先にこちらへと迫ってくる巨大な影が見える。

鎧の巨人だ。

「やった、釣れた！」

「お姉様、喜ぶのは少し早いですわよ！ フォルカー、指示を！」

笑顔を浮かべるアリーセを窘めたラウラが、フォルカーに指示を仰ぐ。

「よし、ユミルはそのまま顔を隠しながら先行して先発隊と合流しろ！ ダイナは反対

に顔を晒して『鎧』を引き付けるんだ。作戦通り、このまま奴を捕獲地点へ誘導する！」

「了解！」

ユミルは黄色と緑の煙弾を同時に打ち上げると、フォルカーの命令通りに速度を上げて目的地へと先行する。

まだライナーたちに、ユミルが寝返ったことを知られない方がいい。

顎の巨人が奇襲を行わない時点でライナーはユミルを疑うだろうが、その段階だともだ「疑い」止まりで裏切りを「確信」出来ないだろう。

ここは壁外、いくらでも不都合は予測される。

2色の煙弾を見て現れた他班の兵士が3人、ユミルと共に捕獲地点へと向かう。当然ながら調査兵団もユミルを信用してないからな。単独行動を許すはずがない。

あの2色の煙弾はユミルが先行する合図であり、付近の別の班からユミルの監視役を呼び寄せるものだ。

小さくなるユミルたちの背中を見送りながら、俺はフードを取って顔を晒す。

遠目でも分かるほど鎧の巨人がピクリと反応し、蒸気を吐き出しながら一気に距離を詰めてきた。

「追いつかれず、だが突き放さない絶妙な速度を保つぞ！ 速度を俺に合わせろ！」

僅かに速度を緩めたフォルカーに従って、俺も少しだけ手綱を引いて速度を落とす

た。

すると1秒ごとに地鳴りの音が大きくなり、大地が震え、少しずつだが確実に鎧の巨人が近づいてくるのが感じられる。

落ち着け、落ち着けよ。

今のところ全てが作戦通りだ。

「速度上昇！」

今度は馬の横腹を軽く蹴り、速度を上げた。

既に鎧の巨人との距離は10メートルちよつと、十分以上に引き付けたと判断したの
だろう。

『鎧』より少し遅い速度から、同じくらいの速度へと加速。これ以上は距離を詰められないように心がける。

「——オオ」

……っ。

近くに潜んでいるはずの『顎』が出てこないことに気づいたか？

疑念からか鎧の巨人が低い声で唸ったその時、前方から幾多もの信煙弾が打ち上げられた。

色は緑。

打ち上げたのは先頭を走るエルヴィン団長……ではなく、その更に先に見える巨大樹の森にいる兵士である。

第57回壁外調査で『超大型』に更地に変えられた場所ではなく、よりウォールマリアに近い別の巨大樹の森だ。

森のスケールは、前の方が少し大きいか。

それでも、顎の巨人がそのポテンシャルを發揮するには十分の広さがあるだろう。

前回俺たちを苦しめた『顎』の超立体機動能力が、今回は頼もしい武器となる。

尤も、本命は寝返ったユミルによる奇襲ではなく――

巨大樹の森にぶつかると同時、長距離索敵陣形が散開。

全ての兵士が立体機動へと移り、森の中へと入っていく。

但し、俺たちだけはそのまま馬で森のど真ん中へ突入。

もうお分かりの通り、本作戦の前半部分の半分はエルヴィン団長が考案した『女型』捕獲作戦だ。

まあ、致命的に違う部分が多いのだが。

「立体機動開始イ!!」

フオルカーの合流で鞍を蹴り飛ばし、アンカーを射出して立体機動へ。

俺達が乗っていた馬は主人がいなくなったためにその場で停止し、しかし真後ろまで

迫っていた鎧の巨人は止まらず、むしろ速度を上げて俺を捕らえようと手を伸ばす。

——かかった。

「オオオオオオッ!？」

そんな悲鳴を残して、鎧の巨人が消える。

直後に轟音が鳴り響き、まるで地震かと思うほど大地が震えた。

「よっしやあッ! ザマア見ろデカブツ!」

「本当にこんな古典的な罠に引つかかるとは……」

フォルカーの歓声と、ラウラの呆れと喜びが混じった声。

それらを聞きながらガスを吹かして巨大樹の枝の上に着地し、つい先ほどまで確かに

鎧の巨人がいた地点を見下ろす。

巻き上げられた大量の土煙が晴れた先には、胸元近くまで地面に埋まった鎧の巨人の

姿が。

「全大砲、放てえッ!!」

驚愕の表情を浮かべてこちらを見上げる鎧の巨人を、ハンジさんの怒号が出迎えた。

先にカラネス区を出発して巨大樹の森で『鎧』の迎撃準備を整えていた調査兵団の残

り半分——ハンジさんたち先発班が、ありつただけの砲弾を身動きが取れなくなった鎧の

巨人へと叩き込む。

壁内の大砲は『対巨人野戦砲』のようにライナーの鎧を貫くほどの威力はないが、これだけ大量の火薬を一気に爆発させたなら話は別だ。

確実に両目は潰れ、破壊には届かなくとも奴自慢の鎧にヒビくらいは入るだろう。

全ての砲弾を確実に当てるための落とし穴を、エレンと共に何日も前からこの巨大樹の森に籠って作った甲斐があつた。

15メートル級が胸元まで埋まる馬鹿げた落とし穴など普通ならば絶対作れないが、俺とエレンが巨人化して掘ればいける。

『叫び』の力で巨人を遠ざけながら進めば、少数精鋭でこの巨大樹の森とカラネス区を往復するなど容易いからな。

俺が逃げないよう監視するとの名目で兵長も付いてきてくれたから、叫びの力を突破して近づいてくる巨人も瞬殺だったし。

「頼んだよ、3人ともし」

全砲弾が命中したのを確認したハンジさんが、再び声を張り上げる。

さあ、これで終わりだ鎧の巨人。

ベルトルトの出番など作ってもやらない。

今ここで、ライナーを瞬殺する。

木の上から俺、エレン、ユミルが同時に飛び降りる。

エレンが右手を犬歯で食いちぎり、ユミルは超硬質ブレードで手のひらを切り裂き、俺は護身用ナイフを腕に突き刺した。

空から3つの雷が絡み合いながら降り注ぎ、俺たち3人は巨人へと姿を変えていく。

「オオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

同時に雄叫びを上げた『女型』、『進撃』、『顎』が、落下の威力をも加えた渾身の一撃を鎧の巨人へと叩き込んだ。

第35話 M1「戦士」の覚悟

エルヴィン・スミスの号令に合わせて、躊躇なく壁外へと飛び出していく調査兵団。その様子を、カラネス区が一望できるウォール・ローゼの壁上から見下ろす人影が2つ。

片や恵まれた体格と鍛え上げられた肉体を持つ、金髪の青年。
片や192センチという突出した高身長を持つ、黒髪の青年。

兵服を身に纏い、巨人を殺せる唯一の武器である立体機動装置を腰に装備した彼らは、しかし人類の守護者たる「兵士」ではない。

この2人こそ、5年前の「あの日」の地獄を作り出した張本人。『座標』の奪取を目的とし、人類を地獄へと叩き落とした「戦士」である。

その名はライナー・ブラウンとベルトルト・フーバー。

第104期訓練兵団には偽名を使って入り込んでいるため、その真名を知っている者は極少数であるが。

「しかし、調査兵団も随分と強引な手段を取ったな」

「ただどこの壁外調査が成功すれば、確実に解体を免れることができる。あの女の力を

使えば僕たちが開けた穴なんてすぐに塞げてしまうから、資材を運ぶための人員も必要もない」

「調査兵団の数がかなり少ないのはそれが原因か。確かに、少数精鋭だけであの女を最速でウォール・マリアに送り届けるのが、最善の策と言えるな」

不可能と言われ続けていたウォール・マリア奪還を、僅か1日以下で成し遂げる。

そんな成果を上げれば、調査兵団を解体の話は即座に消えるだろう。

見事なまでの、起死回生の一手。

「事前にユミルから情報を得ていなかったらヤバかった。まさか情報規制をかけて、今日まで壁外調査の予定を明らかにしないとは」

『鎧』と『超大型』が兵団内に潜んでいることは、間違いなくバレてると考えて良い……。「ああ。あの女がアニの記憶から俺たちの正体を割り出して、調査兵団に伝えただろう。……だが、あの女は『顎』の正体までは知らないはずだ」

いくら『鎧』と『超大型』の力を持つライナーとベルトルトでも、『女型』と『進撃』そして『始祖』の力を持つダイナとエレンに加えて、リヴァイ兵長を始めとした調査兵団の精鋭たちを、正面から撃破するのは難しい。

だからこそ、クリスタを人質にしてまでユミルを味方につけるといふ強引な手段を取った。

雪山での兵站訓練の際に、ユミルが巨人化能力を使用した瞬間を見たのは奇跡と言えるだろう。

そして、無理やりにもユミルを味方にしたのは正解だった。

彼女はクリスタを通して、調査兵団の情報を流してくれる。

今回の第58回壁外調査の作戦内容や、ダイナとエレンの居場所も全て把握済みだ。

57回ではダイナとエレンの居場所が分からず、鎧の巨人と顎の巨人による強引な捜索を行う必要があったが、今回は一直線に目標へ迫ることが出来るのは非常に大きい。

だが1つ懸念があるとすれば、本当にダイナは『座標』を宿しているのか断定出来ないこと。

周囲にいた無垢の巨人を操り、こちらを襲わせたところから、高確率で『座標』を持っていると予想できる。

しかしダイナはユミルと同じで、楽園送りにされ無垢の巨人と化した状態から、偶然アニを食って人に戻った人物だ。

壁の王が持つ『始祖』を、いつ奪ったというのか。

それに彼女は、どうやら正式に調査兵団に所属している訳ではないらしい。

ライナーは憲兵の権力を行使して訓練兵団に所属していた兵士リストを閲覧したが、そこにダイナの名前はなかったのだ。

だというのに彼女は立体機動装置を使いこなし、巨人化能力者であると調査兵団に打ち明けていながら、処刑されていない。

エレンの扱いを見れば一目でわかる。

壁内の人類にとつて、巨人化能力者は恐怖の対象だ。

エレンと違ってトロスト区の穴を塞いだといった功績もなく、兵士ですらない彼女は、どうやって調査兵団に潜り込んだのか……

その全てが謎。

継承した巨人は『女型』であるはずなのに、『戦鎧』の巨人と類似した硬質化能力を操る。

ユミルと同じ略奪者に過ぎないのに、巨人化能力の練度は「戦士」であるライナーをも上回るほど。

明らかにアニの女型の巨人を超える身体能力と、持久力の高さ。

無垢の巨人を呼び寄せ、操作する能力。

アニの記憶から彼女の格闘技を再現する体術のセンス。

高度な部分巨人化。

……あり得ないほど多彩な能力を持ち、だがそれでも底が見えない。まだ何か力を隠しているのではないか、そんな予感すら感じられる。

いいや、間違いなくまだ能力を隠しているはずだ。

まだ自分はその女の——ダイナの本気を、見ていない。

「——行くぞ、ベルトルト。今日で終わらせる。『座標』を手に入れて、故郷に帰るんだ」
「ああ。必ず帰ろう、2人で」

それでもライナーは止まらない。

全ては故郷に帰るため。

マルセルとアニの死を無駄にしないために。

「戦士」としての責務を果たすために。

ユミルに第58回壁外調査の日程と作戦内容を聞いた時から、あらゆる事態に備えて準備はしてきた。

エルヴィン・スミス、ハンジ・ゾエ、アルミン・アルレルトといった面々に頭脳戦で勝つのは難しいだろうが、それでも食らいつく程度の策は練っている。

ライナーは大きく深呼吸すると、超硬質ブレードで自分の右腕を斬り裂き、ベルトルトと共に壁上から飛び降りた。

「悪いなベルトルト。お前にはしばらく窮屈な思いをさせるが、これも任務のためだ」
「相手の意表をつくのに必要なことだよ。やってくれ、ライナー」

会話を終えたライナーは地面が近づいてきたのを見計らい、体の内に宿る巨人の力を

発動。

空から雷が落ち、蒸気と共に傷口から巨人の骨肉が生み出されていく。

現れた巨人体の大きさは、『超大型』などの例外を除いて巨人の中で最大とされる15メートル級。無垢の巨人よりも遥かに発達し、盛り上がった筋肉。

そして、まるで鎧のような硬質化物質が全身を覆う。

九つの巨人が一体。

破格のパワーと防御力を持つ鎧の巨人と化したライナーは、着地と同時に大地を蹴り飛ばして走り出した。

一歩ごとに大地が震え、その巨体が加速していく。

ダイナの『女型』やユミルの『顎』ほどの速度は出ないが、それでも調査兵団の馬に追いつがる程度の速度ならギリギリ出せるのだ。

(ユミルが上手くやっていているなら、既にあの女の近くに陣取っているはずだ。だがもし無垢の巨人に襲われたとかでユミルが作戦通りに動いていない時は、俺が1人で『女型』のうなじを齧り取らねえと……)

『鎧』たる自分に、兵士の刃は通らない。

必然的に女型の巨人とタイマンになるが、果たして勝てるだろうか。

(……いや、勝てるかどうかじゃねえ。勝つんだ。勝って、故郷に帰る)

一步前に進む度に、自分の中で覚悟を固めていく。
もう迷いはない。

必ずダイナを捕獲する。

その邪魔をするなら、例えば104期が相手でも——
ドオンツ！ と。

もう聞き慣れた発砲音と共に、空に黒の煙弾が昇った。

当然ながら、ユミルにはクリスタを介して信煙弾の色が何を意味をするのかも聞いている。

黒は奇行種の発見だ。

(さあ、調査兵団はどう動く?)

走る速度は緩めず、ライナーは視線を黒の煙弾が打ち上げられた箇所へと向ける。

前回はすぐに調査兵たちが攻撃を仕掛けてきたが……

(……流石に、前回の壁外調査で学んだってことか)

立体機動装置が発する、特有の機械音は聞こえない。

それどころか、ライナーの視界内に映る兵士たちは速度を上げてこちらから離れていく。

しかし、調査兵団の対応はこちらとしても好都合だ。

邪魔されないのであれば、ダイナに近づくのが楽になる。

それにライナーとて、好きで人を殺している訳ではないのだから。殺さずに済むのなら、それに越したことはない。

離れていく調査兵たちから視線を外し、ライナーはさらに陣形の中央へと向かう。

そこで、再び信煙弾が打ち上げられた。

色は黄色と緑の2色。

(2色同時……? 何の合図だ? 確か黄色は作戦続行不可能、緑は進路決定だった筈だが……?)

敵の意図を探るために、信煙弾を打ち上げたまだかなり距離が離れた位置で走る5人1組の班を注視する。

班長らしき人物の指示で、班の中の1人だけが加速した。

信煙弾を打ち上げたと思われる人物が、他班から援軍と共に先行していく。

(まさか、あのフードで顔を隠したのが……!)

ライナーの姿を見た調査兵が真っ先に逃がそうとする人物は、ダイナかエレンしか考えられない。そして、今ライナーがいるのは長距離索敵陣形の中央後方あたり。いるとするなら、ダイナの方だ。

先行する兵士を追撃しようと両足に力を込めた、その時。

1人の兵士が、フードを脱ぎながら振り返った。

肩の長さで切り揃えられた美しい金髪が、陽の光を浴びて輝く。

忘れもしないその顔。

余裕の笑みすら湛えたその女性は。

(ダイナ……………ッ！)

標的を捉えたライナーは、鎧の巨人を加速させる。

僅かに口を開き、機関車のように蒸気を吐き出しながらダイナへと突貫した。

意識は全てダイナへ。周囲の兵士が攻撃してこようとも関係ない。兵士の刃などライナーの鎧には通らないのだから。

例外として警戒すべきは巨人化能力を持つエレンと、規格外の存在であるリヴァイ兵士の2人か。だがその2人が所属するリヴァイ班とやらは、ダイナの所属する班とは位置が少し離れていた。

ダイナとライナーの距離は目に見えて縮まっている。

この速さならば、エレンやリヴァイ兵士長が援護にくるより、ライナーがダイナに追いつく方が早い。

ユミルと連携攻撃を行えば、例えダイナと言えどそう長くは……

「——オオ」

(……ユミルはどうした?)

宿敵を前に昂ぶっていたライナーの心が、違和感に気づいたことで冷静さを取り戻す。

既にダイナとライナーの距離は数メートルだ。

もう近くに潜んでいる筈のユミルが巨人化して、奇襲を行なってもおかしくない。

何かあったのか?

人員の入れ替わりが激しい調査兵団だ。部外者が1人紛れ込んだとしても、そう簡単に気付かれはしないだろう。ユミルが駐屯兵団所属だと知っている同期なら怪しむだろうが、そんなことはユミルとて理解している。自ら同期に近づくわけがない。

何より、奴らはエレンとダイナが自分たちに特定されないよう全員がフードで顔を隠しているのだから、声でも発しない限りユミルの隣に同期がいても顔がバレることは……な……い……??

じゃあ何で、ダイナは敢えて顔を晒したんだ?

(ツ!!?)

背筋に悪寒が走る。

ライナーが嵌められたと気づいた時には、既に調査兵団は巨大樹の森へと入ってし

まった後だ。

あの女は、ダイナは、自分を囿にしたのだろう。

それ以外に自ら顔を晒す理由がない。

(ここは一旦退いて、調査兵団の出入を窺うか!?)

焦りがライナーの思考を鈍らせる。

だからこそ立体機動に移ったダイナが手の届く範囲に入った瞬間、無意識のうちに手を伸ばしてしまったのだろう。

本来のライナーであれば、深追いせずにくぐさま反転していたはずだ。

ガクンツと、視界がブレた。

踏み出した右足から地面の感触が消える。

一瞬の浮遊感の後に、鎧の巨人の巨体が大地へと沈んだ。

(まさか、落とし穴——ツ!?)

冗談みたいな罨だが、これほど効果的なものはない。

硬質化能力によって生み出した鎧で全身を覆っているライナーの巨人体は、基本的に体重が軽いという巨人のセオリーに含まれずかなり重たい。

それは歩くたびに周囲の大地が揺れるのが証明している通りだ。

胸元近くまで大地に埋まってしまおうと、そう簡単には抜け出せなくなる。

「全大砲、放てえッ!!」

どこに隠れていたのか、号令と共に全方位から調査兵がその姿を現す。

咄嗟に両腕で顔を覆うが、調査兵団渾身の一撃はその程度で完全に防げるほど甘くはなかった。

視界が迫り来る砲弾で埋まってしまうほど、莫大な量の砲撃。一発や二発の砲弾を受けたところで『鎧』は揺らいだりしないが、これほどの数を同時に受けると話がかわわてくる。

——ツドツツツツドン!! と。

腹の奥にまで響く轟音を最後に、五感が吹き飛んだ。

両目はあつさりと破壊され、両腕の「鎧」はズタボロとなり、頭部が吹き飛んで脳が露わとなる。

頭部を負傷したことで巨人体は殆どライナーの命令を受け付けなくなり、本体と巨人体の接続が8割近く途切れてしまう。

完全に吹き飛ばなかったのは流石と言ったところだが、致命傷だ。

もはや鎧の巨人は抵抗する事すらままならない。

(次、今のとと同じ砲撃を受けたら死——)

「頼んだよ、3人とも!」

敗北を予期するライナーの思考を遮るように再び号令がかかり、その命令に従って木の上から3つの人影がこちらへと飛び降りてくる。

3人とも、ライナーの知っている人物だ。

1人は同期であり、背中を預けて巨人と戦ったこともあるエレン・イエーガー。

1人は言わずもがな、何度もこちらの任務を妨害し続けた宿敵ダイナ。

そして最後の1人は。

(ユミル、まさか裏切って……!?)

超硬質ブレードで自傷を行うソバカスの女性の姿にライナーは愕然としながら、自らに襲い来る3体の巨人を前に口を開く。

すると『女型』が慌てたように目を見開いた気がして、ライナーは少しだけ不敵に笑った。

(作戦変更だ、ベルトルト)

女型の巨人の硬質化した足が、進撃の巨人の拳が、顎の巨人の爪がライナーを捉えるその寸前、『鎧』の口内からベルトルトがスパークを散らしながら飛び出した。

既にライナーは胸元から上がズタボロだが、仰向けになればうなじは守れる。

『超大型』の爆発に、耐えられる。

ライナーが防御姿勢を取ると同時にベルトルトへと雷が突き刺さり、街一つを吹き飛

ばすほどの大爆発が引き起こされた。

第36話 不完全な武術

鼓膜を突き破るかのような轟音と、視界を真白に染め上げる閃光。爆風が巨木を薙ぎ倒し、撒き散らされる高熱が大地を焼き焦がす。

大爆発を引き起こしながら、巨大樹の森の中央に顕現するのは天にも届いているのかと錯覚してしまうほど巨大な怪物。

その大きさ、実に60メートル級。

そんな破壊の化身は、遙か高みから未だに黒煙に包まれる巨大樹の森を見て確信する。

……勝った、と。

間違いなく完璧なタイミングだった。

鎧の巨人が落とし穴にハマり、大砲の一斉掃射を受けたのを見て、調査兵団は追撃を行う絶好の機会だと判断したのでろう。

『女型』、『進撃』、そして彼らにとっては隠し玉とも言える『顎』まで投入した渾身の一撃。

それを十分以上引き付けたところでの、『超大型』による完璧なカウンターだ。あの至

近距離では、まず防御は間に合わない。

最大の懸念は『座標』を持つと思われるダイナが死んでしまった可能性だが、あの並外れた『女型』なら、咄嗟に硬質化してうなじを守るだろうという謎の信頼が、ライナーとベルトルトにはあつた。

敵の脅威ダウと強さを認めているからこそその、信頼が。

——だが、それでも。

「まさか、同じ手が何度も通用すると……本当に思っていたのですか？」

未だに立ち込める黒煙の中から、凜とした女性の声が焦土に響く。

高熱を纏う、60メートルの巨体を持つ破壊の神が。超硬質ブレードすら通さない、鉄壁の鎧を持つ動く要塞が。

共に目を見開いて、声がした方向を凝視する。

「落とし穴まで作っておいて、他に何も用意していないとでも？」

一陣の風が黒煙を運び、変わり果てた巨大樹の森が視界に映った。

灰燼に帰した草木。黒く染まった大地には小さな炎が今も燦っており、爆心地であった超大型巨人の足元は、さながら隕石が落ちた後のようなクレーターが作り上げられている。

それほど世界を壊す力に、至近距離で触れておきながら。

彼女は——ダイナ・フリッツは。

「貴方たち2人と戦うにあたって、最も警戒すべきなのは『超大型』が引き起こす広範囲爆破。まともに受ければ、まず助かりませんから。しかし、裏を返せば『超大型』の一撃さえ防いでしまえば、後は私たちが圧倒的に有利となる」

何も残らないはずだったのだ。

超大型巨人が力を解放したが最後、周囲は更地と化す。そのはずだったのに。消えた巨木の代わりに、落とし穴の周囲には無数の「壁」が聳え立っていた。

それらの高さは20メートル、横幅は10メートルほど。

ヒビ割れ、黒ずみ、今にも崩れ落ちそうになりながらも、無数の「壁」は確かに調査兵団を守りきっている。

落とし穴と同じように、その「壁」は予めダイナによって作られていて、先ほどまでは草木によって隠されていたのだと「戦士」たちが気づいた時には、もう手遅れだった。

上半身をうなじから露出させた状態のまま、ダイナは女型の巨人を操り、彼女を爆風から守りきってポロポロになった「壁」を蹴り砕く。彼女の近くでは、同じようにエレンとユミルが用済みとなった「壁」を砕いている。

（あの一瞬で、僕の爆発を……!?!）

調査兵団が盾とした周囲の「壁」はまだ理解可能だ。

別に硬質化能力に特化している訳でもない『女型』で、この規模の「壁」を無数に作り出したのは恐るべきことだが、時間をかけて少しずつ作業したのなら、不可能ではない。

しかし、ダイナたち巨人化能力者の前には「壁」はなかった。

ベルトルトが巨人化する直前、ダイナたちは各々の最大の一撃を、今まさに鎧の巨人に叩き込まんとしていたのに。

まさか『鎧』の口内からベルトルトが飛び出したのを見てから、ダイナは自分と他人の前に爆発を防げるほどの「壁」を作ったと言うのか。

ベルトルトが飛び出し、巨人化して爆発を引き起こすまでの、僅か10秒足らずの間で。

「落とし穴、砲撃、そこに巨人化能力者全員による攻撃。そこまでやれば貴方たちは間違はなくソレを調査兵団最大の一撃だと判断し、カウンターとして『超大型』の爆発を使うと思っていました。なので私は硬質化した足で蹴りを繰り出すと見せかけ、その裏で硬質化能力の「壁」を作っていた訳です」

ベルトルトにいち早く一回限りの爆発を使わせるために、失敗すれば巨人化能力者を全員失う博打を行う。

ダイナの行動に狂気すら感じて冷や汗を流す『超大型』と『鎧』だが、彼女には出来

るといふ根拠があつた。

事実、『原作』のエレンが似たようなことをしている。

ロッド・レイスは100メートル超えの巨人となり、洞窟の崩壊を引き起こしたが、その時エレンは『ヨロイ・ブラウン』というラベルが貼られたビンの中身を服用したことで、一瞬にして大規模な硬質化能力を発現。見事に洞窟の崩落を防いだのである。

そのシーンから着想を得たダイナがハンジ・ゾエと共に練習を繰り返し、そして会得した「高速物質生成」の能力。

それが至近距離で爆発を浴びながらも、ダイナ、エレン、ユミルの3人が無傷で済んだ理由だ。

(まあ、出来るようになるまで地獄だったがな……)

取り敢えずここまでは作戦通りなのを確認して、ダイナは安堵から大きく息を吐く。簡単に能力を獲得したと言ったものの、その道のりは決して楽なものではなかった。

何度もナイフを己の体に突き立て、自傷し、激痛を対価に『道』へと干渉し、王家の血筋を利用して限界以上の力を引き出そうと試みる。それを延々と繰り返した先に、ようやく届いたのだ。

尤も、ダイナが本当に追い求めている力は未だに得られていないのだが。

ともあれ、広範囲爆発という敵の最大のカードは完封した。

「超大型巨人は熱を放出している間、動くことが出来ない。これで貴方の相方は力尽きるまでロウソクとなりましたね」

別に無理をして超大型巨人のうなじを削ぐ必要はないのだ。

『超大型』は圧倒的な巨体と破壊力に反比例して、持久力——継戦能力は極めて低いだから。

常にリヴァイ兵士長とミカサ、そして調査兵団の精鋭たちが超大型を狙い続けるというこの状況で、熱風の放出をやめればどうなるのか。そんなもの、考えるまでもない。

熱の放出による迎撃を中断したが最後、次の瞬間にベルトルトはうなじの中から引き摺り出されるだろう。

ベルトルトに残された選択肢は2つ。

このまま骨だけになるまで力を使い続けて倒れるか、うなじを削がれて倒れるかのどちらかだ。

「オオ——」

爆発で大地が抉れたことで落とし穴から抜け出せた鎧の巨人が、傷の再生を行いながら立ち上がる。

大量の砲撃を浴びた挙句に、ゼロ距離での超大型の爆発を受けた『鎧』は既に少ないダメージを負っているが、それでもまだ戦闘を行うには十分の力を残しているらしい。

い。

（場の流れは俺たちが掌握している。奴らに残された勝ち筋は、もうライナーが単独で俺たち3人の巨人化能力者を倒す以外にない）

露出させていた本体をうなじの中へと戻し、巨人体と神経の再接続を行いながら、ダイナは静かに拳を握る。

呼応するようにライナーが、エレンが、ユミルが戦闘態勢に入り、熱風が吹き荒ぶ焦土で、3対1の戦いが始まった。



右足を大きく踏み出して間合いを潰し、硬質化させた右の拳を鎧の巨人の顔面へと叩き込む。

奴はその拳撃を首を傾けて躲し、鎧に包まれた腕でカウンターのリアットを放ってきた。

右腕を引き戻しては間に合わない。刹那の間にそう判断した俺は、自分と迫り来

る『鎧』の腕との間に左手を差し込んだ。

直後に、衝撃。

ガードの上から無理やり押し込んでくる鎧の巨人のパワー。

チイ……ッ。

やっぱ、純粹な筋力じゃ勝ち目はねえか。

すぐに力比べをやめ、俺は自分から後ろへと下がる。

必然、突如として押し返す力を失った鎧の巨人が前のめりとなり。低い位置に来た

『鎧』の顔を、俺の右足が打ち抜いた。

「オオオオオアッ！」

雄叫びを上げ、強引に足を振り抜く。

鎧の巨人の下顎が砕け、同時に俺の視界が大きくブレた。浮遊感と鈍痛が同時に襲っ

てくる。

右頬に痛烈なカウンターを貰ったと理解した時には、既に俺が焦土に倒れ込んだ後だった。

く……っ、そ、が……っ。

あの野郎、蹴られて右に倒れ込みながら左拳で俺を殴りつけやがったのかよ……！

さては俺のハイキックを取って躲さなかったな。初めから相打ち上等で確実に俺に

ダメージを与えるって腹か。

起き上がりながら鎧の巨人を睨めば、奴も膝をついた態勢から立ち上がるところだった。

そこで、エレンが咆哮を上げながら割り込んでくる。

俺と『鎧』の攻防がひと段落するのを待ち構えていたのだろう。

立ち上がった直後の鎧の巨人に、大振りの右を繰り出す。その狙いは顔面、カウントーを下さいと言っているようなお粗末な拳。

あ、エレン、それはダメだ。

その戦法、俺が前にライナーに使っちゃった——

鈍い音が響き渡り、エレンの拳がライナーの顔面へと突き刺さる。

結果は言わずもがな。鎧の巨人には傷一つ与えられず、反対に殴ったエレンの拳が裂けて血が吹き出す。

まさか隙だらけで粗雑な一撃が『鎧』に入るとは思わなかったらしく、攻撃したエレンの方が驚愕の表情を浮かべ。次の瞬間、鎧の巨人の体当たりが『進撃』を吹き飛ばした。

「壁」に激突して沈むエレンに、俺は心の中で手を合わせて謝る。

エレンがやろうとしたのは、第57回壁外調査で俺がライナーに使った「アニの格闘

術」だ。

これは相手の力を利用してカウンターを仕掛ける技なので、まずは相手に攻撃させないといけない。

だからエレンは敢えて粗雑な拳を繰り出し、鎧の巨人のカウンターを誘い、カウンターをカウンターするつもりだったのだろうが、俺が前回やったせいで完全に読まれてしまった。

『原作』でも1巻……ちようど今くらいの時系列でエレンがやるので、完全に俺がエレンの役割を先取りしてしまった感じになっている。

マジですまん。

通じないことを先に言っておくべきだったな。

しかし、こうなつてくると厄介だ。

アニの技が通じないなら、関節技に持ち込むのが難しくなる。

俺もエレンも使うのは訓練兵团で習う対人格闘術、つまり鎧の巨人の中身であるライナーも熟知しているもの。

はつきり言つて、大抵の技は読まれてしまうんだよな。

エレンなら持ち味の高い格闘センスで例え手の内が知られた後でも勝てるんだろうが、我らが主人公は硬質化が使いねえ。

俺はそれほど対人格闘術が上手いって訳でもないから、普通に極め技に持ち込むのが難しい。事実、前回の戦いではアニの格闘術で相手の意表を突いて、何とか関節技を決められたし。

……残る方法は『顎』の爪牙による攻撃と、俺が使える3つ目の武術の2つか。

あの武術で何とかライナーにダメージを与え、隙を作る。そして俺より極め技が得意なエレンに、トドメを刺してもらう。

余裕を持つて勝つにはそれしかない。

ここで力を使い果たしていいなら俺一人でも鎧の巨人に勝てるが、俺にはまだ役目が残っている。余力を残す必要がある。

兵団流対人格闘術やアニ流格闘術と比べたら、それこそ見戯にも等しい情けない3つ目の武術。

真面目に鍛錬を重ねた訳でもなく、基本的な動作しか出来ず、会得した技も数少ない。それでも——運が良いことに——俺が趣味でやっていたこの武術の技はどれも高い威力を持っているのだ。

それこそネットでその武術の名前で検索すれば、一番上に出てくるような有名な技でも。

エレンとユミルに、ハンドサインで合図を送る。

2人が領いてくれたのを見届けてから、俺は改めて鎧の巨人と向き合った。

俺の戦意を感じ取ったのか、鎧の巨人もエレンから俺へと視線を移す。

数秒の睨み合いの後、先に動いたのは俺の方。

大地を蹴り飛ばし、躊躇なく鎧の巨人の懐へと飛び込んでいく。

「……………」

——格闘戦において適切とされる間合いは、基本的に自分の手足がちようど届く程度の距離を言う。

遠すぎると当然ながら拳足は届かず、近すぎると関節が伸ばしきれずに十分な威力で蹴りや殴打を繰り出せない。

だからこそ、ほぼ密着するほど間合いを詰めた『女型』の姿に誰もが息を呑んだ。

間合いを外された鎧の巨人がほんの一瞬、隙を見せ。その隙を突いて、女型ダイナが更に踏み込む。

轟音が鳴り響いた。

鎧の巨人の股下へと踏み出された『女型』の右足が、脛まで焦土へと埋まる。大地が震える。

今までの踏み込みとは、明らかに違うその動作。

この大地を陥没させるほどの踏み込みを、とある武術家たちはこう呼ぶ。

——震脚と。

「オオオオオオオアアアアアアアアアアアアッ!!」

震脚によつて得た反作用を利用して、力を肩、腕、拳の順に伝えていく。

その動きはややぎこちなく、ダイナ・フリッツはやはりその武術の達人ではないと分かるが、他の格闘術とは明らかに違う動きに鎧の巨人は対応できない。

そして、至近距離で放たれた『女型』の拳が『鎧』へと突き刺さった。

普通の拳撃とは比べ物にならない威力を孕んだその一撃は鎧の巨人の腹部を容易く破壊し、それどころか15メートルの巨体を吹き飛ばす。

とあるアニメのキャラクターに憧れて、見よう見真似で練習したお遊びの技。趣味の領域を超えない、程度の低い技。

されど法に守られた平和な国から、突如として「死」が常に隣にいるような地獄へと迷い込み、人類の天敵とされる化け物に成り果て、やつとの事で人に戻れば性別すら異なってしまう、怪物が闊歩する屍の街の中を不慣れな巨人の力で駆け抜け、疲労で倒れ

るほど安寧を求めて走り、壁の中も外も敵だらけで絶望が蔓延する中、やっと見つけた心の拠り所となる少女と出会った青年が、大切な友人を幸せにしたいと願って続けた努力が、その程度の低い技を、真の『武』へと昇華する。

八極拳の中で、最も有名な技である発勁の1つ。

それが今、地球とは異なる世界で炸裂した。

第37話 戦慄する焦土

硬質化能力によって、青白く輝く右の拳。

それに渾身の力を込め、あらゆる攻撃を防ぐ鉄壁の『鎧』へと叩き込む。

まるで、巨大な城でも殴りつけたのではないかと錯覚するほど凄まじい手応えが返ってきた。

もう幾度となく鎧の巨人とは激闘を繰り広げたが、その防御力は何度でも驚かさされる。破れない、通じない、倒せない、そんな弱気な考えすら脳裏に浮かび上がり、

「オ、オ、オオオオ——」

それでも、臆さずに振り抜く。

反動で右腕の骨が嫌な音を立てるのにも構わず、歯を食いしばり、拳を前へ。

震脚によって増幅させたその力を、全て右腕に滾らせる。

「九つの巨人」の中で最高の防御力を誇る『鎧』に、僅かながらもヒビが入って。

「オオオオオオアアアアアアアアアアッ!!」

白金の破片が、まるで薄氷のように砕けた『鎧』が、硬質化物質同士のぶつかり合いで発生した火花と共に飛び散った。

奴の胸元と腹部を守っていた盾が、木っ端微塵と化す。

それでも、まだ終わらない。止まらない。

『鎧』を突き抜けて、ついに俺の拳は鎧の巨人の肉へと食い込んだ。

吹っ飛んでいく。

要塞とまで形容された鎧の巨人が、水切りの石のようにバウンドしながら転がった。

——……ぜ、はっ、あ。

まだ戦闘が始まって間もないというのに、激しく乱れる息を整えながら、俺は骨折した右腕の再生を開始。

そして吹き飛んでいった鎧の巨人を、改めて見やる。

入った、よな？

ちやんと手応えは残っている。右腕から伝わる鈍い痛みが、珠玉の一撃である発勁が決まったという証拠。

あまりにも綺麗に決まり過ぎて些か実感が湧かないのだが、余韻に浸っている暇などない和我に返る。

それと同時に、ハンジさんの鋭い指示が飛んだ。

「3人とも、鎧の巨人に再生する暇を与えるな！ 体勢を崩している間にライナーを引き摺り出せ！」

真つ先に始動したのは、先ほどまで静かに俺と『鎧』の攻防を観戦していたエレン。溢れんばかりの戦意に翡翠の両目を輝かせ、雄叫びを上げて鎧の巨人へと突貫していく。何せ、彼の故郷であるシガンシナ区を滅ぼした張本人が目の前にいるのだ。加えて、エレンは前回の壁外調査では鎧の巨人とまともに戦えていない。

5年前からエレンの胸の内で燃える復讐の炎が、自由への渴望が、溜まりに溜まった鬱憤が、今ここで爆発する。

打ち砕かれた「鎧」を修復しながら、何とか立ち上がろうとする鎧の巨人。その動きを、エレンは地に着いた鎧の巨人の手を踏みつけることで止めた。

続いて「鎧」を失い肉が剥き出しになった腹へと、エレンの膝蹴りが叩き込まれる。

ゴキンベキンツという凄絶な音が鳴り響き、屈強なはずの敵がくの字になって、口から滝のように血を吐き出した。どうやら折れた骨が内臓に刺さったらしい。

普通の人間なら致命傷だが、巨人化能力者に限っては例外だ。

うなじさえ……本体さえ無傷であるのなら、どれほど負傷しようとも、体力のある限り戦い続けられるのだから。

血塊を吐きながら雄叫びを上げ、鎧の巨人が全身の傷すら意に介さず反撃に転じる。

自らの右腕を踏みつけるエレンの左足に食いつき、巨人の咬合力で骨肉を噛み砕いた。片足を失い、体勢を崩すエレン。そんな彼に、巖の如き拳が——当たらない。

鎧の巨人のカウンターがエレンの顔面を捉える直前、その敏捷性を遺憾なく発揮した『顎』が割り込んだのだ。疾駆する勢いを乗せた、鎧の巨人の腕へと体当たり。

それによって軌道が逸れ、『鎧』の拳は虚空を穿つ事となる。

本来ならば、重戦士のような鎧の巨人が小柄な顎の巨人の体当たりで揺らぐことなどあり得ない。

むしろ、体当たりした『顎』の方がダメージを受けるだろう。

だが大きく力を消耗し、加えて砲撃と俺の発勁で所々の「鎧」が剥がれて防御力の低下した今なら話は別だ。

それにパンチつてのは踏み込みに始まり、足、腰、肩、腕の順で力を伝えて放つものだからな。寝そべった状態では当然ながら踏み込めず、腰の回転も満足に出来ない。

今のライナーの拳は、本来の力の半分も出ねえよ。

「アアアアアアアッ！」

片足を潰されてもエレンは微塵も怯むことなく、それどころか更に戦意を高めて吠え猛る。

未だに立ち上がれない鎧の巨人のうなじに、組んだ『進撃』の両拳が振り下ろされた。

ダブルスレッジハンマー……!!?

まさかのプロレス技が突き刺さり、起き上がろうとしていた『鎧』が再び大地に沈む。

鉄壁の要塞を殴りつけた代償としてエレンの両手首から先の肉が弾け飛び、白い骨が露出してしまふほど無残となるが、進撃の巨人は手が使えないのならば別の箇所と言わんばかりに肘打ちを繰り返した。

鎧の巨人の頭頂部を『進撃』の右肘が打ち据え、右腕を犠牲とした一撃で重戦士の顔面が半分近く焦土に埋まる。

我らが主人公、めちやくちやしやがるな。

自分がどれほど傷つくのも気にせず、自壊覚悟の渾身の一撃の連打。生半可な攻撃が通じないのなら、自分の体が吹き飛ぶほどの威力で殴ってしまったえという暴挙。

エレンらしいと言えばそれまでだが、せつかく俺が頑張つて作った隙なんだから、普通に関節技を使つて欲しかった。

……いや、何かおかしい。

エレンは確かに直情的だが、同時に冷静さも併せ持っている。

『原作』ではジャンと喧嘩した時にアニの格闘技を使って制圧したり、正体を明かした直後のライナーと戦った時には我を失ったかのような演技をして相手の攻撃を誘い、カウンターで投げ技を決め、さらに関節技が有効だと割り出した。

そこまで出来るエレンが、何故この絶好の機会に関節技を使わず打撃技を使う？

……。

大きく巨人体を損傷したエレンが再生に入ると同時、鎧の巨人が跳ねるように立ち上がる。その重たい体をバネのように軽快に動かせる強靱な筋肉に戦慄しつつも、俺も『鎧』に反撃を隙を与えないために行動開始。

今まで静観していた俺だが、何にもしていなかった訳じゃねえ。

エレンとユミルがラツシユを仕掛けている間に、時間をかけて丁寧に力を練っていたんだよ。

俺の両足から焦土へと力が伝っていき、立ち上がった直後の鎧の巨人の足元で硬質化能力が発動する。超高速で形成された硬質化の槍が大地から生え、真下から鎧の巨人を貫いた。

まだ再生が終わっていないかった腹部に再び痛撃を受け、鎧の巨人が仰向けに倒れていく。

離れた位置に硬質化物質を形成するのは、かなり時間がかかっちゃう。今まさに鎧の巨人を貫いた槍の形成には、軽く2分くらい集中する必要があるしな。

ぶつちやけ実戦には使えねえポンコツな遠隔物質形成能力だが、こうやって誰かが前衛を務めてくれている場合にはかなり強い力を発揮できる。

超大型巨人を倒すための力を温存しておく必要があるから、消耗の激しいこの能力はあんまり使いたくねーんだが。

開幕の落とし穴と砲撃、超大型の爆発のゼロ距離被弾、発勁、エレンのラツシュ、ユミルの追撃に、最後の槍撃で鎧の巨人はもう満身創痕の筈だ。

あと一押し。

あと一度、ズタボロになった奴の腹部にデカイのをブチかますことが出来れば、もう鎧の巨人は立てなくなる。

もっかい発勁を狙ってみるか？

……無理だな、間違いなく警戒されてるだろ。

また八極拳の間合いに易々と入ってくれるとは思えねえ。ライナーは何度も同じ技を受けるような雑魚じゃない。

俺たちが「鎧」の剥がれた箇所を狙うことくらい向こうも分かってんだから、必ず腹部の防御を固めて来る。

さて、どうやって打ち抜けば良い？

「——アア……！」

「オオ——……！」

俺が思索している間にも、ヒートアップした『鎧』と『進撃』の攻防は止まらない。

両者に負傷箇所から大量の蒸気を吹き上げて、再生しながら強引に戦闘態勢を整える。

片や口から滝のように血を吐きながら、腹部には穴すら開いたヒビだらけの鎧。片やまだ骨しかない左拳を握りしめ、再生したばかりの足で大地を踏む隻腕。

凄絶な光景に『超大型』の足止め役を担っている調査兵たちが息を呑んで見守る中、2体の巨人が再度激突する。

……エレンに乗るか。

『鎧』と『進撃』の応酬に意識を集中させ、割り込む隙を窺いながら俺はそう決断した。どんな内容で何を狙っているのかも分からないが、エレンには何かしらの案があるらしい。

関節技を決める絶好のチャンスを取って逃すほどの、何かが。

「オオオオオオッ！」

右腕の再生を終えたエレンが叫んだ。

その声量に周囲の空気がビリビリと振動し、焦土に積もった灰が舞い上がる。

自分を鼓舞するのに「大声で叫ぶ」というのが効果的なのは分かるが、今やられると灰が視界を遮るから出来ればやめて欲し……？

視界が、悪く？

不意に浮かんだ疑問に対する答えは、即座に示された。

俺と同じく大量の灰で視界が妨げられたのか、僅かに後ろへと下がる鎧の巨人。

そこへ進撃の巨人が、後ろへ下がる『鎧』と全く同じ速度で踏み込んだ。

それも、適切とされる間合いより遥かに近い至近距離へと。

それを見てエレンの狙いに気づいた俺は絶句する。

マジかよ……冗談じゃねえ。

エレンが意外と頭が回るのも、天才的な格闘術のセンスを持っていることも分かっていた。

分かっていた、つもりだった。

大地が窪む。

焦土が揺れる。

渾身の力を込めた踏み込みから力を組み上げ、ゼロ距離から『進撃』が拳を放つ。

先ほどの俺と全く同じその動き。

それは、俺が披露した奥の手たる武術の技だ。

まさか、たった一度見ただけで発勁を——!?

流星に鎧の巨人もエレンの方がこの技を使うとは予想出来なかったらしく、回避行動が一步遅れる。

その遅れが、奴にとつては致命的となった。

俺の技を完璧に模倣したエレンが、震脚で増幅させた力を乗せたその拳を、急所と化

した『鎧』の腹へと叩き込んだ。

俺とは違って硬質化が出来ないエレンの右腕が酷使に耐えられず再び吹き飛び、その代わり鎧の巨人も再び宙を舞う。

調べてた、つてことか。

エレンが関節技を使わずに敢えて打撃技を選んだ理由は、捨て身を覚悟なら硬質化を持つ相手にでもダメージを与えられるか試したかったんだろう。

主人公様は、この戦いのさらに先すら見ていた。

『鎧』、『女型』、『獣』、『戦鎚』と、エレンにとって敵になり得る相手の大半が硬質化能力持ちだからな。

加えて『超大型』は硬質化能力を持たない代わりに圧倒的な破壊力を持っているし、『顎』の爪牙は硬質化物質すら穿つほど鋭い。『車力』はその圧倒的な継戦能力で、支援を行うことができる。

ただ『進撃』だけが、目立った固有能力を持っていない。きつと、エレンはそれを気にしていた。

人類の希望である自分が、他のどの巨人とも劣るといふその事実を。

俺の発動を見たエレンは考えたんだ。

発動を使えば、捨て身で攻撃を繰り返せば、硬質化を施した相手の防御すらも貫ける

のではないかと。

だから、まずは発勁を使わず通常の殴打で捨て身の一撃を試した。そして大ダメージとは言えずとも手応えを感じたエレンは、自壊覚悟の発勁なら『鎧』に通じると判断した。

やっちまつたかもしれん。

けど一回見せただけでエレンに八極拳を盗まれてしまうとか、想定外すぎるっついの。

今の発勁がもし俺に向けられることになったら、ゾツとするな。自分の技で倒されたらでもしたら、笑い話にもならん。

巨人化したって、全く痛みを感じなくなる訳じゃねえのに。

確かに人間の姿の時よりはかなり痛みに鈍くなるが、それでも腕が吹っ飛ぶほどの重傷ともなれば激痛に襲われる。

普通の神経の持ち主なら、自分の腕が爆散するほどの力を込めた拳とか絶対に繰り出せないだろう。

これが主人公。

これがエレン・イエーガー。

これが絶望溢れるこの世界で、運命の中心に立つ存在か。

地に伏した鎧の巨人はピクリとも動かない。

受けたダメージに再生が追いついていないのだろう。もしくは、遂に力が枯渇したのか。

どちらにせよ、勝負はついた。

俺たちの、調査兵団の、エレンの勝ちだ。

あとは俺が『超大型』にとどめを刺せば、第58回壁外調査は終わる。

誰もがきつと、そう思っていた。

「テメエら、もう一度すぐに「壁」に隠れる!!」

「エレン、そこから離れて!!」

常人を遥かに凌駕する感覚を持つ、アツカーマンの2人を除いて。

リヴァイ兵士長とミカサの、命令と悲鳴が焦土に木霊する。

その直後、いきなり黒く染め上げられた大地が迫ってきた。

あまりに突然の出来事に反応すら出来ず、俺は無様にも顔面から焦土へと突っ込んでしまう。

……っ、ああ、お、は？

何が起きた？ 何で地面が目の前にあるんだ？ 倒れたのか？ 俺が？ いつ？

どうしてだ？ 何をされた？

大量の疑問が脳内を埋め尽くす。

それでも今は決戦の最中なのだから、取り敢えず地面に手をつけて立ち上がる。ダメージは……そこまで大きくない。

全身に軽度の火傷を負い、鼓膜が破れたくらいだ。音が全く聞こえないが、巨人にとっては簡単に再生できる程度の軽傷。

すぐさま力を回復に集中させて傷を癒しながら、俺は自分を打ち倒したものを探る。『超大型』との戦いで周囲を飛び回っていた調査兵たちが、ほとんど地面に沈んでいた。

リヴァイ兵長やミカサを始めとした精鋭や、咄嗟に兵長の指示に従い「壁」に隠れた一部の兵士だけが謎の攻撃を免れたらしい。

後は、エレンが鎧の巨人を打ち倒した場所から、一步も動かずに立って………あ？ 進撃の巨人の全身が、やけに真っ黒だった。

初めは逆光を浴びているせいで、シルエツトのようになっていたのだと思った。だが、違う。

15メートルの体から立ち上っているのは、巨人特有の蒸気ではなく黒煙。つまりは、『進撃』の体が焼けているということだ。

「オ」

『進撃』の翡翠の瞳から、口から、鼻から、耳から。大量の赤い液体が流れ出る。

そして、進撃の巨人は静かに焦土へと倒れ込んだ。

よほどの大火傷だったのか、炭化した進撃の巨人の体は転倒の衝撃で散っていく。

あれ、下手したら本なかみ体まで丸焦げになってんじや……？

遠くから聞こえてくるミカサの悲鳴。親友の名を呼ぶアルミンの、そして他の104期の声。

それらに混じって、エルヴィン団長とリヴァイ兵長の怒号が響き渡った。

「総員、全力離脱せよ！」

「ダイナ、上だ！ 防ぎやがれ!!」

兵長の声を聞いて、俺は弾かれたように上を見上げる。

そこには熱風の放出をやめて大口を開け、下を向く超大型巨人の姿。

……火傷と、破れた鼓膜？

それじゃあ、つまり、何だ？

今の一撃の正体は、ベルトルトお得意の熱波と——……

俺の思考が答えに至るより早く。

超大型巨人が残る全ての筋肉を蒸発させながら、その60メートルの巨体を倒れ込

せた。

第38話 勝利、敗北、歓喜、苦悩

天を覆い隠すほどに巨大な怪物が、灼熱に身を包みながら倒れ込んでくる。下敷きにされたら最後、硬質化能力を駆使して一命を取り留める事は出来ても、間違いなく戦闘不能に追い込まれてしまう。

そして何よりも、予想される被害範囲の中に謎の攻撃で戦闘不能になってしまったエレンがいるのだ。

奴らは『座標』の所有者が俺だとヤマを張ってるからなのか、『原作』よりエレンを危機に晒すことに躊躇がねえ。

「戦士」側の考えとしては、最悪『進撃』は死んでも構わない。『女型』と『始祖』だけは絶対奪還する——ってところか。

……まだエレンに死んでもらっては困る。

場合によっては、ラウラやフォルカーなどの味方になり得る存在にエレンを食ってもらう必要があるのだから。

王家の末裔である俺がエレンダイナを食って『始祖』を取り込んで、初代「壁の王」の思想に吞まれて力が使えなくなっちまう。かといってアリーセが『始祖』の宿主となって

も、彼女の寿命が13年になつては意味がない。それでは俺の望む未来には辿り着けない。
い。

つまりは。

『超大型』の攻撃が来るあと十数秒の間に、俺はあの広範囲破壊から、自分とエレンを守らなければならないということになる。

くそがッ、王家の血を引く巨人でも何でも出来るって訳じゃねえんだぞ。毎回毎回、しんどい役回りは大体俺に回ってきやがるなあオイ。

舌打ちをしながら両足の筋肉に蓄えた力を解放。

地に伏した『進撃』との距離を瞬時に詰め、そのうなじに噛り付いてエレンを引き摺り出す。

『超大型』の攻撃を受けて黒焦げになった挙句、力尽きて巨人体の崩壊が始まっていたので、女型の巨人の歯はあっさり『進撃』の肉を食い破る事が出来た。

それにしても、酷い有様だな。

敵の攻撃は本体にも届いていたらしく、エレンは全身に大火傷を負ってしまったている。ミカサが見たら間違ひなく取り乱すほどの損傷具合。まあ、謎の攻撃をまともに受けてしまった今回に限っては、生きてるだけ僥倖だろう。

エレンの姿にそんな感想を抱きつつ、硬質化能力を発動。

高速で水晶体を作り出し、それでエレンの全身を覆っていく。要するに『原作』で調査兵団に負けたアニがやったのと同じことだ。

これで、エレンを口に含んでも誤って噛み殺してしまう危険性はなくなった。この水晶体を破壊する手段はかなり限られてるし。

ここまで、体内時計で約8秒。

超大型巨人はもう真上だ。このままだと2、3秒後に、俺はあの巨体と高熱で大ダメージを受けてしまう。

間近に迫る『死』が俺の集中力を高めたのか、気づくと眼に映る世界はスローモーションになっていた。

その停滞する世界を、全力で駆ける。

同時に硬質化能力を発動させ、うなじを中心に頭部などの急所を重点的に防御し——
「オ、オ、オオオオ——」

次の瞬間、何かに右足を掴まれた。

まさかの奇襲に反応できず、先ほど『超大型』の攻撃の余波を浴びた時と同じように、俺は顔面から倒れ込んでしまう。

……っづ！

チツ、この期に及んでまだ悪あがきを……！

握り潰されそうになる右の足首を硬質化で守りながら、妨害者を排除すべく振り返った俺は、直後に特大の悪寒に襲われた。

幾多の攻防で、見るも無残な姿に成り果てた鎧の巨人。

発勁を2度も受けた腹部には大穴が空き、それを中心に全身の「鎧」はひび割れ、エレンの自壊覚悟のラッシュを受けて負った無数の傷は蒸気こそ吹き上げているもの、全く再生が進んでねえ。

顔の装甲も剥がれ落ちており、まるで『超大型』のような——人体模型のような素顔が露わとなっている。

既に立つことも叶わず、されど地を這って俺の元までやって来たらしい。腹ばい状態で俺の足を掴んで離さない『鎧』の背後には、這いずって出来たであろう溝のような跡が残っていた。

天には余力の全てを注ぎ込んだ、特攻紛いの一撃を仕掛けてくる『超大型』。

地には瀕死になりながらも、超大型巨人の渾身の一撃を俺に当てるため、共倒れ覚悟で足止めを行う『鎧』。

まさに「戦士」の執念とも言うべき、ライナーとベルトルトの最後の足掻き。

どちらかが死んでも構わないと。

生き残ったどちらかが『座標』を持って帰れる事が出来ればそれで良いのだと。

言外にそう語る『鎧』の——ライナーの目を見て、俺も牙を剥く。

誰がテメエらの無理心中に付き合ってやるか！

俺にだって……俺たちにだって、何が何でも掴みたい未来というものがある。

こんな所で死んでる暇なんかねえんだよ。

今までのような相打ち、痛み分けなんて結末は選ばない。選ばせない。

勝利よ、ただ完全なる勝利を。

——ああ、そうだ。

——お前らが負けて、惨めに死ね。

反転する。

倒れこみながらも安全地帯に向けて伸ばしていた手を、死地の中央へと伸ばす。

そして『鎧』の顔面を驚掴みにし。

直後、破壊の神が大地に堕ちた。



「お姉様!!」

聞こえたのは、真っ青な顔をしたラウラが私を突き飛ばしながら出した金切り声だった。

満身創痍になりながらも、雄叫びを上げてお互いをガツチリと掴み合っていた鎧の巨人とダイナさん。その両者の上に、業火を纏った超大型巨人が落ちる。

そんな光景を最後に、五感の全てが消し飛んだ。

視界は白く塗り潰されて、あらゆる音が消失し、謎の浮遊感に包まれて上下感覚すら無くなってしまう。

どのくらいの間、感覚が消えていたのかな。

巨人の領域である壁外にいるのに、無防備な状態で地面に寝転がっているなんて。もしダイナさんの『叫び』の力で無垢の巨人をこの森から遠ざけていなかったら、間違いなく私は食べられていたと思う。

「……………う、……………あ」

それが自分の呻き声なんだと気づくにも、数秒かかった。

少しずつ感覚が戻ってくるのと共に、体中から痛みも伝わってくる。

もしかしなくても、随分と派手に吹き飛ばされたみたい。

ダイナさんの「壁」が無かったら——って、本当に何もかもダイナさんに頼ってしまっ

ているね。

もっと彼女の力になりたいのに。もっと頼ってほしいのに。

ダイナさんはいつも自分が最も危険な場所に立って、私を安全地帯に置こうとする。大切に想ってくれるのは嬉しいけれど、大切な人が死にそうになる状況を何度も見せられる側の気持ちも考えて欲しい。

今回だって、まさに――

思考がそこに至った時、私は弾かれるようにして上体を跳ね起こした。

立ち込める蒸気。木っ端微塵と化した「壁」。周囲で折り重なるようにして倒れる調査兵団の面々。

ダイナさんは、どうなったの？

あの人は間違いなく爆心地にいた。超大型巨人の落下地点に。

硬質化能力を使って防御はしたと思うけど、これだけの破壊を引き起こす攻撃を直に受けて、無傷で済む訳がない。

最悪の場合………ううん、きっと大丈夫だ。信じてるもの。

蒸気が晴れていく。

現れるのは、巨大なクレーター。

そして見上げるほどに積み重なった、『超大型』のものだと思われる骨の山。

「動ける者はすぐにダイナの搜索を開始！ 女型の巨人の力が消えた今、この場所に巨人が集まってくるのは時間の問題だろう。各員、早急に任務にかかれ！」

「了解！」

私と同じく現状を把握したエルヴィン団長が、すかさず声を張り上げて指示を出した。比較的軽傷で、すぐに動ける兵士たちの応答があちこちからまばらに聞こえてくる。

私も早く立ち上がらないと。

私がダイナさんを見つけないといけないのだから。

「おい、あそこだ！」

兵士の1人が骨山の一角を指差して叫んだ。

自然と周囲の視線がその兵士の指先に集まり、私も彼の人差し指の先へと視線を移す。

「はっ……は、はあ…………っ。死んだかと、思いました」

その声を聞いた途端、私の視界がボヤけた。頬を伝う涙を拭いながら、両手を口元に当てて嗚咽を殺す。

立体機動装置と調査兵団のマントは巨人体に持つていかれたのか、兵服の下に着ていた簡素なシャツ姿となった、夕日を浴びて輝く金髪を靡かせる女性。

蒸気を纏い、今にも倒れ込みそうになる私の親友の手の中には。

「すみません、アリーセ。調査兵団にあればど格好つけて作戦を立案したのに、1人取り逃がしました」

ダイナさんの左手は、気を失ったエレンの襟首を掴んでいて。右手には、同じく気絶した短い金髪のがタイのいい青年が抱えられていた。

「ですが鎧の巨人——ライナー・ブラウンは、確かに捕らえました」

歓声が、爆発する。

咆哮し、涙を流し、地面を叩き、足を踏みならし、握手を交わし、肩を抱き合って、調査兵団は最後に拳を突き上げる。

5年前の「あの日」に、ウォールマリアを地獄へと叩き込んだその元凶の片割れ。

人類の怨敵たる『鎧』の捕獲成功に兵士たちが沸き立つ。

かくいう私も、既に涙で何も見えていなかった。

私だって元調査兵団だ。

どれだけこの日を夢見たことか、どれだけ望んだことか。

壁外調査で死んだ『彼』の姿が、「あの日」にシガンシナ区の住民を守って死んだ友人たちの姿が、人類に心臓を捧げた同期たちの姿が脳裏に浮かぶ。

「皆……今日、ダイナさんが、仇を取ってくれたよ……！」

もう私は人類を裏切った叛逆者だけど、そう言わずにはいられなかった。

「総員、撤退の準備をせよ！ カラネス区に帰還する！」

「オオオオオオオオオオ!!」

エルヴィン団長の指示に、兵士たちは指笛で次々と自分の馬を呼び寄せると、それに乗っけていつでも長距離索敵陣形を展開できるように準備を整えていく。

エレンに駆け寄るミカサとアルミン。鼻息荒くライナーを拘束するハンジ分隊長。ペトラさんとオルオさんにくつつかれて嫌そうな、でも嬉しそうな複雑な表情のリヴァイ兵長。鎧の巨人の正体を知って、驚愕に硬直する104期生。

『鎧』討伐に対する皆の反応を眺めながら、私もダイナさんの元へ行こうと今度こそ立ち上がったその瞬間だった。

ずるり、と。

私の膝から何かがずり落ちた。

今まで自分が誰かとくつついていたのに、全く気づかなかった自分に少し驚きつつ、地面に崩れ落ちたその相手に手を伸ばして。

「……………え？ ラウ、ラ……………」

額から夥しい量の血を流し、浅い呼吸を繰り返してぐったりとしているラウラが私の足元にいた。

そして、ようやく思い出す。

『超大型』の最後の攻撃で吹き飛ばされる直前、ラウラが私を突き飛ばしたことに。じゃあまさか、私を庇って……？

冷えていく。

鎧の巨人を倒したことで高揚していた心が、冷えていく。

指先が震えて、体に力が入らない。

だつて分かつてしまうから。

数多の戦場を経験し、多くの負傷者を見てきた私には、ラウラの頭の傷は致命傷なのだということが。

「ラウラ！ 目を開けて、お願い！ せっかく鎧の巨人を倒したんだよ！ 調査兵団の大敵を討ち取ったんだよ！？」なのに貴女が死ぬなんて、絶対に認めないから！」

それでも深緑のマントを超硬質ブレードで斬り裂き、布切れを作つて止血を試みる。何度も呼びかける。

けど、ラウラの顔色はどんどん悪くなる。

「アリーセ、どうし………っ!？」

私の声を聞いて駆け寄ってきたダイナさんが、ラウラを見て息を呑んだ。

「ダイナさん……ラウラが、私を庇って……」

「……っ。ラウラ、約束を破るつもりですか？ この戦いが終わったら、どうして貴女がアリーセを好いているのか教えてくれると言ったじゃないですか。まだ、私は教えてもらっていませんよ!？」

「うるさい……ですわね……。ああ、お姉様のことではありませんので、勘違いなさらな
いよう」

「ラウラ!」

私とダイナさんの声が重なる。

涙を拭いてラウラの顔を見てみれば、彼女は薄つすらと目を開いていた。

ラウラは私を見て小さく微笑むと、掠れた声で言葉を紡ぎ始める。

「お姉様。不本意ですが、私がお力になれるのはここまでのようです。最後まで寄り添えず、申し訳ありません」

違う、そんな言葉が聞きたかった訳じゃないの。

貴女が謝る必要なんて何処にもない。

すぐく慕ってくれて、助けてくれて、嫌々ながらもダイナさんとも仲良くしてくれて。最後の最後まで、私はラウラに殆ど何もしてあげられなかった。

謝るのは、私の方なのに。

「ダイナ……本当に、本当に忌々しいですが……お姉様を守る役目、貴女に託しますわ。

最初で最後をお願い……いいえ、命令ですの。腕を挽がれようが、足を食い千切られようが、その心臓が鼓動する限り、お姉様を守りなさい」

ダイナさんが何かを言っている。

だけど、もう私には何も聞こえなかった。



頭が痛え。耳鳴りがする。

体調不良の原因は、巨人化能力の酷使が原因だけじゃねえ。

夕日に照らされて赤く染まる草原を、長距離索敵陣形を展開した調査兵団がカラネス区へ向かって駆け抜けていく。

陣形の中列後方……最も安全な位置で、俺は自分の馬の手綱を握りながら並走する荷馬車へと視線を向けた。

結論から言うと、ラウラは一命を取り留めた。

だが、それが救いとなるかと言えば否。

衛生兵には、ラウラは植物状態でかつもう2度と目覚めない可能性の方が高いと言われたのだから。

この世界の医学では、回復の見込みはない。

……ただ1つ、とある方法を除けば。

最悪の場合を想定して、1つだけ作っておいた『アレ』を入れた腰のポーチに軽く触れる。

幸い、立体機動装置やマントと一緒に持っていていかなかった。

『アレ』作るのは手間がかかるし、面倒くさいし、くそ痛いから、消滅を免れたのは本当に有難い。

と、そんな愚痴はともかくとして。

『アレ』をラウラに使えば、彼女は植物状態から回復することが出来るだろう。

ライナーを捕まえた今、生きてさえいればどんな重態でも1人は助けることが可能だ。何ならユミルも含めて、2人は救える。

『アレ』は現状1つしかないの、今は1人しか無理だが。

さて、どうすつかな。

巨大樹の森を出て以降、ずっとラウラの手を握って黙り続けるアリーセ。

彼女のためにもラウラを助けたい。

だが、俺がラウラの救命活動を巨大樹の森ですぐに実行しなかったのにも理由があるんだよ。

……俺が13年という寿命を克服する方法として考えた理論だと、俺は「九つの巨人」全てを手に入れる必要がある。もしここでラウラを助けたとしても、俺はいずれ自分の延命のためにラウラを食い殺すかもしれない。

それは、どうなのか。

一度は救っておいて後々になって殺すなど、鬼畜などという言葉では生ぬるい所業だ。

今は植物状態のラウラだが、彼女は完全に死んでしまう前に『選択』しなければならぬ。

このままラウラを見殺しにするのか。

それとも救い上げて後々になってから殺すのか。

もしくは……俺が、13年で大人しく死ぬか。

どれが最も後悔せずに済む？

どれが最もアリーセを幸せに出来る？

た。『鎧』討伐に歓喜する調査兵団の中、俺とアリーセは更なる苦悩に直面することになった。

後日談1 叛逆者達の会話——『正義』と『悪』の定義

『ウォール・マリアを破壊した怨敵、鎧の巨人討伐！ 成し遂げたのは調査兵团！ 人類はついに、巨人に反撃の一撃を投じること成功した！』

『第58回壁外調査の秘密！ 本来の目的はウォール・マリア奪還ではなく、元より鎧の巨人の捕縛だった!』

『調査兵团団長エルヴィン・スミスが語る！ 鎧の巨人の正体は憲兵团に所属の兵士!』
朝刊に羅列された文字に一通り目を通した俺は、ため息をついて紙束を傍らの机の上へと投げ捨てる。

何っ—か、見事なまでの手のひら返しだな。

数日前はひたすら罵倒に罵倒を重ね、石まで投げつけていたくせに、大きな成果を上げた途端にこの変わりよう。

まあ、それが民衆らしいと言えればそれまでなのだが。

民衆はあくまで結果のみを注視して、そこに辿り着くまでの過程には全く意識を向けない。そういうものだ。

第58回壁外調査で命を失った兵士や、日常生活に支障をきたすほどの大怪我を負っ

た兵士たちは、鎧の巨人討伐という結果に隠れてしまっている。

今もなお、俺の目の前で静かに眠り続けているラウラのように。

『鎧』との戦いから数日の時が流れたが、未だに彼女が目を覚ます気配はない。

確かに俺はライナーに勝った。調査兵団からの信頼も大きく回復した。

しかし第58回壁外調査の結果がベストかと問われたなら、俺は断じて否と答えよう。あくまでベターだ。

「……、」

その理由もまた、俺の目の前にある。

この旧本部の古城に帰還した時からラウラの側を片時も離れずに、眠り姫の手を握り続けるアリーセの姿。その憔悴した表情は、見ている俺の方まで辛くなっちまう。

これじゃあ、いくら『鎧』を倒したところで何の意味もねえ。

俺の行動原理はアリーセを生かすこと、幸せにすること、喜ばせることなんだから。

……マジでどうすりゃ良いんだよ。

選択肢はいくつかあるが、その全てがどん詰まりの未来にしか繋がってねえとか。

しかも、ラウラを助けられるのかも定かじやないしな。

アリーセから部屋の片隅にある書き物机へと視線を移す。厳密には、その引き出しの中に入っている俺の脊髄液へと。

『原作』で、ジークの脊髓液を摂取したユミルの民が無垢の巨人になるシーンがある。そこから王家の末裔であるダイナの脊髓液にも同様の効果があるかもしれないと予想して採取したのは良いが、本当に使えるのかは今のところ分からん。

加工とか何にもしてないからなあ、アレ。

舌を噛まないように布を口に詰めて、アリーセにロープでベッドに固定してもらった後、馬鹿デカイ注射器を俺の背中にぶっ刺して脊髓液を取り出した時の激痛は忘れられねえわ。

死ぬほど痛い思いをしたのに、何の効果もなかったら流石に落ち込むぞ。

っと、思考が逸れた。

ともかく、そんな訳で巨人化したラウラにライナー（もしくはユミル）を食わせたくとも、まずラウラを無垢の巨人に出来るかも怪しい。

近くの奴らで実験するのも出来ないし、どうしたもんかな。

「ダイナさん」

静寂な空間に、掠れた声が響いた。

再び視線を声の出どころ——アリーセへと戻すと、輝きの失われた榛色の視線と俺の視線が交差する。

「私が調査兵団に入ったのは、幼馴染の男の子に誘われたからなんです。その彼……

カールはずっと壁の外が見たいって言ってる、彼に引つ張られる形で私は訓練兵団に入りました。最初は訓練はキツイし、教官は怖いしであまりやる気は無かったんですけど、同期の子たちと仲良くなるにつれて訓練兵団が好きになって。気がついたら、カールやその他の何人かの同期と一緒に調査兵団を目指してました。多分、カールがあんまり楽しそうに『外』の世界のことを話すから感化されちゃったんだと思います」

ラウラの手を握りしめたまま、静かに語り出すアリーセ。

俺は近くにあつた椅子を引き寄せて彼女と向かい合つて座り、視線で続きを促す。

「カールと一緒に凄く訓練とか頑張つて、そしたら教官にも凄く評価されて、成績第2位で訓練兵団を卒業出来ました。カールは……えつと、座学が良くなくて10番以内に入れなかつたんですけどね。元から私もカールも憲兵団を目指してなかつたので順位は特に意識してなかつたんですが、彼は私に負けたらって悔しがつて」

カール。

アリーセの幼馴染。

だがシガンシナ区でのサバイバル生活を終え、調査兵団へと舞い戻つた彼女に、カールと名乗る男兵士が接触した記憶はない。

俺は常にアリーセと一緒にいたので、2人の再会シーンを見逃したという可能性は低いはずだ。

そこから、突如として始まった彼女の昔話の結末が何となく予測できてしまう。

「そんな感じで私とカールの訓練兵時代は終わって、所属兵団を決める時が来ました。2番だった私は教官や大勢の同期から調査兵団に入るのを止められたんですが、皆の忠告を振り切って、何人かの友達と一緒に調査兵になったんです。初めて自由の翼の紋章が入ったマントを着た時は、自分が凄く誇らしかった。私はもう鳥籠に囚われた小鳥じゃない、大空を飛ばたく猛禽なんだって」

そう言うアリーセは、自嘲の笑みを浮かべていた。

「何にも分かかってなかったんです。私も、カールも。外の世界がこんなにも絶望が溢れていると知っていたら、私は鳥籠から出なかつた」

彼女の言葉に触発され、脳裏に悲惨な光景がフラッシュバックする。

『俺』がこの世界にやってきた日。超大型巨人によって外門が破られた時に作り上げられた、血みどろのシガンシナ区。溢れかえった難民の中から続出する餓死者。開拓地での労働に耐え切れず死んだウォール・マリアの住民。口減らしで巨人のエサになった開拓民。トロスト区で行われた掃討戦で命を落としたテオバルト。第57回壁外調査で死んだ大人数の兵士。街を破壊されたヤルケル区の人々。巨人に変えられたラガコ村の住人たち。そして、今回の戦いでの死傷者とラウラ。

俺もたった数年の間に、夥しい数の死傷者を見た。

「調査兵団に入って1度目の壁外調査。まだ巨人の恐ろしさを正しく認識していなかった私たちは、すぐに地獄を見ました。小さな廃村を横切った時に、巨人の群れと遭遇してしまっただけです。壁外拠点の設置予定地にまで辿り着くことすら出来ず、次々と巨人に食べられていく先輩たち。新兵ということで比較的安全な後方支援の役割を与えられていた私とカールの元にも、あつという間に巨人が来しました」

アリーセは今から遡って、5年以上も前から調査兵団に所属していたらしい。
つてことは、当時の団長はまだキース教官だ。

長距離索敵陣形もなく、リヴァイ兵長のような桁外れの強者もいない。

……確かに、絶望と地獄以外の言葉が出てこねえな。

「4メートル級と8メートル級の2体です。冷静に応戦出来ていれば、私とカールと、一緒にいた同期の5人でも倒せたはずでした。立体機動の成績は良かったですし、戦場も廃村だったので周囲には多くの立体物がありませんでしたから。でも私たち5人を率いていた班長が4メートル級に食べられてしまったことで、皆パニックを引き起こしてしまいました。まず、巨人に怯えて逃げ出そうとした子が恐怖と焦りで立体機動に失敗して、凄く速度で家屋にぶつかっちゃったんです。離れた位置にいた私からでも、彼女の両足が折れたのが一目で分かりました。その子は両足の骨が粉々になった痛みで苦しんでいるうちに、8メートル級に頭から飲まれました」

「……」

「1人が逃げ出しした拳句に死んじやつて、私たちは更に恐慌状態に陥ったんです。連携なんて全く取れずに、互いが互いの足を引っ張つて。誰も攻撃を仕掛けられなくて、私も2体の周囲を立体機動で飛び回って逃げるのが精一杯でした。……けど、カールは違いました。彼は恐怖に耐えながら何度も攻撃を試みていたんです。それは良く言えば勇敢、悪く言えば蛮勇でした。初めての实战ということでカールも本来の力が出せず、程なくして4メートル級に捕まりました」

「アリーセ、もう……」

「助けようとしたんです。あの時はまだ、間に合っていました。うなじを狙えた。アンカーを打ち込めた。でも、カールが捕まった直後に撤退の指示が出て。近くにいたミケ分隊長……当時はミケ班長に、馬に乗ってトロスト区へ帰還しろと命令されました。私は……私は、逃げてしまった。撤退の命令が出されたのを言い訳に、巨人から逃げたんです。カールを見捨てたんです。ここで無理に交戦を続けるのは、調査兵団全体の被害を増やすだけだと自分に言い聞かせて。助けてくれと私の名前を叫ぶカールの声を、耳を塞いで聞かないようにして。後ろから聞こえてくる肉が千切れる音を、自分の叫び声で掻き消して」

榛色の瞳から零れ落ちた水滴が、音もなく彼女の頬を伝う。

「カールを見捨てたことを後悔して、もう友達を失いたくないと必死で戦いました。でも壁外調査を重ねるたびに同期は、友達は1人また1人と死んでしまった。5年前の「あの日」もです。ウォール・マリアに侵入してきた巨人を迎え撃つために、私とまだ生き残っていた友達は前線に駆り出されました。市民を、人類を守るためにボロボロになるまで戦ったんです。何度もガスと刃が尽きて、その度に補給して、また前線へ。それを繰り返すたびにまた仲間たちは減っていった。やっと市民の撤退が終わったと連絡が来てトロスト区に帰還した時には、もう私の班は私しか残っていませんでした。班員の死体は、半分も……回収できなくて。回収できたのも、腕とか……指先とかばかりで……。皆そんなになるまで戦ったのに、それを見たトロスト区の人たちは「もつと死んでくれたら、自分たちの食料が調査兵団に浪費される量も減ったのに」って言ったんです！」

普段の優しいアリーセからは想像も出来ないような絶叫が迸った。

「市民の避難が終わるまでは、逃げたくても逃げられなくて！ 疲労で動けなくなっても、前線に引っ張り出されて！ 怖いのに、辛いのに、しんどいのに、苦しいのに、それでも「人類に心臓を捧げよ！」って叫んで、皆は最後の瞬間まで戦ったのに！ なのに、どうしてそんな酷いことを言われなさいいけないんですか!! 私たちが命を引き換えにして助けたシガンシナ区の、ウォール・マリアの人たちを見て、食料泥棒なんて言

うんですか!? 『口減らし』なんてするくらいなら、どうして私たちに「助ける」って命じたんですか!? 壁外調査で死んだ仲間も、「あの日」に死んだ友達も、人類のために心臓を捧げたのに! 『口減らし』なんてしたら、皆が死んだ意味が無いじゃないですか!!」

叫んで、叫んで、叫んで、叫んで。

そしてアリーセ・エレオノーラは涙を流しながら啜った。

「もう親しい人が死ぬのは耐えられないんです。顔も名前も知らないため人たちのために、友達が死んでいくのは嫌なんです。それならばいつそ、友達の代わりにその他大勢が死んでしまえばいい」

ねえ、ダイナさんと。

俺の名前を呼んで、アリーセはラウラの手を掴んでいるのとは反対の手で俺に触れた。

「ラウラの代わりに、他の誰かがこうなれば良かったのに。そう思ってしまった私を、貴女は軽蔑しますか?」

息を大きく吸って、吐いて。

おそらくは心の中で最も醜いと彼女も自覚している部分を曝け出した親友を、俺は抱きしめた。

「私は貴女を軽蔑しませんよ。きつとそれは、人間が持つごく当たり前の感情です。名前も知らない誰かより、親しい友達や家族が死んだ方が悲しいに決まっている。その感情を——『親しい人のためにその他大勢の人を見捨てる』を世界が『悪』とするならば、私は悪役で構いません。私は、人類とアリーセを選べと問われたならアリーセを選ぶと即答できる。貴女のためなら、人類何万何億人にだって刃を向ける」

例えば。

お前が自分の両親を殺したら日本に住む残る全員が助かって、だがお前が自分の両親を殺さなければお前の家族以外は全部死ぬと聞かれたとして。

じゃあ両親を殺す、と答えることができる人間はどれだけいる？

両親でなくとも友人、恋人、兄弟、恩人……誰にだって一人くらい、大切な人はいるだろう。

名前も知らないその他大勢のために、そんな大切を人を殺せるか？

少なくとも俺には無理だ。

俺なら、一を取って百を捨てる。

きつと兵団は——兵士は、そんな俺の考えを間違っていると言うだろう。

一を捨てて百を救えと。百を捨てて千を救えと。千を捨てて万を救えと。寝食を共にした仲間の屍で、市民の歩く道を作れと。

『心臓を捧げよ』という言葉がそれを物語っている。

そして、この残酷な世界においてその考えはきつと正しい。少数を見捨てるくらいの覚悟でなければ、人類は勝てない。

だが。

それでも。

「私は人類を殺して友人を救う。……こんな身勝手な悪人を、アリーセ……貴女は軽蔑しますか？」

俺の問いかけに、親友は抱擁で返してくれた。

これで完全に俺とアリーセは悪役だ。

間違っているのだと分かった上で、その道を選んだのだから。

自分たちの為に、その他大勢の人を不幸にする。蹴落とす。利用する。

侮蔑するならすれば良い。見下げるなら勝手にしろ。蔑んでもらって結構だ。

外道と化す覚悟は決めた。

さあ、次の戦いへと進もうか。

後日談 2 交差する母と息子の野望

——どのくらいの間、俺はアリーセを抱きしめていたのだろうか。

一瞬にも永遠にも感じられた抱擁は、部屋の扉を乱暴にノックする音で終わりを迎えた。

……？ 誰だ？

リヴァイ兵長……じゃねえよな。

人類最強の兵士長殿は、現在ハンジさんと一緒にこの建物の地下に幽閉されているライナーに尋問（という名のほぼ拷問）を行なっている筈だし。

まさか、前に人の記憶を読み取れるとか嘘ついたせいかな？ ライナーの記憶を探れとか言われたらどうすんだ。

『原作知識』の中に、まだ役に立ちそうなモノは残ってたかな。

「アリーセはラウラの側に。客人は私が対応します」

親友から離れながらそう言い、彼女が小さく頷くのを確認して俺は扉へと向かう。緊張で若干の冷や汗を流しながら扉を開けると、見覚えのない男女の姿が。

いや、マジで誰だよお前ら。

そんな言葉を飲み込み、改めて2人をよく観察して本当に初対面か記憶を探る。

男の方はライナー以上ベルトルト以下のまあまあな長身で、俺よりも背が高い。兵服の上から見ても分かるほど体は鍛えられているが、線は細くて男にしては華奢な方だ。

髪色は茶色。目の色は髪と同じ。

顔立ちは整ってる方で、見るからに優男って印象を受ける。イケメンは爆発しろ。コイツ絶対にリア充だ。オーラで分かる。

対して、女の方はラウラと同じくらいの身長で背が低い。

兵士にしては珍しく髪が長くて、三つ編みにしたそれを右肩から前へと流している。

髪の色は少し赤みがかかった茶色。瞳はルビーのように真紅色。

腰に手を当て、不機嫌そうに柳眉を逆立てる赤の少女は眠り姫にも劣らないほど気が強そうだ。

……原作キャラ、じゃねえ。

漫画やアニメじゃ見たことないしな。

それと、この城に常駐して俺や他の巨人化能力者を見張っている調査兵でもなさそうだ。フォルカーを始めとした俺の監視兵の面々の顔は覚えているが、その中にこの2人はいない。

つまり、このクソ辺境にある旧本部をわざわざ訪ねてきた調査兵という事になる。

で、兵長じゃなくて俺のところに来たってことは……『排斥派』か？

いや、それなら奇襲の効果が失われるノックしないだろ。本気で俺を殺す気なら、無言で入ってきて不意打ちで俺の首を飛ばせばいい。

エルヴィン団長から俺への伝令兵……も、ないか。団長は第58回壁外調査の後処理で、王都ミットラスから出てこれねえって兵長から聞いてるし。

火急の用事でもない限り、わざわざ伝令兵とか送ってこないはずだ。火急の用事である可能性もなくはないが、壁内に潜む敵性巨人化能力者を全て排除したばかりの現状では限りなく低いものだろう。

となれば、残るは――

「お見舞い……ラウラの友人ですか？」

「……まだ何も言っていないのに、よく分かったわね。そう、お見舞いよ。さっさと中に入れないさい。そこ邪魔」

「リーナ、いきなり失礼だよ」

俺の問いかけに刺々しい言葉を返した赤の少女――リーナを、隣に立っていた優男が窘める。

しかしリーナはクールダウンするどころか反対にヒートアップしたらしい。漫画ならキツ！ という効果音が出そうなほど鋭い眼光が、隣の優男を貫く。

「はあ!?　なんで巨人に気を遣わないといけないのよ!」

「はいはい失礼の上塗りをしない。『女型』の機嫌を損ねて戦闘になったら、リーナは責任取れる?　……まあ、責任云々より先に僕らは間違いなく殺されるだろうけどね。立
体機動装置もないし」

「……っ」

今さら巨人呼ばわりされた程度でキレねーよ。

悔しそうに両手をぎゅつと握りしめ、唇を噛んで俯いたリーナ。そんな彼女に代わつて、今度は優男の方が前に出てきた。

「相方が失礼しました。彼女、今ちよつと気が立ってて」

「お気になさらないでください。慣れてますから」

謝罪の言葉と共に微笑む優男に、俺も愛想笑いで返す。

これ、側から見たらすげえ穏やかな会話に見えるんだろうな。

このイケメン、よく見たら目が笑ってねえ。隠し切れない殺気が僅かに全身から溢れるし、コイツら本当に『排斥派』かもしれん。

ただ、過激派ではないってだけで。

俺を潰せるなら潰したいけど、調査兵団の上層部が友好的な態度を取ると決めたのと、単純に俺を殺せるだけの戦力がないから、表面上は友好的に接してるって感じ。

リーナの方は感情的だからコントロールし易そうだが、優男の方は要警戒だな。腹の底が真っ黒だ。

「改めまして、僕はアベル。こっちがリーナです。ラウラとは同期で、本日はお見舞いに来ました」

「ご存知かと思いますが、ダイナです」

「話はもういいでしょ、早くラウラに会わせて」

互いの自己紹介が終わったのと同じ、これ以上は待てないとばかりに、リーナが再び不機嫌さ全開の言葉を放つ。

その声がかかなり大きかったらしく、何かあったのかと心配したアリーセがこっちにやって来た。

「ダイナさん、お客さんと何かあったんですか？」

瞬間、リーナの小柄な体から殺気が爆発する。

「アリーセ・エレオノーラアツ!!」

まるで飢餓状態の猛獣が、ご馳走を目の前にした時のような。荒々しい殺意の塊と化したリーナが、雄叫びを上げて俺の後ろのアリーセへと飛び掛かろうと大きく踏み込む。

体が小さいからこそその、俊敏な動作。

俺もすぐさま親友を守ろうとリーナに掴みかかるが、初動が遅れたせいで間に合わねえ……ツ。

——命令ですの。腕を挽がれようが、足を食い千切られようが、その心臓が鼓動する限り、お姉様を守りなさい。

落雷に打たれたのかと思った。

体の底から、激痛と共に力が湧き上がる。周囲の景色がスローになる。借り物の肉体のくせに、俺はダイナの体の全てが完璧に支配できる。

脳ではなく意思が。神経ではなく『道』を辿って。

脊髓反射すら凌駕するほどの反応速度で、俺の体が動く。

自分でも信じられない速度だった。

間に合わないと思ったはずの俺の手が、アリーセへと伸ばされたリーナの右手首を掴む。華奢な敵対者の体を強引に引き寄せ、足を払って放り投げる。

リーナがいつそ芸術的なほど綺麗な半円を描いて宙を舞い、側頭部から床に激突した。

「リーナ！」

受け身も取れずに床へと叩きつけられた相方を見て、アベルが俺に飛びかかる。胸元を掴もうと伸びてくる優男の手を半身になって躲し、俺は反撃として掌底で下顎を撃ち抜いた。180を超える長身が吹き飛び、天井に激突したアベルは頭からリーナの隣に落ちてそのまま動かない。

リーナが飛び出してから、ここまで約5秒。

「……………っは!?! ああああああああああ!?!」

床に沈んだ2人の来訪者の次は俺の番だった。

全身を駆け巡る激痛に、絶叫して蹲る。

……………っ、……………っあ……………あ!?!

……………!!?!? ………………っ!!?!?

……………。

……………。

……………。

……………ゆつくりと目を開けると、心配そうにこちらを覗き込むアリーセと目があった。しばらく親友と無言で見つめ合った後、俺はまだ少し痛みと熱が残る体に鞭を打って上

体を起こす。

場所は変わらずラウラの部屋。

ラウラの側には、頭を包帯を巻いたりナと下顎を氷で冷やしているアベルの姿が。両者共に、何とも言えない表情で起き上がった俺へと視線を向けた。

……まあな。

自分たちを叩きのめした相手が勝手に自爆して、やられた側よりもダメージを受けたらそんな表情にもなるよな。

このまま静寂が続くと辛いので、ひとまず俺はアリーセへと質問を飛ばす。

「アリーセ。私、どのくらい怪我をしましたか？」

「複数箇所の筋断裂と内出血。右腕骨折、吐血していたので内臓も損傷していたと思います。……巨人化能力者でなければ、間違いなく数ヶ月は寝たきりになってました」

……お、おう。

しかし、気を失うほどの激痛に反して体の傷は大したことねえな。いや、俺の感覚が狂ってきてるだけで普通に大怪我であるが。

「具体的に、何が起きたんですか？」

「それが私にも分からな………あ」

もしかして、そういう事か？

ラウラとあの2人のおかげで、完全にピースが埋まったのか？

ああ、そうだ、『原作』のリヴァイ兵長とミカサの発言とも合う。今まで俺が必死こいて『道』への干渉を繰り返しても成功しなかったのは、大切なピースが1つ欠けてたからだ。

だがもう、全て揃った。

尋常じゃねえほどの反動に襲われちゃうが、それでも人類最強が住む領域に、片足を突っ込むことに成功した。

これで、リヴァイ兵長に勝てる可能性が見えてくる。

「ダイナさん……？」

会話の途中で急に黙り込んだ俺にアリーセが怪訝な顔をするが、俺はそんな彼女に笑顔を向けた。

「その2人のおかげで、遂に人類最強を真正面から打ち倒せる目処が立ちました。これでまた1つ、私たちは前へ進めます」

「「……………!?!?!」」

俺の言葉にアリーセが驚きと喜びの混じった表情を浮かべ、来客の2人は顔を真っ青にする。

自分たちの行動が敵の利となったんだから、当然の反応と言えるが。しかもその内容

が、調査兵団の柱の1つであるリヴァイ兵長を脅かすものなら尚更だろう。

……まあ、0パーセントが1パーセントになった程度の進展なんだけどな。たった5秒使用しただけで気絶して戦闘不能になる能力で、あの人類最強が倒せる訳ねえし。

付け加えるなら、この能力は人間状態の時に使うことを想定したモノでもない。コレはどれだけ体に負担をかけても問題のない、巨人化状態で使用してこそ、真価を發揮する。

そんな説明を『排斥派』にわざわざ説明してやるほど俺は親切じゃねえし、むしろ敵を揺さぶる為に敢えて省略してやった。

「ところで、何故リーナは大人しく座ってるんですか？ 私より早く回復してたなら、懲りずにもう一度アリーセに襲い掛かるくらいの殺気でしたけど」

再び部屋に沈黙が降りたので、俺は目覚めた時からずっと疑問に思っていたことを口にする。

するとリーナが顔を青くしたまま、吐き捨てるように答えた。

「アンタの言う通り、起きてからすぐに突っ込んだわよ。……手も足も出ずに、また床に沈められたけどね」

「僕らが格闘術でアリーセさんに勝つのは不可能だと嫌という程に理解させられたので、こうして大人しく本来の目的であるお見舞いをしてる訳です」

「ああ……なるほど」

納得。

よく考えたならアリーセは俺やエレンより素手の殴り合いが強いんだから、格闘戦に限っては守る必要なんてねえわな。

『アリーセを守る』という意識ばかりが先行してて、自分の格闘技の師匠が誰か完全にすっぽ抜けてたぜ。

そういうことなら、アリーセを置いて出かけても大丈夫だろう。

「どこか行くんですか？」

「ええ、ちよつと『調整』と『お勉強』に。夕刻までには戻りますよ」

アリーセにそう言つて立ち上がり、俺は部屋の外へと出て行く——前にアベルとリーナの耳元で囁く。

「もしも『一を殺して全を救う』のではなく、『全を見捨てて一を救う』を選ぶのなら……貴方達のご友人、助けてあげても良いですよ？」

「……………っ」

体を硬直させて息を呑む2人に、俺はヒラヒラと手を振つて今度こそ部屋を出る。

……はっ、我ながらゲスな手段だなオイ。

これは間違いない地獄に落ちるぜ、俺。

要するに調査兵団を裏切ってこっちの味方になれば、ラウラを助けてやると言った訳だ。アベルとリーナがどのような返答をしようとも、初めからラウラを助けるつもりなのには。

あわよくば『排斥派』の2人を裏切らせることが出来る、そう目論んで。

「悪いなアベル、リーナ。けどこっちも、手段を選んでやれるほど余裕がねえんだ」
友達思いの2人に呟くように謝罪し、俺は決戦に向けての準備に取り掛かる。



ウォール・マリア南部。シガンシナ区。

5年前に超大型巨人及び鎧の巨人による襲撃で、人類が住めない巨人の領域と成り果てた街。

かつてはシガンシナ区の住民を巨人から守っていたが、今や大穴が開いた壁の上に普通ならあり得ないことに人影があつた。

それも、1つだけではなく3つも。

1つはメガネをかけた大柄な男。1つは長い黒髪の気怠げな表情の女。1つはメガネの男性をも超える背丈の青年。

彼らは三重の壁に住む者ではなく、更に言うなら普通の人間でもない。

マーレの戦士。

『九つの巨人』の継承者。

三重の壁を襲い、このシガンシナ区を地獄へと変えた張本人たち。

『獣』の継承者ジーク・イエーガー。

『車力』の継承者ピーク。

『超大型』の継承者ベルトルト・フーバー。

国すらも滅ぼす巨人の力を持つ彼らだが、しかし3者揃ってとある相手に敗北を喫し、ここへ逃げてきたのだ。

言わずもがな、本来なら既に死人であつたはずの極大のジョーカーである『女型』の継承者——ダイナ・フリッツ。

彼女がいなければ、アニ・レオンハートと『女型』が奪われることはなかった。彼女がいなければ、ライナー・ブラウンは調査兵団に捕らえられなかつたかもしれない。彼女がいなければ、ラガコ村を起点とした威力偵察はあそこまで大失敗に終わらなかつただろう。

アツカーマン家というまた別のイレギュラーがいた為、ダイナがいなければ絶対に調査兵団に勝てたとは言えないが、それでもここまで大敗する事は無かったはずだ。

マーレのパラディ島侵攻計画は、今のところ散々な結果になっている。

特にマーレの誇る「7つの巨人」のうち『女型』、『顎』、『鎧』が敵の手に落ちたのが大きい。

『進撃』と『始祖』を含めると、パラディ島が有する巨人は合計で5体。対するマーレが『戦鎚』を含めて4体と、あろう事か巨人の数で負けてしまっているのだ。

実際のところ『進撃』と『始祖』はエレン・イエーガーが宿しているので、巨人化能力者の数は4対4と互角ではあるが。

「俺たちは何としても、島の悪魔に奪われた巨人の力と『座標』を奪還する必要がある」
口を開いたのは「戦士」最強の巨人化能力者にして戦士長である、ジーク・イエーガーだ。

そんな彼の言葉に、ピークが頷く。

「もしマーレが3体も巨人の力を失った事が明らかになれば、確実に周辺諸国が攻めてくる。もう時間もない……とにかく急いで、あの怪物たちから巨人の力を取り返さない

と——」

戦士たちの脳裏に浮かび上がる、敗北の記憶。

鋼の翼で硬質化すら間に合わない神速で空を翔け、鋼の刃で巨人を瞬殺する人類最強。

『戦鎚』に一部匹敵する硬質化能力、その他の巨人を大きく上回る身体能力と持久力、『獣』を凌駕する無垢の巨人操作能力に、その他にまだ幾多もの力を隠している女型の巨人。

この二大怪物だけでも手に余るというのに、そこにエレンなど他の巨人化能力者たちや、アルミン・アルレルト、エルヴィン・スミスという知略の怪物まで加わってくる。

そして忘れてはいけない。アッカーマンは1人ではなく、まだもう1人いるということ。

「僕が殺ります」

揺るぎない言葉を発したのは、手のひらが裂けて血が流れるほどに強く拳を握りしめたベルトルト。その瞳は憎悪と憤怒の炎が燃え盛っている。

ユミルにマルセルを、ダイナには親友だったライナーに、想い人のアニまで奪われた彼はもはや誰にも止められない。

もうエレンに「腰巾着野郎」などと呼ばれたベルトルトは消えていた。今ここにいるのは気弱で自分の意見を述べるのが苦手な青年ではなく、ダイナ・フリッツに血の復讐を誓う悪魔だ。

「けど、あの『女型』は『座標』を宿してるんでしょ？　だったら殺せない。捕獲する必要があるよ」

ベルトルトに言い聞かせるようにしてピークが言ったが、彼女の言葉はジークによって否定される。

「ピークちゃん、その可能性は低い。ベルトルトが見たつていう母親ダイナの巨人を操作する能力は、『座標』に由来しないものはずだ。事実、俺は『始祖』を宿していないが無垢の巨人を操れる」

「戦士長が特別なだけでは？」

「だとしても、あの『女型』と俺には血の繋がりがある。息子の俺が出来るなら、母親も出来てもおかしくはないと思わないか？」

「それは……確かに……」

では、始祖の巨人の宿主は一体誰なのか。

自然と浮上する疑問に、ジークは半ば確信したように答えを出す。

「『座標』を持つているのはエレンだ」

ジークにとつては悪夢としか言いようのない事実だが、ダイナだけではなくグリシヤも楽園送りを免れていた。

グリシヤはダイナのように無垢の巨人としてパラディ島を彷徨った果てに、運良く戦

士を捕食して戻ったのではない。

5年前の「あの日」より遙か前に……それこそ所帯を持てるほど前に、壁の中に入っていたのだ。それはつまり、グリシヤが先代『進撃』の継承者だったということになる。

巨人の力無しに、壁まで辿り着くのは不可能なのだから。

グリシヤは『エルディア復権派』を率いていた人物だ。

それを知るジークは、グリシヤがエルディア帝国の復権のために『始祖』を求めていたことも知っている。

故に、グリシヤが壁の王家から『始祖』を奪い、エレンに『進撃』と共に『始祖』を継承させたのだと簡単に推察できるのだ。

「……一度マールに帰還して、タイバー家に『戦鎚』をパラディ島の攻略に投入するよう頼もう。次の攻撃に全力を傾ける。4体の巨人の総攻撃で、パラディ島に奪われた全ての巨人の力を奪還するんだ」

「しかし、それでは本国の守りが消えます。……マールは『戦鎚』の投入を認めないので？」

「ああ。だからマールには、本国から巨人の力が消えたと周辺諸国が気付くより早く……つまり速攻でパラディ島を攻め落とすと宣言しなければならぬ。もし次もまた失敗すれば、俺たちエルディア人は終わりだ」

ただ自分たちが巨人の力を剥奪されるくらいなら、まだマシだ。

最悪の場合は収容所で暮らす家族……もしくは、全エルディア人が処分されてしま
う。

それを察したピークとベルトルトがプレッシャーで冷や汗を流すのを見て、ジークは緊張をほぐすために敢えて話題を変えた。

「そう言えばピークちゃん。威力偵察の時に、女型の巨人に真上から奇襲を受けたじゃ
ん。よくアレを凌いで、しかも俺を回収して撤退出来たよな」

「仕留めたはずの『女型』の死体が消えないことに気付いたのと同時に、うなじから離脱
して巨人体の下に隠れたんです。おかげで奇襲を受けるより一瞬だけ早く、回避に成功
しました。離脱直前に『車力』を動かして、残っていた砲弾を敢えて敵の攻撃に晒すこ
とで爆発をさせて煙幕代わりにし、敵に相打ち狙いだつたと錯覚させられたのも大き
かったですね」

「流石ピークちゃん、頼りになる」

サラツと説明したピークにジークが拍手を送るが、ベルトルトは『車力』の継承者が
行つた神業に啞然とする。

あの女型の巨人を前に、奇襲を受けるまでの刹那の間にそこまで動けるものなのか。
一通りピークを賞賛したジークは、再び表情を硬くして口を開いた。

「……必ずパラダイ島の悪魔たちを倒そう。俺たちの使命のために」
強く頷く。ピークとベルトルト。

2人が目の前にいる戦士長は「安楽死計画」を企てている裏切り者だと気付くのは、もう少し先の話となる。

第39話　ダイナ・フリッツ殺害事件

窓から差し込む朝日を顔に浴びて、俺はゆっくりと目を開けた。

全身が未だに痛え、昨夜はちよつと無理し過ぎたか。

ただどこから始まる人对巨人ではなく人对人の戦いを生き抜くには、ようやく獲得した新しい能力を少しでも早く使いこなす必要がある。

今のところこちら側にはリヴァイ兵長という怪物がいるが、憲兵側にも人類最強と互角の戦闘能力を持つケニー・アッカーマンがいるからな。切り裂きケニーとかち合ったら、俺は1分足らずで殺されちまう。

……まあ、本気で危なくなれば巨人化するけど。

せつかくエルヴィン団長に俺という存在を世間や王政から隠してもらってるんだから、それを自分で台無しにはしたくない。俺の存在の隠蔽って、絶対に人類憲章に抵触してるだろうし。

バレたらエルヴィン団長は確実に首吊りだ。

調査兵団が大きな手柄を立てた今なら、もしかすると処刑は免れるかもしれねえが……いや、無理か。

壁外出身、巨人化能力持ち、ウォール教より「壁の秘密」に詳しく、王政が記憶改竄までして秘匿していた情報と、レイス家の正体を調査兵団に漏らしたダイナ・フリッツ。そして壁の秘密を知ってしまった調査兵団。

完全に中央憲兵団の出陣案件じゃねえか。

壁内での保身を図るために「マーレの情報」を渡したのが、巡り巡って跳ね返ってきたやつだ。

調査兵団VS中央憲兵が、『原作』の何倍も激しくなるかもしれん。

「兵長、ガンバ」

俺は今もまだライナーに尋問を行なっているだろう兵長に小声でエールを送って、ベッドに横たえていた上体を起こす。

珍しくアリーセに起こされるより早く目が覚めたし、街にでも出掛けるか。

最近では自傷し過ぎて護身用ナイフの切れ味が落ちてきたから、新しいのを買いに行こう。切れ味の悪いナイフで自傷すると、めっちゃ痛いからな。

顔を洗い、歯を磨き、寝巻きを脱ぎ捨て、クローゼットの中にある服を見繕う。

白のドレスワンピースでいいか。一番楽だし。

朝は少し肌寒いのでショールを肩にかけ、金髪を櫛で梳いてポニーテールに。後はアリーセから贈られた星のペンダントをつければ、身支度は終わりだ。

自室の扉を開けて、廊下へと出る。

「あ、おはようございます」

ちやうど俺の部屋の前を通り過ぎようとしていたらしいイケメン優男アベルが、会釈と共に挨拶をしてきた。

またラウラのお見舞いか。

「おはようございます、アベル。今日はリーナと一緒にじゃないんですね」

「彼女は……ほら、アリーセさんと顔を合わせると弾けちゃうので。鉢合わせしないように、僕が少し遅く来るように言ったんです」

「ああ、納得です」

確かに、相方が毎日のようにアリーセに飛び掛かるとアベルも疲れるだろう。

まあ、リーナから見ればアリーセは自分の友人を植物状態にした相手だからな。仕方ねえんだろうけど、それは間接的な話であって、恨むのなら直接的な原因になったベルトルトとライナーを恨んで欲しい。

片方は城の地下で尋問中、もう片方は逃げられたから、一番身近にいるアリーセにやり場のない怒りが向けられてしまうんだろう。

例え、ラウラが自分の意思でアリーセを庇ったのだと分かっているても。

「ダイナさんはお出かけですか？」

「ええ、少し買物に。兵長には昨日のうちに掛けると報告しているので、ご心配なく。……それに何も言わずに出掛けても、24時間体制で私を監視している誰かしらが尾行してくるでしょうし」

「対象に気づかれてる時点で、尾行と言えない気もしますが……」

「私から隠れる気ありませんよ、彼ら。どちらかと言うと、常に見張ってるから変な真似するなという牽制の意味合いの方が強いでしょう」

「なるほど……。では、僕はこの辺で」

再び会釈してラウラの部屋へ向かっていくアベルの背中を見送り、俺も城の外へと歩き出す。

途中でアリーセの部屋の前を通ったが今回はスルーだ。

第58回壁外調査で体も心もまだ疲れているだろうし、俺の都合で朝早くに起こすのは彼女に悪い。休める時にしっかり休んでもらわないとな。

庭に出て白い毛並みの愛馬に跨り、手綱を握ると横腹を軽く足で蹴って走り出すよう指示を送る。

チラツと後ろを確認。

今日は……5人か？

先頭は最近ストーカー化してるフォルカー、後ろにゲルガーさん、ナナバさん、フリー

ド、ルイス。

男女比率エ……ナナバさん可愛そうに。まともな男ゲルガーさんだけじゃねえか。残り3人まとめて変態だ。

フォルカーは言わずもがな。単独でも監視を言い訳に寝室や浴室に現れたりと変態度合いに磨きがかかってやがるが、フリードとルイスと絡むとウザさが10倍になる。

あの馬鹿トリオ本当に成人してるのは疑うレベルの知能だ。戦闘に入ると優秀なんだが、日常パートではマジで行動が巨人以下になっちゃう。

例えるなら修学旅行でテンションが上がって女子風呂を覗こうとする男子高校生。

……ナナバさんとゲルガーさんには、おみやげを買つとくか。

ゲルガーさんにはお酒で良いとして、ナナバさんには何を買えば良いんだ？

女性へのプレゼントとか全く分からんぞ、助けてアリーセ。やつぱ付いてきて貰えば良かった。

そんなことを考えているうちに街に到着。

適当な場所に馬をつないで、さつそく財布を片手に数多の出店が並ぶ大通りへと向かう。

軍資金に問題はなし。

鎧の巨人ことライナーを捕獲した功績で、調査兵団に凄い額の資金が転がり込んでき

たからな。連鎖的に俺の財布も潤っている。

目についた店を冷やかしながら大通りを進んでいると、程なくして目的地である刃物店を発見。さっそく中へ。

やたらと威勢のいい店主のおっさんに頼んで、ナイフを選んでもらう。

「これなんてどうですかい?」

「握ってみても?」

「勿論、どうぞ」

刃渡り10センチほどのナイフを店主から受け取り、軽く手の中で遊ぶ。

悪くない。悪くないが、ちょっとゴツすぎるな。

いざという時に素早く取り出せるナイフが理想的であって、殺傷力はあまり必要ない。どんな小傷でも巨人化のトリガーになるし。

「もう少し軽い——」

ナイフを、という俺の言葉は店の外から聞こえてきた重低音によつて掻き消された。何度も連続して鳴り響くその音。

窓がビリビリと震え、店内にいた他の客たちが思わず耳を塞いでしまうような轟音だ。

……かなり近い。

壁上固定砲の砲撃音にしてはやや軽くて、しかし憲兵の使うような銃声と比べれば重すぎると。

「兵士様が砲弾でも取り落としたのか？　　ったく、傍迷惑な。それでお客さん、何か言いかけてやしたよね？」

「ええ。刃渡りは同じくらいで、これよりも少し軽いナイフはありますか？」

「これなんてどうでしょう？　　今のやつよりは少し高くなりますが、扱い易さと斬れ味は保証しやす。そして何より、お客さんのようなご婦人にも扱える軽さが売りですぜ」
そんな売り文句と共に渡されたのは、先ほどの物よりシャープな印象のナイフ。刃にうっすらと花の紋様が刻まれていて、柄の部分にも妨げにならない程度の装飾が施されていた。

くると、そのナイフを手の中で一回転させる。

心地いい風切り音と共に、刃の光が円形の軌跡を残す。

「これにします」

「へい、まいどありがたい！」

即決。

このナイフ、めっちゃ手に馴染む。

店主の人がおまけとしてくれた鞆に新しいナイフを納め、代金を払った俺はご機嫌で

店を後にした。

……刃物買ってテンション上がるとか、側から見たら俺ってかなりヤベー奴に見られるんじゃない？ 見た目が金髪美人のダイナだから、何とか余計に……アレだ。

適当な言葉が見つからなかった。

「〜♪」

良い買い物をして、気分が高揚していたのが悪かったのかもしれない。それとも、早朝でまだ朝食も食べていなかったから頭が回ってなかったのか。

もつと根本的に、鎧の巨人と超大型巨人という分かりやすい脅威を排除した直後で気を緩んでいたのが原因だったのかも。

何にせよ、その時の俺はあまりにも警戒心がなさ過ぎた。

「——へ？」

左胸を襲った軽い衝撃。

喉から溢れ出た間拔けな自分の声。

ぐらりと揺れる視界。

一気に力が抜けていく体。

気がつくとも俺は崩れ落ちていて、地面に横たわっていた。

異常事態の原因と思われる軽い衝撃を受けた左胸へと、脱力した右手を強引に持って

いく。

すると、右手のひらに生暖かくぬめりとした感触が伝わる。

それが自分の左胸から流れ出た鮮血の感触だということは、今までの経験からすぐに分かった。

当たり前だろう。

この世界に来てから流血した回数なんて数え切れないくらいだし、巨人化やとある能力を会得する為の修行でナイフが駄目になるほど、自傷を繰り返していたのだから。

刺された。心臓を一突き。致命傷。

理解した瞬間、激痛に襲われた。

しかし喉からは悲鳴は出ず、代わりに血塊を吐き出して石畳の地面を紅に染め上げる。

「あ、がつ、ぐ……………っ?!?!」

意味のない掠れ声を出しながら必死で思考を回す。

目を開けろ、絶対に閉じるな。

巨人の力を心臓部分に集中させ全力で止血、再生を行え。

「オ……………んと……………ったのか?」

「……………実に……………臓を刺し……………即死……………ず……………」

「……………急げ……………次は……………セ・エ……………ラだ」

「……………な。その前に脈を……………」

チイツ、よく聞こえねえ……………つ。

せめて襲撃者の数と顔くらいは確認しとかなないと、割りに合わねえぞ……………!

そう思った時、霞む視界に男の顔が映った。

男の手がこちらへ伸びてくる。

それが事切れる前の、最期の映像。

「……………脈がない。この女、ダイナは完全に死んだ。任務完了。次の標的はアリーセ・エレオノーラだったな」



時間はほんの少し巻き戻る。

ダイナ・フリッツが切れ味の落ちた護身用ナイフの代わりを求め、刃物店に入って行った直後。

その様子を店の近くの裏路地から顔を出していたフォルカーは、拳を握り締めて呟いた。

「良い……！ やっぱり女の髪型は動くたびにうなじが見える、後ろでのひとつ結びが正義……！」

感極まれりといった様子フォルカーに、残る面々がそれぞれ別のリアクションをする。

具体的に言えば今回のダイナ監視班の紅一点であるナナバはゴミを見るような視線を向け、ゲルガーは呆れたようにため息をついて酒を飲み、フリードとルイスが信じられないとばかりに叫ぶ。

「ふっざけんなフォルカーてめエ！ いいか、理想の髪型は二つ結びだア！」
「いいや違うね！ 女性の髪の毛は結ばないのが正解……！」

ツインテールを推奨する前者が、坊主頭にメガネの変態その1であるフリード。ストリートを推奨する後者が、金髪を肩まで伸ばした変態その2のルイス。

ダイナには知能レベルが巨人並とまで言われ、調査兵団に所属する全ての女性兵士から害虫とまで言われる問題児である。

フォルカーが変態と化したのも、ダイナ監視班に配属されたこの2人の影響を受けたせいだ。

ダイナ曰く、フリードとルイスが牢屋にぶち込まれてないのは調査兵団七不思議の一つだとか。

「そもそも、うなじが良いとか言ってる時点で論外なんだな。頭がおかしいなア!

普通そこは太ももだろオ!」

「断じて否! 圧倒的に二の腕だね!」

「頼むからお前から早く巨人に食われて死んでくれ」

お互いに胸ぐらを掴み合うフリードとルイスに、望遠鏡まで使って店内のダイナを見ようとしているフォルカーの姿に、ナナバは真顔で言う。

だが変態達には届かず、彼らの議論はヒートアップするばかりだ。

「……ゲルガー。酒を飲んでないで、アイツらを止めてくれると嬉しいんだけど」

「冗談言うな」

ナナバに断固拒否の姿勢を示すと、再び酒を流し込むゲルガー。

そんな騒がしい5人組の後ろに、音もなく人影が現れた。

「——ツ」

どれほど頭の悪い会話をしようとも、この場にいるのは人類最強たるリヴァイが

有事の際には『女型』という規格外とやり合えると判断した精鋭達だ。

敵意を感じ取った彼らは即座に路地から飛び出すと、マントの下に隠してあった立体機動装置を用いてその場から離脱する。

その速度は、過酷な戦場を生き延びてきた調査兵の猛者として相応しいものだったが。

それでも。

重低音が鳴り響く。

火薬の力を借りて、凄まじい速度で撒き散らされる無数の弾丸。放たれた鉛玉が、ルイスの顔を吹き飛ばしていた。

紅色の花が咲き乱れ、肉片が飛び散り、残りの4人に生命の源である赤色が大量に降りかかる。

それは、フォルカー達が装備しているものとは形状が違う鉄の翼だった。

両手に握るのは剣ではなく散弾銃。ガスを入れるボンベとワイヤー巻き取り装置を背に背負い、アンカーの射出口は散弾銃の持ち手の下。両足の太ももには散弾銃の弾。

それは巨人を殺すものではない。

それは人間を殺すものである。

その名は「対人用立体機動装置」。

もう1人の『最強』憲兵殺しケニー・アツカーマンが率いる、中央第一憲兵団の主武装。

殺人兵器を装備するのは、一角獣ユニコーンの紋章が刻まれた兵服を纏う3人の兵士だ。驚愕は刹那。対応は一瞬。

「総員、戦闘態勢！」

「護衛は残り4人だ。速やかに片付けろ」

フォルカーと3人のうち中央に立つ憲兵が、同時に仲間へと指示を出した。

2つの立体機動装置が唸りを上げ、剣先と銃口が敵対者へと向けられる。

そして、人間同士が殺し合う。

第40話 疑惑

無数の鉛玉によつて吹き飛ばされたルイスの鮮血が、骨肉が、脳漿が未だに宙を舞い散るその最中、兵士達は身に纏う鉄の翼を以つて空を翔け抜けた。

その瞬間、調査兵団が壁内に潜んでいた『鎧』と『超大型』を退けたことで得た束の間の安寧を享受していた平和な街は、殺意渦巻く戦場へと姿を変える。

「一斉射撃！ 残りの奴らの頭も派手にぶち撒けてやれ！」

「距離を開けるな！ 奴らの装備は散弾だ、接近して引き金を引く前に素っ首を叩き斬つてやれ！」

中央憲兵たちが指示に従つて銃口を向けたことで反射的に身を引く仲間に、フォルカーもまた指示を発して突つ込んでいく。連続して左右にガスを吹かすことで、敵に的を絞らせないようジグザグの軌道を描くフォルカー。

「な——っ!？」

「遅えよノロマー！」

銀光一閃。

路地裏の闇を切り裂くようにフォルカーの握る剣が振られ、憲兵の1人の上半身と下

半身が泣き別れとなった。再び鮮血が内臓と共に撒き散らされ、ルイスの血肉で赤く染まった路地裏に更なる赤を塗り重ねる。

「正気かコイツ!？」

「頭がイカれてやがる!!」

仲間を殺したフォルカーに向けて、驚愕と罵声の入り混じる言葉と共に残る2人が散弾をぶち込む。至近距離で放たれた幾多の弾丸。死を齎すそれからフォルカーを救ったのは、ナナバとゲルガーの2人だった。

彼らはアンカーを憲兵の握る銃に射出することで銃口を逸らし、迫る凶弾から仲間を救う。

「ぐ……ッ」

だがそれでも、銃口を僅かに逸らす程度では広範囲を撃ち抜く散弾の脅威を、完全に取り除けるものではない。躲し切れなかった弾丸がフォルカーの肩、腕、脚の肉を抉り取っていく。

撃たれた痛みには耐えながらトリガーを引き、フォルカーはアンカーも射出せずに強引にガスを噴出。壁に体を打ち付けながらも上昇し、射程圏外へ離脱に成功する。

「何考えてんだ!？」 普通、銃を構えた相手に突っ込まねえだろ!？」

「だからこそ突貫したんだっつーの! 結果的に敵を1人撃破できて、こっちは無事に

済んだんだから良いだろ！」

アンカーを打ち込み、姿勢制御を行いながら言うフォルカーにゲルガー達は頭を抱える。体の各所の肉を散弾で抉られ、少なくない量の血を流すその姿の一体どこが「無事」なのかと。

急所や立体機動装置に着弾しなかったのは、単なる偶然に過ぎないというのに。

調査兵団からすれば、中央憲兵の「対人用立体機動装置」は初見の代物だ。巨人を殺すための兵器がまさか対人間用に改良されているとは思わないうし、ましてや仲間の一人在頭をぶち抜かれた直後。

そんな状態で銃口を突きつけられたら、誰だつてまずは様子見しようと思距離を取る。銃を突きつけた側である中央憲兵もそう考えていたからこそ、予想とは真反対のフォルカーの行動に不意を突かれて対応が遅れたのだ。

「無茶苦茶しやがって……！ 俺とナナバの援護がなけりや、今ごろ木っ端微塵だったくせによお！」

「感謝してるぜ、これ終わったら酒奢つてやるよ！」

「おい、私は肉だからな！」

「お喋りはそこまでだ！ 次が来るぞオ！」

中央憲兵達が次の弾丸を装填したのを見て、軽口を叩き合う3人にフリードが警告を

発した。

それを皮切りに戦鬪が再開する。

中央憲兵が背中に背負う装置が石畳と擦れて火花を散らすほどの低空飛行を行い、真下から調査兵に向けて第2射を放った。4連して銃声が鳴り響き、しかし撒き散らされたそれらは、フォルカーたちがワイヤーを巻き取って身を翻したことで命中せずに終わる。

決着は、拍子抜けするほどに一瞬だった。

「今だ、やれ!!」

3回目の装填が行われるより早く。

フォルカーの指示で一気に距離を詰めたゲルガーとナナバが、残る2人の中央憲兵を斬り伏せる。脱力した彼らは街路へと墜落し、平和を謳歌していた市民たちが一斉に悲鳴を上げて我先にと逃げ出した。

「1人は即死。もう1人は……頑丈だなア、まだ息がある」

そう言つて、フリードが痛みで呻く憲兵をつま先で転がす。それを見たナナバは仰向けにされた憲兵に慌てて駆け寄り、懐から取り出した布で止血を行った。

「アンタにはまだ死んでもらつては困る。色々と聞きたいことが山ほどあるからね」

「それにしても、ご大層なモン作りやがつて。何だこりやア? 凄えことは凄えが、弱点

が目立ちまくってんぜ。銃は2つあるが両方とも撃ちまえば、装填に時間がかかるせいで隙を晒しちまう。しかもワイヤーは銃の向いてる方向にしか発射出来ねえんだろ？ おかげで、お前らの動きは分かり易かったぜエ？ 練度は高いらしいが、実戦慣れしてねえのが丸分かりだ」

「……ふは……はは。もう……勝者気取りか、調査兵団……」

対人用立体機動装置を小突きながら喋るフリードに、敗者である筈の憲兵は口から血を吐きながらも嗤う。

「殺し合いは……お前らの、勝ちだ。だが……最終的に、目的を達成するのは……我々だ……っ！」

「——っ!? 止めろ、ナナバ！」

いち早くに中央憲兵の意図に気づいたゲルガーが叫び、即座にナナバも反応するが、それでも僅かに間に合わない。予め奥歯に毒物か何かを仕込んでいたのか、喉を鳴らした憲兵は大きく痙攣して泡を吹くと、ピクリとも動かなくなった。

「クソツ、拷問にかけられて情報を吐いちまう前に自害しやがった」

屍と化した憲兵を見下ろしてゲルガーが舌打ちし、ナナバも意味がなくなった止血をやめる。

「んで、コイツらは一体なにが目的だったんだア？」

「……色々と仮説は浮かぶけど、まずはエルヴィン団長に報告しようか。ゲルガー、コイツの立体機動装置も回収してくれ」

「了解。……そう言えば、フォルカーはどこ行った?」

今やつと一人足りないことに気づいたと、ゲルガーは周囲を見渡す。同じようにナナバとフリードも辺りに視線を巡らせて首を傾げたその時、少し離れた場所から絶叫が聞こえてきた。

それが探していた仲間のものだと理解すると同時に、3人は声が出た方向へと一斉に駆け出していく。

声が出た場所は、ダイナが入った店から僅か数十メートルのところだった。街路の端で血の海に沈む女性の脇で、フォルカーが崩れ落ちている。

「おい、どうし——」

フォルカーの肩に手を置き、遺体の顔を覗き込んだゲルガーが言葉を失う。続いて駆け寄った面々も、ゲルガーと同じく驚愕の表情を浮かべた。

血で汚れた長い金髪に、光を失った瞳。白のドレスワンピースに包まれた美しい四肢からは完全に力が抜け、動く気配が全くない。

それは、自分たちと共に数多の脅威を退けた調査兵団の切り札だった女性。

人間の最強がリヴァイ兵長であるならば、巨人の最強は彼女とまで称されていたほど

の存在。

女型の継承者ダイナ・フリッツが、死んでいた。

「……少し考えれば、分かっていったのに」

頂垂れたまま、フォルカーは拳を握りしめて掠れた声を出す。

「おかしな点はいくつもあつたんだ。ルイスを殺った直後に、奴らは俺たちを「護衛」と呼んだ。何故だ？ 決まつてる、奴らの狙いがダイナだったからだ。奴らからすれば、俺たちが抹殺対象の護衛に見えたんだろうな。それに加えて、人数。本気で俺たちを殺す気なら、3人なんてあり得ない。数の有利を取るために、少なくとも6人以上は送り込む筈だ。あの3人はただの足止めで、別働隊がいやがった」

そう、考えれば考えるほど今回の襲撃は不明瞭な点が出てくる。

もしも本当に中央憲兵の狙い調査兵団であるなら、フォルカーたちを狙ったりはしないだろう。下っ端を何人殺しても、組織に対して大きなダメージは与えられないのだから。

本気で調査兵団を潰すのなら、エルヴィン・スミス、リヴァイ、ハンジ・ゾエ、ミケ・ザカリアスといった上官の面々に刺客を差し向けるべきだ。

「中央憲兵による急襲と、新型の立体機動装置に意識を奪われすぎて気付かなかった

……！ すまねえ、ダイナ……！」

「……そう思ってるなら、これからは寝室と浴室に忍び込むのは控えてください……」
「——ツ!?」

4人全員が、上体を起こしたダイナに幽霊でも見たかのような視線を向けて息を呑む。夢か幻覚でも見ているのかと何度も瞬きしても、目の前の光景は変わらない。

確かに心臓が停止し、脈が無かった人間が動いている。

「……刺された直後に巨人の再生力を負傷箇所注ぎ込んで応急再生を行い、ひとまず命の危険が去ったタイミングで自分で自分の心臓を止めて仮死状態になったんですよ。とにかく、死んでないのでそのお化けを見るような視線を向けなくてください」

少しフラつきながらも立ち上がり、解説まで行ったダイナにゲルガーは思わず額に手を当てて言う。

「お前、どうやったら死ぬんだよ」

それは、この場にいる4人全員の思いをして見事に代弁していた。



中央憲兵らによる暗殺を何とか凌ぎ、無事に仮死状態からの蘇生にも成功できた。

仮死状態からの蘇生は試したことが無かったのでぶっっちゃけ不安だったが、幸運の女神は微笑んでくれたようだ。

まあ、暗殺されかけた時点で幸運もクソもねえけど。

心臓が完全に再生しているのを確認した後、俺はフォルカーから意識がなかった間に何があったのかの説明を受けていた。

俺が店の中で聞いたあの重低音は、どうやら中央憲兵の対人立体機動部隊が使う散弾の発砲音だったらしい。

レイス家、そしてケニー・アッカーマンも初手からやつてくれるな。

『原作知識』と現在の状況を擦り合わせながら全力で頭を動かし、思考を纏めていく。まず、何で俺が狙われた？

そんなもん「壁外の世界」と「真の王家」の情報を調査兵団にバラしたからに決まっているが、それを知ってるのはエルヴィン団長を始めとした、一部の人物のみ。

つーか、俺が壁外から来た存在かつ巨人化能力者ってことを知ってるのも、調査兵団に所属している兵士だけだ。あ、それとナイル師団長か。それ以外の部外者から見れば、ただの兵士の一人にしか見えない筈だし。

なのに、中央憲兵は俺を狙った。

つまり——……

「クソツタレ！」

と、そこでフリードの発した罵声で思考が断ち切られる。

通称「ダイナ監視班」と合流を果たした俺は彼らと共に、戦死したルイスと中央憲兵の遺体、そして対人用立体機動装置を回収するべく戦場となった場所へと向かっていたのだが、何やら問題が発生したみたいだ。

皆が視線を向ける先には、夥しい量の血痕が残る石畳の地面。

「目を離れた隙に、遺体ごとあの立体機動装置が回収されてやがる……！」

「路地裏の遺体も回収されてたよ。残ってたのは、ルイスの遺体だけだ」

血痕の前で地団駄を踏むフリードと俺の元に、近くの路地裏に入って行ったナナバさんとフォルカーが、ルイスの遺体を担いで戻ってきた。

……これは、酷いな。

運ばれてきたルイスの遺体は、思わずそんな感想を抱いてしまうほど損傷が激しかった。死者への手向けにもならないが、シヨールで首から上を隠してやる。

俺が死者に出来ることなど、この程度だ。

「急いで旧本部に戻ろう。一刻も早くリヴァイ兵長に今回の襲撃について報告しないと」

「それと、エルヴィン団長にも報告だな。俺は団長の方へ向かうぜ。……お前ら、ルイスとダイナは任せたらなあ」

「了解」

フリードはもう一度だけルイスを見ると、立体機動装置で王都へと向かっていく。

……あれでウォールシーナに入ったら、軍法会議にかけられるんじゃないか？ 例え兵士でも、理由もなく壁内で立体機動装置を使うのはダメだった気がするんだが。

いや、俺の監視任務って明確な理由があるんだが、それは調査兵団外の人間には言えねえし。

……まあ、暫くしたらクーデター起きて政権変わるし大丈夫か。

中央憲兵との戦いで遠ざかっていた市民が徐々に戻ってきたので、俺たちも慌てて愛馬を繋いでいた場所へと走る。

フォルカー、ナナバさん、ゲルガーさんは兵服で立体機動装置を装備してて、しかもフォルカーは首無し遺体を担いでる訳で。さらに俺は真っ白なドレスワンピースや髪の毛を血で真っ赤に染めてるときた。

もういつ憲兵を呼ばれてもおかしくない風体。

逃げるべし、逃げるべし。



「……以上が、ほんの数時間前に街で起きた出来事です」

馬にかなり無理をさせてスピードを出しまくり、最短時間で旧本部へと戻った俺と「ダイナ監視班」。

出迎えてくれたアリーセやペトラさんが帰宅した俺たちの姿を見て大慌てとなり、ペトラさんは兵長とハンジさんを呼びに地下室へと猛ダツシユ。アリーセは俺の部屋へ連行すると血に塗れたワンピースを奪い取り、素っ裸になった俺を浴室へと叩き込んだ。

湯浴みで血を洗い流し、今度は兵服に着替える。

織物で濡れた髪も拭きながら浴室を出ると、会議室には既に城内にいる殆ど全員が集まっていた。

ちようど、フォルカーとナナバさんが兵長たちに事情を説明し終えたところか。タイミング完璧だな。

俺が入室した瞬間に一斉に視線を向けてきた、大広間に集まっている面々を見渡す。まずは第3期リヴアイ班のリヴアイ兵長、ペトラさん、オルオさん、エレン、ミカサ、アルミンだ。因みに第1期は俺が所属していた時の班で、第2期が進撃ファン大好きの旧リヴアイ班だ。

続いてハンジさん、モブリットさん、ミケ分隊長、ナナバさん、ゲルガーさん、コニー、サシャ、ジャン、フォルカー、アリーセ、リーナ。

そして俺への抑止力としてこの城に常駐してる調査兵たち。何人か欠けているのは、地下に幽閉しているライナーとユミルの監視に当たっているからだろう。

「あれ？ アベルはもう帰ったんですか？」

「アイツなら、お前が買い物に出かけた後すぐにここから出て行ったぜ？」

ゲルガーさんの言葉に俺は首をかしげる。

俺が買い物に出た直後ってことは、あの優男はラウラのお見舞いに行かなかったのか？ わざわざこんな辺境まで来たのに、何ですぐに帰ったんだ？ 今ここにいないって事は、忘れ物して取りに帰ったとかじゃなさそうだけど。

「おいダイナ、この緊急時に関係のない話はするな。本題に入るぞ」

「了解です」

兵長からお叱りの言葉を貰ったので、そこで思考を中断。

アリーセの隣に並び、会議を仕切っているハンジさんへと視線を向ける。

「それじゃあ、全員揃ったし情報を整理しよう」

そう切り出したハンジさんはチョークを手に取ると、黒板に今回の襲撃事件の要点をまとめていく。

一通り書き終えると、ハンジさんは振り向いて俺を見た。

「ダイナ、君を襲ったのも中央憲兵で間違い無いんだよね？」

「はい。咄嗟に兵服を見て確認したので、間違い無いと思います」

「分かった。次に、相手の顔とか人数とかは覚えてるかな？」

「正確な数は分かりませんが、恐らく4人以上はいたかと。顔の方は……えっと」

出来る限り正確に、俺を刺した男の特徴を述べる。

『原作』に出てきた人物なら名前まで言えたんだが、襲ってきた奴らの中で顔を確認できたのは脈を確認しに近づいてきた1人だけ。

そして、残念ながらソイツは原作キャラじゃなかった。

特徴を全て言い終えると、ほぼ同時にモブリットさんが俺の証言を元に描いたイラストを黒板に貼る。

うつま!! え、何それ凄え。もはや写真じゃねえか。しかも俺が言った特徴を全て完璧に捉えている。

「モブリットさん、こんな特技があつたんですね。私が頭の中で思い描いていた顔と全く同じです」

素直に絶賛すると、モブリットさんは少し照れたように微笑み、そしてすぐにハンジさんに続きを促した。

『車力』のピークもデタラメに優秀だが、こつちも負けてねえな。

しきりに感心しているうちに会議の議題は対人用立体機動装置へ移っていた。これに関しては実際に戦ったナナバさん、ゲルガーさん、フォルカーへと質問が集中し、俺は特に話すことなし。

口を閉じたまま会議を静観する。

余談だが、対人用立体機動装置に関しても交戦した3人の証言を元にモブリットさんが精巧なイラストを描き上げた。

「……で、次が最大の問題だね」

「ああ。何よりの問題は、中央憲兵が狙った相手がダイナつてことだ」

ハンジさんの言葉に兵長が頷き、室内の空気が張り詰める。

勘付いた人たちが互いに疑惑の視線を向け合い、俺も無意識のうちにアリーセの肩を抱いて引き寄せた。

もしかすると、この部屋の中にいる可能性もあるからな。

……いいや、むしろこの中にいる可能性が最も高いだろう。

「なあ、アルミン。何で皆、仲間同士で睨み合ってるんだ？」

どうやらこの事態をよく理解出来ていなかったらしいコニーが、小声でアルミンへと話しかけていた。同じようにサシャも疑問の視線をアルミンへと向けている。

……待て、エレンも聞き耳立ててないか？

何でだ主人公、お前はそれなりに頭が回る方だろ。

公式ファンブックで、エレンとコニーの頭脳戦のステータスが同数値なのを見た時はそんな馬鹿なと思ったが、まさか間違ってるじゃない？

「ダイナさんが巨人化能力者であることや、壁の外の世界についての情報を持っていることを知っているのは調査兵团だけなんだ。ナイル師団長は知ってるけど、あのエルヴィン団長が裏切るような相手に自ら秘密を開示するとは思えない。つまり、調査兵团の中にダイナさんのことを中央憲兵に話した裏切り者がいる」

俺でも察せられるんだから、調査兵团の頭脳を担うハンジさんやアルミンは一瞬で気づくよな。兵長も言わずもがな。

そう、調査兵团の中に中央憲兵のスパイがいる。

それも特に俺の行動に詳しい、監視役としてこの城に常駐している面々——今まさにこの部屋にいる奴らが特に怪しい。

何せ、城にいる時じゃなくて俺が買い物のために街へ出たタイミングだからな。俺が今日、買い物に出かけると予め伝えていた相手はリヴァイ兵長とハンジさん、そしてアリーの3人だけだ。

この3人がスパイの可能性はゼロなので、即座に除外。そうすると、前日から俺が外出すると知っている人物はいなくなる。

しかし、俺は実際に街で襲われてしまった。

中央憲兵がウォールローゼ内の街で常に俺を待ち伏せしてる可能性も無しではないが、奴らもそんなに暇じゃないだろう。

以上のことから、スパイは俺が今日出かけるのを見てから中央憲兵にそのことを伝えるに行ったのだろう。

行きはそんなに馬を飛ばしてないから、先回りして街に中央憲兵を配置するのは十分に可能だ。それに乗っていたのは調査兵団のサラブレッドじゃない普通の馬だったから、それこそスパイがサラブレッドの方を使えば簡単に先回りできる。

そしてこんな行動が出来るのは、今日の朝にこの城にいた奴らだけという訳だ。

「エレンとヒストリア、そしてダイナはすぐに別の場所に隠す。俺とハンジ、ダイナ、アリーの3人以外は全員外に出る。3人を隠す場所が決まった後、俺とハンジが信頼できると判断した奴にだけ隠れ家の場所を伝える」

第41話 対応×日常×三つ巴

調査兵团の中に裏切り者が潜んでいることを確信したりヴァイ兵長とハンジさんは、流石と言うべき対応の早さを見せた。

まず、ハンジさんとモブリットさんの2人がエルヴィン団長の元へスパイの存在を報告。指示を仰ぐと共に、団長と同じく王都にいるヒストリアを連れて戻ってくる。

続いてリヴァイ兵長は第3期リヴァイ班を解体。メンバーを兵長、エレン、ミカサ、アルミン、サシャ、コニー、ジャンの7人に切り替え、そこに俺、アリーセ、ユミルを含めた第4期リヴァイ班を設立した。

何だこのメンツ。原作主要キャラをずらりと並べた挙句、ユミルと俺とエレンの巨人化能力者が3人も参戦。負ける気ねえだろ。

絶対にエレンとヒストリア（ついでに俺）を守り抜くという、兵長の意志がひしひしと伝わってくるような布陣だ。

因みに新兵である104期生がリヴァイ班に抜擢された理由は、俺が刺された時間の前後に確固たるアリバイがあるから。皆揃ってエレンと一緒にいたとか。

最後に、ミケ分隊長、ペトラさん、オルオさんを中心としたライナーの監視班。フォ

ルカー、ナナバさん、ゲルガーさんといった元ダイナ監視班もここに含まれる。

調査兵団の誇る熟練兵の大半が、ここに所属することになった。

本当なら戦力をエレンとヒストリアの元に集めたいところだが、誰が敵か分からねえ以上はこうするしかねえ。

ミケ分隊長や旧リヴァイ班といった、兵長が信頼を寄せてる相手までここに含まれているのは、この部隊が最も裏切り者が潜んでいる可能性が高いからだ。兵長がいない間に裏切り者が牙を剥いた時、それを制圧できるだけの確かな戦力が必要になるからな。

それと、普通にライナーが脱獄した時に抑え込める戦力がある——……

「ちよつとダイナさん、手え止めないで動かしてくださいよ！ もうすぐ兵長が帰ってきますよ!」

「う、嘘?! もうそんな時間ですか!」

思考を遮ったエレンの声に、俺は慌てて窓の外へと視線を向けた。

既に太陽は中天近くで輝いており、もう間も無く正午であることを示している。やばい、マジでやばい。

確かウォールシーナに向かったハンジさんと一緒に、正午過ぎには帰ってくると言っていたから……

「もしかして後一時間もない!? エレン、掃除はどこが残ってましたっけ!」

「この部屋と廊下が……隣の部屋は、アリーセさんがやつてくれます」
残り3箇所……いや、まだいける。間に合う。

この部屋はもうすぐ終わるし、アリーセなら隣の部屋もすぐに終わらせてくれる筈だ。廊下はそんなに広くないから、時間もそんなにかからない。

「エレン、この部屋の掃除は任せました！ 私は廊下をやります！」

「了解！」

返答と共にエレンが投げ渡してきた雑巾をキャッチし、俺は駆け足で廊下へ。まずは水拭きしようと雑巾を濡らしたその時、隠れ家の外から騒がしい声が聞こえてきた。

「サシャ、食料をつまみ食いでもしてみろ。リヴァイ兵長に食べやすい大きさに捌いてもらうからな」

「し、しませんよー！」

声が見た方を見れば、大荷物を担いだジャンとサシャの姿。その後ろにはアルミンとコニーがいた。

どうやら街へ食料調達に出ていたメンバーが帰ってきたらしい。『原作』と違い俺とアリーの2人が加わってるから、必要な食料も増えている。おかげで本来なら留守番して掃除する筈のコニーまでが買い物に駆り出される始末だ。

すまん、104期の皆。うちのアリーセが人並み以上に食べるから……。

心の中で謝罪しつつ、同時に掃除する人手が増えたことにガッツポーズ。

取り敢えずジャンには床の雑巾がけ、サシャには窓拭きをやってもらうべく2人に雑巾を渡そうとして、俺はある事に気づく。

……………おい。

「どうしたんスか？」

両手に濡らした雑巾を持ったまま硬直する俺に、怪訝な表情で問いかけてくる馬面、もといジャン・キルシユタイン。

同じようにサシャ、アルミン、コニーが俺に視線を向け、掃除に熱中していたエレンもこちらに顔を向けた。そして、我らが主人公も俺と同じように体を硬直させる。

俺とエレンの視線は床。それも、今まさに隠れ家へ帰還した104期たちの足元だ。

「お前ら、出かける前に言ったよな!? 入ってくる時はちゃんと埃や泥を落としてこいってー!」

「あ、ああ、せっかく綺麗にしたのに……」

ジャンに箒を突きつけて叫ぶエレンを横目に、俺はその場に座り込む。

泥だらけじゃねえかよお。

日本とは違って靴を履いたまま部屋に入るのが常識であるが故に、多少は汚れるだろうとは思ってたぜ? だが、これは酷い。

入り口、廊下、そしてこの部屋まで泥の足跡がくつきり。磨き上げたテーブルは、買ってきた食料を山積みしたことで埃だらけに戻っている。

くそつ、床とテーブルは一からやり直しか。もう雑巾も箒も投げ捨ててアリーセと格闘術の訓練でもしたいところだが、兵長の怒りに触れたくないならやるしかねえ。

まずは床の泥から掃除しよう。ちようど雑巾持つてるし。

「どうすんだよコレ！ お前ら、リヴァイ兵長に頭蓋骨を蹴り砕かれたいのか!? 今朝だって、俺がお前のベッドを直してなかったらなあ……」

「うるせえな、お前は俺の母ちゃんか!？」

泥を拭き取る後ろで更にヒートアップするエレンとジャン。

どうでも良いから掃除してくれ、いやマジでホント。

兵長、いくらでも傷が治る巨人化能力者に対しては容赦なく暴力を振るうからな。しかも俺は完全な仲間じゃないから、場合によってはエレンよりも酷い目に遭う。

一応は女という事で、顔面だけは殴られない辺りが唯一の救いか。

「……お帰り」

「おいおい、こりや一体なんの騒ぎだ?」

と、そこで外にいたミカサ、ユミル、ヒストリアの女子3人組が入ってくる。

当然のように泥を落とさず、今しがた俺が綺麗にした場所に泥の足跡をつけて。四つ

ん這いになっていた俺には気づいてすらいない。

もういいや、アリーセの所へ行こう。

「ああ、ミカサ。薪割りご苦労様。エレンとジャンもその辺で……サシャ、今バッグに何か入れなかった?」

「パンのような物は、何も」

「てめえ芋女、あれほと言っただろうが!」

「おい、返せよそれ」

「それより兵長が帰ってくる前に掃除を……」

アリーセのいる部屋に入るなりバタンと扉を閉めて、大騒ぎを始める104期に背を向ける。

断じてそんな場合じゃねえのに、主要キャラたちのバカ騒ぎを見れて不覚にもちよつと感動しそうになった。

何より、あの中にユミルがいるというのが心にくるな。

「ダイナさん? どうして涙目になってるんですか?」

「心を許せる友人というのは、やはり素晴らしいと思ひまして」

「……? そうですな……?」

可愛らしく小首を傾げるアリーセ。

そんな彼女の頭を優しく撫で、俺もまた自分の友人のために頑張ろうと思い、俺は掃除を再開する。

そのまま2人で黙々と掃除をしていると、104期たちと大騒ぎがピタリと止んだ。それだけで全てを察した俺は、ジャンが帰ってきた辺りで嫌な予感がして用意しておいた傷薬と包帯をポケットから出す。

「時間は十分にあつた筈だが……」

大声でもないのに、廊下と扉を貫通してここまで聞こえてくる兵長の言葉。そこに込められた感情は不快5、呆れ3、怒り2といったところか。

掃除が間に合わなかった程度ならまだしも、逆に汚してしまったのだ。まず無事では済まないだろう。

案の定、人が人を殴打するゴツ、ゴツ、ゴツという鈍い音が連続する。



人里離れた森の中に用意された、調査兵団の隠れ家。

その付近にある巨大な洞窟の前で、巨人と化したエレンは硬質化能力を発動させようと奮闘していた。

その様子を崖の上から眺めていると、同じく隣でエレンを見ていた兵長が話しかけてくる。

「ダイナ、他に何かないのか？ エレンが硬質化を扱えるようになる方法は」

「と、言われましても……」

そもそも『進撃』は硬質化能力を持ち合わせてないのだから、方法も何もねえんだよなあ。いや、もしかしたら本当にエレンが『進撃』の力を引き出せてないだけで、『進撃』が硬質化能力を備えている可能性はゼロではないが。

一応、俺が硬質化能力を使う時の感覚はエレンに伝えている。

硬質化させたい部位に意識を集中させて、皮膚が硬くなるイメージと共に巨人の力を収束するのだ。

しかし、巨人化したエレンがどれだけ力んでも、硬質化能力が発動する兆しはない。

エレンが短期間で硬質化能力を扱えるようになる方法は2つ。

まずは、『原作』通りレイス家が隠し持っている「ヨロイ・ブラウン」の薬を経口摂取

する方法。

そしてもう一つは、ライナーを食って『鎧』の力を得ることだ。

いや、ライナー食うのは無しかな。

『鎧』の力を得たところで、俺や『戦鎧』みたいに硬質化物質の壁を作るのは無理そうだし。出来たとしても、せいぜいアニの『女型』が使ったのような部位硬質化だけだろう。

……いや、でも、鎧を纏った『進撃』とは凄えカツコ良さそうだな。ちよつと見てみたいかもしれん。

俺がウォールマリアの壁を塞いでも良いのだが、ハンジさんと兵長は俺に頼るのをよしとしなかった。

最終的に俺とも敵対する可能性がある以上、結局エレンには硬質化を習得してもらう必要があるとのこと。

まあ、当然か。

調査兵団からすれば今のエレンが俺に勝てるとは思わないだろうし、少しでも人類の希望の力は高めたいと思うのは不思議ではない。

実際のところ、俺とエレンが戦うと現時点でもエレンが勝つのだが、だつてエレン、始祖の巨人持つてるしな。

互いに巨人化して殴り合った（接触した）時点でエレンは覚醒、俺は『座標』の力でボコられるのだから。

下手したら俺の『女型』も『座標』で乗っ取られるかもしれない。

……やはりエレンと戦う時は立体機動で仕留めるか、巨人化能力者の仲間を作ってソイツに任せろしかない。

強力な切り札である「王家の血脈」が、エレン相手だと完全に邪魔になっちゃうな。まあ、それは置いといて。

エレンが硬質化能力を使うには、やはり薬によるドーピングが最も良いだろう。

「エレン、立てえええええええ！ 人類の明日が、君に懸かっているんだぞ!? 立ってくれえええええ！」

考え事をしている間に、エレンに限界が訪れたらしい。

ハンジさんの絶叫も虚しく、進撃の巨人は地面に倒れ込んだ。

もはや巨人体は10メートル程度しか生成されず、本体がうなじから露出してしまっている。強引に巨人体から引き剥がされたエレンの顔や腕が凄惨な事になっているのを見て、近くにいたユミルが顔を強張らせた。

「おい、まさか私まで、あんなになるまで力を使わされるんじゃないだろうな？」

「実験の指揮を執るのがハンジさんなので、私たちも何かしらやらされますよ。覚悟は

しておいた方が良かった」

茜色に染まる空を仰ぎながら俺がそう言うのと、ユミルも諦めたように空を仰ぐ。

そこへ、興奮から頬を赤く染めたハンジさんが凄くいい笑顔で走ってきた。

「ダイナあああああアツ！ 君の『叫びの力』でエレンの巨人体に命令を出せば、強引に硬質化を使える可能性があると思っただけ……どうかな!？」

無茶言うなこの人。

これ以上エレンは巨人化できないだろうし、それだとまた俺の力を借りることになるが良いのだろうか。

そんな心の声を何とか封殺して、俺はハンジさんに落ち着くように説得するが失敗。強引に実験場へと引きずりこまれてしまう。

結局、ハンジさんの暴走は兵長とモブリットさんが強引に止めるまで続いた。

意識を失ったエレンがミカサに担がれて撤収していくのを見送りながら、どこか暗い顔をする兵長に話しかける。

「兵長、1つ取り引きしませんか？」

「……聞こう」



星が見え始めた空の下、リヴァイとダイナの拳が交差した。

左足で大地を蹴り、その華奢な体を宙に浮かすと腰の捻りで高速で横回転するダイナ。遠心力を味方につけた右足の蹴りが弧を描き、リヴァイの側頭部を狙って放たれる。

常人なら認知することすら出来ずに意識を刈り取られるだろうその蹴撃を、しかし人類最強は僅かに首を動かすだけで容易く躲す。

そして蹴りを放った直後で体勢が安定しないダイナに向けて、反撃の拳撃。大の男が吹き飛ばすほどの威力を孕んだ一撃が腹部を狙い、だが命中の寸前でダイナは腕を差し込んで防衛に成功。

そこで両者共に後ろに跳び、距離を開けて仕切り直しとなる。

「凄え……あのリヴァイ兵長とやり合ってるぞ」

「うん。僕なんて、2人の動きが殆ど見えないよ」

一連の攻防に、興味本位で見物していたコニーとアルミンは驚嘆の表情を浮かべたま

ま感想を言い合う。その2人の隣では、他の104期も信じられないモノを見る目を向けていた。

主に、ダイナの方へ。

「まだ動きに無駄が多い。それと、相手が隙を見せた時以外は蹴りで頭部を狙うな。今みたいに、防がれるとカウンターを貰うぞ」

「はい！」

「分かったなら次だ。同じことを2度指摘させるなよ」

リヴァイの言葉に頷いたダイナは、今度は低い姿勢で人類最強へと踏み込んだ。リヴァイの目の前で地面に手をつき、足を払うような軌道の蹴り。脚部にダメージを与えて敵の動きの障害を狙うそれは、リヴァイが跳躍したことで不発に終わる。

上を取られたダイナは即座に離脱を試みるが、それより早く真上から肘打ちが落ちてきた。回避を諦め、咄嗟に両腕を交差させて防御。

何とか防いだものの、踏ん張りが利かず地面に叩きつけられてしまう。後頭部と背中を打ち付けたことでダイナの視界が明滅し、そこへリヴァイの追撃が叩き込まれる。

冗談ではなく、人体が3メートルは浮いた。

仰向けに倒れ込んだダイナを、リヴァイがつま先で掬い上げるように蹴り飛ばしたのだ。

「化け物だ……」

そう呟いたコニーを誰も否定しない。

いくら女性とは言え、片足の筋肉だけで人を隠れ家の屋根より高く吹き飛ばす存在を、化け物と言わず何と言う。

完全に脱力して落ちて来たダイナを受け止めて、リヴァイは腕の中の女性に容赦なく言った。

「次だ」

「……もう少し、ハンデを増やしてもらって良いですか？」

そう、アツカーマンという規格外と僅かにでも戦えていたのはリヴァイがハンデをつけていたからだ。ここまでの攻防で、リヴァイは一度も左腕を使っていない。足と右腕だけである。

「でも私、あの条件でも兵長と戦える自信ありませんよ」

「安心しろ、俺もだ」

次は右足をも封印したリヴァイに突っ込んでいくダイナを見て、サシャとジャンが首を振る。

それを聞いたアルミンが、別の方向を指差して苦笑した。

「僕はミカサにそのハンデをつけてもらっても戦える気しないな……」

リヴァイとダイナペアとは少し離れた位置でぶつかり合うのは、牙を剥いた猛獣の如くぶつかり合うミカサとアリーセペア。

そこに、クールにエレンを見守る幼馴染も、柔らかな笑みを浮かべる天使もいない。ともすると、リヴァイとダイナペアよりもハイレベルな格闘戦が繰り広げられている。

ミカサはリヴァイほど人外の領域におらず、アリーセはダイナを凌駕する実力者だ。互いの実力が近いため、ハンデも手加減も必要ない。

故に本気の潰し合いが繰り広げられる。これがリヴァイとダイナの取り引き。

ダイナが提示したのは、エレンが硬質化能力を使えるようになる薬をレイス家が所有している可能性があるという情報。そして、もしその薬を奪うのなら助力するという意思。

対してリヴァイが提示したのは、ミカサと共にダイナとアリーセに格闘術の訓練相手となること。そして、レイス家から奪取した薬の一部をダイナに譲渡することだ。

エレン、ヒストリア、ダイナ、アリーセを狙う中央憲兵とレイス家。

「サイキョウノキョジン」のラベルが貼られた巨人化薬を狙うダイナ。

スパイを炙り出し、降りかかる火の粉を払ってウォールマリア奪還を目指す調査兵

団。

3つの陣営が今、共に動き出す。

第42話 反撃前夜

窓から差し込む淡い月明かりを頼りに、アリーセはベッドの上で手帳サイズの小さな本へと目を通す。

それは、ダイナがもしも自分がアリーセを残して先に死んでしまった際に、残された彼女が一人でも敵と渡り合えるよう『原作知識』の中の必要な部分のみを抽出して書き記した手記だ。

調査兵团やマールレに奪われると、その瞬間に全ての情報が交渉材料としての価値を失ってしまう危険を孕んでいるが、その対策として中身は全て日本語で記されている。「うう……また読めない漢字が出てきた……。これ、何て読むんだっけ……？」

尤も、ダイナから「壁外の言語」として日本語を教わったアリーセも未だ完璧ではないらしい。現在のアリーセの日本語力は、小学生低学年の同程度といったところか。

アリーセはひらがなやこの世界の文字と似ているカタカナは簡単に習得できたのだが、ダイナの予想通り漢字で躓いた。

外国人が日本語が難しいと感じる元凶なだけあって、比較的学习能力の高いアリーセでもそう簡単に読み書き出来ない。

それを考慮して、ダイナもひらがなとカタカナを多めで書いてはいるのだが。「ユミルの呪い——」

ダイナの文字で丁寧に綴られたそのワードを細い指先でなぞり、呷く。

それこそ唯一無二の親友の命を脅かす、その名の通りの呪い。強大な力と引き換えに、命の残り時間を13年にまで縮める呪縛。

ダイナに残された時間は残り8年。

それまでに呪いを解除しなければ、親友は死ぬ。

「……………」

訪れるかもしれない最悪の未来を首を振って払い、アリーセは手記のページをめくる。

次頁に書かれているのは『ユミルの呪い』を打破できる可能性がある幾つかの方法だ。

その中で最も成功する可能性が高い方法は、調査兵团とマーレを同時に敵に回してしまふ。

何せ、「九つの巨人」を全て集める必要があるのだから。必然的に調査兵团とマーレが保有する力を奪い取る必要があり、エレンやジークも殺す必要がある。

しかし、

「調査兵团にとっての人類の希望と、マーレの切り札である『戦士隊』に置いて最強の存

在。寄越せと言っても、両陣営が「はい、どうぞ」と簡単に渡してくれるものじゃない……」

だからこそその全面对決。

交渉しても相手が拒むのなら、力で奪い取る以外の方法はない。

そして、その為には力が必要となる。『国』を丸ごと2つ相手取っても、対等以上に戦える絶大な力が。

ダイナは既に「国崩し」が出来るほど強大な力の片鱗を見せているが、対するアリーセはせいぜい並みの兵士よりは強いといったレベルだ。

ミカサとの組手で、包帯だらけになった己の体に触れる。

「彼女一人も倒せなかったら、ダイナさんの助けになるなんて夢のまた夢だよね……」

単騎で並みの兵士100人と等価とまで謳われる104期の首席を比較対象にするのが間違っているのかもしれないが、壁内人類全てを敵に回すのならいつかは倒さなければいけない相手である事も違いない。

「取り返しがつかなくなる前に、私が強くならなないと……」

ダイナの手記を枕元に置くと、アリーセは代わりに小さな箱を手取る。その中身はダイナの脊髄液が入れられた注射器だ。

試作段階の巨人化薬。

「九つの巨人」を継承するのがダイナに追いつく最も手っ取り早い方法ではあるが、それをやってみてしまうと将来的に自分はダイナに喰われることになってしまう。

それで「ユミルの呪い」が破れ、ダイナの寿命が増えるなら望むところだが、彼女がアリーセを食い殺してまで延命を求めることはまずあり得ない。

何か他の方法を模索する必要がある。

「待ってて、ダイナさん。私が必ず呪いを打ち破るから……この命に代えても」

呟き、アリーセは手記と脊髄液を隠し場所へと戻した。

方や残り8年の命を燃やし尽くし、平和な世界を築いてそこへ友を送り出すことを願う。

方や「九つの巨人」を全てを奪うために世界との戦いに命を賭し、友に未来が戻ることを願う。

——そうして、ダイナとアリーセは決定的にすれ違う。



ジャブジャブ、バシャバシャという水の音が連鎖する。

その音源は、窓から夕日が差し込み、室内が赤く染まる我らが調査兵団の隠れ家だ。もつと具体的に言うのなら、隠れ家の片隅で向かい合って食器洗いしている俺とコニーの手元。

中央憲兵団とか言う（こちら側の観点では）害悪極まりない集団が科学発展を抑圧しているせいで、当然ながらこの壁内世界に水道という便利なライフラインは存在しない。水仕事をしたければ、近くの川から木桶で水を汲んでこなければならぬのである。

「コニー、残りの食器って後何枚ですか？」

「え？ えーつと……15枚くらいか……？」

洗い終えた食器を織物で拭き取る作業を中断したコニーが、食器の枚数を数えて報告してくれた。

まだ半分近く残ってんのかよ……いや、ホントにないわー。

ちくしよう、余計なことをするんじゃないな。

本来なら、自分で使った食器は自分で洗う。それがここでのルールだ。では何故、俺とコニーの2人だけが全員分の食器洗いをさせられているのか。

事の発端は、俺がアリーセと食事中にパンを賭けて「ジャンケン」をしていた時にまでする。

ジャンケン日本人なら知らない者など存在しないメジャーな遊戯だが、この世界の住人にとっては違う。初めてジャンケンを知った時のアリーセと同じく、この遊戯に104期たちは興味を示した。主にいち早く食事を終え、暇を持て余していたコニーとかサシャが。

そこで俺がジャンケンのルールを説明すると、全員参加によるジャンケン大会が始まったのだ。

ここまで言えば、もう察しが付くだろう。

負けたのである。それも、コニー以外の全員に。付け加えるとコニーは全戦全敗した。

何つーかもう、サシャとヒストリアが強すぎるんだよ。

それぞれ黒星が2つか3つくらいしか無かったんじゃないの？

アレは皆から愛される可愛い女神クリスタから、親の愛情を得られなかった悲劇の少

女ヒストリアにランクダウンしたのに、それでも神に愛されているとしか思えない強さだった。

サシヤは間違いなく野生の勘とか言うヤツだろうな。

反対にユミル、ジャン、アルミン辺りが弱かった。

ユミルに至っては、負けがもう一つ多かつたら俺の代わりに食器洗いをしてたくらいだ。

最後の最後で俺に勝った時に見せたユミルのあの黒い笑みは、生涯忘れない自信がある。それはもう煽られて、危うく『女型』と『顎』による巨人対戦が勃発する寸前までいった。

まあ、開戦前に兵長の拳でユミルと一緒に沈められたけどな。今もまだ後頭部が痛い。

そう、その兵長だ。後ミカサ。

アツカーマンはマジで反則。

もうこの2人とは絶対にジャンケンしねえ。

だってさ、バカみたいな動体視力でこつちの指の動きを確認して手を出してくるんだぜ？ 合法的な後出しジャンケンとか、反則一歩手前だ。

誰もあの2人に「反則ー！ 罰ゲームどーん！」とは言えないので、チートは見逃し

となつたのも——……

「リヴァイ兵長！ エルヴァイン団長からの伝令です！」

腹いせに次は兵長やミカサが負けそうなゲームを提案しようとして画策していると、もの凄いい勢いでニファアが隠れ家へと飛び込んできた。

彼女の雰囲気からただ事ではないと判断した兵長が、すぐさま全員に召集をかける。

「何が起きたんだ……？」

「……さあ？ コニー、私たちも行きましょうか」

食器を片手に首を傾げるコニーの背を押し、俺達も兵長の元へ。

長机を囲んで全員が席に座ると、先程まで緩んでいた空気が一気に張り詰め、隠れ家の中は息苦しさすら感じられる空間へと変わる。兵長はニファアから手渡された紙に目を通すと、顔を上げて即座に指示を出した。

「全員撤収だ、ここは捨てる。全ての痕跡を消せ」

案の定、とでも言えればいいのか。

ニファアが持ってきた伝令は『原作』と同じ内容だったらしく、すぐに撤収作業が始まる。

椅子を倒す勢いで立ち上がった104期に続き、俺とアリーセも与えられていた部屋へと飛び込んで私物の回収を開始。

とは言っても、俺もアリーセもこの隠れ家に持ち込んだ私物は少なくて直ぐに終わった。

痕跡を消せとの命令だが、DNA鑑定や指紋検査もないこの世界だ。何もかもを持ち去らなくとも大丈夫だろう。

衣服類などの生活必需品をカバンに詰め込み、腰に立体機動装置を装備。上からマントを羽織ることで、巨人殺しの兵器が見えないように隠す。

後は巨人が相手なら無用の物と化すが、対人戦となれば効果を発揮する銃を担げば準備は完了だ。

最後に忘れ物がないかももう一度だけ部屋を見渡して廊下へ出ると、同じタイミングで支度を終えたのか、向かいの部屋からアリーセが出てきた。

「アリーセ、『手記』と『薬』は？」

「大丈夫です、ダイナさん。ここに」

有事の場合に備えてアリーセに渡している最重要アイテムの確認を行うと、親友は軽く左胸を叩いて忘れていないアピール。

よし、その2つさえ忘れてないなら大丈夫だ。

2人揃って廊下を駆け抜け、隠れ家の外へと転がり出る。

すぐに後ろからヒストリアとユミルが現れ、少し遅れてアルミンとエレンも外へと出

てきた。

その他の面々は俺とアリーセより早く外で待機していた為、ちょうど今出てきたアルミンとエレンで全員だ。

「この場を離れるぞ。全員、俺に続け。音を立てるな。それと、足跡を残さないよう注意しろ」

「了解」

出された指示に小声を揃えて応じ、本当に人間かと改めて思ってしまうほどの速度で森を駆け抜ける兵長に必死で追い縋る。

けど、なかなか追いつけない。それどころか兵長の背中がどんどん遠くなっていく始末だ。

いやいやいや、何で足場の悪い森の中をそんな速度で走れんだよ。俺、さつきから木の根や落ち葉に足を取られて転びかけ――

「うわっ!?!」

見事につま先が木の根に引っかかった。

一気にバランスが崩れて、俺は顔面を地面に打ち付ける……直前に、後ろから誰かにマントを掴まれる。強引に体勢が戻され、何とか無様を晒さずに済んだ。

走り続けながら後ろを振り返れば、俺とは違って全く息を切らせていないサシャと目

が合う。

流石は狩猟民族の家系、森の中を走るのはお手の物ってことか。

「ありがとうございます、サシャ」

「もつと視野を広げて下さい。前だけ見てるんじゃないやなくて、周囲の全てを見る感じで。森を舐めて平原を走る感覚でいると死にますよあなた！」

「まさかその台詞を私が言われる事になるとは思いませんでした！」

サシャの忠告に軽口で返し、言われた通り前だけでなく足元や木々の配置にまた意識を向けていく。

……成る程な。

要するに、立体機動と同じだ。

高速で移動しながら周囲の立体物の高さや位置を把握し、瞬時にアンカーを打ち込むのに最も最適な箇所を割り出すのと同じように。

周囲の木々の位置。踏み場にしやすい場所。反対に踏むと危ない場所。それらを周りに見分け、走り易いルートを見つけ出せばいい。

それも足だけでなく、全身を使って移動しろ。

木の根と根の間を踏みつけ、足場が特に悪い時には幹を足場にし、枝にぶら下がり、速度を落とさないように森の中を駆け抜ける。

おお、さつきまでと比べて格段に楽になった。

これなら兵長に引き離されずに済むな。

調子に乗ってどンドン速度を上げていると、並走していたサシャが僅かに驚きの感情を滲ませた瞳を向けてくる。

「……何か？」

「あなた、私と一緒に狩りに行きませんか!? 絶対に才能がありますよ!」

「この厄介事が終わった後、私がまだ調査兵団と敵対していなければ是非とも」

そんな感じでハイペースを維持しながらサシャと談笑していると、森が開けて高台のような場所へと出た。

下を見下ろすと、ちょうど中央憲兵が隠れ家に入っていく景色が見える。

「危ねえ……もう少し遅かったら、俺たちどうなってたんだ……う!」

隣で同じように隠れ家を見下ろしたコニーが、引きつった顔で呟く。

いや、マジで間一髪だったな。

リヴァイ兵長が一瞬であの隠れ家を引き払う決断をしていなかったら、俺たち確実に中央憲兵に捕らえられていた。

コニーの言葉を聞いた104期が一樣に頷く中、アルミンが兵長へ問いを投げかける。

「どうして、エルヴィン団長はこの事を？」

「中央から命令が出たらしい。調査兵団の壁外調査を全面凍結、エレンとヒストリアを引き渡せってな」

帰ってきた答えに、この場の全員が息を呑む。

まあ、王様がマジで敵に回ったってことを意味するからな。壁内世界の最高権力に目をつけられたとなれば、及び腰になるのも当然だろう。

しかし、嫌な知らせはこれで終わりじゃねえことを『原作知識』を持つ俺は知っている。

予想通り、追い討ちをかけるようにして伝令兵のニファが口を開く。

「それと、私が手紙を受け取った直後、団長のところにも憲兵団が……」

「まるで犯罪者扱いじゃないか！」

自分たちの統率者が実質的に身柄を確保されたという報告に、ハンジさんが真っ先に反応した。

まあ、確かに『鎧』を降した英雄に対する扱いじゃない。『原作』と比べて調査兵団は市民の支持をかなり集めているので、もしかしたら強引な手段は取らないかもと考えていたが……レイス家もそんな余裕じゃないって事だろう。

「もう裏でどうこうってレベルじゃねえな。なりふり構わずってことだ」

「それだけ中央にとって、エレンとヒストリアは重要ってことだろうね。特に、エレンはダイナが警戒する程の何かがあるみたいだし」

険しい表情で発された兵長の言葉に頷きながら、そう言っただけで意味深な視線を送ってくるハンジさん。

うへえ……やっぱり、エレンを避けてるのがバレてやがる。

まあ、それなりの時間を同じ屋根の下で暮らしてたからな。ハンジさんが気づかない方がおかしいか。

この分だと、アルミンや兵長も察してたな。

『始祖』の存在が明らかになるのも、いよいよ時間の問題になってきた。エレンの持つ『座標』の力を知れば、調査兵団はすぐに俺がエレンと接触しない理由に辿り着くだろう。

そして、俺が始祖の巨人を狙っていることにも。

あやふやになって今このうちにエレンを襲うことも考えたが、流石に兵長のお膝元でそんな真似は出来ねえし。

こつちはこつちで、早く対策を立てないと。

「とにかく、これで敵の狙いははつきりした。このままこの辺りをウロついているのはマズイ。エレンたちをトロスト区へ移動させる」

「それが良いだろう。敵の本拠地である中央に行くより、彼らの手が比較的届きにくく、まだ先の襲撃による被害の復興が終わっていないトロスト区なら、簡単に紛れこめるだろうし」

「ああ。それに、いざって時にはコイツも使えるしな」

そう言つて、マントの下の立体機動装置を見せる兵長。

完璧なフラグですよ、と。

『原作』で嫌という程に見たもう一人の最強……否、最凶ケニー・アッカーマン。

間違いない訪れるであろう彼の襲来に戦慄しているうちに、兵長は今後の方針を決めていく。

「一方的に狙われるのは不利だ。こっちも、敵の顔くらいは確認する。ハンジ、お前の班から何人か借りるぞ」

「もちろん。……よし、私はエルヴィンの方につく。モブリットは私と。他の者はリヴァイに従つてくれ」

刹那の思考を挟んだ後、そのように指示を出したハンジさんはすぐにモブリットさんと共に馬に乗って中央へと向かつて行った。

本来ならここでエレンがベルトルトとユミルの会話内容を思い出して書いた紙をハンジさんに渡すのだが、そもそもエレン誘拐イベントが発生してないので、そのイベン

トも強制スキップである。

同時にハンネスさん死亡イベントも消えてるので、これは良い方向に転がったと言えるだろう。

ハンネスさんがカルラ・イーターに食われたシーンは本当に悲しかったし。

いくつかの違いはあるが、ここまでは概ね『原作』通りだな。

「兵長。敵の顔を確認すると言つても、具体的にどうするんですか？」

ハンジさんとモブリットさんの後ろ姿が見えなくなったタイミングで、今度はエレンが問いを発した。

「囷を使う。エレンとヒストリアに扮した影武者を敢えて敵に掴ませ、敵の情報を割り出す。囷役は……ジャン、お前がエレン役だ。それとヒストリア役はアルミン——」

リヴァイ兵長から、通称アルミン大火傷作戦が発令された。

初めての殺人を体験されられた挙句、男に全身を弄られるという地獄を味わうことになる彼に敬礼。

と、心の中でアルミンの未来を憂っていたら、兵長の視線がアルミンから俺へと移った。

兵長と目が合った瞬間に、俺の中で強烈に警鐘が鳴り響く。

そして、嫌な予感は見事の中のことになった。

「いや、ヒストリア役はお前がやれ」

「本当に言ってるんですか!?! 普通、一度襲われて刺された人を囮役にしませんよ!?!」
「お前なら万が一の時でも、自力で対処できるだろう。自衛の為なら巨人化も許可する。
……尤も、街に多大な被害を及ぼす巨人化はあくまで最終手段としろ。それに、お前以上の適任はこの場にいないしな」

兵長に命令されて、自分の私服を差し出してくるヒストリア。俺はそれを無言で受け取り、深いため息をつく。

ジャンの方もエレンに変装するのは気が乗らないのか凄く嫌そうな顔をしているが、側から見れば俺も同じような顔をしているのだろう。

確かに俺とヒストリアは遠縁の親戚だが、三十路の元人妻が10代の少女の代役になんのか……?!

いや、俺とアリーの努力で、ダイナの体は今でも十分に若々しいけどさ。

まさか「嫌だからアルミン代わりにやって」とは言えないので、俺は抵抗を諦める。
こうして、『原作』とは異なる形で囮作戦が始まった。

第43話 殺人鬼との邂逅

ウォール・ローゼ、トロスト区。

人類領域の現最南端の街であり、僅か数ヶ月前に『超大型』と『鎧』の侵略によって、壊滅的被害を受けた地域だ。

未だ復興は進んでおらず、並び立つ建物には巨人による破壊の跡が今もはっきりと残っている。

往来を行き交う人々は十分な食事を取れていないのか痩せこけており、着用している衣服もお世辞にも綺麗とは言えない。齒に衣着せずに言うところ、ボロ切れを身に巻きつけているような有様。

否応無く巨人の恐怖を想起させる街並みの端、その倉庫街に俺とエレン……即ちジャンは捕らえられていた。

ここまでの展開は『原作』通り。王政設立記念日で年に一回の特別配給が実施され、沸き立つ民衆を横目にトロスト区の大通りを歩いていると、馬車が突っ込んできて俺とジャンはすれ違い様に荷台に引きずり込まれたという訳だ。

俺たちは向かい合うようにして椅子に座らされ、両手を後ろにした状態で縄でガッチ

りと拘束されている。

まあ猿轡はかまされてないので、いつでも自傷をトリガーに巨人化することは可能だが。

敵のボスが出てくる前にそれやっちゃまうとせつかくの囷作戦が根っからパーになるので、俺は耐え忍ぶしかない。

この、拷問よりも遥かに辛い地獄を。

「はあ、はあ……なあ、どうだ？ 声を聞かせてくれよ……？」

……今なら、俺は殺人すら出来るかもしれん。

心の奥底から湧き上がる嫌悪感と不快感に奥歯を噛み締めて耐え、燃え上がる赫怒と殺意を理性で押さえつけながら、ひたすら精神統一する俺はそう思う。

今すぐにも舌を噛み切って巨人化し、このクソ野郎を喰い殺せと心が叫んでいる。

荒い息遣いが聞こえる度に、ギラついた視線が俺の肢体を舐め回す度に、脂ぎった手に体を弄られる度に、怖気が走る。女の体が拒絶反応を起こしている。

要するに、薄暗い倉庫の中で誘拐犯に椅子に拘束されて顔も名前も知らねえ男に性的暴行を受ける5秒前。

ヘルプミー!!

もう誰でも構わん、とにかく早く来てくれ!

これ以上は無理だ。ギブアップ。男に性的な目で見られた挙句に欲情されるとかキヤパオーバーにも程がある。

対面に座るジャンにアイコンタクトで救援要請を送るが、貧乏くじ仲間は苦しそうに顔を背けて——おい、ガン見してんじやねえぞ teme。なんでお前までちよつと興奮してんだ。

全部終わって一段落したら、絶対にこの馬面も殴ってやる。それとミカサにも無理やりするのが好きな変態だつて言つてやろう。エレン（本物）が存在する以上はどうせ実らない恋だ、盛大に爆発しちまえ。

心の中でジャンに八つ当たりしているうちに、男の手が俺の首に触れた。地獄はそれだけで終わらず、興奮で僅かに震える指先は少しずつ服の中へと向かつて動いていく。

ふざけつ、これ以上はマジでシャレになら——

「お、い、ぶるげあああつっ?!?!」

至近距離で凄まじい打撃音が鳴り響き、続いて男が絶叫と血反吐を喉から吐き出して吹き飛んだ。何度も地面にバウンドして横たわった男の顔はひしゃげており、顔面を強打されたことが容易に察せられる。

完全なるノックダウン。

気を失ったのか、倒れ伏す悪漢はピクリともしない。しないのだが、男はそれだけの

暴力を受けてもまだ許されていなかった。鼻がへし折れ、歯も何本か失った男の下腹部に、より正確に言うなら股間に、痛烈な蹴りが叩き込まれた。

「があああああああつっつ?!?!」

急所に強撃を浴びた男は激痛で停止していた意識を強引に再起動させられ、患部を押さえながら2度目の絶叫。痙攣しながらのたうつその姿は本来なら同情を禁じ得ないが、先に手を出されている為に「ザマア見ろ」という感情しか抱けない。

おう、ザマア見ろ。そのまま機能不全に陥って……オイちよつと待て!

「アリーセ、ストップ! 止まってください! それ以上やったら2つの意味でその変態が死にます!」

主に命と男としての部分。後者は死んでも良いと思うが、前者はまだダメだ。情報吐かせた後なら殺つても構わんが。

救援にきた友人が無言で再び足を持ち上げ、股間に狙いを定めるのを見て流石に制止を呼びかける。

俺の声を聞いたアリーセはようやく暴走から立ち直り、はつとした表情で振り返った。そして慌てて駆け寄ってくる。

「ダイナさん、大丈夫ですか!?!」

「何の問題もありません……とは言い難いですが、取り敢えず身体に害は受けていませ

ん。メンタルには甚大な被害を受けましたが」

「すみません、偵察と様子見で思ったより時間がかかってしまい……。あの変態はちゃんと去勢しますので、本当にもう大丈夫ですよ」

「何はともあれ、まずは囮作戦を続けましょう。アリーセが来たという事は、敵は釣れたんですよね？」

「はい。先ほど、コニーがこの倉庫へと近づくと一団を目視しました。もう間もなく入ってくると思います」

「じゃあ悠長にお話ししている暇ありませんよね!? 早く準備をー」

ここまでやったのに作戦失敗とかマジで笑えねえ。

アリーセは慌てて高窓から倉庫内を覗き込んでいたミカサたちに合図を送り、超硬質ブレードで俺とジャンを縛る縄に切れ目を入れる。

こうしておけば、少し力を込めるだけで縄はあっさりと解けるだろう。

ミカサがまだピクピクしている変態を縛り上げ、遠くへと蹴り飛ばすと、全ての準備は終わりだ。

工作を終えたアリーセはミカサと共に積み上げられた木箱の影に身を隠し、サシャは弓を引いて臨戦態勢に。

作戦通り奇襲の布陣が完成すると同タイミングで、倉庫の扉が乱暴に開け放たれ

る。

現れたのは、4人組の男たちだ。

後ろの2人は『原作知識』がイマイチ反応しないので、主要キャラではない。反対に、前を歩く2人の顔は見覚えがあった。

リーブス商会の会長デイモ・リーブスと、その息子のフレージェル・リーブス。

前者はトロスト区襲撃の際に大荷物を開閉門に詰まらせて、住民の避難遅れの原因を作った人物だ。尤も悪人ではなく、その後はトロスト区復興に尽力しているが。

「おい、本当にエレンとクリスタで間違い無いんだらうな？」

「特徴は一致しています」

リーブス会長は俺とジャンを一瞥すると、後ろに付き従う部下に問いを投げかける。それに部下が答えた瞬間に、隠れていたアリーセとミカサが同時に飛び出した。

地を蹴って華奢な身を中空に踊らせたミカサの膝が、2人いる部下の片割れの顔を打つ。飛び膝蹴りという大技をモロに受けた哀れな男は風に吹かれた紙切れの如く吹き飛び、頭から木箱に激突して気を失う。

もう1人の部下はアリーセの回し蹴りを腹に受け、血反吐を吐きながら崩れ落ちた。そして蹲って悶絶する男の背中に、親友は容赦なく踵を振り下ろす。

踵落としを受け男は激痛で意識を失ったらしく、こちらにも全く動く気配がない。

「——っ!? 何だコイツら……!?!」

瞬きの間に護衛の役も兼ねた部下2人が打ち倒され、動揺と焦燥を滲ませた声と共にフレーゲルは懐からピストルを取り出すが、引き金を引くより早くミカサの爪先が彼の頬を穿った。

うわ、よく首が吹っ飛ばなかったな。

人間が空中で5回も横回転するというサーカスでも見られないような光景の後、口から泡を吹いてフレーゲルが床に沈む。

頃合いだ。

「行きますよ、ジャンー!」

「了解!」

両手に力を込め、俺を縛り上げていた縄を引き千切る。

椅子を倒しながら全力で駆け出し、そのまま姿勢を低くしてリーブス会長の懐へと踏み込む。

「な……っ!?!」

「口は閉じておく事をお勧めします。舌を噛んでも、知りませんよ?」

俺の掌底が真下から跳ね上がり、リーブス会長の下顎を撃ち抜いた。開きかけていた会長の口が強引に閉じられ、そのまま後ろに倒れ込んだ。

やべ、ちょっとやり過ぎたか？

流石に生きているとは思うが、これだけボコボコにしたら後で兵長が協力を要請する時にマイナスの影響が出るんじゃないや……。

いや、これはセクハラされた分つてことにしよう。何やかんや未遂だったし、これで許してやるよ。

心の内で言い訳しつつ、俺は自分を縛っていた縄で会長の両手を拘束する。隣ではジャンがフレーゲルを縛り上げており、残る部下2人もサシャとユミルによって拘束済み。

見張り役のアルミンとコニーが今ので全ての敵の制圧が完了したと合図を送ってきた。

これで前哨戦は終わりだな。

次はケニー・アッカーマンとその部下にニファを始めとした仲間たちが顔を吹っ飛ばされるよりも早く、兵長たちと合流する必要がある。

「アリーセ、私の立体機動装置を！」

「既に準備しています！」

流石は俺の最大の理解者。

俺が求めるものを先回りして用意しておくことくらい、アリーセにとっては造作もな

いのだろう。

即座に手渡された立体機動装置を受け取り、ヒストリアから借りていたスカート脱ぎ捨てる。刹那に、ミカサ、サシャ、アリーの女性陣が男性陣の視線を強引に俺から逸らしてくれた。

その間に兵服を着込み、ベルトを巻いて、立体機動装置を装備する。5年もの間、毎日のように繰り返したその動作。完了するまでに、もはや1分の時すら必要ない。

装置に不備がないか点検した後、俺は倉庫の天井付近にある高窓に向かってワイヤーを射出。窓枠にアンカーが打ち込まれたのを確認し、トリガーを引いてガスを吹かしつつワイヤーを巻き取る。

今この瞬間——立体機動中のみ、体は重力という星の力から解き放たれた。

高窓を突き破り、全速力を以って兵長の元へと向かう。

既に、兵長を含む本作戦の参加者には中央憲兵団による奇襲を受ける危険性を示唆している。

流石に『原作知識』による未来予測とは言えないので、調査兵団内に潜むスパイによって情報が敵に漏洩する可能性がある、といった感じで。

兵長曰く、目標を集団で尾行する時は両斜め後方と見晴らしの良い高台がベストらしい。今も、兵長はハンジさんから借りた兵士をそのように展開しているはずだ。

——ケニー・アッカーマンの、予想通りに。

何せそういつた知識を兵長に与えたのはケニー・アッカーマンなのだから、こちらの動きは読まれていて当然。故に、俺はその状況すらも逆手に取る事を考えた。

要するに、相手に裏を取られてる事に気付かないフリをして敢えて敵を引きずり出す作戦。

ケニーと正面からカチ合うのは好ましくないが、奴は兵長が抑えられる。放置すると危険極まりないし、仕留められる時に首を狙いに行くのがベストだろう。

なので『原作』と違い、エレンとヒストリア追跡部隊は中央憲兵の襲撃にかなり注意している筈だが、それでも反応が遅れてしまう可能性はゼロではない。

104期の指揮はアルミンに丸投げし、俺とアリーセは追跡部隊をカバーする為に2人だけで先行。

俺がいなくても、104期にはミカサと『顎』のユミルがいるからな。襲われても問題ないだろう。

むしろ襲撃した側が悲惨な末路を辿るんじゃないやねえの？

などと思考を巡らせながら立体機動で街を突き進んでいると、視界にリヴァイ兵長とニファアの姿が映った。

——そして、その2人に音もなく忍び寄る殺人鬼の姿も。

「アリーセ、赤!!」

反射的に叫ぶと同時に、俺は宙空で思い切り体を捻る。腕だけでなく全身に力を巡らせ、右手に持つ刃をケニーに向けて全力で投擲。

俺の手から放たれた刃は銀の輪を描き、今まさに凶弾を放ってニファの頭部を吹き飛ばそうとする銃にぶち当たった。

甲高い金属音が鳴り響き、接触した鋼の刃と銃身が火花を散らす。結果、衝撃で銃口が僅かに逸れて、ケニーの左手から放たれた散弾はニファの足元を吹き飛ばすだけで終わる。

リヴァイ兵長の方は言わずもがな。

撃たれる直前にケニーの気配に気づき、咄嗟に身を屈めて放たれた鉛玉を見事に回避していた。

「ケニー——イイツツツ!!」

怒号が響く。

襲撃者の姿を確認した兵長は、追撃する為にリロードを行っていたケニーに向けて突貫。

下から上へ。人体を両断するような軌道で、兵長の握る超硬質ブレードが振るわれた。

常人ならば視認する事すら出来ずに真つ二つにされていたであろうその斬撃は、しかしケニーには届かない。兵長の攻撃に反応した殺人鬼は、後ろへと飛び退きながら迫り来る刃の軌道上に銃身を挟む事で防御を行う。

そうして、今の一連の攻防から2人のアッカーマンによる凄絶な殺し合いが始まった。

目にも留まらぬ速度で立体機動を行い、斬撃と銃撃を向け合う武家の末裔たち。その様相は、もはや貧弱な俺のボキャブラリーでは表現する事すら難しい。

「まあ、全体的にこちらが有利という事さえ分かれば良いでしょう」

ひとまずアッカーマン達の規格外な戦場から視線を外し、俺は視線を別の場所へ。

新たに視線を向けた先には、無数の小規模な戦場が生まれていた。

俺の合図でアリーセが打ち上げた赤色の「信煙弾」で奇襲を察した調査兵達が不意打ちを防ぎ、襲撃者である対人立体機動部隊と各々迎え撃っているのだ。

通常、赤色の信煙弾は「通常種の巨人発見」を意味するのだが、今回に限っては「中央憲兵の襲撃を確認」という意味に変わってるんだよ。

「ダイナさん、私たちはどうしますか？」

「……ん。そうですね——」

アリーセに問われた俺はワイヤーを巻き取り、近くの建物の屋根に着地して刹那の思

考。

兵長の援護——むしろ足手纏いになるな。

あの意味わからん高速戦闘に割り込む自信はねえわ。

となると、残るは雑兵を蹴散らすことくらいか。今ここにいる追跡部隊は十分以上の精鋭たちで、初手の奇襲さえ防げたのならカバーの必要があるのかも怪しいけど。

「露払いに徹しましょう。何人たりとも、兵長の戦いに割り込まないように」

「了解です」

「私は一足先に追跡部隊と合流して戦闘に加わりますので、アリーセは遅れてくる104期と合流して——」

「よお、姉ちゃん。コイツがアリーセであつてるか?」

言い終えるより早く、真後ろから声がした。

「……つつ!?!」

背筋が栗立つ。頭の中で警鐘が鳴り響く。

考えるより早く振り返り、気配すら感じさせずに背後に現れた相手に斬撃を叩き込んだ。
だ。

が、手応えがない。虚空を斬った虚しい感覚だけが剣を握る両手に残るのみ。

咄嗟に消えた敵の姿を探して次撃を繰り出そうとするが、再び声が俺の動作を止め

る。しかし、今回は心の臓まで冷えるような殺人鬼の声ではなく――

「あ、ぐ……ッ!？」

苦しみに喘ぐ、友人の声。

「アリーセ!!」

再度振り返った先に、悪魔のような光景がある。

リヴァイ兵長と戦っていた筈の『憲兵殺し』ケニー・アツカーマンが、完全に脱力してぐったりとしたアリーセを抱えていた。

もしもアリーセの弱々しい息遣いが聞こえていなければ、俺は友人を亡くしたと判断し、巨人の力で敵味方問わず全てをぶち殺していたかもしれない。

「ケニー……ッ。どうやって兵長から……いや、アリーセに何の用だ?」

俺の問いかけに、殺人鬼からの返答はなかった。

代わりにケニーは近くの部下をジェスチャーで呼び寄せると、気絶したアリーセをソイツに渡す。

「待っ……」

「つと、悪いいな。俺たちもアリーセに用があんだよ」

俺はすぐにケニーからアリーセを預りこの場から離脱していく憲兵を追いかけようとするが、その行く手を『憲兵殺し』が阻む。

ふざけんな。何がどうなってる？ 兵長は？ それよりなぜアリーセが拐われる？ 俺に対する人質か？ スパイが情報を流した？ 俺に対するカードとして？ 俺を殺すのに失敗したから？

疑問が溢れて止まらない。

この意味の分からない状況に加えて、親友を奪われたという焦りが余計に思考を乱す。

クソが、どうすりやいい？

今の俺じゃあケニーを倒すのは無理だ。だが、エレンやヒストリアと違ってアリーセはどう扱われるのか分からない。下手したら即殺や拷問に……拷問？

俺の殺害未遂、スパイの存在、情報、アリーセ……………！

「まさか、まさかまさかまさか!? 巨人化能力者に傷は与えられないから!」

スパイは調査兵団の内情に精通している。

俺の正体も理解している。

俺はウォール教や中央が必死で隠そうとしている情報を調査兵団に漏らした。

スパイはそれも知っている。

そうだ、それだ、間違いない。

「ダイナに続いて「壁の秘密」の情報を持つアリーセを拷問するつもりか!? ダイナが何

をどこまで知っているのか、本人に聞けないから!!」

俺の叫び声を聞いたケニー・アツカーマンは僅かに驚愕の表情を浮かべ、そして不敵に笑った。

「ご明察。やるじゃねえか。もしかしてどチビのネズミが裏の裏まで読んでたのは……」

「退け」

3度目は立場が入れ替わり、俺が相手の言葉を遮る形となる。

殺人鬼を挑発する危険すら度外視し、気づけば俺は感情のままに刃の先をケニーに向けていた。

「道を譲れ、殺人鬼」

——言い放って、何もかもをかなぐり捨てて、俺はもう1人の人類最強へと挑む。

あまりにも無謀なソレに、殺人鬼は嗤って引き金を引いた。

第44話 覚醒

——混乱して、怖くて、痛くて、苦しくて、辛くて、そして何より孤独で寂しかったのだ。



——『進撃の巨人』

強大な力を持つ人類の天敵を相手に非力な人間が立ち向かうという王道的なストーリーでありながら、数多くの謎と伏線を用意することで先の展開を予想させず想定外の展開の連鎖で読者を翻弄する、ダークファンタジー界における屈指の名作。

立体機動装置という特徴的な武器に、巨人という敵としては理想的で神秘的な存在。主要キャラですらあっさり死ぬ残酷さ。

俺もまた、そんな要素に魅了された読者の1人であった。

アニメは何度も何度も見返したし、単行本も伏線を見破ってやろうとボロボロになるほど読み込んだ。

敵も味方も強い意思を持っていて、嫌いなキャラなど数えるほどしかいなかったと思う。

旧リヴァイ班が殺された時は本気で女型の巨人に殺意が湧いたが、アニの心の内を知れば憎めなくなった。

『進撃の巨人』が好きだった。

他にも好きなアニメ漫画はあったが、最も見たのはこの作品だと断言できる。

心の底から好きだったと。

転生した。

もしくは憑依した。

『俺』の本当の体がどうなったのかは知らないが、とにかく『俺』は進撃世界に入ってしまったのだ。

それも、あろう事か人類の敵である巨人として。

持ち前の楽観的な性格と勢いで動く性格、そして原作知識を総動員して生存だけに全てを注いだ。

思えば、アニを喰い殺したのも巨人体の暴走などではなく俺の意思だったのかもな。

あの局面で、俺の理性と本能は彼女を殺して巨人の力を奪うことが最善手だと判断した。その際に俺の意思は置いてきぼりにされたから、結果的に体が勝手に動いたように思えたのだろうか。

ともあれ、事實は1つ。

『俺』はダイナ・フリッツとなったということ。

トロスト区に逃げ込んで、ひとまず命の危機から脱した後は、凄まじい寂寥感に襲われた。

開拓民として暮らしていた1年は、孤独に潰されるかと思ったほどだ。性別が変わり、分からない事だらけで何度もパニックになった。

何せ「九つの巨人」の継承者であり、戦士から力を奪った篡奪者でもある。壁の内と外の、両方から敵として認定されてしまう。それに加えてダイナ・フリッツという超重要人物的な立ち位置。

もう物語に巻き込まれない方がおかしかった。

周りの人間は全て敵。

味方はゼロ。

いつ巨人だとバレて中世の魔女裁判のように吊るし上げられて殺されるのかと、戦々恐々と生きていた。

好きだったキャラ達も今や自分の命を狙う殺人鬼へと変わり。

圧倒された人が次々と死ぬ展開も恐怖以外の何物でもなく。

魅了された謎と伏線も実際にこの世界にいると煩わしいと思ってしまう。

そうだ。

——混乱して、怖くて、痛くて、苦しくて、辛くて、そして何より孤独で寂しかったのだ。

いつそ自殺してしまえば、元の世界に戻れるのではと考えていた事もある。

というか、普通に自殺していただろう。

アリーセ・エレオノーラという少女が、俺の前に現れていなければ。

救われた。

助けられた。

手を掴んでくれた。

笑顔を向けてくれた。

そして俺が巨人だと知っても、変わらない友情を築いてくれた。

俺がどれほど彼女に救われたのか、それはきつと俺にしか分からないだろう。

断言する。

転生者、憑依者という如何にも主人公的な立場にある『俺』だが、『俺』は決して主人

公にはなれない。英雄には届かない。エレンにも、リヴァイ兵長にも届かない。

少し成功すると調子に乗って油断し、思慮は浅く何度も間違つて失敗する。未だに「死」に直面すると体が竦むし、無垢の巨人が相手でも恐怖を感じる。

俺は隣にアリーセがいなければ、何も出来ないモブなのだ。

体は借り物。

力は盗品。

世界のどこにも居場所がなく。

この身は全て贋作で、ただ一つ本物があるとすれば『心』だけ。

その『心』の支えである親友を、相棒を、片割れを、アリーセを俺から奪うというのなら。

目を開く。

行方を阻むように、両手に銃を携えた大量殺人鬼が立っている。不敵に嗤うその男は、あのリヴァイ兵長と渡り合う真性の怪物だ。

まともに戦つたなら、数秒で俺の首は飛ぶだろう。

だが、退かない。

「道を譲れ、殺人鬼」

相対するだけで本能が危機を叫ぶアッカーマンを相手に、俺は宣戦布告する。

ケニー・アツカーマン。

お前に初めての敗北を与えたウーリ・レイスの血縁のこの体で、俺が2度目の敗北をくれてやる。



「野郎……」

ケニーとの凄絶な立体機動戦の果てに酒場へと飛び込み、カウンターに身を潜めていたりヴァイは悪態をつきながら立ち上がる。

酒場にあつた銃を片手に殺人鬼を待ち構えていた彼だが、数分経つても酒場内に仇敵が現れないのだ。

ならば、考えられる可能性は1つ。

ケニーはリヴァイよりも優先して殺害（もしくは捕獲）する相手を発見し、そちらの

方へと狙いを変えたのだろう。

銃撃を警戒して頭を下げながら窓の外を覗けば、酒場の周辺には敵兵の影が全くない事が分かる。

「チツ、邪魔したな爺さん」

立体機動装置を用いてダイナミック入店した人類最強に怯えて縮こまっている店主に銃を投げ返し、リヴァイは店の外へ。

念のために椅子を先に放り出してみるのが、やはり銃撃はされない。

トリガーを引いて付近の立体物にアンカーを打ち込み、まずは現状を把握すべくガスを吹かして高度を上げてトロスト区を上から見下ろす。

戦場の中心はすぐに分かった。

民家の屋根上で向かい合う殺人鬼と黄金の美女。

その2人を囲うようにして、中央憲兵と調査兵達が睨み合うといった構図になっている。

そして、ケニーに庇われながら誰かを抱えて戦場の離脱を試みる憲兵が1人。その憲兵の腕の中にいるのがアリーセ・エレオノーラだと気づいた瞬間、リヴァイは何が起きたのかを完全に理解する。

即ち、あの殺人鬼は『女型』の逆鱗に触れてしまったのだと。

ダイナが爆発するのは時間の問題だ。

激昂したダイナが『女型』と化して全力でケニーへ攻撃すれば、トロスト区など僅か数分で壊滅してしまう。

この街の住民がどうなるか、そんなものは考える必要すらない。

(どうする……?)

ケニーとダイナの間に割り込んで、ダイナが動くより早くケニーを仕留めるか。もしくはアリーセの救助を優先して、五体満足の彼女をダイナに見せて落ち着かせるか。

どちらが正解だ？

どちらが仲間と市民の命を守る？

前者を選ぶと、自分とほぼ互角の力を持つケニーを短時間で仕留めなければいけないという無理難題が。後者を選ぶと、短時間ながら『女型』が出現してしまう。

前者を選んで失敗すれば、自分は殺されて結局『女型』が出てくる。後者を選んで失敗すれば、トロスト区とその住民は潰える。

前者を選んで成功しても、アリーセは連れ去られる可能性が高い。後者を選んで成功しても、トロスト区に少なくない被害が出るだろう。

刹那、かつての仲間の顔がリヴァイの目に浮んだ。

信頼の眼差しと屈託のない笑みを自分に向ける、イサベル・マグノリアとファールン・

チャーチが、かつて自分が発した事のある言葉を紡ぐ。

『悔いなき選択を——』

「——！ ニファ、部隊の半数を率いて付近の住民を避難させろ！ もう半数はエレンとヒストリアの護衛につけ！ 俺はアリーセを追う！」

「兵長!!? り、了解です！」

上にリヴァイがいた事に気付かなかつたのだろう。突如として頭上から命令されたニファは困惑の表情を浮かべるが、すぐに命令受諾の意を示すと、周囲の兵士を率いて行動を開始する。

散開する調査兵達。それに合わせて対人立体機動部隊も行動を再開し、停滞していた戦線が動き出す。

調査兵と憲兵の双方が身に付けている立体機動装置が特有の金属音をかき鳴らし、そこに銃撃音が入り混じった。

敵味方が入り乱れる乱戦の渦中、戦場の中央に立つダイナが静かに刃を己の肌へと突き立てる。

美しい純白の肌が裂け、そこから鮮やかな紅色の花が咲く。そしてダイナの周囲を舞う鮮血に引き寄せられるように、天空から一条の雷がダイナへと降り注いだ。

戦場を眩く照らすソレは、既にリヴァイも幾度と目にした巨人化の光。巨人の肉体が

ダイナの意思に従って目に見えぬ『道』を通り、烈風を巻き起こして顕現する——
「……………」

——刹那、リヴァイはまるで全身に電撃が走ったかのような感覚に襲われて動きを止めた。

まるで自分の体が目に見えぬ何かによって、得体の知れないモノと繋がってしまったかのような強烈な違和感。遅れて、その接続先が渦巻く光と烈風の中心、すなわちダイナであるということをも本能的に理解する。

加えて、その瞬間に違和感を感じたのはリヴァイ一人だけではない。

ダイナの正面に立つケニーと、戦場から少し離れた位置でエレンとヒストリアの護衛任務に当たっていたミカサが、それぞれ雷光を纏うダイナに意識を引かれて動きを止めていた。

奇しくもリヴァイ、ケニー、ミカサ、3人が全く同時に全く同じ思考をする。

そう、今の感覚はまさに、初めてアツカーマンの『本能』と『力』が覚醒した瞬間に、酷似していたと。

3人のアツカーマンが冷や汗を流して見守る中、遂にトロスト区を照らしていた光が消えた。

充満する蒸気の中に、巨大な人影——すなわち女型の巨人の姿はない。蒸気が晴れた

先にいたのは、人の姿を保ったままのダイナ・フリッツだ。

(不発……? いや、違う)

反射的に脳内に浮かんだその答えを、リヴァイは即座に否定する。

ダイナ・フリッツはリヴァイの知る限り最も巨人の力に精通した人物だ。そんな彼女が、この局面で巨人化失敗などという安易なミスをするわけが無い。

であるならば、導き出される結論は1つ。

巨人化とは異なる、ダイナの新たな切り札——！

「……ッ!?」

反応できたのは、リヴァイとケニーの2人だけだった。

その他の兵士は何が起きたのか分からず、戦闘すらも中断してダイナを凝視する。

正しくは、突如として姿を消したダイナが一瞬前まで立っていた場所を。

「テメエの一族の血と力に裏切られて、死ね」

端的な殺害宣言と共に、何の脈絡もなくケニーの背後へと姿を現したダイナがその手に握る剣を一閃する。

放たれた刃の狙いはケニーの首だ。

確実に命を刈り取らんとする死の剣線に、しかし殺人鬼は超人的な反射神経を以って反応。即座に首と剣の合間に散弾銃を差し込み、間一髪でダイナの凶撃を防ぎ切った。

「冗談じゃねえ……ッ」

「悠長に感想を言う時間がお前にあるとでも？」

目前まで迫った死にケニーが驚愕の言葉を紡げば、たったの一言も喋らせないとばかりにダイナが追撃を放つ。

剣と銃の鏢迫り合いが途切れ、黄金の美女が密着した状態からハイキックを繰り出した。ケニーはこれを腰を落とすことで回避し、体を反転させると銃口をダイナの胸元へと突きつける。だが、引き金を引くよりダイナの方が速い。左の剣が真下から銃を穿ち、銃口は上を向いて、放たれた鉛玉は空を撃ち抜いて終わる。

「チイ……ッ！」

銃を弾かれた衝撃で仰け反ってしまったケニーはそのまま勢いに任せて後ろへと倒れこみ、上下反転した世界でアンカーを射出。一気にガスを吹かしながらワイヤーを巻き取り、ダイナから距離を取ろうと試みる。

しかし、ダイナも銃を持った相手に、距離というアドバンテージを易々と渡さない。立体機動装置を全力稼働させ、ケニーへと追いつがる。

両者の速度は既に調査兵すらも視認できない領域へと達し、宙に残るガスの白い線だけが、ダイナとケニーの動きを表していた。

「年寄り相手に容赦ねえな！」

距離を詰めてくるダイナに向けて、ケニーが悪態と共に再射撃。鉄の弾が撒き散らされ、音にも迫る速度でダイナを肉片に変えようと襲い掛かる。

「ふ……っ！」

対して、ダイナはワイヤーを回収して体を横に。その状態でガスを吹かすことで急速に軌道を変え、銃撃を回避した。

それだけでダイナの動きは終わらない。左右のワイヤーを交互に射出と巻き取りを行い、そこにガスによる加速を合わせることでジグザグ軌道を描く。

自らの体にかかる負荷を一切顧みない立体機動に、アッカーマン3人が息を呑んだ。リヴァイやケニーといった人外の領域の速度を保ちながら強引に左右に動くなど、いつ制御を失って墜落してもおかしくない。それ以前に、常人ならば体の両側から凄まじいGがかかって意識を失うだろう。

だが、ダイナ・フリッツは止まらない。

口から血を吐き、目から血涙を流し、限界を超える負荷で筋断裂が起こり、全身の骨格が軋み、体が内側から崩壊し始めても、強引に殺人鬼へと突っ込んでいく。

瞬間、目を見開いたのはリヴァイだった。

驚愕の原因は、雄叫びを上げながらさらに速度を上げたダイナの姿にある。

くるりと、右手に握る刃を手の中で回転させ、逆手で持ったのだ。その独特の剣の握

り方は他ならぬリヴァイのもの。加速するダイナに自分の姿が重なったのを、リヴァイは確かに視た。

稲妻型から直進へと軌道を変え、ダイナは宙空で前方に一転。回転による遠心力を乗せて、ケニーに向けてブレードを投擲する。相手が常人ならば視認すら許さずに命を絶つその一撃。だが、人外の怪物たる殺人鬼には通じない。

正確無比に喉笛を狙うソレをケニーは銃身で弾くと、流れるような動作で散弾銃をリロード。超高速の立体機動を行いながら全く淀むことのない再装填は、いつそ曲芸のようですらあった。

「チエックメイト」

刃を投擲した直後では、次の銃撃はアツカーマンにも匹敵する身体能力を見せた今のダイナでも躲せない。

あの稲妻型の軌道を描くには、体勢を立て直すのに最低でも1秒以上のロスが生まれるだろう。

己の勝利を確信したケニーが銃口をダイナに向けて、そして気づいた。

「な——」

「ああ、これでチエックメイトだ」

ダイナ・フリッツの声が、ほぼゼロ距離から聞こえたことに。

刃の投擲による攻撃は目くらし。黄金の美女は回転してブレードを投げると同時に、ケニーに向けて突貫していたのだ。

ケニーが縦回転する刃を弾くため、ダイナから目を逸らしたその一瞬の隙を突いて。「アリーセを……返せえッ！」

咆哮し、投擲しなかつた方——逆手に握る右の剣が振り抜かれた。迸る剣撃がケニーの腹を切り裂き、空中で鮮血がばら撒かれる。

最後の攻防を終えた黄金の美女と大量殺人鬼はもつれ合うようにして建物の屋根に落ち、そして片方だけが立ち上がった。

立ち上がった片方は倒れたまま動けないもう片方を見下ろし、静かに呟く。

「……俺の勝ちだ」

調査兵団と中央憲兵団。

クーデターの幕開けとなる初戦が、今ここに決着した。

第45話 敗北×代償×すれ違い

目を開くと、知らない天井が視界に映った。

……？

ダメだ、意識を失う前の記憶が完全にねえ。というか全体的に記憶が曖昧になってやる。

何がどうなって俺はぶっ倒れたんだっけ……？

何はともあれ、まずは現状を把握しないと。

脱力していた体に力を入れ、倦怠感に包まれた上体を無理やりに起こす――

「……っ、は、あ……っ」

痛覚が爆発した。

体が内側からぶっ壊れたかと思うほどの激痛。

再び途切れそうになる意識を気合と感情で必死に繋ぎとめ、声にならない悲鳴を上げる。

っーか、悲鳴すら出ねえ。

声の代わりに喉から出てきたのは大量の血塊だ。咄嗟に首を動かして横を向き、血液

が気管を塞いで窒息しないようにする。

「……兵長、ダイナさんが！」

全身を駆け巡る痛みにも耐えながら咳き込んでいると、近くにいたらしい誰かが、俺が目覚めたことに気づいて声を上げた。

そのままバタバタとどこかへ走っていく。聞こえた声から察するに、アルミンがリヴァイ兵長に俺が起きたことを報告しに行ったのだろう。

程なくして、俺の視界に2人分の足が映る。

片方は兵長だろうが、もう片方は誰か分からねえな。

「やっ」と起きたか。随分と寝坊したな、ダイナ」

「……兵長」

「デメエが寝た後の話は今からする。とにかく体を動かすな。死ぬぞ」

ほんのちよつと動くだけで命に関わるとか、どんだけヤバい状態なんだよ俺。

また何か無茶しちまったのか？

マズいな、またアリーセに怒られる。普段はほわほわしてるのに、怒ると凄え怖いからな。早く言い訳を考えとかないと——

そう言えば、アリーセはどこだ？

真つ先に駆け寄って来てくれると思ったんだが、近くに彼女の姿はない。目だけを動

かして視界を動かして兵長の後ろにいる人物を見れば、アリーセではなくアルミンだった。

「——兵長、アリーセは……?」

「エレンとヒストリアと共に連れ去られた。俺たちは負けた」

……あ?

連れ去られた? 誰が? アリーセ? 誰に? 何で? いつ? エレンとヒストリアも? 人類の希望と王家の末裔が奪われた? 誰に負けた?

思考が弾ける。

与えられた情報の衝撃で記憶が蘇る。

そうだ、負けた。後一步届かなかった。

ケニー・アツカーマンに。

「あ、あ、あ、あああああああ!?!」

「——落ち着け! まだ何も終わってねえだろうが!」

兵長に胸ぐらを掴まれ怒鳴られるが、敗北という事実に関心が割れる。

最悪だ。最悪以上だ。

エレンとヒストリアはすぐには殺されない。その未来は分かる。『原作知識』による保証がある。

しかし、アリーセには『原作知識』による未来の保証がない。連れ去られた理由も分からない。

もしかしたら、もう既に……

「おい、ダイナ。一人で勝手に絶望して諦めてんじやねえ。エレンも、ヒストリアも、アリーセも、まだ取り戻せる可能性は十分ある。お前が今やるべきことは、ガキみてえに泣き叫ぶことか？ いや、違う。戦うことだ」

「……っ」

エレンやヒストリアと違って、アリーセには身の安全を保証されるだけの理由がない。彼女は俺と同じ、本来ならとっくに原作から退場しちまう筈だったモブに過ぎない。

この世界は残酷だ。

モブの命など、それこそ虫ケラと同じくらいあっさり潰えてしまう。

ああ、これが『原作知識』の外側か。

これがこの世界に生きるエレンが、ミカサが、アルミンが、兵長が、ハンジさんが、ジャンが、コニーが、サシャが、ライナーが、ベルトルトが、原作キャラたちがいる場所か。冗談じゃねえよ。怖すぎるだろ。

本当に――

リヴァイ兵長に『原作知識』は当然ない。

つまり、兵長も俺と同じく絶対に守らないといけない相手が敵の手に落ちてしまっているのに。

俺を睨みつける兵長の目、僅かたりとも揺らがない。

俺と同じだけの絶望と、悔しさと、恐怖と、喪失感を味わっている筈なのに、一瞬たりとも立ち止まらない。振り返らない。

ひたすら仲間が生きっていると信じて、突き進んでいく。

本当に敵わない。

文字通り俺とは格が違う。

戦闘力がどうかの次元ではなく、その精神力が桁外れだ。

これが、人類最強にして調査兵团兵士長……英雄リヴァイ・アッカーマンか。

……確かに、兵長の言う通りだ。

いつまでも敗北を嘆いている暇はない。

アリーセが連れ去られた理由は、おそらく彼女から俺の持つ情報を引き出すため。巨人化能力者は拷問できないから、俺と最も近いアリーセを狙った。全ての情報を記した『手記』は日本語で書いてあるから心配ないとしても、アリーセ自身が拷問にかけられたら情報が漏れる——いや、彼女なら死んでも口を開かないだろう。

だからこそ、早く助けないといけない。

「すいません、取り乱しました。兵長、私が気を失った後の説明をお願いします」

「……ああ。アルミン、俺がダイナと話している間に全員をここに集めろ。エレン達3人の救出作戦を立てる」

「了解です！」

慌ただしく走っていくアルミンの後ろ姿を見送ると、兵長は俺の上体を抱えて起こしてくれる。

……ここ、俺とジャンがリープス会長達に拉致されたあの倉庫の中だったのか。

「一人で起きられるか？」

「全力で巨人の力を再生に回してますが、それでも辛いですね……」

「ならこのまま俺が支える。お前は現状の把握に努めろ」

「分かりました」

そんな訳で、兵長にもたれかかる態勢のまま情報共有を開始。

まず俺とケニーの戦いだが、これは俺の自滅で負けた。あの殺人鬼の腹を斬り裂いたところまでは良かったんだが、そこで最後の切り札を解放した反動に襲われた訳だ。

限界以上に体を酷使した代償として内臓はスクランブル、骨はバキバキ、体中の筋肉が断裂と、兵長曰く巨人化能力者でなければ間違いないで死んでいたらしい。

これはまあ、本来の使用法を無視した俺が悪い。命があるだけマシだと考えよう。俺とケニーとの一騎討ちについての詳細は後に回す。

「二応言っておくが、後でテメエがケニーと戦った時に見せた力についても説明してもらう」

「り、了解」

何事もなく次の話題に行こうとしたら、ガツチリと釘を刺された。まあ、誤魔化せる訳ないか。

これも仕方ねえな。

続いて被害報告。

これは拐われた3人以外になし。

調査兵団側に死傷者はなく、反対に対人立体機動部隊はその半数近くを無力化できたらしい。

人数だけで見れば、今回の戦いは調査兵団の圧勝とも言えるだろう。重要人物はまとめて抑えられたから、敗北に変わりはないが。

歩兵、飛車、角、金銀が生きていても、王将が取られたんじや負けだ。

「それにしても、対人戦闘に特化した敵を相手によく死者が出ませんでしたね」

「お前がケニーに与えた傷が存外に深かったらしい。お前が倒れた後、トドメを刺す余

裕もなく奴は部隊と共に撤退。調査兵団が追撃側になることが出来た」
「なるほど……」

中央憲兵達が傷を負ったケニーを庇いながら撤退しないといけないのに対して、こっちは全力全開の兵長を軸に追撃できたからか。

……それでもアリーセ達も助け出せなかったのは、十中八九俺のせいだ。

くそつ、完全に足を引つ張った……つ。

「反省は後だ。まずはエレン達も助ける事を第一に考えろ」

「……はい」

と、そこでアルミンが104期の面々と二フアを始めとするハンジさんの部下達を引き連れて戻って来た。

アルミン達はそこらの木箱を椅子にすると、円を描くように座る。

『原作』で言うなら、アルミンが初めての殺人で、ジャンが敵を殺すことを躊躇してアルミンの手を汚させてしまった事を悔いるシーンだ。

尤も、俺が気を失っている間にその一連のやり取りは終わってしまったらしいが。

「早速エレン達の救出作戦の立案……といきたいところだが、テメエにはその前に喋ってもらうことがある」

『原作』を思い返していると、兵長の矛先がいきなり俺に向いた。連動して、この場に

いる全員が俺を見る。

「まず始めに、あのケニーに深手を与えたあの力は何だ？」



——アツカーマン一族。

それは旧エルディア帝国時代に行われた巨人研究の過程で誕生した存在だ。

人の姿を保ったまま巨人の力を一部行使できるだけでなく、脳のリミッターを意図的に解除することで身体能力を爆発的に高められる力を持ち、更には『道』を通じて歴代のアツカーマンの戦闘経験すらも獲得、使用できる、超戦闘特化型種族。

フリッツ王を守る為の武家として設計された一面を持ち、それ故に遺伝的に受け継がれる『アツカーマンの力』は、守るべき主を得ることをトリガーに解放される。

自分と親友の命を守れるだけの『力』を渴望する世界の異分子ダイナ・フリッツは、このアツカーマン一族に目をつけた。

さて、この遺伝的に継承される力を、一族以外の人間が手にするにはどうすれば良い

?

アツカーマンと交わって子を残すのでは、目的は達成できない。自分の子ではなく、自分自身がアツカーマンになる必要がある。なら、残る方法はただ一つ。

もう一度、ゼロからアツカーマンを作り出すのだ。かつて旧エルディア帝国がしたように、徹底的にユミルの『道』に干渉して。

そんないつそ狂氣的とも言えるその試みを、ダイナ・フリッツという人物は実現してしまった。

護身用ナイフでひたすら自分の体を斬り裂いて、激痛と流血を対価に『道』へと手を伸ばす。ただひたすらにそれを繰り返し、無数に流れる『道』からアツカーマンの血脈を掴み取る。

理論など知らない。方法など分らない。けれど可能性を信じて愚直に手を伸ばせ。科学者やそれに類する人物が聞けば、思わず嘲笑してしまうような稚拙な根性論。まるで砂漠の中から一粒の金を見つけ出すような、無謀で成功確率などゼロに等しい試み。

失敗以外の結末などあり得ない。——あり得ない、筈だった。

他の巨人化能力者の追隨を許さない、王家の末裔だからこそ持つ、『道』への最高アク

セス権限。

ほぼ無制限に体を再生できる巨人化能力者だからこそ、膨大な試行回数。

彼女が持つその2つ力が、天文学的確率を引き当てる。

かくしてダイナ・フリッツは『道』を通じてアッカーマン達の持つ戦闘経験を獲得し、同時に人の姿を保ったまま巨人の力を引き出すことを可能とした。

しかも彼女が引き出す巨人の力は、彼女がその身に宿す『九つの巨人』が一角、『女型』のもの。故に身体強化の出力は、リヴァイ兵長ですらも上回る。

彼女はほんの一瞬だけだが、紛れもなく人類最強となれるのだ。

……だが。

(ダメです、ダイナさん——つ)

アリーセ・エレオノーラは中央憲兵によってトロスト区の戦場から引き剥がされる直前に見た落雷を思い返し、心の中で無二の親友に向けて叫ぶ。

見間違える訳がない。アレはもう幾度となく見た巨人化の光だ。

しかしその後、巨人の咆哮がなかったという事は、ダイナは使ってしまったのだらう。

——そう、アッカーマンの力を。

(言つてたじゃないですか……！ その能力の本来の使い方は、巨人化してから発動す

るものだつて！)

一見すると非常に強力な切り札であるが、その実は使うだけで生死の境を彷徨うことになる自滅能力なのだ。

リヴァイ兵長やミカサを見れば分かる通り、2人はそれぞれ身長と性別に合わない体重を持っている。これは規格外の身体能力を發揮しても体が壊れないように、骨密度が常人と比べて高くなっているためだ。

だが、ダイナの体はアッカーマンの力に適応していない。アッカーマンの力を解放すれば最後、身の丈に合わない力を使った代償として、ほんの数分で体が内側から崩壊する。

というか、まともな人間なら体が内側から破壊される痛みには耐え切れず能力を使った瞬間に気を失ってしまうだろう。

それでもダイナが動けたのは、彼女の意地と根性が痛みを上回るほど強かったからだ。

(私のせいで、まだダイナさんに無茶をさせてしまった)

家具一つない部屋のだ真ん中。

そのポツンと置かれた椅子に縛り付けられているアリーセは、心の中で憤怒の炎を燃やす。

その怒りの矛先は自分を誘拐してこの場所に拘束した中央憲兵でも、その後ろにいるレイス家でもない。

どこまでも無力で足手まといの、自分自身に向けられている。

（あの時アツカーマンの力を使わず『女型』になっていれば、巨人を殺せる装備を持たないケニー・アツカーマンに勝てたかもしれない。少なくとも、能力の反動で傷つく事はなかった。それでも無茶をしたのは、私のせいだ）

良く言えば優しい。悪く言えば甘い。

それがアリーセ・エレオノーラだ。

どこまでも甘つちよろいアリーセは、自分が助けられた時に無関係の多くの人々が犠牲になっていれば、自分が足手まといのせいだと嘆くだろう。

ダイナはそれすら認めなかった。だから切り札を使ったのだ。

そうすれば傷つくのはダイナ一人だけで、周囲への被害は殆ど出ないから。

（迷惑かけて、守ってもらって、助けてもらって、私はダイナさんに何も返せていない。ダイナさんに甘えてばかりで、微塵も彼女の役に立てていない！）

怒る、呪う、どこまでも無力で惨めで情けないアリーセ・エレオノーラを。

（もう守られるのは嫌だ。ダイナさんが傷つくのは嫌だ。私が死んでも、世界が滅びても、ダイナさんだけは生きてて欲しい）

目を開く。

乱暴に扉を開けて入ってきた中央憲兵の男2人を睨みつける。

この場所がどこか分からないが、どうやら自分はエレンやヒストリアと同じ建物にいるらしい。

少なくとも、ヒストリアはすぐ隣の部屋で実の父親と感動の再会を果たしている事だろう。

これから自分はこの2人に拷問される。

狙いは恐らく、自分が持つ『ダイナの情報』。

巨人化能力者は拷問できない。傷つければ最後、巨人と化して強烈な報復を受けるからだ。

猿轡のせいで言葉を発する事が出来ないので、アリーセは視線で拷問器具を見せてくる憲兵に伝えてやる。

(そう簡単に、私から情報を聞き出せると思うなよ)

これ以上ダイナに迷惑をかけるくらいなら死んだ方がマシだ。死んだ方がマシなのだ、死ぬ訳にはいかない。

奪われた『注射』と『手記』を取り返し、機会があればエレンの『進撃』と『始祖』をレイス家から奪い取る。

そして巨人化能力者というダイナと肩を並べる力を得て、最後は『座標』を本来の継承者であるダイナへと返すのだ。

『九つの巨人』全てを手に入れる事が出来れば、ダイナはユミルの呪いを打ち破れる。『手記』の内容は全て暗記した。

ダイナの『ゲンサクチシキ』があれば、この先に起きる未来すらも予知できる。

『進撃』と『ゲンサクチシキ』の2つがあれば、自分も主人公ダイナになれる。

(待ってて下さいダイナさん、必ず全てを手に入れますから。そして、私は貴女だけの主人公になる。——弱くて甘いアリーセ・エレオノーラは、もう要らない)

第46話 三作戦同時進行開始

「つまりお前は、人間の姿を保ったまま巨人の力を部分的に発動したってことか」
「ええ、そういう認識で構いません」

トロスト区の薄暗い倉庫の中で、アツカーマンインストールの説明を一通り聞いたリヴァイ兵長の感想に俺は肯定して頷いた。

と言っても、アツカーマンインストールという名称やアツカーマン家の情報については伏せてある。

兵長に説明を求められた俺は先ほどの兵長の感想の通り、人間の状態で巨人の身体能力を発動したとしか語っていない。『原作知識』による情報は俺の生命線だ。必要以上に手札を見せる必要はないし、何よりこのタイミングで『実は兵長の苗字はアツカーマンで、ミカサと兵長とケニーは血の繋がりがあるんだぜ!』なんて言っても混乱しか呼ばないだろう。

今は『中央憲兵団に攫われたエレン、ヒストリア、アリーセを救出する』という目的から外れない方が良い。

ただでさえ時間に余裕がねえしな。

そんな事を考えているうちに、ケニーとの戦場で未だ全身がボロボロの俺を支えてくれている兵長は倉庫内にいる調査兵団の面々に向けて指示を出し始める。

最初に現状を王都にいるエルヴィン団長とハンジさんに伝える伝令係。これはニアが担当となり、彼女はすでに立体機動装置を使用して倉庫から飛び出して行った。「まずはエレン達が連れ去られた場所を特定する。幸い、手掛かりはあるしな」

そう言つて、視線を倉庫の隅へと向ける兵長。

リヴァイ兵長の視線の先には、ロープでグルグル巻きにされたりーブス会長達の姿。

『原作』の流れだとこの後リヴァイ兵長はりーブス会長とその息子を味方につけて、ニック司祭を殺害したあの2人の中央憲兵を誘い出し、拷問の果てにエレン達の居場所を突き止めるのだが――

「兵長。中央憲兵と、その裏で糸を引いている黒幕に心当たりがあります」

「……………」

早速りーブス会長の尋問を始めようとした兵長の行動を遮り、俺は声を上げた。

悪いが、そんな周りくどい方法はスキップさせてもらう。

未来がどう変化するのは不明な『原作変換』は出来る限りしたくないのだが、何せ今はエレン達に加えてアリーセまで捕らえられている状態だ。バカ真面目に『原作』の展開に付き合う余裕はない。

この場の全員が向けてくる驚愕の視線を浴びながら、俺は再び口を開く。

「既にご存知の通り、壁の外にも人類の活動領域は存在します。そして外の世界にも、この壁の中と同じように民を統治する『王』がいるのですが——」

「その話はエレンの居場所と関係するんですか？ 早くしないとエレンが……！」

「ミカサの言う通り、余計な話はない。今必要なのはヒストリアの居場所だけだ」

「……ただ居場所だけ言っても信憑性がないので、この情報が正しいと裏付ける部分も話したかったです……」

だから懇切丁寧に話そうとしたのだが、ミカサとユミルの2人に俺の言葉は根元からぶった斬られた。

いやまあ、2人とも俺と全く同じ立場だから気持ちは分かるけどさ……。

早くエレンたちの居場所を吐くと睨みつけてくる2人から、俺は視線を兵長に向けて無言で問いかける。

——情報が正しいという裏付けは必要ないのかと。

「攫われたのがエレンとヒストリアだけならともかく、アリーセも中央憲兵の手の内だ。この状況でお前が俺達に対して嘘を吐く理由も意味もねえだろ。……信じてやるから、早く言え。時間が惜しいのは同じだろうが。細かいことは後で聞く」

……。

あー、もう、クソが。

リヴァイ兵長はこういうところがアレだよな。ホント、マジで。

完璧な『人類の敵』の立場にあるせいでそれだけ信頼されていることを素直に喜べないのは、いつか裏切る時に有利だと考えるほど、俺は外道に堕ちていないからか。

ともあれ、兵長の言葉に間違いはない。

俺はアリーセを中央憲兵という巨大な敵から助けるために少しでも多くの戦力を欲していて、そしてそれは調査兵団と同じだ。敵の敵は味方とはまさにこのこと。

俺も調査兵団も『自分の命より大切な人』が同じ相手に拉致されたのだから、共闘しない理由がない。

「……分かりました。私達の共通の敵の名前はロッド・レイス。この壁の真の王家であるレイス家の当主にして、ヒストリア・レイスの実の父親。そして拉致された3人がいるのは、まず間違いなくレイス家の領地にある教会です」



さて、改めて現状を把握しよう。

まず調査兵団の主な目的はエレン達の救出と、調査兵団内部に潜むスパイの特定。そして王都でエルヴィン団長が行うクーデターの成功だ。

『原作』よりかなり早く展開が進んでいるのでリー布斯会長の殺害と調査兵団の指名手配などは起きていないが、このまま中央憲兵が何も手を打たない訳がない。

間違いなく何かしらのアクションを起こすはずなので、それに対応する人員も確保しなければならぬだろう。

調査兵団は大きく3つに分かれた。

まずはエレン達の救出を担当する救助隊。

これはリヴァイ兵長、ミカサ、アルミン、ジャン、コニー、サシャ、ユミル、俺、そして後から合流予定のハンジさんとモブリットさんがここに含まれる。

メンツ的には調査兵団の最高戦力と言っても良いレベルだ。

次に調査兵団の中に潜むスパイの特定。

これを担当するのはペトラさん、オルオさん、ナナバさん、ゲルガーさん、ミケ分隊長。

こちららも調査兵団の中でも特に信用が出来る選りすぐりのメンバー達だ。

俺の情報を中央憲兵に流して『ダイナの暗殺』を企んだ人物もすぐに見つかるだろう。

最後に予想外の攻撃や妨害を受けた時に対応するサブメンバー。

ここにフォルカーを始めとする残りの調査兵団が全員が配属されることになり、ミケ分隊長達はの中からスパイを見つけ出すことになる。

他の救出作戦に参加しない調査兵団のメンバーは一部の例外（ラウラなど）を除いて全員が王都に集結することになったが、これはスパイの行動を制限する意味も併せ持つ。

そして救助隊になった俺は、リヴァイ兵長達と共にレイス家が統治する領地に向けて馬で移動中だ。ハンジさんとモブリットさんは目的地である教会の近くで合流するらしい。

俺の発言によっていきなり救出作戦が開始されたのにも関わらず、ここまで滑らかに連携が取れているのは、やはりエルヴィン団長がリース会長を殺害した容疑で逮捕されていないのが大きい。

おかげで『原作』のように調査兵団のメンバーは憲兵によって拘束されていないし、全作戦の司令塔が人類の頭脳とも言えるエルヴィン団長なのだ。

スパイの存在を除けば、間違いなく調査兵団は組織として完璧に力を発揮できている。

「だからこそ、内側から全てを潰しに来るスパイが怖いんだけど」

「ダイナ、独り言はやめておけ。舌を噛むぞ」

「失礼しました。けど、そんなに頻発に舌を噛むのはオルオさんくらいですよ」

どうやら思考が漏れていたらしい。

右隣を走るリヴァイ兵長に窘められ、俺はしつかりと愛馬の手綱を握り直す。

——この時、王都でペトラと共にスパイの搜索を行なっていたオルオが盛大にクシャミをしたのだが、レイス領に向かって馬を走らせていたダイナは知る由もない。

「それと、独り言は私だけじゃないようです」

そう言っただけで後ろを走るアルミンに視線を向ければ、104期の頭脳である彼は俯きながらブツブツと何かを呟いていた。

風の音や馬の蹄の音でほとんど聞こえないが、耳に意識を集中すると「真の王家……」
「……レンは………器……」など途切れ途切れの声を拾うことができる。

本来なら監禁拷問した中央憲兵から得られる情報を俺が一気に話してしまったので、軽度の混乱状態になったらしい。

因みに俺が話したのは『壁の真の王家はレイス家である』、『ヒストリアは真の王家の血筋を引く存在』、『中央憲兵の目標はヒストリアを巨人に変えてエレンを捕食させ、エレンの持つ巨人を強奪すること』の3つだ。

これも余談だが、最後の情報を話した時にミカサとユミルがパニックになった。

俺が話した情報は王都のエルヴィン団長やハンジさんにも届いているので、優秀なあ
の2人は既に動き出しているだろう。

というか、この情報を得ないとエルヴィン団長はクーデターを起こそうとは思わな
いだろうし。ヒストリアが真の王家だと分かなければ、今の王様を玉座から引き摺り下
ろしても代わりの王が立てられなくなるのだから。

今のところ「救出作戦」「スパイ特定作戦」「クーデター作戦」は全て順調のように感
じられるが、懸念が1つ。それはエレンとヒストリアと違って、アリーの居場所だけ
は完璧に特定できていないということ。

中央憲兵に拉致されたのだから恐らくエレン達と同じレイス領の教会にいますと思
うのだが、別の場所で監禁されている場合は厄介なことになる。

誘拐犯であるケニーならアリーの居場所は知っているだろうが、あの殺人鬼が簡単
に喋るとは考えにくい。むしろどんな拷問も笑顔で乗り切ってしまう気がする。

トロスト区での戦いから、今日で3日。

目的地であるレイス領までは、後1日かかるらしい。特に問題がなければ「救出作戦」
は明後日に実行となるので、アリーは5日の間奴らに拘束される。

アリーセなら簡単に屈して情報を漏らすことはないだろうが、5日間も拷問に耐えら
れるかどうかは分からない。

……最悪の場合は——……

「落ち着け、殺気の出し過ぎだ。馬が怯えてるぞ」

再びリヴァイ兵長に窘められてハツと顔を上げれば、俺を乗せてくれている愛馬の足並みが乱れていた。心なしか息も荒い気がする。

「ごめんなさい……大丈夫ですよ」

そう言つて首をあたりを優しく撫でると、愛馬がいくらか調子を取り戻す。

クールになれ、俺。

自暴自棄になつて敵味方関係なく大暴走とか、それこそ兵長に削がれて死ぬバツドエンドは免れない。

今はアリーセが無事だと信じるしかないのだから、ネガティブな想像をするべきじゃねえよな。

「おい見たか、今のダイナさん。『女型』が見えたぞ」

聞こえてるぞ馬面。

俺はまだ巨人化してねえよ。

「シート！ ジャン、怒っている獣を刺激しないでください！ 常識ですよ！」

聞こえてるぞ芋女。

誰が獣だこの野郎。

「流石は怒ったら怖い人ランキングの——」

「黙れバカ！」

「ちよつと、何ですかそのランキング！ ……何でみんな一斉に明後日の方向を見てるんですか!?! おい、コニー！」

思考の海に沈んでいるアルミン、俺と同じく鬼気迫る表情のミカサとユミル、そして無表情でただ正面を見つめている兵長に比べて、ジャン、サシャ、コニーは色々と軽すぎる。

コイツら今の状況が分かってんの？

余裕があるのは良いが、緊張感が無すぎるのも問題だろう。

まあ、女型捕獲作戦の途中の旧リヴァイ班みたいな感じで嫌いではないのだけど。

……後、俺は104期の間でどう思われているのか不安になってきた。

敵対してるとは言え、好きだった漫画のキャラに陰口を言われるのはなかなかメンタルにダメージを受けるんだが。

そこまで考えて、俺はふと気になったことを左隣を走るジャンに耳打ちで質問する。

「ところで、そのランキングで兵長は？」

「ランキング外っす」

「怖すぎるから？」

「いえ、怒らなくても怖いんで」

「納得」

1位が気になるところだが、これ以上の無駄口は良くないだろうと俺は口を閉じる。その後はしばらく無言で馬を走らせ続け、空が赤く染まる頃になってようやく目的地の教会が見えてきた。

間違いない。アニメや漫画で見た場所だ。

流石に敵の本拠地近くとなると、ジャン達も喋る余裕はないらしい。全員の表情に緊張感が増し、自然とリヴァイ兵長へと視線を向ける。

「まずは様子見だ。森の中に身を隠せ」

「了解」

馬を手頃な木に繋ぎ、しゃがみ込んで茂みの中に身を隠す。

森は教会の周囲を取り囲んでいるので、森の中を進めば敵の本拠地を全方位から観測できた。

教会の周囲には、見張りと思われる武装した憲兵が数人程度。あの数なら、見張りは一瞬で制圧できるだろう。

問題は教会——より正確にはその地下に広がる空間に、どれだけの敵が潜んでいるかだ。

『原作』では……えーっと、原作の兵長が一瞬で敵の数を割り出したシーンは覚えていないんだけどな。確か約40人近くだった。

数ではこちらが負けているが、こちらには巨人化能力者2人にアッカーマンが2人だ。多少の不利は覆せる。

初戦の俺の奮闘で、最大の敵であるケニー・アッカーマンも傷を負っているし。

勝ち目は、ある。

……しかし。

「遅えな、ハンジの野郎。王都の方で何か起きたのか……?」

太陽が完全に地平線に沈み、空に星が輝き始めるころ。

合流を予定していた時刻を大幅に過ぎても姿を見せないハンジさんとモブリットさんに、巨木に背中を預けて腕を組んでいた兵長が呟く。

本来ならハンジさん達が中央憲兵との戦闘に必要な物資——信煙弾や原作において煙幕を発生させていた装置——を持ってくる予定だったのだが、

「兵長、どうしますか?」

「……作戦開始予定時の夜明けまで待つ。それまでに2人が現れなかった場合は、俺達だけで救出するぞ」

「「了解」」

——そして作戦開始予定時刻、トロスト区での戦いから5日後の早朝。
ついに、ハンジさんとモブリットさんは現れなかった。